
ヴァンドル・バード

天猫 紅樓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンドル・バード

【NZコード】

N4816V

【作者名】

天猫 紅樓

【あらすじ】

ソラール兵士養成学校の生徒である寡黙な少年カイルは、サクとその友人シリウ、サクの幼馴染みのヤツハと、ひょんなことから仲間になった。ファンネル校長の直々の依頼によって、旅をすることになった四人。その中でラディンという謎の少年と心を通わせ、ますます仲間内の絆が深まっていくなか、それぞれの秘密が明らかになっていく。そして、ヴァンドル・バードとは何なのか……少年達の心の絆を描いたファンタジーストーリー。

始まりはソラール

人口一千五百人ほどの小さな街、ヴィルス。寄り添うように横たわる、さほど高くないカナン山の中腹に、そのソラール兵士養成学校はあった。

三棟ある建物は、講堂、医務室、給仕室や約二十人居る教官の待機場、図書館を兼ねた学習室が入っている三階建ての建物を挟むよう、二階建ての男子寮と女子寮の二棟が建っている。外には、広くならされたグラウンドが整備してある。

そのなかで、現在二百人ほど居る生徒たちはそれぞれに夢を持ち、日夜鍛練している。

ここでの教育のしかたは、時間にしばられた厳しい規律に凝り固まつたスバルタ学校というわけでもなく、朝と晩の決まった時間に講堂に集まり、点呼と連絡や注意事項を伝えられたあとは、基本「自由」というスタイルだ。 基本的なマナー や常識を外れないかぎり、教育を受けられる。

教官たちのスケジュールが毎日決まっていて、生徒たちは自分が求める技術や知識を、自ら動いて得なければならない。

教官たちは分け隔てなく、授業を受けに来た生徒に自分のペースで教育する。 ついていけなくなつたら、容赦なく置いていく。

そして、月に一度の試験に合格しなければ、すぐに養成学校を出なくてはならないという残酷な規則があつた。

生徒たちはいつも必死に生きていた。 それでも自分の夢を叶えたいがために。

今日も養成学校のあちこちから、訓練の息遣いや霸気が放出されていた。

講堂での一通りの集会が終わり、明日の朝までは自由な時間。皆それぞれに夕食を取つたり、図書室で勉強に励んだり、自室で休んだりと、好きな事をしている。いつものように静かな夜だった。

講堂などが入つてゐる建物にしかない屋上では 。

山の麓から吹き上げる風が、静かに建物の壁を撫でていく。灯りがひとつも無い屋上は、ただ月明かりがぼんやりと照らし、穏やかな時間を奏でている。

貯水タンクの下にある鉄製のハシゴに座る人影がひとつあつた。ストレートの藍色の髪の毛は耳がちょうど隠れるくらいに綺麗にカットしてあり、少し長めの前髪が鬱陶しいほどに田元を隠している。少し小柄な体型の少年。十六歳。

名をカイル・マチといった。

カイルは一人きりでハシゴに座り、夜空を眺めていた。そしてその頬には、あろうことか涙が一筋流れていた。

カイルには、秘密があつた。

それは医務室の担当医、ミランにだけ伝えてある。

誰にも言えない秘密。それは、癒えない傷と共に心に突き刺さつていた。

彼は一人の時間ができると、一人でいつもそこで体を休め、空を眺めていた。成績は優秀。何でもソツなく、たいていの事は器用にこなしている。

ただ、人付き合いだけは苦手だつた というより、故意に人を近づけまいとしていた。見えない壁を作り、必要最低限の会話以

外は、誰とも交わさなかつた。

ソラール兵士養成学校に入つて三年。

今のかイルに、友達と呼べる者は居なかつた。

彼はしばらくそこに座つたまま夜空を眺めた後、涙が乾いた頬をそのままに、屋上を出た。

そして、自室へと戻つていつた。

夜の屋上には、静かに風の音だけが奏でられていた。

翌日

「いっつ！　てててて！」

医務室に、叫び声にも似た奇声が響いた。

担当医のミランが、少年のこんがりと日焼けした腕に包帯を巻いている。奇声はこの少年から発せられたものだつた。

「いつもいつも怪我ばかりして！　ここ一週間、ほとんどの毎日じやないかつ！」

細い体に白衣をひつかけ、眼鏡をかけた知的な容姿とはうらはらに、意外にも男勝りな言葉遣いの女医、ミラン。半ばやけくそ氣味に包帯を締め付けるものだから、少年は余計に痛がつている。

「しうがねえだろ？」サライナの奴、容赦しねえんだから！

「教官を『奴』なんて言つんじゃないつ！」

そう言いながら、留めおわつた包帯の巻かれた腕をパンツと叩いた。

「いてえつ！」

飛び上がるよう立ち上がり、少年は包帯の上から腕をさすつた。

小柄な体は光が弾けるように輝き、健康的な色に包まれている。

「サク、また来たら承知しないからね！」

言いながらミランは、懐から煙草を取り出して火を点けた。

つにまとめた金髪の束からひと束が零れ落ち、顔の頬をくすぐつて
いる。それを細い指先で鬱陶しそうに耳に掛け、眼鏡を上げた。
サクは口を尖らせて反論した。

「怪我するのは元気な証拠だろ?」

「屁理屈を言つくらい元気なら、早く授業に戻りな!」

ふうつと白い息を吹きかけると、サクは逃げるように扉の方へ
駆けた。

すると、偶然にもサクの目の前でガラツと扉が開き、背の高い細
身の少年が姿を現した。ストレートで少し長めの紺色の髪が顔を
撫で、細縁の眼鏡とその奥の細い紺色の瞳が、知的な印象を与えて
いる。

「シリウー!」

驚いたように見上げるサクに、シリウはため息をついた。

「また怪我をしたと聞きました」

丁寧な口調で呆れたように言われて、サクは

「わはははは!」

と笑つてみせながら、黒髪がビンビンはねた頭をかいた。

「ハハハじやないでしょつ。 そのうち怪我だけじゃ済まなくな
りますよ!」

静かな口調で、説得するように言つシリウ。そこにはミランが近
づき

「ほらほら、説教なら外でやつてくれ! やかましい!」

と一人の背中を押して追い出すと、勢いよく扉を閉めた。

「わわわっ!」

「あ、すみません、ミラン先生!」

一人の声は、ミランが扉を閉める音にかき消された。閉じた扉
の前で、ミランはフンッと鼻を鳴らして腰に手をあてると、小さく
笑みをこぼした。

「元気な証拠、か。よく言つよ!」

嬉しそうに眩ぐと窓辺に寄り添つた。そして一変、切ない表情で「死んだらおしまいなんだよ……」

と呟いた。//ランが吐いた白い煙が、窓から見える外の訓練風景を曇らせた。

「ほらみなさい。また次に行つたら倍返しされるかも知れませんね」

シリウがからかうように笑う。冷静そうな白肌の表情がニヒルに歪む。サクは白い包帯が映える褐色に日焼けした腕を一回転させた。

「でもオレ、母ちゃんみたいな感じがして、好きだぜ！」

ニッと笑うと、白い歯が眩しい。そんなけろりとした表情のサクを見下ろすようにシリウも微笑み、並んで廊下を歩いた。この会話もいつもの事なのだ。

元気の塊、十五歳のサク・パクオラと知的で冷静な十九歳のシリウ・ソム・イクシード。このデコボココンビは、まるで兄弟のようにいつも一緒に居る。

出会いは、サクの入学の時だった。

入学試験と称して、体力測定をしていた時の事。

小柄で元気が良く、豪快に動き回るまでは良かつたのだが、勢い余つて壁に激突したサク。当たり所が悪く氣絶していたサクを医務室まで連れて行つたのが、偶然居合わせたシリウだつた。

目を覚ましたサクが、何の反省も無くくつたくのない笑顔を見せて礼を言つたのは言つまでもない。

シリウはそれから、何かにつけてサクの傍にいるようになった。

周りからは暴走するサクのお守り役に見えたようだが、シリウにとっては、何事にも真つ直ぐで、凝り固まった考えを持たない彼に

魅了されたのかもしれない。

「午後から試験があるんでしょう?」

「おう! 今回もバッヂだぜ!」

シリウの問いに意気揚々と拳を上げるサクの鼻つづらを指先で弾いた。

「なあにが! また怪我をしないように!」

弾かれた鼻には、既に絆創膏が貼つてある。他にも頬や膝……

一体どうしたらい、と思いつくり、あちこち怪我だらけのサク。

「分かつてるよ!」

サクは舌を出し、アカンベーをしながら走つていった。シリウはその後ろ姿を見送りながら、呆れたように息をつき、眼鏡を上げた。

出会いは闘技場

生徒たちの歓声が、学校裏の闘技場を包んでいる。

月に一度の試験場でもあり、国内外から集まつてきた要人の使者たちの目に留まればスカウトもされる場所だ。

そして試験に落ちれば、即退学。

まさに生徒たちの目の色が変わる時。皆、命を掛けて試験に挑む。

闘技場に入場した個人またはグループに見合った対戦相手を、試験官シャルサムが用意する。それは人であつたり、幻獣の姿をしていたり、大きかつたり小さかつたり、様々だ。

幻獣とは、高等武道のひとつである幻武道^{（ゲンクドウ）}の達人であるシャルサム教官が創りだした対戦用のケモノである。種類は数十種類あり、属性も様々で、生徒たちは戦いの中で幻獣の弱点を調べ対応することを要求される。

相手を降参させるか戦意喪失、あるいは命を取るか消滅させられれば合格。怪我を負つて試合続行が出来なかつた場合、それは中止され、改めて再試験を受けることになる。また、対戦相手に怖気づいて生徒自ら逃げたりすれば、即刻失格となる。再試験を拒否または失格となつた場合は、規則によつて数日のうちに寮から荷物をまとめて学校を出なくてはならない。

生き残るために、夢をかなえるために、生徒たちは毎日を命懸けで生きているのだ。そして、そうでなくては外の世界では生きていけないということをその身に教えているのだ。

無論、試験に出てくる幻獣のような浮世離れしたような獣は、現実には存在しない。養成学校の中で厳しく訓練することで、世界に出たときに自信となり、実力が發揮出来るようになるといつ。

すべては、ファンネル校長の理念に基づいた教育方針である。

闘技場の真ん中で、自身の三倍はあるつかといつ日本体が地響きを立てて倒れた。歓声が降り注ぐ中、余裕の表情で戻つてくる姿があつた。

さつきまで医務室で包帯を巻かれていた、サクだ。彼は行くときと同じ笑顔でシリウの前に戻ってきた。シリウは観戦席で優雅にコーヒーを飲みながらサクを迎えた。

「余裕、でしたね」

サクは

「当たり前だ！」

と笑いながらシリウの隣に座り、手にしていたドリンクに口を付け、美味しそうに飲み干した。

「あなたはあらゆることを無視しますからね……」

怪訝に横目で見るシリウに、既に空になつたボトルをもてあそびながらきょとんとしているサク。

「さつきの幻獣ザクロは、見たところ、体液を飛ばして相手の足を取り、相手を動けなくしてから攻撃してくるようでしたが……地面に剣を突き刺して足場にするとは……普段剣を使わないサクが、と、少し驚きました」

「だつてさ、ベトベトしてイヤじやん！」

本能で動くところは、誉めるべきなのか。

「勘が良いのは羨むべき本能ですが、もう少し識武道シキブダツを学ぶと、効率よく戦えると思うのですがねえ……」

少し残念そうに言つシリウに、サクは眉をしかめた。識武道とは、知識を重んじて戦いを進める戦い方で、効率よく戦うためには相手をよく知ることと教えられている。

「オレ、勉強なんか大キライだ！　じつと座つて話聞いてさ、つま

んねえんだもん！」

フンッと鼻をならし、両手を頭の後ろに組んだ。

「ま、今回はどうにも怪我をしていないようですし、良しとしましょう」

シリウは呆れたように微笑んだ。

その時、歓声が一際大きくなつた。

二人の目も闘技場に注目した。

一人の少年が巨大な幻獣オオクトを相手にしていた。少年を捕まえようと、長い触手を何本も鞭のようにしならせて襲い掛かる中を、いつも簡単に縫いながら、一本一本を確実に切り落としていく。そのたびにオオクトは悲鳴のような奇声をあげ、やがて体一つになつた。少年はその目の前に立ち、静かに剣をその鼻つらに対して向けた。静止した切っ先の前で、オオクトはしなだれようつに動きを止めた。

「勝負あり！」

審判員である教官が声をあげた。鮮やかな戦い方に、割れんばかりの歓声が闘技場を揺らした。

「す、すげえ！」

サクは目を丸くして身を乗り出した。

「一体、アイツ何者だよ！ シリウ、知ってるか？」

興奮状態で言うサクをあきれ顔で見つめ、シリウが答えた。

「知ってるもなにも、校内で知らない人は居ないと思っていたんですけど……ま、仕方ないです、あなたはいつも試験のたびに怪我をして医務室に担ぎ込まれていますから」

「いつもじゃねーよ！ なあ、アイツ何者なんだ？」

急かすサクに、シリウは指先で眼鏡を上げた。

「彼はカイル・マチ。セイブルトウ 静武道では彼より上に出られる人は居ません。他にもいくつかの教育を受けているようですが、僕も細かい

「とまでは知らないんです。なにしろ、いつも一人で居て、誰とも話さないらしいですから」

「へええ～！」

【静武道】^{セイブドウ}とは、激しさを主体とする【動武道】^{ドウブドウ}とは逆に、冷静さを失わず、常に平常心で闘いをする武道である。どちらも闘い勝利をつかむことには変わりないが、うまく両方を組み合わせるほどに強さを生み出すとされている。

他に合氣道を主体とした【波武道】^{ハブドウ}や身軽さを重視する【飛武道】^{ヒブドウ}などがあり、生徒達はそれに自分の得意分野を生かしながら自分を高めていくのだ。

サクは目を輝かせて、涼しい顔をして汗を拭きながら一人で控え室へと戻つていくカイルを見つめていた。誰も一緒に歩く者は見当たらない。だがカイルは、それを当たり前のようすに平然と奥へと入つて行つた。

「オレ、アイツを仲間にする…」「えっ？」

驚くシリウに、熱弁するサク。

「オレ、アイツのこと気に入つた！仲間にしようぜー！」

今度はシリウに強制とも言えるような同意を求めた。

サクが勢いづくりのは今に始まつたことではない。喧嘩つ早く、売られた喧嘩は買いまくる。おかげで、サクが通るとあちこちで騒動が勃発する。だが、誰かを仲間にしたいと囁うのは初めてのことだった。

『これも、サクの勘つてやつでしょうか？』

シリウはサクに頷いた。

「あなたの直感に、異論はありませんよ」

「よつしゃ！決まりだつ！」

拳を上げて早速走つていくサクの背中を見ながら、シリウもゆつ

くりついていく。

『でも、彼は一筋縄ではいかなさそうですがねえ……』
シリウは小さく笑った。

サクが闘技場の控え室を覗いたときには、すでにカイルの姿は消えていた。近くにいた生徒に尋ねても、どこへ行つたのかは誰も分からなかつた。

「一体どこに行つたんだあ？」

サクは思い込んだら一直線に突き進む。試験の疲れなど忘れたようになかつた。

一方、シリウは喫茶室で一人本を読んでいた。
試験中は、各自、自由な時間を過ごせる。

シリウはサクの好きにさせようとするつもりなのだろう。窓からは午後の心地よい日差しが降り注ぎ、体をやさしく暖めている。若干眠気を覚えて小さくあぐびをし、また本へと視線を落とした。

「カイル、どこだあ！」

サクはもはや、ヤケになりながらカイルを探している。校内のどこを捜しても居ないのだ。これはもう呼ぶしかないと、ひたすら名前を呼びながら走り回つていた。周りの生徒たちは最初

「またサクが暴れ回つてるよ……」

と呆れた表情で見ていたが、すぐに気にしなくなつた。いつものこと。元気いっぱいなサクは、ひたすらカイルを捜し回つていた。

「おう、サクう、何してんだー？」

野太い声がサクを捕らえた。サクは体を大きく揺らして止まつた。

「なんだよ、ナトウ？ 今忙しいんだ。喧嘩なら後な！」

軽く受け流して手を振り、走り去ろうとするサクを、ナトウ・バ

タウサが引き止めた。

「お前が探してる奴なら、さっき屋上に行つたぜ～！」

がっしりした褐色の体を揺らすナトウ。

「何、ホントか？ 屋上はまだ行つてなかつたぜ。 ありがとよ～。」

サクは礼を言つと、手を挙げて走り去つた。 ナトウは、両端に従えた子分たちと顔を見合わせて含み笑いをした。

カイルを探して二千里

屋上の扉を開くと、眩しい光がサクの視界を塞いだ。

「カイル～！ いるかー？」

早速名前を呼びながら辺りを見回したが、返事はなかつた。人の気配も無く、静かな空間が広がっていた。

「んだよ、ここにもいねえのか？」

残念そうに咳きながら戻るうとしたサクが、驚いて足を止めた。

「ナトウ…」

サクの田の前に、さつきカイルの居場所を教えてくれたナトウがにやけながら立ちはだかっていたのだ。その脇から、これみよがしにと一人の子分も顔を出した。サクは一步下がり、睨んだ。

「お前、嘘言つただろ…」

「口なら誰にも邪魔されねえからな！」

そう言いながらパキパキと指を鳴らした。嬉しそうに顔をにやけさせてくる。

「そういう事かよ！」

じゃあしようがない、といった風にサクも構えた。

「こいつ…」

サクの声に、ナトウはイヤらしく頷いた。

「そうこなきやな！」

ぶんつと風が唸つたと思うと、ナトウの巨体がサクに向かって突進してきた。サクはそれを軽々と交わすと、その後頭部に蹴りを入れた。

「つ！ のやめつ！」

ナトウはよろめきながら足を踏張り、振り向いた。そして顔面に迫るサクの足を丸太のような両腕でガードし、払つた。

「つ！」

サクは回転しながら着地すると、ペロッと唇を舐めて笑つた。

「まだまだだぜ！」

足元に力を込め、ナトウへと飛び出すサク。だがその体はナトウへは届かず、硬い床に容赦なく叩きつけられた。

「！ んなんだつ？」

しこたま鼻つづらを叩き付けたサクは、顔をしかめて足元を見た。その両足には、いつのまにか鎖ガマが巻き付いていた。重い金属音が床を這う。

「お前ら卑怯だぞ！」

上半身だけ起き上がり睨み付けるサクの視線の先には、にやけながら見下ろす子分たちが立っていた。

「よそ見するな！ これは戦いだぞ？」

ナトウの声がしたかと思うと、サクの脳が揺れた。後ろから襲つたナトウの腕が、サクの側頭部を直撃したのだ。

「！」

視界が白くなり、体中に痺れが走った。

『やべえ……』

そう思つたとき、目の前を人影が横切つた。その後には子分たちが次々に倒れ、次にナトウのうめき声がサクの耳に届いた。

「昼寝の邪魔をするな」

その声は、サクが聞いたことのないものだった。

『誰…………だ…………？』

振り向くことができず、サクはその場に崩れた。

サクが次に目を覚ましたとき、その体はベッドに寝かされていた。

『医務……室？』

ぼんやりする頭で見慣れた天井を見つめていると、仕切られているカーテンが開いた。

「目が覚めたかい？ つたく……どうせ喧嘩するなら勝つて来な！」

ミランが憎まれ口を叩きながら近づき、煙草を吹かしながら腰に

手をあてて呆れたように見下ろした。

「そうだ！ オレ、ナトウと喧嘩してたんだ！」

あわてて起き上がったサクの頭を激痛が走った。

「！ つ痛う！」

「まだ動かさないほうがいい。 脳震盪を起こしてたからね」

ミランがサクの額から落ちた氷袋を拾いながら言った。

「三人相手にしていたらしいじゃないか。 一人じゃ無理だと思つたら、潔く逃げるのも戦いだよ！」

眼鏡の奥から冷たい目で見下ろし、氷袋をサクの額に落とした。ひんやりとした感触と共に、氷の塊がサクの頭を直撃した。それを軽く押さえながら、サクは天井を睨んだ。

「次は負けねえ！」

「またそんなことを言つて！」

ミランは脳震盪を起こしたばかりのサクの頭に容赦なくゲンコツを落とした。

「そういう、あいつらは？」

叩かれた頭をさすりながらサクが尋ねた時、扉が開いてシリウが現れた。

「シリウ！ お前が助けてくれたのか？」

「いいえ。 今カイルに、あなたがココで寝てるからって言われたから来たところです。 またナトウと喧嘩したんですね？」

シリウは眉をひそめて首をかしげ、眼鏡を上げながらため息をついた。 サクは呟いた。

「カイル？」

「そう。 カイルがお前を担いで、ナトウは子分に担がれて、仲良くな医務室へ入ってきた」

ミランも呆れた風に煙草をふかしている。

「じゃあ、ナトウは！」

サクはあわてて周りを見渡したが、周りのベッドは空だ。 すぐに眩暈を起こしてこめかみを押された。

「せつを出でていったよ。 あんたみたいに減らず口をたたきながら
ね」

//リンは面倒くさそうに言ひとど、もつ寝な、ヒサクをベッドに押
しつけのよつに寝かしつけた。 いつもでもしないと、サクはまた飛
び出して行つてしまつ。 サクはまだクラクラする頭を冷やしながら、
天井を見つめた。

『カイルが……？』

そう言えば薄れゆく意識の中で、カイルは三人をいとも簡単に倒
していた。

『あいつ……絶対仲間にするんだ……』

何故そう思ったのか、サク自身にも分からぬ。 だが、一緒に居たらなんだか楽しそうだということを直感で感じていた。 サク
は再び氣を失うように眠りについた。

夜の屋上は、昼間のぬくもりを忘れたかのようにひんやりとした
空氣に包まれていた。 虫の鳴く音が遠くに聞こえる。 カイルは
いつものように鉄製のハシゴに座り、うずくまるよつにして微動だ
にしない。 時折吹く緩い風が、鼻先まで伸びる藍色の前髪を揺ら
す。

「こんなとこに居たのかあ！」

静寂は一瞬で壊された。 その元気な声の正体は、昼間からカイ
ルをずっと探し続けていたサクだつた。 カイルは驚いた様子もなく
くわくわくと目を開けると、サクを見上げた。 長めの前髪から覗
く黒目が月の光を反射して煌めいている。 どこか、涙を湛えている
ように揺れていた。

『泣いていた……？』

サクの後ろにつってきたシリウがそう感じたが、言わないことに
した。 カイルは無言でサクを見つめている。 サクがにっこり微笑
んでカイルの前にしゃがみこんだ。

「昼間はありがとな。お前が居なかつたら、オレ、ぼくぼくこされるとこだつたぜ」

カイルは答えずに手を背けたが、サクはかまわずに続けた。

「カイル、オレたちと仲間になろ!」

楽しそうに微笑み続いているサクを再び見て、カイルは吐き捨てるように言った。

「俺は誰ともつるむ気はない」

そう言って立ち上がり

「昼寝の邪魔をされたから手を出しただけだ。勘違いするな」と、逃げるよう立ち去ろうとした。

「カイル！ オレはあきらめねえからな！」

サクはその背中に声を投げたが、振り向きもせず、カイルは屋上の扉を開けて去っていった。

「オレは絶対あきらめねえ！」

独り言のように言うその顔は、とても楽しそうな表情をしていた。シリウは、じばりく様子を見ることにした。

それから毎日のように、サクはカイルの前に現れた。木の枝から降りてきたり、屋上で待ち伏せをしたり、武道場で待ち伏せしたり、手を変え品を変えては何度も声をかけたが、カイルの答えは変わらない。

「しつこく来ても無駄だ。俺の気持ちは変わらない」

「いや、お前はオレの仲間になるんだ！」

その自信はどこから来るのか……サクはまつきりと言い切る。

「何故俺を？」

あまりのしつこさにため息をつきながら、カイルは静かに聞いた。

「お前、いい奴だから！」

にっこり笑うサクから、カイルは焦ったように手を背けた。

「そんなこと、お前に分かるか！」

「分かるよ！」

「一度助けただけで、勘違いにも程がある！」

呆れたように言うカイルに、サクは手を振った。

「違う違う。 カイルの目が、そう言ってんだ」「？」

「それでいいじゃん！」

サクは微笑んだ。 カイルは冷たい視線を送つて踵を返すと、その場を離れようとした。

「カイル！」

「勝手に人をいい人呼ばわりするな！」

立ち止まつたカイルは振り返らずに冷たくそう言って、立ち去つてしまつた。

「オレは絶対あきらめねえからな！」

ふうっと頬を膨らませて見せたが、カイルに届くことはなかつた。

サク軍団結成！

「今度はあんたか……」

屋上に通じる階段を上がる途中、カイルの前に居たのはシリウだつた。手摺りにもたれ、長い足を投げ出す彼をすり抜け

「何度来ても同じだ」

と屋上への扉を開いた。眩しい日差しが一瞬視界をさえぎる。カイルはその眩しさにも慣れた顔で外に出ると、いつも座つている場所に向かつた。

「サクは、たまに核心を突くんですよ。勘が鋭いというか」

カイルはついてくるシリウを気にする風もなく歩を進めた。シリウは慌てる素振りもなく、距離を保ちながらカイルについていく。「それに、あきらめが悪い。悪い人じやないんですけどね、少々無鉄砲な所もある。結構、お守りをするのが大変なんですよ」

冗談交じりに言うシリウを無視して、カイルは無言でハシゴに座つた。山肌を吹き上げる風が心地よく頬を撫でる。カイルの前髪を、撫でるように揺らしていく。

「そこで、相談なんですが……来週、試験が行われるのは知つてゐると思いますが、その試験の間だけでも一緒に組んでいただけませんか？」

それは年に一度特別に行われる試験で、ソラール兵士養成学校の生徒三人以上でグループを作り、協力しあいながら目的を達成しなくてはならない。闘技場で一人で受ける試験と違い、学校の外で行う、少し規模の大きな試験だ。

「それなら、去年と同じ奴を誘えばいいじゃないか

カイルは肘をつき、シリウを見ようともせずに返すと、彼は眼鏡を上げながらため息をついた。

「去年の彼はもうココには居ないんですよ」

思わずカイルがシリウを見た。前髪が邪魔をしているが、少し

驚いているように見えた。

「無事に卒業したんですよ」

シリウが微笑むと

「ああ……」

と、どこかホッとした表情でまた目を背けた。

「あなたは去年、この試験を棄権していますね？ 何故ですか？」

「言つてるだろ？ 僕は誰ともつるむ気はないよ」

カイルは面倒臭そうに答えたが、シリウは静かに続けた。

「あなたはそのことで、かなりの減点を受けている

「何が言いたい？ 説教をしにきたのか？」

不機嫌な表情で睨むカイルに、シリウは微笑みながら手を振つて否定した。

「そんなつもりはありませんよ。 この養成学校では、個人がどう行動しようと、どう思おうと自由ですか。 ただ、僕たちは最低もう一人見つけないと、困ったことになるんですよ」

「俺じゃなくても、他に誰か居るだろ？」

カイルは立ち上がった。 もはやそれ以上は聞きたくないという態度だ。

「カイルがいいんですね」

「何故だ！」

「分かりません」

「はあ？」

「サクに聞いてみてください。 今ダメでも、今度はサクがまたあなたに頼みに来るはずです。 あなたも、しつこくされるのはイヤでしょうし、何度も断るのは面倒臭いでしきつ。 試験をクリアするまで。 ね

シリウは優しく微笑んでいる。 カイルはしばらく黙つた後、ため息をひとつついた。

「やつたあ～～！」

部屋の中にサクの歓喜の声が響いた。

「カイル、よろしくなつ！」

はちきれんばかりの笑顔で手を差し出すサクを、怪訝な顔で見るカイル。

「お前が入つてくれれば百人力だぜ！」

サクはカイルの手を取つて強引に握手をすると、嬉しそうに拳を握つた。

「なんであんなに喜んでるんだ？」

あつけに取られているカイルに微笑むシリウ。

「さあ。でもあれは、かなり最高潮みたいですよ」

シリウは小さく笑つた。シリウ自身も、ここまで喜びをあらわにするサクの姿を見るのは珍しいことだつた。

そんなバツク宙をしながら喜びを体で表現しているサクに、声が飛んだ。

「サク！ あんたまた怪我するわよっ！」

甲高い声がサクのバランスを崩し、顔から着地してしまつた。

「つ！ いつてえ～なあ！ なんだよ？」

あぐらをかいて鼻を撫でるサク。シリウやカイルたちの前に、ひとりの少女が立つていた。栗毛を後頭部でひとつに束ね、薄手の布で作った短めのワンピースから細く長い足がすらりと伸びている。茶色い瞳でサクを睨む。ヤツハ・キナソン。十五歳だ。

「ヤツハ！ これはお前の性だかんな！」

これ見よがしに赤く擦り剥けた鼻を指差すサクに、ヤツハは勢い衰えずに言い返した。

「あんたが無駄にはしゃいでるからでしょうが！ 勝手に人の性にしないで！」

そう言いながら、絆創膏を懐から取り出して素早く貼つた。そして離れぎわに指で弾くと、サクは痛みでのけぞつた。

「つてえな！」

「ふんっ！」

二人のやり取りを見つめながら、カイルが呟いた。

「彼女は？」

「あの子はヤツハ。専ら医武道^{イブドウ}に通つてます。サクの幼馴染で、入つたときから仲が良いんですよ」

「「良くない！」

いきなりサクとヤツハに否められ、たじろぐシリウとカイル。

【医武道】とは、闘いに盛り込んだり、万が一の怪我や病氣にも対処できるように医学を学ぶ授業のことだ。ツボや急所から、生物学、東洋・西洋医学の分野まで、幅は広い。

ヤツハは闘いに利用するよりも、人を助ける方の医学を専攻していた。勿論、普通に闘えるだけの実力は持っている。

「あたしはねえ、サクが怪我ばっかりしてるから、ミラン先生に言われてきただけ！ 試験の間だけでも、サクを監視するようになつて！」

「監視つて何だよ？ それじゃ、俺たちと一緒に試験を受けるつもりか？」

ヤツハは腰に手をあてて大きく頷いた。

「あたしも誰かと組んで試験を受けなきやならないし。ちょうどいいわ。一緒に試験受けてあげる！」

「いやだよう！」

いきなり不機嫌になるサクの膨らんだ頬を両手でつぶし、ヤツハはシリウの方を見た。

「それに、シリウとも一緒だし」

と、につこりした。ヤツハはシリウの事がお気に入りだつた。サクをからかいに来たついでと言つては、シリウに勉強を教えてもらつたりしている。そして次に、シリウの横にいるカイルに気付くと、目を輝かせた。

「あつ！ あなた、カイル・マチね？ デうしてここに？」

それにはシリウが答えた。

「彼は、僕たちと組んで試験を受けることになつたんですよ」

「本当に？まあ！こんな偶然つてないわ！校内一優秀を争うシリウとカイルが一緒に組むなんて、素敵すぎる！よろしく、あたしはヤツハよ！ヤツハ・キナソン！」

ヤツハは、握手しようと半ば強引にカイルの手を取つた。

「え？」

一瞬、ヤツハが不思議そうな顔をしたが、すぐにいつもの笑顔に戻つた。だがカイルは、無表情のまま踵を返して立ち去ろうとした。

「どこに行くんだよ？」

サクの問いに、カイルは少し振り向き

「試験には最低三人。もう揃つてるだろ？俺は外れさせてもらう」と冷たく返した。

「なんでだよ！三人以上なら何人でもいいんだぜ！カイルが外れることはないじゃん！」

あわてて立ち上がるサク。シリウもカイルに声をかけた。
「カイル、男が一度約束した事を破つて、許されると思つてているんですか？」

静かだが、気迫のこもつたシリウの言葉だった。その言葉はカイルの心に深く突き刺さつた。しばらく無言で背中を向けていたが、カイルは振り向いてため息をついた。

「……分かつた

「やつたぜ！」

「カイルが仲間になるなんて、思つてもみなかつたわ！嬉しい！」

今度はサクに加えてヤツハまでが喜びをあらわにしていた。

「もう少し静かなパーティーだと、いいんですがね……」

シリウが呆れながら言う横で、カイルは表情も変えず、黙つてそ

の様子を見ていた。

「お前、サクのパーティーに入つたらしいな！」

廊下を歩くカイルの前に、大男ナトウが立ちはだかっていた。周りには誰もいない。カイルとナトウだけが、弾かれそうなオーラを漂わせて対峙していた。

「そこに、ヤツハちゃんも入つたそうじゃないか？」

褐色の太い腕がカイルの瞳に映る。無言のカイルに、ナトウは迫つた。

「どうだ？ 僕とパーティー、変わらないか？」
と、にやけた顔で見下ろした。

「お前のその細腕じや、なんの力にもならんだろう？ それに、最初は嫌がつてたそうじやないか。お前ほどのいい成績なら、たかが一つ試験を落としたって大したことないはずだぜ？ 去年だって棄権したんだろ？」

ナトウの説得を黙つて聞いていたカイルは、一言返した。

「断る」

「なんだと？」

今までナトウなりに微笑んでいた頬がピクッと引きつった。カイルは気にする風も無く、そのままそれ違あつとした。

「ちょっと待て！ 今何て言った？」

見下ろしながら凄むナトウに、カイルは表情も変えずに淡々と答えた。

「どうせ女目的なんだろう？ そんな不純な動機と齧しで俺が頷くとでも思ったのか？」

「このやうつ……せつかく下手に出てやつてたのに……！」

拳を握り震えるナトウを置いて、カイルは淡々と場を離れようとした。ナトウはその背中に、恨みぶしを吐いた。

「お前も墮ちたもんだな。寂しくなつて仲間が恋しくなつたのか

? 女みてえなツラしやがつ

全部言い終わる前にナトウの口がつぐみ、顎が上がった。喉元にはナイフの切つ先が突き立てられ、すぐ下には、カイルの睨む瞳がナトウを捕らえていた。

「二度と『女みたい』だとか言つな。次は殺す」

静かに言う中に、確かに殺氣が漂っている。ナトウは小さく頷くしか出来なかつた。カイルが去つた後、ナトウは膝を折つた。
『なんてえ殺氣だよ？ 殺されるかと思つたぜ……』
ナトウの蒼白な頬に、一筋の冷や汗が伝つた。

試験開始！

試験当日、生徒たちはグラウンドに集められた。 それぞれのグループが、お互いに睨みを利かせている。 試験は命懸けなのだ。その中には勿論、サクたち四人も揃っていた。

「目標は、山頂のほこらにある札を取り、ここに持つてくること。途中、様々な幻獣や罠を仕掛けある。 それらをクリアして札を持ち帰つて来たグループに、栄誉と特別得点を与える。 至るところで試験官たちが監視している。 正当な戦い方で、目標を達成せよ！ 期限は明日の正午だ！ 検討を祈る！」

試験官の合図と共に、それぞれが飛ぶようにグラウンドを去つていぐ。 あつという間に生徒たちは消え去り、一陣の風が吹いた。

「さて、我々も配置に着くとしよう」

試験官たちも、自分の持ち場へと風のように走り去つた。

サクを先頭に、ヤツハ、カイル、シリウが木々の間を走り抜けていく。

軽装に加え、武器も軽いものを身につけている。 今回はスピードも重視しているので、重い武器は足手まといになる。 中にはどでかい剣を振り回す生徒たちもいたが、大きく遅れを取つてしまつていた。 それを横目に見ながら、時折木々の間から飛び出していく矢や降つてくる網などを器用に避けながら、四人は順調に山頂を目指していく。 普通に行けば一時間もかかる道のり。 それを約一日半の時間を設けたというのは、それなりの足止めを食らうということだろう。 能天気なサクを筆頭に、頭脳明晰なシリウが計画を練り、カイルとヤツハが従う。 パーティーとして、まとまつていると言えよう。

器用に、飛んでくる矢を避けながら、シリウがカイルに話し掛けた。

「カイル、今朝医務室に入つていくのを見ましたが、どこか具合でも悪いのですか？」

数十分走り続けているが、息が上がることもなく普通に会話できる。日々の鍛練の成果だ。カイルはシリウに少し驚いた顔をしたが、すぐに表情を戻して

「いや、なんでもない」

と、軽く返した。シリウは少し首をひねったが、それ以上は追求せず

「何があるか分かりません。出来るだけ先を急ぎましょう！」
と皆に声をかけた。

その時

「！」

いきなり八方からの、矢の集中攻撃にサクが狙われた。

「うわっ！」

その体は地面に叩きつけられ、勢い良く落ち葉をはねあげた。

「サク！」

驚いたメンバーがサクの周りに駆け寄り、ヤツハが診ている間、シリウとカイルは周りを伺つた。またいつ攻撃されるか分からない。

「ヤツハ、どうですか？」

シリウの問いかけに、ヤツハの気弱な声が返ってきた。

「ちょっと厳しい……」

「！」

思わず一人が振り向くと、そこにはサクが青い顔をして横たわっていた。

「サク！」

珍しく動搖した口調でシリウが駆け寄った。カイルは耳を傾けながら周りを警戒している。シリウとヤツハの傍らで、サクは腕を押さえて動けないでいる。

「矢に何かが塗つてあつたんでしょうか?」

シリウが焦つた口調でヤツハに聞くと、彼女は言いにくそうに口を開いた。

「多分、フルンザが……」こんな珍しい毒の解毒剤は持ち合わせてないわ……」

悔しそうに唇を噛むヤツハ。

「放つておくと、どうなるんだ?」

カイルが視線を周囲に配りながら、冷たい口調で尋ねた。

「サクを放つておくっていうの?」

驚き睨むヤツハ。

「どうなるんだ?」

カイルは少し強い口調で同じ事を聞いた。

「毒の量にも寄るけど、もつて一日……」

ヤツハの気弱な口調に、カイルは抑揚の無い口調で言った。

「材料を持ってきたら、解毒剤を作れるか?」

「カイル?」

シリウも怪訝な顔をしてカイルを見た。

「確かフルンザには、ザネルの葉を煎じてなんとかなると思つたが

……」

視線は周りを警戒しながらのカイルの言葉に、ヤツハは驚いた。

「そう、その通りよ! でもその薬草は、この辺りではカタナ谷にしか生えていないの。 やっぱり学校に戻るしか……」

ヤツハは悔しそうに言つた。

「なんとか、なるだろ」

カイルは周りを警戒しながら背中の荷物を下ろし、必要そうな道具だけをポケットに詰め込んだ。

「まさかカタナ谷に行くつもりなんですか?」

驚いて見上げるシリウに、カイルは頷きもせずに答えた。

「戻つて試験を落とすより、出来るだけやれることをやつたほうが良いだろ?」きっと試験官たちもどこから見ている。この状況も計算されたものだとしたら、このまま戻るのは悔しいだろ?」

力タナ谷は山の裏手にある。断崖絶壁で、誰も寄せ付けようとしない雰囲気を漂わせた風貌から、力タナ谷と名付けられたらしい。人や動物が寄り付かないため、珍しい草花が生えていることもある。サクの状態を治すには、力タナ谷に生えるザネルがどうしても必要なのだ。

一刻も早く採取しようと走りだしたカイルの後に、ぴつたりと

シリウがついてきた。それを察知し

「サクが心配じゃないのか?」

と、シリウを振り向かずに冷たく言つカイル。ひょいひょいと枝を渡りながら、シリウは眼鏡を上げた。

「心配するだけでは何もならないですからね。それに、サクにはヤツハがついていますから」

サクは木の根に体を委ね、ヤツハに見守られながら安静にしている。その体中を冷や汗が覆い、息も絶え絶えだ。ヤツハはその汗を拭きながら、一人がザネルを探つてきてくれることを祈るしかなかつた。

カイルとシリウは、ほどなくして力タナ谷についていた。

「形は分かるんですか?」

シリウの問いに、カイルは谷を覗きながら答えた。

「辞典で見た。たぶん間違いない……アレだ」

一人が断崖絶壁の端に寝そべり下を覗くと、目も眩むような谷底への途中に、岩に挟まれるように一輪の花が咲いている。真っ赤な花びらと、大きな葉が特徴だ。だが、周りの足場が心もとないのは、誰が見ても容易に判断できた。

「厳しいですね……」

悔しそうに唇を噛むシリウの横で、カイルが静かに立ち上がった。

「俺に行く。 あなたは上から引っ張り上げてくれ」

と言いながら、自身の体に持ってきたロープを巻き付けた。 シリウは素直に従い、近くの木にもう片方の端をしっかりと縛り付けた。 自分より小柄なカイルが行つた方が、リスクが小さくなるのは分かつていた。

「無理だと思つたら、すぐに戻つてきてくれさい！」

と言うシリウに

「頼んだ」

と一言だけ残して、カイルはするすると下りていった。 シリウが心配そうに見守るなか、カイルは器用に岩を伝い下り、見事ザネルを手にした。

「今から上がる！」

カイルの声にシリウはロープを握り、引っ張つた。 タイミングを合わせてカイルも岩を蹴り、その姿はすぐに断崖絶壁を登りきつた。

「お見事です！」

汗ばむ額を拭いながら微笑むシリウに、膝をつくカイルは照れるように少しだけ微笑み返した。

「行こう！」

照れくささを振り切るように立ち上がりかけた時、突然カイルの足元が崩れた。

「！」

後ろのめりに倒れていくカイル。

「カイル！」

全てを吸い込むかのように深く刻まれたカタナ谷に、シリウの声がこだました。

コントの思い出

一方ヤツハは、木の根に力なくもたれて浅い息をしているサクを目の前に、何も出来ないでいた。

「こんな時なのに何も役に立てないなんて……あたしは毎日、一体何をやってたんだろ……」

時折サクの額に滲む汗を拭いてやりながら、ヤツハは泣きそうな顔をしていた。すると、サクの手がヤツハの指に触れた。

「？」

サクの顔を覗くと、彼は脂汗をかきながらも笑顔を作つて見せた。

「サク？」

ヤツハは涙を堪えながらサクを見つめた。小さく頷くサクに「そうだね、サクも辛いんだよね……」「めんね、あたしがしつかりしなくちゃ……」

そう言つて、ヤツハは涙を拭いてサクの手をしっかりと握った。

「お前、名前は？」

「……ヤツハ……」

見上げるサクに震える声で答えたのは、八年前のヤツハだった。

サツフル村

サクとヤツハの生まれ故郷だ。

山に囲まれ、広い敷地内では牛や羊がのんびりと過ごしている。人口100人ほどの、広大な敷地を持つ村。

二人はこれが初対面だった。

消え入りそうな泣き声に偶然気付いたサクが駆け付けると、真っ赤に熟れたリングゴーがいくつも成っている木に、必死でしがみついているヤツハを見つけたのだった。たいして太くない木の幹に腕を巻きつけて、ヤツハは登ることも下りることも出来ないでただ泣いていた。涙をこぼし続けるヤツハに、サクは両手を口の横に沿えて声をかけた。

「ヤツハ！ ゆっくり右足を下の出っ張った所に乗せるんだ！」

「う……」

涙で視界が遮られ、足元もおぼつかない。だが、サクの言葉を頼りに少しずつ足を動かした。

「そうそう！ 次は左足をその下に――」

その時、ヤツハの小さな足がズルッと踏み外し、ヤツハの体は木から離れた！

「さやあつ！」

「ドサツ！」

「いってえ！」

ヤツハの体の下で、サクがうめき声を上げた。サクは落ちてくるヤツハを受けとめようとしたが、勢い余って倒れてしまったのだ。

「ごめんなさい！」

ヤツハは慌ててサクの上から下り、涙で真っ赤になつた目で頭を下げ、謝った。サクはむくつと起き上がり、ヤツハに笑顔を見せた。

「こんなの、何でもねえよ！ それより、なんで木になんて登つてたんだ？」

「お母さんにはげようと思つて……」

ヤツハは木を見上げた。葉の間から差し込む陽の光に照らされ

ながら、真っ赤なリンゴの実が揺れていった。

「この木、バロンおばさん家のだろ？ 見つかってたらすぐ怒られるんだぜ！」

サクが身を縮めた。何度か怒られたことがあるのだろう。思い出し奮いをしている。

「でも……」

ヤツハには、家で寝たきりになつていていた母がいた。

父は、ヤツハが生まれてすぐに仕事で遠いところへ行ってしまつたのだと母から聞かされていた。右手一つでヤツハを育てていたが、もともと丈夫な体ではなかつたので、無理がたたつて倒れてしまつたのだ。七才のヤツハが頑張つて働いたところで、日々を生きるのに最低限の稼ぎにしかならない。少しでも栄養をつけてもらいたくて、叱られるのを承知で他人のリンゴの木に登つたのだった。

サクは理由を黙つて聞いた後、おもむろに木に手をかけた。

「……あ、ねえ？」

「オレはサクつてんだ。そこで待つてな！ あのリンゴ、採つてきてやるよ！」

そう言つて、サクは慣れた手つきで木を登つていいく。あつとう間にリンゴの成る枝にまたがると、その一つをもいだ。

「ほらつ！」

放り投げたリンゴは弧を描いてヤツハの手におさまつた。小さな手には充分ほどの大きさと重さがある。ヤツハはひんやりしたリンゴの重さを感じながら、胸が熱くなるのを感じた。

次の瞬間、木の枝がメキメキッ！ときしむ音がしたかと思うと、サクが勢い良く落ちてきた。

ドサツ！

「いってええ！」

しこたま尻を打ち、顔をしかめて押さえるサク。 そのすぐ横に、枝が落ちてきた。

「だ、大丈夫？」

驚いて駆け寄るヤツハに、サクはさすがに苦笑して
「だいじょう」

と言いかけたが、途端に怒号がそれを消し去った。

「誰かまた、あたしのリンゴの木に登ったのかい？」

見ると、近くの家から恰幅のいい女性が出てくるのが見えた。
「ヤツハは隠れてろ！」

「え、でも……」

ヤツハの体をリンゴの木の裏へと押しやつたところへ、バロンが体を揺らしながらやってきた。

「まああんたかい！ 何度言つたら分かるんだい？ この木はあたしらが丹精こめて育てて、熟した実は売り物にするんだ！ 二度とするんじゃないよ！」

バロンの大きなげんこつがサクの頭上に降った。

「いってええ！」

サクはバロンがまだ肩をいからせながら去つていいく後ろ姿にアカンベーをしながら、頭を両手で押さえて痛みを堪えながら振り返ると、ヤツハに笑顔を見せた。

「だ、大丈夫？」

心配して眉を寄せて駆け寄るヤツハに、サクは笑った。

「こんなの、なんでもねえよ。 それよりほら、早く母ちゃんに持つて行つてやれよ！」

「ありがとう！」

ヤツハは、両手でリンゴを大切に持ち、家へと駆けていった。

その後ろ姿を、満足そうな笑顔でサクが見送っていた。

「母さんはそれからしばらく経つて死んでしまったけど、間際にこう言ったの。『あのリンゴ、とても美味しかったよ』って……あたしね、サクと母さんのあの時の笑顔、ずっと忘れられないでいるのよ。それから、あなたのいつも傷だらけの体もね……サク、お願い、死なないで……」

ヤツハは祈るように、汗の滲むサクの手を自分の額に押しつけた。

罰はお姫様抱っこ！？

「カイル！」

シリウはとっさに彼の手をつかみ、間一髪、カイルは崖に片手一本でしがみつく形になった。

「！」

カイルのはるか下の方で、崩れ落ちた土や石が砂煙を上げている。シリウはカイルの手をしっかりと握り、一気に引き上げた。

「はあっ…」

大きく息を吐いて座り込むシリウ。

「すまない……」

カイルも座り込んで息を整えていた。

「いや、足元、意外に脆かつたんですねえ。驚きました」

シリウは微笑みながら汗を拭いた。

「さあ、急ぎましょ。サクが待っています！」

立ち上がるシリウに続いてカイルも立ち上がらうとした時

「あ……つっ！」

小さくつめいて膝をついた。

「どうしたんですか？」

驚いたシリウが駆け寄ると、カイルは右足首を押さえていた。

「さつき挫いたみたいだ……」

唇を噛み、悔しそうに叫ぶカイル。

「利き足ですね？」

シリウが懐から布のベルトを取り出した。

「これで少しば痛みが治まると思いますが……」

「医武道か……」

手際よくカイルの足首に布ベルトを巻き固定するのを見ながら呟いた。シリウはええ、と頷いた。

「サクがあんなですからね、少しば知識があつたほうが良いと思い

まして。 フルンザの件といい、あなたの知識も、相当なものですね

シリウは終わりを丁寧に留め、動かしてみるよつに促した。まだ痛みは残っているし、全力で動くには心配だ。 カイルは手に握つたままのザネルを見つめた。 そしてそれをシリウに差し出した。「先に行つてくれ！」

シリウはやつぱり、といつた顔で息をついた。

「ダメですよ、あなたも一緒に行くんです！」

「俺が居たら、足手まといになる！ 一刻を争うんだ！ 行つてくれ！」

「……」

珍しく声を荒げるカイルを見つめ、シリウはゆづくらとザネルを受け取つた。

「必ず迎えに来ます。 だから無理せずここで待つていてください。 いいですね？」

そう言い聞かせてシリウは立ち上がり、あつといつ間に木々の中へ消えていった。

残されたカイルは、布ベルトが巻かれた右足をさすり、軽く振つてみた。

『少しなら動けそうだ……』

カイルは懐から小さな布の袋を取り出し、中から一錠の錠剤を出して口に入れた。 少し苦い顔をしながら飲み込むとゆづくら立ち上がり、足を引きずりながら、シリウが消えていった木々の中へと姿を消した。

しばらぐして、シリウはサクとヤツハのもとへたどり着いていた。
「シリウ！ ザネルは……？」

シリウは、顔面蒼白で浅い息をしているサクを前に、もはや泣きそうになつてているヤツハにザネルを手渡し

「頼みます！」

と一言言つと、背中を向けた。

「シリウ？　どこに行くの？」

「カイルを迎えに行つてきます！」

「えつ？　カイルに何かあつたの？」

「大丈夫です！　ヤツハはサクをお願いします！」

唖然とした顔のヤツハを残して、シリウは再び木々の間に消えた。

「待つていてくださいって、言つたでしよう？」

足を引きずりながら木々の間を縫うカイルの前に、シリウが降り立つた。

「全く！」

少し憮然とした口調で言いながら近づいたシリウは、軽々とカイルを抱き上げた。

「ちょつ！　離せつ！」

いきなりのお姫さま抱っこに慌ててもがくカイルに、シリウは叱るようになつた。

「言いつけを守らなかつた罰です！　走るのに邪魔ですから、決して暴れないでくださいねつ！」

そして、シリウはカイルを抱きかかえたまま走りだした。

身軽に風を切り、二人の影は木々の間を飛ぶように走り抜ける。その見事な身のこなしに、カイルもおとなしく身を預けていた。前を見てひた走るシリウの顔を下から見ていたカイルは、いつしかじつと惹き込まれていた。

全員集合！ 山頂を目指せ！！

ものの数分で、シリウたちはヤツハとサクのもとに着いた。

「ヤツハ、サクの具合は？」

シリウはカイルをそっと下ろし、サクの傍にしゃがみこむと、その顔を覗きこんだ。

浅く早かつた息がゆっくりになり、心なしか頬に赤みが戻っている。

「二人ともありがとう。 だいぶ落ち着いたわ。 もう大丈夫。

それより、カイルの具合はどう？」

ヤツハの表情もやっと緩み、カイルを心配そうに見つめた。

「俺は大丈夫だ。 足を挫いただけだし、シリウが応急措置をしてくれた」

それでもヤツハは、診せて、とカイルの足首を取った。

「腫れはあまりないみたいだけど、湿布しておくといいわね」

ヤツハは手際よくカバンの中から一枚の布を取り出し、すばやく薬草をすりつぶすと薄く塗り、カイルの足首に処方した。 すぐにひんやりした感触が足首全体に広がった。

「……ありがとう」

カイルが小さな声で礼を言うと、ヤツハは微笑んだ。

「ね、あたしが同行して良かったでしょ？」

自慢気に言つてみせるヤツハの後ろで、サクが声を出した。

「う……ううん……」

サクは顔をしかめ、ゆっくりと目を開けた。

「気が付きましたね。 分かりますか、サク？」

シリウが優しく声をかけた。 サクは横たわったまま瞳を回した。 三人がそろって覗きこんでいる。

「皆……」

サクは体を起こそうとした。

「まだダメよ！ 動かないで！」

慌てて肩を押さえるヤツハの手をつかみ、サクはまだ蒼白の顔で言った。

「そつは言つてられない。 ずいぶん時間をロスしたんだろ？ これ以上寝ていられるか！」

「でも……」

サクは無理やり体を起こして、皆の顔を見回した。

「ヤツハ、シリウとカイルもありがとう。 だけどここで終わるわけにはいかない、そうだよな！」

「その通りですね」

シリウも静かに即答した。

「シリウ！ あなた何を言つてるとか分かつてるの？ サクはまだ動ける体じやないわ！ セめて体内の毒がもつと治まってから……」

必死で説得するヤツハ。 カイルはその様子をじっと見ている。

「もしあの毒矢が、試験官が放つたものだとして、生徒を殺すほどの毒を塗つてあつたとは考えにくい。 だとしたら、限界まで自分を追い込むのが得策だと思いますよ。 試験とはそういうものです。

自分の限界を超えるのも試練ですよ」

シリウは冷静に答えた。 だがヤツハは納得できない様子で俯いた。

「でも……」

「もう少し行つてみて、ダメだったらあきらめればいい」

カイルが抑揚のない口調で言った。

「カイルまで！ サクが死んじやつてもいいの？」

ヤツハは驚き、必死な顔で皆の顔を見回す。 サクをはじめ、三人も譲れない決意をした表情をしている。 ヤツハはこみ上げてくる思いに、泣きそうな顔になつた。

「皆、バカだよ！ ただの試験なのに、なんで命かけるのよ？ 死んじやつたら、終わりなのよ！」

ヤツハの言葉を聞きながら、カイルが表情を押し殺すように唇を

囁んだ。涙が溢れそうなほど潤んだ瞳をしたヤツハに、サクが言った。

「試験だからこそ、安心して命かけられるんだ。オレたちは、それぞれの夢を持つてここで学んでいる。外に出たらきっと、もつと危険で、厳しい世界が待ってる。だからこそ、今ここで命かけないでどこでかけんだよ！」

ソラール兵士養成学校には、様々な国から生徒が集まつてくる。それぞれが目指す目標に見合つ資格を取るために、毎日を過ごす。自分の夢を叶えるために、必死で自身を追い込んでいるのだ。その成果を発揮する場所が、試験であり、自分の限界を試し高める機会なのだ。

勿論、ヤツハもそれは理解していた。その厳しさに逃げていった生徒も少なくはない。ヤツハはサクのまっすぐな瞳に見つめられ、もう一度考え方直した。

「……そうね……ここであきらめたら、何のために皆が集まつたのかも、意味が無くなるわ」

ヤツハは、気持ちを切り替えるように微笑んだ。

「もしサクが動けなくなつても、僕たちにはヤツハがいる。心強い仲間ですから」

シリウも微笑んだ。四人は顔を見合わせ気持ちを呟わせるように頷いた。

夜明けまで数時間となつていた。暗闇で動くのは危険と判断しそれとサクとカイルの回復を待つためにそこで朝を待ち、日の出と共に、四人は再び動きだした。

目指すは山頂のほうにある札だ。道中、怪我人を背負つて戻つていく生徒たちとすれ違つた。それらを見て、この先に何があるのか、不安がないわけではない。だがサクたちは進み続けなく

てはならない。

「もうすぐだ！」

サクが嬉しそうな笑顔で指差す先には、山頂のほこらの屋根が見えていた。皆の顔が緩んだ。心なしか体も軽くなり、山頂へと急いだ。

ほいら前の激闘！

ほいらの周りは、氣味が悪いほどの静けさに包まれていた。 時折吹く風が、草の匂いを運ぶ。

他の生徒たちの姿も見当たらないが、所々に血痕や折れた刃など、闘いの痕が残っている。

「いい眺めだなあ！」

サクの気の抜けた声が響いた。 数時間前まで意識が混濁していた同一人物とは思えない。

眼下には、ヴィルス町が見渡せる。 遠くの景色も晴れ渡った空に溶けるようになだらかに横たわっている。

「ちよつとサク！ そんな悠長にしている場合じゃないのよつ！」

ヤツハがサクの耳をつかんでほいらへと連行した。

「いってえなあ！」

やつと離してもらつた耳を押さえて涙目になつていてるサクを見て、シリウが笑つた。

「もう！ 皆、緊張感持つて！ 時間がないのよ！」

あきれたように言つヤツハ。 カイルはクスリともせずこの様子をじつと見ていく。

「扉が開かないんですね」

シリウが静かに言いながら、肩をすくめた。

「鍵が要るのかしら？」

ヤツハが言つ後ろで、サクが拳を上げた。

「んなの、壊しちまえばいいじゃん！」

と、いきなり皆の至近距離で、扉に拳を叩きつけた。

「きやあつ！」

「サク！」

「！」

三人にげんこつで制裁され、うずくまるサクを尻目に、扉の前で話し合いが始まった。 サクが拳を叩き込んだところには、傷ひとつ付いていない。

「鍵穴らしきものはなさそうですねえ……」

気持ちを落ち着かせるように眼鏡を上げるシリウの横で、カイルは扉に触れた。

「ぴったり閉ざされている……」

「封印魔法かしら？」

ヤツハが呟いた。

「そんな所でしようかねえ……きっと何かの力が加わることで開くようになつているのではないでしょ？ ほら、この円の中心には、呪文を封じ込めたような印があります」

シリウが指差した扉の中心には、人が手のひらを広げたくらいの円と、中には何かの封印模様が描かれている。

「「「うーん……」」

三人は困り果ててしまつた。 その間にも、時間は刻々と流れている。

「悩んでも仕方ない……これは多分、皆の力を試されているのでしようから、それぞれが力を合わせてこの印にぶつけてみましょ！」シリウが苦肉の策を打ち出した。 途端に、頭を抑えてうずくまり拗ねていたサクが勢いよく立ち上がり、拳を振り回した。

「力勝負なら負けねえぞ！」

嬉しそうにするサクも円陣に入り、それぞれが得意な武器を持つて力を溜めた。

まずはサクの攻撃だ！

サクはオープンフィンガータイプの革グローブを装着している。もっぱら剣は使わず、自身の拳と足で勝負をする。 サクは両拳

を強く握つて気を溜めた。身体全体から熱気が噴出し、周りを圧倒した。そして拳に溜めた気を一気に扉へと叩き込んだ。

「はあっ！ 爆拳刀刹！」

次は間髪入れずにシリウがサクの後ろで剣を構えた。身長に並ぶかのような長い剣を上段に構え、気を入れ、扉に向かつて振り下ろした。

「はあっ！ 奏拍龍刃！」
ソウハウクリュウハ

次はヤツハだ。彼女はナイフの一ノ刀流で挑んだ。胸の前で両腕を交差し、気を込めた。自らの気が高まり、栗色の髪の毛が逆立つた。

「深華滝泉！ はっ！」
シンカタツゼン

カイルが細身の剣を上段に構えてヤツハの後ろから次を狙う。扉を睨むように飛び掛り、渾身の力で振り下ろした。

「はあっ！ 仙劍突刃！」

だが、叩きつけられた武器や氣は散々に跳ね返され、扉には傷ひとつ刻まれる事がなかつた。

「くそあつ！」

サクは悔しそうに拳を地面に叩きつけた。土煙が風に流された。シリウとヤツハも、微動だにしなかつた扉を前にため息をついた。

「一体、どうしたらいいのよ……？」

すると、カイルは引き寄せられる感覚に捕らわれ、抗わずによつくりと扉に近づいた。そして手のひらを扉の印にそつとあてた。

「暖かい……」

そう呟いて目を閉じるカイル。その温もりはどこか懐かしく、もっと深くまで感じたい気持ちが生まれた。心が落ち着き、カイルの息はゆっくりと整えられた。

「もしかして……」

それを見ていたシリウは、自分の手をカイルのソレに重ねた。
「ヤツハとサクも、一緒に重ねてください」

二人は顔を見合わせながらも、言われるままに手を重ねた。

「暖かい……不思議……」

ヤツハも懐かしい温もりに包まれる感覚を覚えた。 サクも、少し驚いたような顔で扉を見つめた。

次の瞬間、それぞれの体が熱を帯び、光に包まれた。

心の中にも光が入り込み、包み込まれ、身体が宙に浮いたような気がした。 四人はそれぞれに、扉に願つた。

『開け！』

扉の中心に一筋の光が生まれた。

「開くぞ！」

サクの声と共に手を離した四人の前で、扉は音もなく開いた。

「やつたな！ すげーじゃん、カイル！」

とサクに肩をつかまれ、大きく揺さぶられながらも、カイルは彼を促した。

「サク、早く札を……」

「ああ！」

サクは開いた扉をくぐり、部屋に一步入ると息を飲み込み、ゆっくりと目の前にある札を剥がした。

「取った！」

サクが札を掲げた途端、地面が揺れた。

「な、なんだっ！」

四人が動搖しながら慌てていると、背後から大きな影が襲つてき

た。

「幻獣だ！」

「かなり大きい！ きっと札で封印されていたんですね！」

「その札を取つてこいつてことは、この幻獣を倒してこいつてことだつたのね？」

「こうなれば、倒すしかないだろう！」

カイルが剣を手に飛び出した。

「カイルの言う通りだぜ！」

サクも楽しそうに幻獣に向かっていく。

「それもそうね！」

ヤツハも半ばあきらめたように走つていき、シリウはそれらを見送つて眼鏡を上げながら微笑んだ。

「チームがだんだん固まって来ましたねえ」と嬉しそうに言つと、自身も幻獣へと向かつていた。

幻獣を倒すのに、大した時間はかからなかつた。

「爆拳弾！」

サクの拳から、幾つもの気の弾が放出され、幻獣の大きな体にヒットした。

「奏拍龍刃！」

まるで音楽を奏でるかのように、シリウが振り下ろした刃先から気が突き出し、幻獣の体を突き抜けた。

「深華滝泉！」

真紅の軌跡を描き、ヤツハが幾つもの切つ先を幻獣の体に刻んだ。

「剣舞四奏！」

カイルは幻獣の周りを駆け回り、幻獣の体を切り刻んだ。

それぞれが順番に自分の技を叩きつけ、息一つ上げずに止付けた

四人が見ると、扉は再び何もなかつたかのように閉じられていた。

「たいした試験だぜ！」

「たいした試験だぜ！」

サクが余裕の顔で言つと、ヤツハが急かした。

「早く戻りましょう！ 時間が迫つてゐ！」

四人は頷き、養成学校へと走りだそうとした。

その時、大きく黒い人影が四人の前に立ちはだかつた。

「ナトウ！」

サクたちは睨みながら身構えた。ナトウの脇には、いつもの子分が従つている。

「すっかり待ちくたびれちまつたよ！」

「なんだと！」

「何故あなたがここに？」

シリウが迷惑そうに言つと、ナトウはにやけながら言つた。

「ここまでは楽勝だつたんだけどよ、どうしてもある扉が開かなくてよお？ 武器も力も効かねえから、こりやあ、誰かから頂いたほうが簡単だと思って、ここで待つてたんだ！」

「卑怯な男！」

ヤツハが軽蔑すると、ナトウは切なそうな顔をした。

「ヤツハちゃん、そんなこと言つなよう。これでも俺ら、頑張つてんだけ！」

「何を頑張つてんのよ？ 力任せなだけじゃない！」

「ヤツハちゃんにはケガなんてさせないからね。札を取つたら、俺らの仲間に入れてあげるから！」

体をくねらせながら言つナトウにすっかり気分を害され

「願い下げだわつ！」

と腕を組んで顔を背けるヤツハにお構い無く、ナトウたちは武器を構えた。

「お前ら、おとなしく札を渡せ！ でなきや、覚悟はあるんだろ？ なあつ？」

息巻くナトウに、サクは肩を回して唇を舐めた。

「まあ、ちょうどいいや。この間の礼がまだだしな！」

同じく、と身構えるカイルの横で、シリウはため息をつきながら
眼鏡を上げた。

「仕方ありませんねえ……」

三対三で始まった喧嘩が、空気を揺るがした。

カイルの涙と円の呪縛

時刻まであと十分。

最高試験官は他の試験官たちに合図を送った。まだ帰ってきていない生徒たちに、試験終了を知らせるためだ。試験官たちは、風の様にグラウンドから姿を消した。

すでにほとんどの生徒たちは、途中断念して戻つてきている。彼らの手当をするために、医務室はてんてこ舞いの忙しさだった。ミランにとつては、この合同試験の時期が一番嫌いだった。

「ホンシトに、忙しくてたまんないよ……！」

イラつき、独り言をこぼしながら生徒たちの手当をしてくる。

そして時計の針は刻々と進み続け、やがて最高試験官が終了を知らせるために高く手を挙げようとした。

その時

「おひやあひー！」

とこう怒鳴と共に、草むらからサクが飛び出してきた。あとからシリカ、ヤツハ、カイルも同様に姿を現した。既、身体中に枝葉をいっぱいに付けている。

「間に合つたかあ？」

サクが息せき切つて試験官に尋ねると、彼は半ば驚いた表情で

「あ、ああ……」

と頷いた。

「やあつたあー！」

と飛び上がりて喜ぶサクを尻目に、ヤツハは身体中に付いている枝葉を迷惑そうに払い落としながら言った。

「まったく……サクが『近道だ！』って言つからつこつこつたら、

ひどいめにあつたわ……」

シリウとカイルも眉を寄せて、同意するよつに頷きながら身体を拵つてゐる。

「いいじゃん、間に合つたんだからさあ！」

悪気もなく、はちきれそうな笑顔で言つサクを見つめ、三人は息をつきながらあきれていた。

その頃ナトウたちは、山頂付近で田畠を剥いて伸びていた。

「絶対……許さねえ！」

と悪態をつきながら、体を痙攣させた。

「サク・パクオラ、シリウ・ソム・イクシード、カイル・マチ、ヤツハ・キナソン！ 君たちは見事に試練を乗り越え、全員揃つて帰還した。ここに合格点および特別点を追加する！」

試験官の読み上げにより、グラウンドに集まつた生徒たちは並ぶサクたち四人に対して、口々に栄誉を讃えた。その身体はあちこちが傷だらけで、試験の厳しさを物語つていた。

その夜、生徒会を中心になつて、打ち上げも兼ねて祝いの席を設けた。

この時ばかりは無礼講だ。生徒も試験官、教官たちも交じつて、夜遅くまでラウンジで宴が繰り広げられる。

医務室を飛び出したサクは、毒もすっかり抜けたかのように、喜び勇んで宴へと飛び込んでいく。ヤツハも友人たちと共に並んだ料理に舌鼓を打ち、話に華を咲かせていく。

そんな喧騒も届かないような静かな屋上に、カイルはいた。ひとりきり、いつもの場所で景色を眺めていた。

「身体はもういいのかい？」

不意な声に見上ると、保健医のミランが立っていた。白衣が夜風にたなびく。頬を撫でる金髪の後れ毛を、うつとうしそうに耳に掛けた。やつと忙しさから開放されたばかりのようで、顔には少しの疲労が浮かんでいる。

「はい、もう大丈夫です。足も少し挫いただけだし、一、二日で治りますよ」

包帯が巻いてある右足をさすつながら、カイルは答えた。
「楽しかったかい？」

「え？」

「顔がほころんでるよ」

「！」

慌てて両頬に手をあてるカイルを見て、ミランはフツと笑い、煙草に火を点けた。

「仲間つていいだろ？　楽しめばいいんだよ。片意地張らずにね」

白く長い煙は夜風に流れしていく。カイルは黙つたまま遠くの景色を見た。

「まだ気持ちは変わらないのかい？」

ミランも遠く景色を見ながら呟くように言った。カイルはひとつ息を吐いた。

「ええ」

それ以上ミランは何も言わず、一人の間に沈黙が流れた。

その時、屋上の扉が勢い良く開き、ひとりの男子生徒が飛び込んできた。

「ミラン先生、ここにいたんですね？ サクがナトウと喧嘩を始めました！」

息急ぎ切つて話す生徒。ミランは大きなため息をついた。

「またあいつらは！ 懲りない子らだねえ！」

と文句を言いながら男子生徒と屋上を出していく。扉の前で振り

返り、カイルに声をかけた。

「気が向いたらおいでの！旨い料理もたくさんあるよ！動いた分、精力付けなきや！」

ミランは微笑んで手を上げ、カイルの答を待たずに去つていった。カイルは少し微笑んで見送り、また遠くを見た。月明かりが薄く景色を照らしている。

「素敵な景色ですね」

「シリウ？」

知らぬ間に、シリウが傍らに立っていた。そして、カイルの横に静かに座ると、大きく伸びをした。

「夜風も気持ちいいですね」

「サクに付いていなくていいのか？ ナトウと喧嘩してるって……」

「カイルも見に行きますか？」

微笑むシリウに、カイルは驚いて目を逸らせた。

「な、なんで俺が！」

「仲間、だからですよ」

シリウは優しく言つた。すると、カイルは慌てて言つた。

「言つておぐが、組んだのは試験の為であつて、終わつた今はもう赤の他人だ！ もう一度と、面倒なことに巻き込まないでくれ！」

シリウの眼鏡が光つた。

「ああ、またこの間みたいに、サクが意識を失つて倒れ、ナトウの巨体の下敷きに」

「ああもう！ 分かつたよ！」

カイルは勢い良く立ち上がり、屋上を出ていった。シリウの軽い微笑みがこもつたため息も知らないで……。

サクとナトウは人の輪の真ん中で対峙していた。お互いまだ傷だらけの上に生傷を作っている。

「ナトウ、まだ寝とけよ！ なんだその包帯はあ？」

「お前がやつたんだろうがよ！」

すでにテーブルや椅子は端に寄せられ、一人が暴れてもいいようになつてゐる。 そろそろ教官たちも止めに入ろうかと伺つてゐた。

「お前だけは絶対許さんからなつ！」

ナトウがサクに向かつて拳を振り上げる。

「いつまでも引きずつてんじゃねーよー！」

「人が再びぶつかり合つかと思った時、ナトウの顔面にカイルの膝が入つた。

「がつ……」

スローモーションのように倒れていくナトウの前に軽い足取りで着地し、足早にサクの前まで行くと、思い切り頭を叩いた。

「つてえ！」

「たまにはおとなしくしてねー！」

「カイル！」

止められずに成り行きを見ていたヤツハが嬉しそうに駆け寄った。

「ありがとう！ 誰も止められなくて困つてたの」

礼を言つヤツハの後ろで、サクが嬉しそうに頭をさすつた。

「心配してくれたのか？」

「そんなんじやない！」

カイルが慌てて言つと

「まあまあ、そう意地張らなくていいんだぜー！」

サクがからかうように肘でこづく。

「やめろー！」

逃げるカイルにサクが迫つた。

「つまくいってるじゃないか」

煙草をふかしながら壁にもたれ、遠くからサクたちの事を眺めているミランの横に、シリウが立つてゐる。

「結構いい『ゾンビ』になるかもしませんよ」「楽しそうに微笑むシリウ。

「助かったよ、あんたが一声かけてくれてさ」

「僕は、彼の笑顔が見たかつただけですよ」

「サクたちと会う前のカイルは、いつも一人で物思いにふけり、誰とも絡むことはなかつた。周りもそんなカイルに話しづらい印象を持ち、自然に壁を作つていた。

「そつは言つても、カイルは必死な顔してるけどねえ」

ミランが少しあきれながら見る、遠くでサクから必死で逃げ回つてゐるカイルは、少しづつだが感情を見せるようになつていた。カイルは振り返ると、サクに叫んだ。

「いいか！ 勘違いするな！ 僕は誰ともつむつもりはない！ これからもだ！ だからもう俺と関わ……」

言い終わらないうちに、カイルの身体が崩れ落ちた。

「まずい！」

とミランが吐いた焦りのこもつた咳きと同時に、シリウが走りだした。

目を覚ますと、カイルは医務室に寝かされているのに気付いた。薬の匂いが鼻をくすぐる。次に、仕切つてあるカーテンの向こうからなにやら騒がしい話し声が耳に入つてきた。

「だからただの貧血だつて！」

「あいつ、ちゃんと食べてんのか？ もしかして夕飯食つてないのか？」

「何か栄養のあるもの、持つてこようかしら？」

「ラウンジに行けば、まだ料理も残つてゐるはずですよ」

「いいから静かしてくれ！ でなきや出ていきな！」

せわしない幾つかの足音が聞こえたあと、イラついた感情がこもつた扉が閉められる音がして、医務室の中はいきなり静かになつた。

「つたく……」

静かにカーテンを開けたミランは、田を開けているカイルに気が付いた。

「気が付いてたのかい？」

「ついさつき……俺は……？」

「倒れたんだよ。慣れてないのに、暴れて大きな声を出すから」

「ああ……」

『しつこいサクに説得して聞かせようと思つたら、田の前が真っ白になつて……』

「昨日から動きづめだから、そりゃあ疲れも出るよ。それにあんたは……」

ミランが呆れたように見下ろすカイルは、ベッドに起き上がりつゝつくりと下腹をさすつてゐる。表情がどこか暗い。

「皆心配して、あの通りさ。シリウなんて、一番遠い所から走つていつて、あんたを抱きかかえて……」

カイルは力なく肩を落とした。

「あんたのことなんてなんにも知らないくせに、あんなに心配してくれたこと、感謝するんだよ」

「……」

カイルは小さく肩を震わせていた。その頭に真っ白なタオルをかけ、ミランは窓辺に座つた。

「あんたは、月からは逃れられないんだよ……」

呟くようにミランは言った。その言葉を受けながら、カイルはタオルの下でとめどなく涙を流していた。声を殺し、抑えきれない感情を必死で隠していた。

ミランは何も言わず、窓辺で煙草をふかしていた。
夜空には眩しいくらいの月が浮かんでいた。

ザ ピクニック！

翌朝の集会には、何事もなかつたかのようにカイルの姿があつた。

「カイル！ もう身体はいいのか？ 飯食つたか？」

サクが駆け寄り、心配そうな顔をしてカイルを覗き込んだ。

「サク、しつこく追い回したのが良くなかったんじゃないかなって、悩んでもましたよ？」

シリウも静かに近寄つた。

「サクの性じやないよ……」

カイルが言つと、ヤツハも駆け寄つてきた。

「カイル！ よかつた、元気になつたのね？ いきなり倒れるんだもの、びっくりしたわ」

「あの……」

カイルは、三人をして少し体を揺らしながら言葉を選んでいた。

「皆、心配してくれて……『ごめん』

すると三人は顔を見合させて微笑んだ。 サクがカイルの肩を叩いた。

「当たり前じやんか！ オレたち仲間だぜ！」

傷だらけの顔が笑顔で溢れている。

「心配して当然です！」

背筋を伸ばしたシリウが、眼鏡を上げながら言つた。

「ね、昨夜考えてたんだけど、皆でピクニックに行かない？」

ヤツハが突然な事を提案した。

「ピクニック？」

カイルが怪訝な表情をして言つた。 ヤツハは人差し指を立て、飛び上がるよう迫つた。

「そう！ 皆せっかく協力して試験を合格したんだしさ、あたしたちだけでお祝いしてもいいんじゃないかなって！ カイルだつて、

あの料理もろくに食べてないんでしょ？

「それいいな！ 弁当持つてなつ！」

サクはすっかり乗り気だ。そもそも彼は楽しそうなことには目がない。すでに瞳が輝いている。

「一日くらい授業を捨てても良いじゃないですか。夕方の集会に間に合えばいいですしね。お互いを知るいい機会かも知れませんよ、カイル」

シリウが微笑んで言うと、カイルはあまり嬉しそうな顔をしていなかつた。

「いや、俺は……いいよ」

少し後退りをしながら断る態勢をカイルから感じたサクは、しつかりと両肩をつかんで迫った。

「絶対楽しいって！ オレが保証する！ な！ 決まり、なつ！」

カイルはサクの押しに勝てず、思わず頷いてしまったことで、サク、ヤツハ、シリウ、そしてカイルの四人によるピクニックが決定した。

その日は快晴だった。

澄み渡る青空が、山道を歩く四人の心を晴れやかにしていった。朝の集会のあと、学校を出て歩く山の中は、つい数日前に凄惨な試験があつた同じ場所だとはまったく感じさせず、木々の間を穏やかな風が流れていた。山の裏側に向かつて何分か歩くと、急に目の前が開けた。

「こんなところが……？」

カイルは思わず目を疑つた。

目の前には、木々が囲むように草原が広がっていたのだ。はるかかなたに、山々が浮かんでいる。

「素敵なところでしよう？ サクが見つけたのよ」

「たまにこうして遊びに来るんですよ」

ヤツハとシリウが楽しそうに言つ。一足先に草原で気持ちよさ

そうに転げ回っていたサクが勢い良く立ち上がり、カイルを呼んだ。

「お相手願おう!」

「たまには幻獣以外の相手も、いいんじやないですか?」

シリウが背中を押すので、カイルは仕方なく荷物を下ろした。

それでも

「ここなら、思い切り暴れられそうだな」

と静かに言うその口元には、かすかに微笑みが浮かんでいた。

草原の真ん中で手合せをしているサクとカイルから少し離れて、ヤツハは周りを散策しながら薬草を摘み、シリウは木陰で涼みながら読書をしている。皆それぞれにのんびりと時間を過ごしている。静かな草原では、一人の気迫のこもった声が空に吸い込まれるだけだった。

やがて一時間ほど経つた後

「ヤツハ、飯……！」

という声と共に、サクがカイルと共にシリウのもとに駆けてきた。シリウの近くには、皆の荷物が無造作に置かれている。カイルはその中から自分の荷物を取り出すと、タオルで顔を拭きはじめた。気持ち良さそうに、風に頬をあてている。

「お疲れさまでした」

シリウは自分の水筒を差し出した。

「いや、自分のがあるから」

断る口調も以前のような刺々しさが少し無くなっている。シリ

ウが

「そうですか」

と素直に水筒を下げるが、自分が持ってきた水筒から水分補給するカイルをじっと見た。

「なんだよ?」

シリウに気付いたカイルは、迷惑そうに眉をひそめた。シリウ

は軽く微笑んだ。

「いえ、カイル、楽しそうだなあつて思つて」
するとカイルは、動搖したように水筒の蓋を慌ただしく閉め、顔
を背けた。 その様子をただ嬉しそうに見つめるシリウの後方から、
ヤツハと言い争いをしながらサクが戻ってきた。

「だからまだ昼食には早いんだってば！」

「だつて腹減つたんだもん！ なんかあるだろ？ おやつ的なもの
が！」

「あんたは食べることしか頭に無いのね！」

ヤツハは文句を言いながらも、自分の荷物の中から小さな箱を取り出しました。

「わお！ 焼き菓子じゃん！」

蓋を開けるヤツハに待ちきれず、瞳を輝かせながらいち早く手を
出すサク。 一口食べて雄叫びをあげた。

「うんめえー！」

その様子にあきれながら、ヤツハはシリウとカイルには微笑みを
見せて勧めた。

「今朝作つたの。 お口に合うか分からないけど……」

少しばにかみながら言つヤツハから焼き菓子を受け取りながら、
シリウはカイルに言つた。

「ヤツハの手作り料理は、とても美味しいんですよ」
と、一口食べて微笑んだ。 カイルも習つて一口頬張つた。

「……美味しい」

正直な感想がカイルの口から漏れ、ヤツハは嬉しそうに微笑んだ。

「よかつた！ たくさんあるから、遠慮しないでね」

「おう！ 遠慮なんてしねーよ」

とサクがヤツハの肩ごしに手を出し、一掴み取つていった。

「あんたは遠慮しなさいっ！」

ヤツハとサクが追いかけっこをしている様子をバックに、カイル
は自分の手にあるヤツハの手作り菓子を見つめていた。

「どうしました？」

シリウが覗き込むと、カイルは我に返つて背中を伸ばした。

「あ、ああ、女の子なんだなあって……」

感心したように言うカイルに、ヤツハから逃れようとするサクが声をかけた。

「こいつの取り柄は、料理だけだぜ！」

「サクっ！」

ヤツハが襲い掛かるのを器用に避けながら逃げていくサク。 その様子を見ながら笑うシリウ。

「あの二人は、本当に仲が良いですねえ。 さて、今から何をしますか？」

尋ねられたカイルは、手に残っている焼き菓子を頬張った。

「しばらく休憩」

「そうですか、では僕も読書の続きをしましょう」

タオルで顔を隠して寝そべるカイルの頭近くにシリウが座り、二人は木陰で涼みながら静かな時間を過ごした。 しばらくして、ヤツハが戻ってきた。

「アーッ、逃げ足だけは早いんだから……」

そして、カイルの足元に座ると息をついた。

「いい運動でしたね」

笑いながら言うシリウ。 カイルも体を起こした。 タオルがフ

ワリと胸に落ちた。

「あ、起こしちゃった？」

「いや」

ヤツハはじっとカイルの顔を見ている。

「なに？」

「あたし、カイルって不思議な人だなあって、いつも思うの」「どうしてそう思うんです？」

シリウは興味深そうに本を閉じた。

「なんて言つたら良いのか分からぬけど、いつも一人で、誰とも

仲良くしてないみたいだつたから、きつと怖くて冷たい人だらうつて印象だつたのに、こうして一緒に過ごすようになつて、思つてた人じやないつて気がしてきたのよね……

「買い被りすぎだ。俺は多分……最初の印象そのままだ」カイルは少し不機嫌そうに言つた。そしてヤツハを見ると、冷たく言つた。

「俺に深く関わらないほうが良い」

シリウはそれを見ながら微笑み、カイルの肩を軽く叩いた。

「まあそんなに固くならなくとも。僕たちは厳しい学校生活を楽しむために一緒にいるだけですから。お互いの気を悪くする集まりなんかじゃないんですよ？」

カイルは何も言わずに、シリウのなすがままになつていた。

そのうち、ビニールを走り回つていたのか、汗だくのサクも戻つてきた。

「ヤツハ～、腹減つたあ～」

氣の抜けた声に、場の空気が和んだ。

「サク、あんたはホントにそっぽっかりよね……でも、もつそんな時間か。昼食にしましょう！」

ヤツハは手早くシートを広げると、カバンから三段重弁当を取り出した。蓋を開けると、センスよく色とりどりに散りばめられた弁当が現れた。

「うまそ～！」

サクは皿を輝かせながら食べはじめた。

「うんめえ～！」

シリウもパンを二つ手に取り、一つをカイルに手渡した。

「ヤツハの手作りパンは、本当に美味しいんですよ」

微笑むシリウを前に、カイルは一口かじつた。ふわふわの生地から立ち上つた甘い香りが鼻をくすぐる。

「本當だ……」

カイルの一言に、ヤツハもどびきりの笑顔を見せた。

「そう言つてもらえると、作つた甲斐があつたものだわ！ た
くさんあるから、どんどん食べてね！」

そう言つて勧めるヤツハに、カイルは言った。

「さつきはきつこと言つてごめん」

するとヤツハは、気にしてない、と首を横に振り

「この学校の生徒は皆、何か思うところがあつて来てる人ばかり。
仲間つて、そういう痛みを和ませたり、励まし合つたりするもの
だと思つてる。 カイルの心が少しでも和らぐことは、あたしも嬉しい
し」と思うの。 今のカイルの言葉は、その証だつて思つていよい
ね？」

首をかしげて覗き込むように微笑む笑顔は、いたずらっ子のよう
だ。 カイルは恥ずかしそうに手を背けた。

「よし、次はシリウだ！ 手合させ願おう！」

腹^{はら}しらえも済み、体力も回復したサクは、勢いよく立ち上がり
て構えた。 シリウはゆっくり立ち上がり、眼鏡を上げた。

「では、少し汗をかいてきますか」

少し嬉しそうな表情で、シリウはサクへと歩を進めた。

「ホントに、皆全然違うでしょ？」

弁当の片付けを終えたヤツハが、カイルの横に座った。

「そうだな」

並んで座つた二人は、草原の真ん中で戦い合つサクとシリウを見
つめていた。 一人が動くたびに草と土埃が舞い、風に流れる。
「どんな夢あれ、皆、それを叶えるために一生懸命になつてる。
卒業したらバラバラになつちやうのに、こうして集まつてゐる。
これつて、とても不思議じやない？」

ヤツハは微笑んだ。 カイルはそれを視野の端に見て、また前を
向いた。

「そうだな」

一言呴いてうつむくカイルの何か思いつめた様な表情に、ヤツハはただならぬ雰囲気を感じた。それを気にしない風に装つて、静かに言った。

「仲間になつたからって、最初から自分の事を全部言つ」ではないわ。 気が向いたらでいいのよ」

「ヤツハは……」

カイルはうつむいたままで改めて言った。

「女の子なんだな」

「な、なによ、また急に？ 当たり前でしょ？ 胸だつてちゃんとあるわよ！ 小さいけど……」

頬を赤らめて言つヤツハを見て、カイルは少しだけ微笑んだ。

「それでいいと、思うよ」

ヤツハには何のことか分からなかつたが、カイルが微笑んだ顔を見られたことが嬉しくて、それでよしとした。 ヤツハの心が希望で温かくなるのを感じた。

その時、静かに時が流れていった草原に怒号が響いた。

ファンネル校長の依頼

「こんなところにいたのか、お前たち！」

四人が驚いて声のした方を見ると、風紀教員のゴンドル教官が巨体を揺らして近づいてきていた。

巨体の割に動きが素早く、いつも校内を走り回り、学校の風紀を乱すものを注意し正すことを担っている。黒い短髪に、四角い顔。小さい三白眼が鋭い輝きを放っている。生徒たちの苦手とする教官だ。

「うわ、やべつ！」

思わず逃げようと背中を向けたサクに俊足で近づき、その首根っこを掴むと、自分の田の高さまで軽がると持ち上げた。

「探すのに苦労したぞ！　まさか揃って外にいるとはなあ…」

「なんだよ！　別に悪いことなんてしていないだろ？」

「じゃあなんで今逃げようとしたんだ？」

ゴンドルは目の前で手足をばたつかせるサクを鼻で笑い、放るようになどりした。器用に着地したサクは、拳を握つて構えた。

「やるか、このつー！」

ゴンドルは臨戦態勢のサクを無視して、他の三人に言った。

「ファンネル校長がお前たちを呼んでいる。早急に校長室へ行くよつに！　それと……」

三白眼をもつて、ゴンドルは四人を流し見た。

「仲が良いのはいいことだが、くれぐれも試験を落とさぬよつに！　落ちたら、例外なく即刻退学だからな！」

ゴンドルはイヤミつぽくそれだけ言つて、踵を返すと風のよつこ消えた。

「校長が、僕たちに何の用なんでしょう？」

「首を傾げるシリウに

「行けば分かるだろ！」

と、まだ動き足りなそうに体を動かすサク。ともすれば、本当に「ゴンドルとやりあうつもりだったのだろうか。

「そうね、とにかく行ってみましょう」

ヤツハの言葉に異論はなく、早々に荷物を片付けると、四人は養成学校へと戻つて行つた。

「お楽しみのところ、邪魔をしたかいのう？」

たつぱりと蓄えた白いあご鬚をゴツゴツした指で何度もさすりながら、ファンネル校長は笑つて言つた。小柄な老体に似合わず、いつも隙がない。少し訓練をした生徒ならばその柔らかい表情の裏にある、鋭い切つ先のような気迫を感じるはずだ。

「ファンネル校長、僕たちに用とは何でしょ？」

シリウがしつかりとした丁寧口調で尋ねた。ファンネル校長は少し真面目な表情になつた。

「うむ。君たちはこの間の試験を見事に通過した。毎年やつてはいるが、なかなかあれだけの素晴らしい仲間同士の助け合いは見られない。私は感動した」

「だから、用事つて何だ……つふ！」

結論を急かそうとしたサクの口を慌てて塞ぐヤツハ。

「つ、続けてください！」

「それでだね、ひとつ君たちに頼みたいことがあるのだ」

「頼み……ですか？」

シリウが眼鏡を上げた。四人は想像が出来ず、顔を見合させた。

「そうじゃ。君たちに、この手紙をある人に届けて欲しいのじや」

「普通の手紙のように見えますが……」

ファンネル校長から封筒を受け取つたシリウが、中身を窓から差し込む陽の光に透かしてみたが、何も違和感はなく、ごく普通の白い封筒にしか見えなかつた。宛名も書かれていない。

「そんなの、普通に郵便で送れば……つづ！」

今度はカイルのげんこつがサクの頭に落下した。

「少しばかり…」

ファンネル校長は動じずに、笑つて答えた。

「それは普通の郵便では運べんのじゃよ。そこには、ハミウカ紙が入つておる」

するとカイルが乗り出した。

「ハミウカ紙？あの、浄化作用があるといつ？」

「そうじゃ。水に浸すと溶けて広がり、周りの土壤を浄化する」

「では、これを運ぶ先というのは、アルゴド国……？」

カイルの呟きに、ファンネル校長はゆっくり頷いた。

「そうじゃ。詳しい話は、カイルから聞けば分かるじゃろつ。事は急ぐ。早速明日にでも出発して欲しい。くれぐれも、気を付けてな」

ファンネル校長は白鬚をさすりながら、頼むぞ、と微笑んだ。

四人が所長室を出て行った後

「本当に、彼らに託しても良いのでしょうか？まだ十代の生徒たちですよ。私たちに任せて頂けた方が、よっぽど安心で早いでしょうに」

部屋の隅に立つて話を一緒に聞いていたゴンドルが、不満そうに言った。事の大きさと緊急性を考えれば、実力のある大人の教官たちに託したほうが良い。そう思うのが普通だろう。

だがファンネル校長は、首を横に振った。

「あの子たちに任せる。アルゴド国は、大人では救えないんじゃ

……」

希望を託し、微笑みすら浮かべるファンネル校長の前で、ゴンドルは終始あまりいい顔をしなかった。

「カイルに聞けば分かるって、どういうことだ？」

その日、夕方の集会が終わってから食事もそこそこに、サクたちは図書室に集まり、地図を広げて明日からの旅の予定を立てはじめた。

「そうよ。そもそもカイルは今回のこと、知つてたわけ？」

ヤツハがペンを器用に回しながらカイルに聞いた。カイルは首を横に振つて言った。

「いや、依頼のことは知らなかつた。噂に聞いたことがあるだけだ。アルコド国は森と水が豊かな国で、ずっと平穏に過ごしていんだけど、ある日急に泉の湧き水が濁りだし、周りの土壤も汚れはじめたらしい。やがて食物も育たなくなり、人々の生活にも困るようになった。五年ほど前の話だ」

「ハミウカ紙は、特別な草で作った紙に呪文が封印してあるもので、それも強靭な魔導士が相当の念を込めなくてはならない」

シリウが補足すると、ヤツハがぽんと手を打つた。

「そうか、ファンネル校長！」

「それに、他にも何人か力のある教官はいるし、協力すればハミウカ紙を作ることも可能です」

シリウの言葉に、カイルは頷いた。

「そあんなすごい紙切れには見えないけどなー！」

サクが封筒を灯りに透かしている。

「でも、校長ともあるう人が、オレたちを信用して頼んできただよな？　じゃあその期待、裏切るわけにはいかねえよな！」

サクは冒険の匂いに瞳を煌めかせている。そして目の前に広げられた地図を見下ろした。続くように、他の三人も地図に目を落とした。

「さあ、どんな道順で行く？」

シリウがペンを取り、ソラール兵士養成学校を囲むように丸く印を付けた。

「ここが養成学校。山は極力登らずに、避けるように麓を行こう

と思います」

言いながら、地図に道となる線を書き込んだ。それを見ながら、

サクが呟いた。

「ずいぶん曲がりくねつてるな」

「山は方向を見失いややすいし、何が出るか分かりません。多少遠回りでも、この道を行つたほうが安全でしそうから」

「腹が減つたらどうするんだ？」

「サク、あんたはそばつかり！」

ヤツハがあきれ顔をし、シリウは笑いながら言つた。

「途中、幾つか町や村がありますから、そこで休んだり食糧も調達できます」

サクは、地図を見ながら線をたどつた。

「タニヤ村、ザック町、モノリス村……美味しいもんあるかなあ？」

「もう、あんたはあ！ ちゃんと分かつてる？ 遊びじゃないんだからね！」

ヤツハがサクに拳を擧げる横で、カイルは皆に聞こえないほどの小声で呟いた。

「ザック……」

旅のはじまり

出発の朝早く、ソラール兵士養成学校に在籍する何人かの教官や生徒たちが見送りをしてくれた。

「気を付けて行つてこいよ！」

「何かあつたら、無理するな！ 逃げるのも勇氣だぞ！」

それぞれが声をかけ、その中には保健医のミランもいた。

「あんたたち、何があつてもヤケ起こすんじゃないよ！ まったく……まだ子供なのに大変な重荷を背負わせて、校長は一体、何を考えているんだろうね……」

半ば愚痴にも似た事を言いながら、ミランはカイルにそつと小さな布袋を渡した。

「いいかい？ くれぐれも、体には気を付けな！」

カイルはその布袋を大事そうに受け取り、頷いた。シリウはそつとその様子を見つめていたが、何も言わずにいた。ヤツハは、こんな時でもナトウと喧嘩をしそうになつているサクを引っ張り、前を向かせた。

「また帰つてきたら存分にやればいいから！」

「つ分かつてるよっ！ さあ、行くぞ！」

気分を切り替えて荷物を背負い直したサクの声に呼応して、シリウ、ヤツハ、カイルの三人は頷いた。

まだ太陽は山の影になつてその姿は見えず、東の空が目覚める予感を見せていた。四人は見送つてくれた人たちに手を振り、一路アルコド国へと向かつた。

初めての旅。

途中に何があるか、全く予想がつかない。体力の温存も兼ねて、急がず確實に進む四人。

防御壁に守られた国や町、呪文札や高い柵に守られた村の中ならある程度安全だが、一歩外に出れば、何があるか分からぬ。

食えた野生動物、天候、そして、山には『流賊^{ルゾク}』と呼ばれる者たちがいる。

彼らは、多くは何十人という人数で集まり、道を行く者から金品を奪つたり、ともすれば小さな村を襲つたりする、卑劣で凶悪な者たちである。至る所にその類の賊はいて、派閥鬭争も絶えない。近隣に住み、平穏を願う人々の悩みの種となつてゐる。ほとんどが屈強な男たちの集まりで、一ヶ所にとどまらず、野宿をしながらいつも移動していることから『流賊』と総称されてゐる。

ある程度の訓練を受けてゐるサクたちは、無理さえしなければ乗り越えられるだろう。きっとファンネル校長にも、仲間意識を向上させる目的があつたのかも知れない。

何より、ハミウカ紙をアルコド国に届けるという大事な役目がある。

責任を持つて果たすこと。

そして、無事にまたソラール兵士養成学校へ帰つてくること。

この依頼には、一国の存続がかかっているという。

十代の若者たちには重くつらい任務かもしれないが、これも試練だと受け取るしかない。

何より、ソラール兵士養成学校を代表するファンネル校長の直々なる頼みなのだ。

サクも一晩経つて、さすがに事の重大さを理解し、気を引き締めたようだ。というより、楽しみを見つけた、と言つた方が良いだろ? 狹く閉鎖された学校から出られるといつことは、今まで知らなかつた世界を知る機会でもある。

馬車や汽車という、公共の、危険なものから守られた交通手段はいくつもある。だがそれらは、ごく限られた者たちがやつと、高

額な費用を払つて乗ることができるものばかり。 実際、サクたちがソラール兵士養成学校へ入学するときも、自分で、または知り合いからかき集めた資金をはたいて乗り物に乗ってきた。

だが今回の旅は、周りを巻き込まないことを最重要条件にしてい

た。 ハミウカ紙を持つていることがどこかで漏れた場合、狙われる可能性は非常に高い。 それほどこのハミウカ紙というものは、大変貴重であり、入手困難なものなのだ。 裏で扱われれば、高額な値段で交渉されるだろう。

四人は、自分たちの力だけで、アルコド国への道を進むことに決めた。

毎日の過酷な訓練のおかげで、しばらくはさほど困難な旅ではなかつた。 無論、シャルサム教官が作り出したような、センスのない強いだけの幻獣よりはマシだ。

三時間程進んだ所で

「ひとつめの休憩場所はどこだ？」

十人ほどの団体で襲つてきた流賊を早々と片付けたあと、いつも

の口調でサクが吠えた。

「あの丘の上から、見えると思うのですが……」

シリウが地図を見ながら前方を指差して言い終わらないうちに、サクはすでに走りだしていた。

「もうっ！ 一人で行動しないようにって言つてるのに！」

困つたように言うヤツハに、シリウは笑いながら言つた。

「まあまあ。 彼も、やる時はそれなりに出来る人ですから」

そんな事を言つている間に、サクは丘の先端に立ち、三人に振り

返つた。

「見えた！ タニヤ村だ！」

すぐに追いついた三人と並び、丘の上から見下ろしたタニヤ村は、森に囲まれた小さな村だった。

辺り一面夕陽に照らされ、濃いオレンジに染まる風景は、日暮れ

が近いことを知らせていた。

村の周りには、数メートルにのぼる木と石の防御壁が立ち、あちこちに獣避けの草木が生えている。町や国でよく見られる、魔導士が強い念で強固に守られた壁とは違う、昔からの人々の知恵の一つだ。防御壁に小さく点在する数ヶ所の門は固く閉ざされていた。

サクたちはそのうちの一つに近づいた。人の気配も無く、扉はぴったりと閉まっている。

「ここにちは！」

とシリウが門を叩いた。しばらくして、低く警戒した口調で男の声がした。

「誰だ？」

「旅をしている者です。今夜一泊の宿をお願いしたいのですが」シリウが丁寧に答えると、門の一角にある小さな窓が開いた。

四人が近づくと、角張った顔のがつしりした体つきの男が顔を出した。

「驚いた！まだ子供じやないか！あの物騒な森を通つてきたのか？」

「んなの、どうつてことないぞ！」

サクが自慢げに言いながら、窓いっぱいに顔を近付けた。それを押し退けるように、今度はヤツハが顔を見せた。

「あ、あのっ！あたしたち、怪しい者じやないんです！ソーラー

ル兵士養成学校から来ました！」

すると男は、また驚いたように言った。

「ああ、そうだったか！昨日、そこの校長からうちの村長宛てに手紙が来たとお触れがあつたんだ。生徒たちが寄つた時には、受け入れてくれとな！少し待つてね！」

男は小さな窓を閉じた。すぐに扉の施錠を解いた音がし、見掛けに寄らず重そうな扉を軽々と開け、サクたちを招き入れた。

「ありがとうございます。僕はシリウ。そしてサク、ヤツハ、カイルです」

三人は順番に紹介されると、それぞれに挨拶をした。

「俺はバカラだ。子供たち四人だけで旅とは、大変だつただろう？」

？ よく来たな。 村長に会わせてやる、ついてこい」

四人は小さな扉をくぐり、体格の良い褐色肌のバカラについて行つた。

村の中には十何軒かの小さな木製の家がひしめきあつていて、その隙間を縫うような細い路地裏で遊ぶ子供たちは、突然の来客に驚いたように手を止め、じつと四人を見つめている。

村の奥にあつた村長の家は、大きなかやぶき屋根の立派な家屋だつた。

「でつかい家！ 金持ちのかなあ！」

サクが目を丸くして、家の外観を仰ぎ見て感嘆の声をあげた。

「村長に。ソラール兵士養成学校から旅人がやつてきたと」
バカラが門の前に立つていた御用聞きに言つと、彼は少し待つよう言い残して、家の中へ入つていつた。あちこち覗きたがるサクをヤツハが押さえていると、再び中から御用聞きが戻つてきて「中へ招くように」とのことです

と、家中へ促した。

バカラについて一步踏み入れると、そこはなんとも煌びやかな内装だつた。

「まるで外観はダミーのようですねえ」

シリウは驚いたように周りを見回した。

一面金箔の貼られた壁には、名画らしい絵画や彫刻品など、高そうな芸術品が整然と飾られ、サクも周りに気を取られて足元がおぼつかない。ヤツハのげんこつがサクに飛んだ。

「サク、しつかり歩きなさいよー ぶつかって壊したら弁償よー！」

「わはははー 皆村長のコレクションばかりだ。あまり触るなよ

！ 壊したら怒られるじゃ済まないぞー！」

バカラは笑いながら言い、やがて四人は一番奥の部屋へと通された。

深々と彫刻の掘られた頑丈そうな扉を開くと、巨大な銅像に守られるように挟まれた村長が、柔らかそうな一人掛けのソファーに深々と座つていた。

バカラは扉の外で

「俺はここまでだ。 ゆっくりしていけよ。」
と去つていった。

「ありがとうございました！」

シリウが丁寧に礼を言い、ヤツハとカイルもお辞儀をした。 サクは一人、明るく手を振つていた。

「さあ、どうぞ。 よくここまで無事で来られましたな」

初老の村長はたくましく大きな体を揺らして、笑いながら四人を中心へと誘つた。 口に太い葉巻をくわえながら、目の前のソファーにサクたちを促した。 そつと座つた体を、ふんわりと包み込み、心地よく感じた。

「私はタニヤ村の長を務めているガラムだ。 さぞや厳しい旅だつただろう？ 最近は本当に外の治安が悪い。 獣避けの草木も効果が無くなつてきているなか、よく旅を続けられてきたな」

「この辺りは、そんなに危険にさらされているんですか？」

シリウが静かに尋ねた。 ガラム村長はゆっくりと首を横に振り、ため息をついた。

「この村もこれ以上大きくなれば出来ず、狭くて住みきれなくなつて、やむなく村を出していく者もいる位なのだよ。 外に出ると言つても、安全な場所などどこにも無いのに……」

「大変なんだな」

サクが心配そうに言つているなか、その腹の虫が鳴る音がした。 バカラはしまった、という顔をして手をひとつ叩き、御用聞きを呼んだ。

「すぐにこの客人に食事の用意を！」

そしてサクにすまなそうな顔をした。

「気が付かなくてすまなかつた。きっと緊張のしづめの上、歩き詰めだつたのだろう？ 腹が空いていないはずはない。久しぶりの客で、つい話を長引かせてしまつた。すぐに用意させるから、ゆっくりしていってくれ。寝室も用意してある。後で案内させよ」

「何から何までありがとうございます。僕たちは、世の中をほとんど知らずに育っています。訓練ばかりの毎日ですから。滅多に無いこういう機会に、色々な話を聞くことが出来るのは、とても貴重で嬉しいことだと思います」

シリウが言うと、ガラムはさも嬉しそうな顔をした。

「そうかそうか、では、少し聞いてくれるか？ 実は私は、話をするのが大好きで、何があると口に出さなくては済まない性格なのだ。おかげで家人には面倒くさがられている」

苦笑しながら言つガラムに、空腹のお腹を押されたサクが力なく言った。

「食べながらでいいか？」

「こら、サクつ！」

ヤツハがしかる。

「勿論！ 夜は長い。キミたちが良ければ、一、三泊していっても良いくらいだ」

ガラムは肩を揺らして笑つた。するとシリウが微笑んで小さく手を振つた。

「大変有難いのですが、僕たちは先を急いでいます。今晚だけ、甘えさせていただく予定ですので」

柔らかい口調で言つシリウ。ガラムは少し寂しそうな顔をしたが、すぐに微笑んだ。

「そうか。 そうだな、旅には目的があるものだ！」

そういひしているうちに、別室には食事の用意がされ、ガラムと

共にサクたちはテーブルの前に座つた。

「うわあ！ 美味そうな料理ばかりだ！」

テーブルの上に所狭しと並べられた料理を見た途端、サクが感嘆の声を上げた。 ヤツハも、目の前のフルーツやデザートに目を輝かせている。

「こんな豪華な料理、見たことがないわ！ 学校では絶対に食べられないものばかりね！」

サクとヤツハは嬉しそうに料理を眺めていた。 その横で、カイルはシリウにそつと耳打ちした。

「おかしくないか、この村？」

シリウも小さく頷いた。

「僕もそう思いました。」

周囲に気付かれないように辺りをそつと見回し

「質素で、いかにも貧しそうな村の外観に比べて、この家の内装の派手さ…… いくら村長のコレクションとはいえ、どこか引っかかるんですよ」

と言つて、目の前の料理に目を落とした。 見るからに出来立てで、綺麗な盛り付けをされ、美味しそうな匂いと湯気が鼻をくすぐる。 空腹なのは、シリウも同じだ。 思わず心酔いそうになる。

「料理に何か入つてるんじや…… おい、サク！」

カイルは思わず慌てた声を上げた。

サクはすでに、口いっぱいに料理を頬張りながら、ガラムの話に聞き入つている。 ヤツハも、メインよりもデザートに口を付けながら、料理人と思われる人に、どこで採れるフルーツなのか、どうやって作っているのか、などと質問をしている。

「……大丈夫…… のようですね」
シリウがあきれて言った。 がつついでいるサクを見て呆然としていたカイルも息をついた。

「だと良いが……」

そう言つて、田の前の料理に恐る恐る口をつけた。

「！ 美味しい……」

カイルの素直な感想に、シリウも同じく、と感心したように頷いた。

それからは、シリウとカイルもガラムの話に聞き入り、四人は充実した一夜を過ごした。

ガラムは分かりやすい語り口で、この村に起こった事件や、自分が長として村を必死に守ってきた体験談を延々と話し続け、その話は一刻も止む事がなかつた。

途中、先ほど村を案内してくれたバカラも加わり、宴会のようにな盛り上がり、気が付けば朝陽が昇つていた。

「すまん！ つい話に夢中になつて、夜が明けてしまった！」

もう一日泊まっていかんか、と申し訳なさそうに話すガラム。だが四人は、安全に夜を過ごせたことだけでも有難いと受け止めていた。

「いいよ、ガラムのおっさん！ オレたち、すげー楽しかつたし、体は休めたし、美味しいものたっくん食べさせてくれたし、充分だ！」

！」

サクはまだ興奮した顔で言つた。シリウも頷き

「大変貴重な話を聞くことが出来て、感謝しています。ありがとうございます！」

と言つと、ヤツハも

「あたしも、色んなフルーツや料理の事を知ることができて、本当に良かつたわ。学校に帰つたら、皆に自慢しなきやー！」

と満足そうに微笑んだ。

「そうか、皆、道中気をつけてな。帰りには、このタニヤ村に必ずまた寄つてくれ！ その時には、今度こそゆっくり休んでもらうよ。待つとるからな！」

ガラムは大きな体を揺らして村の出口まで行くと、門番のバカラと共に、旅立つ四人を見送った。サクたちも振り返って手を振りながら、タニヤ村との別れを惜しんだ。

シンジテタノー……

「良かつたな、こんなにたくさん土産までもらつちまって……」

サクが歩きながら嬉しそうに背中の革袋を揺らすと、ヤツハが言った。

「土産じゃなくて、これから食料！ あんな小さな村なのに、きっと必死に集めてくれたのよ！ 大事に食べるの！」

と言っている先で、そいつと革袋に手を入れようとするサク。カイルのげんこつが飛んだ。

「お前、分かつてやってないか？」

「いつて……」

「しかし、本当に良い村でしたね。皆さん良い人たちばかりでしたし……ですが……ふああ～……」

四人は同時にあくびをした。

「やはり疲れた体に徹夜というのは辛いですね……」

シリウは眼鏡を外して目をこすった。他の三人も、急に元気を無くしていた。

「少し、はしゃぎ過ぎたかもな……」

カイルがこめかみを軽く押された。

折りしも、朝から快晴。穏やかな日差しが四人を麗らかに暖めていた。

「やべえ……」

サクはふらつき、ついに道端に立つ木の根にぺたんと座りこんだ。

「もう歩けねえよ、眠くて……」

泣きそうに悲痛な表情で、サクが大あくびをした。体に力が入らない……。

「……あたしもダメかも……」

ヤツハも同じように、木陰に座り込んだ。シリウとカイルも長いため息を吐いた。一人も同じように睡魔に襲われ、体中を疲労

感が支配している。シリウは白くなつていく視界のなか、辺りを見回した。

「本當なら、もっと安全そうな場所を見つけるべきなんですが……限界のようですね……」

「見張り役、してやるよ」

カイルが力なく言うと、シリウもつらそうに微笑んだ。

「とりあえず十分だけ……すぐに起こしてください……」

言い終わらないうちに、シリウの体は崩れ落ちた。

「！ シリウ……」

カイルもまた、助けようと膝を付いたあと、そのまま倒れこんでしまった。サクとヤツハも、すでに木陰で目を閉じていた。四人は、突然襲ってきた睡魔に抗つヒマもなく、深い眠りに落ちていった。

しばらくして、寝息をたてるサクたちを、複数の影が囮んだ。

「ん……」

一番最初に目が覚めたのは、カイルだった。目の前に地面が横たわっているのを見て、慌てて起き上ると、反射的に自分の体を探つた。

「！ しまった！」

カイルは急いで、まだ寝息を立てているサクたちを振り起こした。「まずい！ 皆、起きろー！」

目を覚ましたシリウも、すぐに事の大きさを理解したようだった。自身の両頬を叩くと、首を振った。

「不覚でした！ 所持品を奪われるとはー！」

「オレの食料もねえ！」

サクが叫んだ。タニヤ村でもらつた、食料の入った大きな革袋も姿を消していた。

「一体誰だ、このやるうー！」

その体は怒りに打ち震えている。

その時、ヤツハはふと足元にキラリと光るものを見つけた。

「これ……つてまさか……」

シリウはヤツハからソレを受け取ると、丁寧に見た。

「……金箔……ですね……」

「もしかして……！」

シリウはヤツハの言葉に頷いた。

「タニヤ村か！」

カイルとサクが同時に言った。

「何で奴らだ！ 戻るぞ！」

サクは震える手で拳を握った。 シリウも眼鏡を上げて背筋を伸ばした。

「そうですね。 武器も取られてしまつては、この先一步も進めません。 それに……」

シリウの表情が曇り、それを察知したヤツハが言った。

「まさかハミウカ紙も？」

「ええ、しつかり盗られてしましました」

「奴ら、ハミウカ紙を狙つて？」

カイルの眼光が鋭くなつていた。 怒りに満ちている証拠だ。

シリウは静かに首を横に振つた。

「いえ、校長が僕たちのために近隣の村や町に手紙を送つたとはいえ、旅の目的までは書いていないハズです。 ハミウカ紙は、世界でも手に入れにくい貴重な物。 そう軽々と口外することはないでしょう」

「それって、売つたら高いのか？」

サクが体をほぐしながら聞いた。 ぐつすり睡眠も取つたので、頭はすつきりしている。 暴れる準備をするには、充分すぎる体調だった。 シリウは頷いた。

「知っている人が見れば、かなりの高額になると思います。 ただ、あの村の人たちが知つていてるかどうかは分かりませんが……」

「そうか！」

サクは充分に体をほぐした。

「じゃあ、そろそろ行くか！」

三人も、大きく頷いた。

その頃タニヤ村では、ガラムの屋敷に数人の男たちが集まっていた。その中にはガラムもバカラも居る。

「ボス、今回の得物はこれだけですよ。相手が子供ばかりってのが、よくなかつたんじゃないですか？」

床に無造作に置かれたサクたちの武器や所持品を見下ろし、不満そうなため息をついた。ガラムもまた、剣やナイフを蹴りながら横に避け、金めの物がほとんどないことを確認すると

「フンッ！」

と鼻で笑った。

「こんなもんじやあ、昨夜の宴の分にもなりやしねえ。いつそあいつらの体を売るか、人質にして学校を脅迫するかした方が良かつたかもな！」

と悪態を付きながら物品を蹴飛ばし

「売り物にならねえもんは捨てちまえ！」

そう仲間たちに言つてその場を離れようとしたその時、ガラムは何かに気付いて足を止めた。

「ちょっと待て」

そう言つて仲間の足元にあつた一枚の封筒を拾つた。宛名も差出人も書かれていない、白紙の封筒だが、封はしっかりとある。中身がある証拠だ。

「こりやあ……」

いちべつしたガラムは、ニヤリと顔を歪めた。

「大物だぜ、こりや……」

バカラたちは何のことか分からず、ただ途端に嬉しそうな顔をし

たガラムをきよとんとした表情で見るだけだった。

その時、何かが破壊される大きな音と共に、大きなものが倒れる音がした。

「な、何だ！」

慌てて様子を見に行つたバカラたちの前には、粉々に砕け散った門が崩れ落ちていた。

「一体誰が？」

呆然としているバカラたちに、立ち上る砂煙の中から声が届いた。

「オレたちだよ！」

「おっ！ お前らか！」

サクの声に、バカラたちは一斉に彼らを見据えた。シリウは眼鏡を指で上げながら悠然と言つた。

「預けていたものを、返してもらいました」

「おとなしく返しなさい！」

ヤツハも怒り心頭だ。カイルも鋭い眼光を放つて睨んでいる。バカラはそんな彼らを見て、高笑いをした。

「わははは！ やめておけ！ 僕たちは戦いなれた流族だぜ。目的の為なら女子供だろうと容赦はしない。だが、子供の命を無造作に取るのでも気が引けるのでな、今あきらめて引き返せば、命だけは見逃してやるぞ！」

シッシッとまるで小動物でも追い払つかのような仕草をするバカラ。完全に見下しているバカラに

「それが、あきらめられないんですよ。 とても大切なものをあなたたちに奪われてしまったのでね」

とシリウが静かに言つた。 そうは言つても、彼の心の中は燃えるように怒りに震えていただろう。他の三人も同様だ。立ち姿から、怒りの気が放たれていた。

「ご託はいいから、早くあたしたちから奪つたものを返しなさい！」
ヤツハも苛立つた口調で言つた。

バカラは一層笑い飛ばしたあと、大きな斧を構えた。他の仲間たちもそれに剣や鎌などを構えた。臨戦態勢だ。

「やるつてんなら、遠慮なく行くぜ、おっさん！」

サクが飛び出すと、他の三人も同時に地面を蹴った。

訓練で身に付けた技術を駆使して、四人は戦つた。サクはまだしも、シリウ、ヤツハ、カイルにとつて一つ難点だったのは、丸腰だったことだ。それぞれ得意とする戦いを伸ばしてきた彼らにとって、いつも使っている武器が無いのは、心もとない事だった。だがその心配も、やがてそれが倒した男たちから奪つた武器ですぐに解決した。

屋敷の外は、戦いで生まれた土煙に包まれた。

村のあちこちから仲間が出てきて襲いかかる。こんな小さな村に、こんなに屈強な男たちが何十人も居たのかと不思議に思うほどの団体に囲まれながらも、四人はその身軽さを武器にその壁を崩していった。ガラムの屋敷までもう少しの距離まで近づいた。

「クソッ！ ちょこまかとうるさい奴らだ！」

バカラが大きな斧を振り回すが、サクたちにはかすりもしない。苛立つて力任せに叩きつけた地面に深々と刺さった斧を引き抜こうとするバカラの後頭部をサクの足が蹴りおとし、もんどうりうつたその太い腕をシリウが背中にねじり上げ、うめき声を上げる首元にカイルがナイフを付きつけ、動けなくなつた汗だくの顔を見下ろしたヤツハが余裕の表情で尋ねた。

「お頭さまは、どこ？」

残党たちは、リーダーであるバカラがねじ伏せられている様子に愕然とし、動きが止まつた。

「つ……奥の……部屋だ……」

「行くぞ！」

サクの声でシリウはその手を離し、一同はガラムの家へと歩を進めた。

「」のように詰まれた流族たち。そこに、ゆっくりと起き上がる影。

「」のガキッ！」「

バカラは憲りてなどいなかつた。勢いよく地面を蹴り、サクたちに再び襲い掛かろうとしたが、すぐにその体が止まつた。冷静にカイルが放つたナイフが、バカラの喉元を貫いたのだった。

「な……」

血しぶきを上げ、大きな砂煙を巻きあげて倒れたバカラを振り返ることも無く、サクたちはガラムの屋敷へと入つて行つた。

御用聞きと偽つていた下つ端たちもなぎ倒し、わき目も振らずに奥の部屋へと歩を進め、やがてその扉はサクの足によつて無造作に開け放たれた。

部屋の奥では、驚いた顔をしたガラムが追い詰められたよつて、サクたちを震えながら見ていた。

「オレたちの荷物、返せよ！」

迫るサクの前で、ガラムはハミウカ紙の入つた封筒を破る格好をした。

「これだろ？　こいつは土地を浄化するといつハミウカ紙。どこでこれを手に入れたのかは知らないが、」といつが無くなると、お前らは困ることになるんだろう？」

ガラムの目が見開かれ、その顔は憎らしげに歪んだ。

「てめえ！　卑怯なことすんな！」

サクが動けずに怒ると、ガラムの顔は一層ひどく歪んだ。確証を得た証拠だ。

「それ以上近づくな！　」いつを破るぞ！』

だがシリウはかまわずに足を進めた。

「く、来るなと言つているだろ！」

ガラムは慌てふためきながら後ずさりをし、封筒を顔の前に持つてくると、今にも破り捨てる素振りを見せた。

だがシリウは冷静な顔で、ゆっくりと眼鏡を指で上げた。

「破るのが先か、あなたが命を落とすのが先か……」

そして不敵に微笑んだ。

「！ 何つ！」

動きが止まつたガラムの首元に、ナイフが突きつけられていた。

「い……いつの間に……」

ガラムの冷や汗が、その頬を流れ落ちた。震えながら目玉だけを向けたガラムの目の前には、冷たい視線を向けたカイルの顔があつた。

「その封筒を離せ」

抑揚も無く冷たく言い放つカイルの前で、ガラムの震える指から封筒が静かに落ちた。軽い音を立てて床に落ちた封筒をシリウが悠然と拾い、ホツとしたように微笑んだ。

「このやろーつ！」

サクが怒りの表情でガラムに殴りかかるつとしたが、その腕はシリウにつかまれた。

「何するんだよ！ 一発殴らせようよつ！」

もがくサクに、シリウは静かに

「もう、終わりました。無駄に手を汚すこととは無いですよ」と微笑んだ。サクは悔しそうに、ちつ！と舌打ちをして

「お前、命拾いしたな！」

と捨て台詞を吐いた。シリウもサクの腕をそつと離し、カイルに頷いた。

カイルのナイフが離れ、ガラムが力なく座り込む前で、サクたちは自分の荷物を拾つてほこりを叩き落した。

「！」最近、この辺りで強盗が頻繁に起きているという噂は聞いていました。ここまで来る途中で襲つてきた流族たちがそうなのかなと思っていましたが……まさか居を構え、普通の民を装つていると

は思つてもみませんでした」

シリウは冷たい目でガラムを見下ろした。ガラムは全てを失つたことを理解し、すっかり意欲を無くしてうつむいていた。

「確かに、外を歩き回る流族よりは、安全で確実な方法かもしれませんけどね。人様に迷惑をかけるようなことをする流族を、僕は絶対に許せません！」

シリウの冷たい視線に小さくなつたガラムを置いて、サクたちは荒れ果てた廊下をすり抜けて、屋敷を出た。

外にはまだ残党が散らばって屋敷の中を伺っていたが、サクたちの姿を見た途端、怯え震えて後ずさりをした。ボスのガラムが落ちたことを知ったからだ。

サクたちは残党たちの視線を気にする素振りも無く、村の外へと向かつた。その時

「お前ら！ 絶対！ 許せない！」

と甲高い声が響いた。

見ると、母親と見られる女性の制止を振り切つて、まだ五、六歳ほどの少年がサクたちに駆け寄ってきた。見ると、小さな体には不釣合いに煌めくナイフをしっかりと両手で握っている。そのままの勢いで、少年はサクへとナイフを振りかざして襲い掛かつた。

「おっと！」

サクは、軽々と襲ってきた少年の攻撃をかわし、その細腕をつかみ上げた。その拍子に、手にしていたナイフも金属音を立てて地面に落ちた。

「くつ！ 離せ！ 離せつてば！」

「サク！」

ヤツハが戸惑いながら少年を見つめた。少年はもがきながら、今度はサクの体を蹴ろうと足をバタつかせている。だが、その短い足ではかすりもしない。

「ヤンバス！」

母親らしき女性が近づけないまま、地面に膝をついて少年の名を悲痛に呼んだ。

「お前、この村の子供か？」

サクが人懐っこく微笑み、軽い口調でヤンバスに尋ねた。ヤンバスはサクの頬につばを吐きかけた。

「！」

シリウとカイルの緊張が走った。怒らせたら、例え相手が子供だろうが、何をするか分からない。

だがサクは、ゆっくりと頬を腕で拭き、少年を見つめ返した。

「ヤンバスつて言つのか」

「強盗のお前らなんかに、名前で呼ばれる筋合いなんかない！」

「強盗？」

ヤツハが驚いて尋ねた。

「そうだろ？ 父ちゃんたちが一生懸命稼いできた物を、お前らは盗んだんだ！ 村もこんなに滅茶苦茶にして！ お前ら、絶対許せない！」

「そうか……」

カイルが呟いた。

「この村の男たちは、家族に自分が流族だつてことを言つてないんだ」

シリウはそれを聞き、小さく頷いた。

「その様ですね。彼らにとつては、僕たちはただの強盗……ということですか？」

サクはじつと少年を見つめ、そして突き放すようにその手を離した。

しりもちをついて地面に転がったヤンバスは、それでも心は折れなかつた。睨む瞳は、憎悪で輝いている。

「ヤンバス！ 今はわかんねえかも知れないけど、聞け！」

「っ！」

ヤンバスはサクの気迫に押され、言葉をつぐんだ。

「大事なのは、真実を知ることだ！ 見えない所に、真実は隠れてる！」

ヤンバスは呆然と聞き入つていた。サクはニッと微笑んだ。

「お前、将来絶対強くなる！ オレが保障する！ 村を荒らしたことは謝る。すまなかつた！」

すっかり言葉を失つたヤンバスを残して、サクは歩き始めた。

その後を、他の三人も追いかけた。後ろ髪を引かれる思いでヤツハが振り返ると、まだ膝を付いている状態で、じつと見つめるヤンバスの姿が見えた。その表情に、もう憎悪の気配は無かった。というより、ただサクの気迫に押さえ込まれたのだろう。

「あの子……」

ヤツハが心配そうに言つと、カイルが言つた。

「大丈夫だ」

「え？」

「目は死んじゃいなかつた。あの子は、大人になつて全て分かつた時、自分で行くべき道を選べる男だ」

そう言うカイルに、シリウは微笑んだ。

「そうですね」

不信感をあらわにする村人の視線を浴びながら、サクたちはタニヤ村を後にした。

タニヤ村を出てしばらく行つたあと、戦いで受けた怪我の手当をするために安全な場所を確保した四人の口論は激化していた。

「まったく、ちゃんと持つとけよな！」

ヤツハにキズの手当を受けながら、サクはシリウを責めた。彼は申し訳なさそうに

「すみません。僕も油断していました。まさかあそこまで睡魔に襲われるとは思いませんでした」

「シリウだけの性じやないわよ！ 料理の中に何か入れられていたのかもしれないし、何より、シリウが持つていてのを知つていたあたしたちだって、守らなきやならない責任があるのよ。皆の責任だわ！」

ヤツハが弁護するように言つと、カイルもうつむいた。

「見張りするつて言つたのに、俺まで眠つてしまつた……」

「カイル、自分を責めることはないわ！ サクの方が、一番先に寝

たじやない！」

キズに巻いた包帯を無理やり絞られ、悲鳴を上げるサク。

「分かつてゐよ……オレも油断してた。シリウの性だけにしちゃ悪いよな。『めん！』

シリウは首を横に振った。

「これからは、もつと気を引き締めて行かないと！ 何があるか分かりませんから」

それから、胸のポケットを軽く叩いた。シリウはヤツハに頼んで、内ポケットを厳重に縫いこんでもらうこととした。

その後、休み無く半日以上を歩き続け、時々襲つてくる獣たちと戦いながら進み、さすがにへとへとになつた四人は、森に囲まれた泉のほとりで野宿することにした。ひとりひとりが交代で見張りをしながら、数時間ずつの睡眠を取ることにした。

月明かりにぼんやりと照らされ、虫の鳴き声だけが響く森の中は風も穏やかで、ゆっくりと時間が流れているようだった。

「静かですねえ」

シリウの声に、見張り役だつたカイルが振り向いた。

「まだ起きていたのか？ 少しでも眠つておいた方が良い」

シリウは答へずに、カイルの横に座つた。サクとヤツハは同じ木の幹にもたれて、毛布にくるまつて眠つている。寝顔を見れば、まだ十代半ばの子供の顔だ。気を張り続けた末の、短い安息の時。

「シリウ、いいから眠つて」

カイルの言葉を遮つて、シリウはシーツと自分の唇の前で人差し指を立てた。

「人にはね、適當つて言葉があるんですよ。充分、休息は取らせていただきました」

そう言つて微笑むシリウに、カイルは思わず見入つてしまいそう

になつた。

「！」

我に返り、慌てて視線を逸らすと、カイルは緩やかな波を立てる水面を見つめた。

「これからも、学校では味わえないことがたくさん起こりそうですね」

シリウが穏やかに言つた。

「まだ先は長い」

カイルが呟くと、シリウはその顔を覗き込んだ。

「怖い、ですか？」

するとカイルはキッと睨んだ。

「そんなことはない！」

俺も厳しい訓練を乗り越えてきている。

それにこの旅が危険なことくらい、最初から覚悟している！」

カイルは、眠っているサクとヤツハを起こさない程度の音量で言った。

「そうですか。僕は怖いですけどね」

シリウはそう言って微笑んだ。思わず見つめるカイルに

「意外そうな顔ですね？」でも僕は、一度過ちを犯しました。ハミウカ紙は、命を削つてでも守らなくてはならない。その重圧を、今更ながら思い知っています」

シリウは、胸を強く押さえ、カイルもその胸元を見つめた。

「そうだったな……この旅は、シリウが一番気が重いのかもしれない。でも俺たちは、あの事があつたことで、一層絆が深まつたはずだ！もう間違いはないとと思う」

「絆……フフッ……カイルからその言葉を聞くとは」

シリウは嬉しそうに笑つた。カイルの頬が赤くなつたようだが、夜の薄暗さにうやむやにされた。

「とにかく、俺たちはファンネル校長に信用されて依頼されたんだ。その期待を裏切ることはできないってことだ！」

まるで自分に言い聞かせるように言うカイルに、シリウは微笑ん

で頷いた。そしておもむろにカイルに寄り添うと囁くように語った。

「ところで、旅立つ時に、あなたがミラン先生から受け取った物が気になつていいんですねが……」「カイルは驚いたように体を離した。

「知っていたのか？」

シリウは微笑んで頷いた。

「それに、月に一度、医務室に通つていることも気になります」カイルはそこまで知つてゐるのか、と観念したようにため息をついた。そして懐から布袋を取り出した。旅立つ時に、ミランがそつと手渡したものだ。

「痛み止めだ」

カイルは袋の口を開き、手のひらにてそのいくつかを取り出した。錠剤の形をしてゐるそれは、確かに薬のようだつた。シリウはそれを興味深そうに見つめ、次にカイルの顔を見た。

「何か持病でも？」

心配そうに尋ねるシリウに、カイルは視線を逸らせて答えた。

「持病……まあ、そうだな……」

そして、錠剤を布袋に戻した。

「あまり聞かれないことも、人にはある

と、それ以上は黙つた。シリウはあきらめたように息をつくと、木の幹にもたれた。

「そうですよね。でも、無理しないでくださいね。薬があると言つても、気休めにしかならないと思って」

「それはミラン先生にも言われた。薬に頼るな、と。でも……」

続けようとしたカイルだったが、口をつぐんだ。

「助け合つのが仲間です。薬よりも仲間に頼つた方が、健康的かもしれませんよ。あとは、睡眠も。さ、時間ですよ、カイル」優しい口調のシリウに、カイルは穏やかに微笑んだ。

「ありがとう、シリウ。

感謝する

そして静かにサクとヤツハの所へ近づくと、上着を後頭部まで深く着こんで、眠りに付いた。

「おやすみなさい、カイル」

シリウは、カイルが小さくうずくまるのを見届けると、ひとり微笑んで再び泉を見つめた。

静かな時が、一時の安息を包んでいた。

「さあ！ ザック町へ！」

「次はザック町だな！」

「そろそろ食糧も尽きかけているし、少し急いだほうがいいかも？」
サクとヤツハが言うと、シリウも頷いた。

「アルコド国まではまだ中間地点です。ザックは少し大きな町の
ようですし、しっかりと体を休めて、続く旅に向けて備えましょう
！」

シリウはふとカイルを見た。どこか心口にあらざと言った雰
囲気を感じたので

「カイル？ 大丈夫ですか？」

と尋ねると、カイルはハツと我に返り、慌てて頷いた。

そうして一行は、一路次の町ザックへと向かつた。

ザック町は、森と海に面した漁業の町。

港では道の両側に店が立ち並び、海で獲れた新鮮な魚介類が並び、
人で溢れかえっている。サクたちはその繁栄ぶりに圧倒された。

「にぎやかな町だなあ！ 美味いもんがたくさんありそう！」

サクはすでにヨダレを垂らしている。

「サク、ヨダレが汚い！ でも、これだけのいろんな魚介類、あた
しも見たことないわ！ ホント、栄えてるのね！」

すっかり興奮しているサクやヤツハ。あちこちに田が奪われ、
興味津々でふらついている。

「ここからアルコド国に食糧を届けているんだ。もうあの国に、
自給の力はないと思う」

カイルが神妙な顔でつぶやいた。それを聞き、三人はそれぞれ
に、自分たちの責任の重さを感じるのだった。シリウは胸のポケ
ットに忍ばせてあるハミウ力紙を、そつと押さえて確認した。

「とりあえず、食事にしましょう！」

シリウの一言で、もちろん大賛成のサクを筆頭に町の中を歩いた。

石造りの建物がひしめき合い、人通りも多い。まるで異世界に来たような錯覚に陥る。いろいろな人種が集まり、交わす言葉も知らない言語が混じる。

「カイル、ここは、何が美味しいんですか？」

シリウが聞くと、カイルは少し考えて言った。

「ここは、見ての通り漁業が盛んだから、魚料理かな。新鮮な魚を出してもらえる」

一行はレストランを探すと、中に入った。

「魚くれ！ 魚、魚！」

サクがテーブルを盛んに叩くので、またヤツハの制裁が落ちた。

「他の人の迷惑も考えて！」

その前で、もう慣れてそ知らぬ顔をしたシリウがカイルにメニューを見せた。

「どれが良いですかねえ？」

カイルはメニュー表を上から順番にたどった。

「これだと、皆で分けながら食べられるし、量も多い」

「じゃあ、これにしましょう！」

シリウは店員を呼んだ。

しばらくして、心待ちにしながら先に置かれたフォークとナイフを持って待っているサクの前に、テーブルいっぱいの分厚い大皿が重い音を立てて置かれた。

「でっけ～！ いくらオレでも、こんなに食えねえよ？」

「バカね！ 皆で分けるのつ！」

「具たくさんで、すごいボリュームですね！」

シリウも驚いた声を出した。

「これ、なんていう料理なの？」

ヤツハが聞くと、カイルはひとつ頷いて答えた。

「『パエリア』っていうんだ。貝やイカとかと米を煮込んだ、家庭料理で」

「うんめえー！しかしカイル、この町の事詳しいんだなっ！」

「ん？ あ、ああ」

カイルの返事を聞くのもそこそこ、はち切れそうな頬で笑顔になるサク。

「ホント、美味しい！ 素材の味がすごく生きてる…」

「本当に美味しいですね！」

空腹の性もあってか、それぞれかきこむように喜んで食べる姿を見て、カイルは思わず微笑んでいた。そして、自分も同じようにパエリアをかきこんだ。

「うまかったー！ 腹がパンパンだ！」

満足そうに膨れた腹をさするサクを先頭に、久しぶりにしつかりと栄養補給ができた一行は、宿を取つた。

「費用は学校持ちですから」

と微笑みながら、シリウは贅沢にも一人一部屋を取つた。

仲間としてずっと一緒にいるが、曲がりなりにもそれぞれ違う思いを強く胸に秘め、毎日を学んでいる者たちだ。たまには一人になる時間も必要だろうという、ちょっとしたシリウの気遣いだった。いつも元気に小突き合っているサクとヤツハはまだしも、カイルの表情には、体力的以外の疲労が出ていた。

「カイル、今夜はゆっくり休んでくださいね」

そつと囁くように言ったシリウに、カイルは申し訳なさそうに頷いた。

「正直、人とこんなに長い間一緒に居ることに慣れてなくて…… すまない、気を遣わせたな……」

カイルは静かに部屋の扉を閉めると、倒れこむようにベッドに沈んだ。途端に、清潔なシーツからのぼる石鹼の匂いが鼻をくすぐる。

「ふう……」

目を閉じて大きく息をした。

しばらくそうしていた後、カイルはゆっくりと起き上がり、窓から外を見た。一階の窓から見下ろす町には、まだ人や馬車がひつきりなしに道を行き交っている。夕暮れも近い。西日が町をオレンジ色に染めている。遠くに見える高い時計台が、午後六時を差している。

カイルは軽く身を覆っていた防具を脱いだ。そして着ていた服を替えると、洗面所で顔を洗った。そして、軽装のまま部屋の鍵と少しの金をポケットにねじこむと、部屋の扉を開いた。

「あ、カイル！」

宿の受付の辺りでサクの声がし、カイルが振り向くとそこにはヤツハも揃っていた。

「どこかに行くのか？」

サクが訪ねると

「サクたちこそ、どこかへ？」

とカイルも聞き返した。サクは途端に笑顔で答えた。

「近くに温泉があるってさつき聞いたからさ、行ってみようかと思つて！ で、お前とシリウも呼びに行くとこだつたんだ！」

「ね、一緒に行かない？ あ、もちろん混浴じゃないわよ！ しばらくまともに体を洗つてないし、久しぶりにさっぱりしましょうよ！」

！」

ヤツハもにつこりと誘つた。カイルは愛想笑いで手を振つた。

「俺はいいよ。シリウと三人で行つてこいよ。ザックの温泉は、疲労回復によく効くらしい」

「じゃあおさらカイルも温泉入つた方がいいんじゃね？」

カイルは首を横に振つた。

「俺は少し用事があるから。楽しんでこいよ」

軽く手を振つてその場を離れるカイルの背中にサクが呼び掛けた。

「後からでもいいから、来いよー！」

カイルは答えずに、夕刻の町へと姿を消した。

勢いよくしぶきが上がった。

「あつちい～～～！ でも気持ちいい～～～！」

サクの声が露天風呂に響く。湯けむりが漂うなか、シリウもち
やつかり湯に浸かっていた。湯氣で眼鏡が真っ白だ。

「本当に、気持ちいいですねえ。カイルも来ればよかつたのに」
白く濁った湯を手ですくいながらシリウが言つと、潜つていたサ
クが勢いよく湯から飛び出して言つた。

「なんか用事があるつてさ。あいつ、旅の途中でも一緒に水浴び
とかしたがらないんだよな！」

それでもあまり気にしていないような口調で言い、そして不意に
壁を見ると、耳を近付けた。

「シリウっ！ 向こう、女湯だったよな？」

サクが囁くように言つと、シリウも

「確かにそうだつたよな……」

と声を潜めた。サクはにやけながら、おもむろに壁をよじ登り
はじめた。

壁と言つても、岩でできた簡易的なものだ。器用に上までのぼ
ると、懸垂の要領で田の辺りまで覗かせた。

「湯氣でぼんやりとしか見えねえ……」

残念そうに言つていると、急に激しい風が吹き、湯けむりを揺ら
した。

「うわおー！」

サクが思わず声をあげた途端、彼に軽い物体がぶつかる音と共に
サクが落ちた。湯しぶきが勢い良く上がり、起き上がったサクに
ヤツハの怒号が刺さつた。

「なに見てんのよ？ バカ！ 変態！」

「お前なんか見るわけねえだろ！ 他にいねえのかよ、姉ちゃんが
さあ！」

「なんですかーーっ？」

いきなりヤツハの顔が壁の上に現れ、桶を振り上げた。

カ「ーーーン！」

再び軽い音が露天風呂に響き、サクの頭には一つのじぶが出来て
いた。

「やるか、このやううー！」

サクが構えると、ヤツハは鼻で笑い

「そおんなちつちやい奴に負ける気がしないわ」

と言いつと、サクはヤツハの視線をたどって自分の股間に手を当て、
慌てて湯の中に沈んだ。

「見んなよ、こらあ！」

「あははははー！」

ヤツハはサクを笑い飛ばし、サクは必死に言葉で返すが、事は明

らかにヤツハが優位に立っていた。 その様子を見ながら

「二人は、本当に仲が良いですねえ」

と湯に浸かつままのシリウは、桶を一つ持つて微笑んでいた。

故郷は涙の香り

一方カイルはといふと、夕刻の町の中を一人でゆっくりと歩いていた。

訓練に明け暮れる毎日を忘れさせるような平和な町中は、つい数時間前まで厳しく危険な旅をして来たことさえも和ませるようだつた。武器も防具も持っていない普通の人になつてゐるカイルは、町の片隅のベンチに座つて、しばらく人の往来を眺めたあと、おもむろに立ち上るとまた歩き始めた。

そして一軒の店の前まで来ると、立ち止まつた。

木で出来たあまり大きくない建物は、どうやら飲み屋のようだつた。

『セブンスヘブン』と小さく看板がある扉を開くと、

カラーンカラーンカラーン

と、丁度いい音量をしたベルの音が、心地よく頭上から降つてきた。

「いらっしゃいませ」

低い声が耳に届いた瞬間、カイルの顔がほころんだ。

「あら、久しぶりですねえ」

カウンターの向こう側には長身のマスターが控えていて、彼はカイルを見るなり少し驚いた顔をした後、すぐに歓迎するように微笑んだ。

肩まで伸びたストレートの黒髪をひとつにまとめ、口元に鬚を蓄え、白いノータイのブラウスに黒いベストがしつくり似合つてゐる。清潔感のある、印象の良いバーテンダーだ。

「久しぶり。賑わつてゐみたいだね」

カイルはかるうじて空いていたカウンターの端に座つた。店内

にはカウンターの他に五つのテーブル席があり、そのほとんどが埋まっていた。

ほろ酔いの客たちは各自に話し合い、盛り上がっている。

「おかげさまで。この辺りは商売もまだまだ盛んですから、カイルは差し出されたメニュー表を手にすると、フルーツドリンクを頼んだ。

「かしこまりました」

マスターは丁寧に軽くお辞儀をすると、ドリンクを作りはじめた。その様子を、頬に手を付いて眺めるカイル。その顔にはずっと笑顔が浮かんでいる。

「懐かしいな……」

と呴くカイルの肩が、ぽんと叩かれた。振り向くと、トレイを持つた女性店員が立っていた。まだカイルと同じ歳くらいの彼女は、カイルに向かつて明るい声を出した。

「久しぶりじゃん！ 元気だつた？」

途端、カイルの笑顔が弾けた。

「！ オツカ、久しぶり！」

思わず立ち上がったカイルに、オツカは空のトレイを無造作に力 ウンターに置くなり抱きついた。カイルもまた、オツカの背中を軽く叩きながら抱き締め返した。

「もう、会えないかと思った……」

そう呴くオツカの瞳には、涙が溢れていた。カイルは身体を離して、指でゆっくりとその涙を拭いてやると、笑顔で覗き込んだ。

「元気にしてた？」

オツカは無理やり微笑んでみせ、大きく頷いた。そしてカイルを再び席に座らせると、ゆっくりして行つて、と涙を拭つた。

「お待たせいたしました」

マスターが出してくれたフルーツドリンクをストローでゆっくり飲んでいると

「久しぶりだね！」

と再び声が掛かった。さつきと違う声に再び振り返ると、目の大きな男の店員が笑顔で立っていた。立てた短髪が元気の良さを表しているようだ。

「カゲ！」

カイルはまたもや笑顔が弾けた。

「久しぶり！ 皆、元気そうでよかつた！」

ホツとしたように息をついたが、落ち着く暇もなく、カイルは一人と話しかじめた。

それは、久しぶりの再会を果たせた事の喜びであり、昔に戻れる一時でもあった。カイルはずっと、どびきりの笑顔を見せていました。まるで無邪気な子供に戻ったように。

オツカもまた、仕事はそっちのけでトレイをカウンターに乗せたまま話し込んでいたが、マスターはまだ微笑んで三人を見守るだけであった。

その時

カラーンカラーンカラーン

という来客のベルが鳴った。

「いらっしゃいませ！」

反射的にオツカとカゲが挨拶をした。カゲは、注文を取ろうとトレイを手に取り掛けたオツカを制止して

「いいよ、ボクが行つてくる！ オツカはゆっくり話してて…」と笑顔で言うと、お客のもとへと近づいていった。

「カゲはホントによく動いてくれるんですよ」マスターが微笑んで言った。

「皆、変わつてないみたいだ」

カイルは目を細めた。カゲは一人で入ってきた若い男の客を席へと誘導すると、メニュー表を渡した。

「ご注文が決まりましたら、お呼びください」

丁寧に応対すると、客の男は微笑んで言つた。

「なんだか、盛り上がっているようですね」

男の視線をたどるとカウンターで仲良く話すカイルとオッカが見えた。

「ああ、久しぶりに会つたので、喜んでるんです」

「久しぶりの再会ですか？」

「ええ。 で、『注文は……？』

カゲが笑顔で尋ねると、男は

「珈琲を戴けますか？」

と微笑んでメニュー表をカゲに手渡した。

「かしこまりました。 少々お待ちください」

軽く一礼すると、カゲはカウンターに戻り、マスターに

「珈琲ワン！」

と告げた。 カゲもカイルとオッカの間に入り話し込んでいると、やがて珈琲のいい香りがあまり広くない店内を漂いはじめた。 賑わっている店内が、一時和むようだ。

「珈琲、出来ました」

マスターがカウンターにコーヒー カップを置くと、カゲは小気味よい返事をして受け取り、男の前に丁寧に置いた。

「お待たせしました」

「ありがとうございます。 ところで……」

男はカゲに囁くように言った。

「の人たちは、恋人なんですか？」

『の人たち』とは、カイルとオッカの事だろうと気付いたカゲは、思わず吹き出した。

「あはは！ 違いますよ！ あの店員じやない方、男っぽい格好はしますが、れっきとした女なんですから」

「はい？」

「二人とも女の子！」

カゲはくつたくのない笑顔で繰り返した。 まるで、カイルの事

を面白がっているようだつた。

「そうだつたんですか……それで……」

男は不意に何か考え込んだ風になつた。

「どうかしたんですか？」

カゲが心配そうに言つと、男は我に返つて微笑んだ。

「あ、変なこと聞いてすみません。 ありがとうございます。 い
い香りですね」

「ありがとうございます。 ロロの珈琲は、マスターが血ら敵選し
た豆から挽いてますから！ うちの自慢なんですよ。 「じゅつくり」
カゲはまた軽く一礼して、カウンターに戻つた。

店内はかなりの賑わいようで、やがてカゲとオッカも仕事に追わ
れた。 グラスに残つた氷をストローで軽くつつくカイルに、マス
ターが優しい口調で尋ねた。

「気持ちは、あれから変わりませんか？」

するとカイルは氷を見つめたまま手を止めて頷いた。 マスター
は小さく息をつき、言つた。

「そうですか……オッカもカゲも、毎日の様にあなたのこと心配
していますよ」

カイルは肘をつくと、苦笑いをした。

「分かつてる。 けど、俺はアイツを絶対許さない」

静かな口調からはそれでも、固い意志が感じられた。 マスター

はやはり、とあきらめたような小さいため息をつき

「約束、覚えてますか？」

と尋ねた。 カイルは微笑んだ。

「もちろん。 必ず生きて帰つて、セブンスヘブンの用心棒になる
よ」

そして、空になつたグラスを軽く押して席を立つと

「そろそろ行くよ」

と懐に手を伸ばした。

「今日は、お勘定はいりませんよ」

マスターはそう言って、グラスを下げた。

「帰つてきたら、その分働いてもらいますからね」

マスターはからかうように微笑み、カイルは少し驚いた顔をしたが、すぐに頷いて微笑み返した。慣れた間柄の仕草だった。

「あれ、もう行くの？」

仕事に追われながら、カゲが声をかけた。

「ああ。皆の元気そうな顔を見られて良かつた。また来るよー。」
カイルは笑顔で言つた。そしてひとつ手を振ると、静かに店を出ていった。

カラソカラソカラソ

その音を追うように、扉を開ける音がした。

「カミィル！」

カミィルと呼ばれたのは、カイルだった。トレイを持ったまま追い掛けってきたオツカは、助走をつけてカイルに抱きついた。

「オツカ！」

その勢いに、受け止めたカイルはかろうじて倒れることを免れた。「お願い！ 生きて、必ず帰つてきて！」

悲痛な表情で言うオツカに、カイルは微笑んで頷いた。

「約束する。全て終わつたら、必ず帰つてきて、セブンスヘブンで一緒に働く」

オツカの潤んだ瞳が街灯に照らされて揺れている。外はすっかり夜だ。だが、人の往来は相変わらず多い。

カイルはオツカの頭を優しく叩き

「ほら、もう泣かない！ 泣き顔なんて見せたら、お客様に失礼だろ？」

いたずらっぽく笑いながら、オツカの顔を覗き込んだ。

カゲは放心した表情でカウンターに寄りかかっていた。

「行つてしましましたねえ」

マスターの静かな言葉に、カゲは呟くよつと言つた。

「でも、信じたいんだ……カミィルのこと……」

固い意志を持つた瞳で言うカゲの横に、人影が並んだ。

「お会計をお願いします」

話し掛けたのは、さつきの若い男だった。

「呼んでもくだされば、参りましたのに」

マスターが申し訳なさそうに言うと、男はいいえ、と首を横に振り

「さつきの子とお知り合いなんですか?」

微笑んで話し掛けた。 カゲは会計をしながら

「あなた、一体誰なんですか?」

と怪訝な表情で尋ねた。 さつきからカイルの事を探るような質問をしていることに、今更ながら気付いたのだ。

懐からお金を取り出すと、男は外していた眼鏡を掛けながら静かに答えた。

「一緒に旅をしている、シリウと言つものです」

すると一人は驚き、そして顔を見合わすと、途端に喜びの表情になつた。

「アーッ、『俺はいつも独りだ』なんて言つてたけど、ちやんと仲間がいるんじやないか!」

カゲは嬉しそうに叫んだ。

「他にも一人居るんですよ。皆、いい仲間たちです」

シリウの言葉に、マスターも嬉しそうに頷いた。

「あまり自分のことを話してくれないので、ついここまで後をつけてしまいました」

苦笑いをするシリウに、マスターとカゲも同意するよつに苦笑いを返した。

「僕たち、孤児なんです。 ある事件があつて家もなにもかも失つた時、救けてくれたのがマスターなんです」

「そりだつたんですか。 で、その事件とまつのは……？」
そう尋ねた時、

カラソカラソカラソ

とベルの音が鳴り、オツカが戻ってきた。涙を拭きながら店に入ってきた彼女は、カウンターで一人と一緒にいるシリウに気付くと、近寄ってきた。

「何かあつたの？」

客と何かトラブルでもあつたのかと営業モードに切り替わったオツカに、カゲは笑つて言った。

「この人、カミイルと一緒に旅をしているんだって！」

するとオツカは目を見開いて再び涙を溜めてシリウに詰め寄つた。

「お願ひ！ カミイルを助けて！」

「オツカ！」

長身のシリウにしがみつくように肩口を掴むオツカを抑えるように、カゲがオツカの肩を優しく掴んだ。

「カミイル、と言うんですね、彼女の本当の名前は？」

オツカとカゲは大きく頷いた。懇願する意志が詰まった瞳が照明を反射して輝いている。シリウは微笑みながらオツカの両手を握つた。

「カミイルは僕たちの大切な仲間ですから。痛みは分け合いつもりでいます。それに、僕も安心しました」

そう言いながら、二人とマスターを見た。

「こんなに心配してくれる人たちがいるということに」

シリウは三人に、必ずカミイルを守ると約束をした。

カイルがカミイルだった時

カイルは港の脇にある小さな公園のベンチに座っていた。緩やかな潮風がカイルの前髪を揺らしている。ぼんやりと港を流れるように航行する船や、照明を反射して揺れる水面を見ていた。不意に、横に座った影に驚いて見ると、シリウだつた。

「な、なんでここに？」

驚きを隠せず、動搖するカイルに、シリウは優しく微笑んだ。「オツカちゃんが、きっとココにいるだるうつて、教えてくれたんですよ」

「オツカ？……なぜオツカの事を！」

思わず立ち上がり後ずさりするカイルに、シリウは、まあまあと微笑みながら、ベンチに座るように促した。

「シリウ、君は一体何がしたいんだ？」

怒りにも似た口調で立ち尽くすカイル。両手の拳がきつく握られている。

「驚かせてすみません。僕はただ、あなたのこと�이知りたいだけなんです」

シリウは申し訳なさそうに言った。

「俺の事など詮索するなと言つたはずだ！」

「気分を害してしまって、本当にすみません。でも僕たちは、仲間なんですよ、カミイル」

カイルは、はつとした表情で田を見開き、そして、あきらめたよう无力なく肩を落とした。

「とりあえず、座つてください」

シリウの誘いに、カイルはベンチへとゆっくり近づいて座つた。

「みんな、知つてゐるのか？」

カイルはシリウと視線を合わせずに呟いた。

「聞いたのは、あなたの本当の名前くらいです。僕は出来るだけ、

本当のことあなたから聞きたい」

シリウは優しく言った。 カイルはため息をついて俯いた。 やがて観念したように大きく息を吸いながら顔を上げた。

「ここまで知ってる?」

シリウは、カイルの本当の名前の事と、オッカ、カゲと共に孤児だったと言う事だけは知っていると告げた。 カイルは

「そうか……」

とまた少し俯いて考えると、やがて話し始めた。

「俺は小さい頃、マチという女性に育てられていた。 物心ついたときにはすでにオッカもカゲもいて、三人は本当の兄弟のように育てられていた……」

カイルは、ザックの町外れにある一軒家で育てられた。 紛争地帯の焼けた村で泣いているまだ赤ん坊だった三人を、軍医だったマチは仕事を辞めて引き取り、カミィル、オッカ、カゲと名付けて女手ひとつで育てていた。

マチ自身、子供が好きだったこともあって、いきなり三人の子供が出来たことは負担ではなかつた。 むしろ、毎日が騒がしく楽しい生活だつた。 恰幅の良い、粋な男勝りのマチのもとで、三人は元気によくすくと育つていた。

そんなある日、最悪の事件は起こつた。

誕生日は分からなかつたが、マチに助けられてから十年経つたといふことは知つていた。 捨われてから数え年で、三人は揃つて十歳になつたばかりだつた。

その日はマチに社会勉強だと言われ、買い物に出掛けっていた。

皆で協力してなんとか無事に必要なものを手に入れると、すっかり安心した三人はふざけてじゃれあいながら帰路についていた。

やがて家の近くまで行くと、カミィルは何か不穏な空気を感じた。急に立ち止まつたカミィルの背中にオツカがぶつかってきた。

「なつ！ どうしたの、カミィル？」

「しつ！ 隠れて！」

オツカの口を塞ぎながら木の影に走るカミィルを、カゲも訳が分からぬまま追いかけていた。

「カミィル？」

オツカの問いに答えず、じつと家の方を見るカミィルに、カゲもただ事でないことを察した。

「家に誰かいる……」

「マチさんじやなくて？」

カミィルは首を横に振った。

「違う！ マチさんの感じじやない！」

カミィルは咳きながら凝視するが、遠すぎて家の中の様子までは分からぬ。

「二人はココにいて。 ちょっと見てくる！」

カミィルは木の影に一人を残し、抜き足刺し足で家に近づいた。近づくにつれて、家の中の明かりが揺れているのがわかつた。そして……

「！」

カミィルは血の気が引いたように顔面蒼白で踵を返すと、一目散に一人が待つ木の影へと走つていつた。 オツカもカゲも、ただ事でない顔をして戻つてくるカミィルに、底知れぬ恐怖心を覚えた。「ど、どうだつたんだよ？」

二人の元に戻つてきて息を整えるカミィルに、カゲは恐る恐る尋ねた。 オツカはすっかり怯えて、カゲの袖を強く握つている。

「家の中に、誰かいる！ それもたくさん！」

「ええつ？」

一人は驚いて後ずさりをした。誰か客が来るなら、マチがあらかじめ言つはずだ。なのに何も聞かされていない。突然の来客にしても、子供心に嫌な空気が漂つていた。三人に緊張が走つた。

「ど、どうしよう？」

オツカが震えながらカゲの袖をなおも強く握つた。カミィルはもう一度の方を見つめながら言つた。

「カゲ、オツカを連れてセブンスヘブンに行くんだ。そして、マスターに助けを求めて！」

「カミィルは？」

「あたしは大丈夫！　ここで様子を見てるから。早く！」

カゲは、大きく頷いてオツカの腕を引いた。

「カ、カミィル！」

今にも泣きだしそうなオツカに、カミィルは微笑んだ。

「オツカ、大丈夫だよ！　信じるんだ！」

「カミィル、無理しないでよ！　すぐ助けを呼んでくるから！」

カゲは引きずるようにオツカを引っ張りながら町へと戻つて行つた。

カミィルはその姿を見送り、やがて見えなくなると、再び静かに家の方へと近づいていった。

扉の前まで行くと、壁伝いに窓の方へそつと横歩きした。窓からそつと中を覗くと、薄暗い照明の中で、五、六人の男たちがうごめいているのが見えた。

「！」

途端に、カミィルの身体中を悪寒が襲つた。訳の分からぬ寒気と恐怖に震えながら、カミィルは家の横に立て掛けた斧を手に取つた。普段はその近くに積んである木を切つて薪にするときに使うものだ。慣れているはずなのに、異常なほどずつしりとした鉄の重みがカミィルの細い腕を緊張させる。それを引きずらなりように持ち上げ、扉の前まで近づくと、大きく息を吸つて扉を蹴

り開けた。

バターン！

大きな音に驚いて、家の中に居た男たちが開け放たれた扉を一斉に見た。

皆、腕も首も太い体に簡素な服と汚れた身体。男たちが驚いたのは一瞬だけで、すぐに白い目でカミィルを見下ろした。

「なんだなんだ？ ガキが邪魔しにきやがつたぞー！」

見下した目をして、一人の男が笑った。それにつられて他の男たちも笑い始めた。

「ここはお前みたいなチビが来るところじゃねえぞ。早く家に帰んな！」

手を振つて追い出すよつた仕草をする男に、カミィルの全身が鳥肌立つた。それでも、勇気を振り絞つて叫んだ。

「ここはあたしの家だ！ マチさんはどこに居る…」

「マチー？」

男たちは顔を見合わせ、怪しく微笑んだ。

「もしかして、こいつかあ？」

男たちの体が少し離れ、さまざまなもののが散乱している部屋の奥には、マチがぐつたりと倒れているのが見えた。生臭い空気が、カミィルを不快にさせた。

「マチや……？」

近づこうと一步踏み込んだカミィルの体がびくりと震えた。マチの服はボロボロに千切られ、身体のあちこちにアザと傷が刻まれている。床のあちこちには、血の痕がこびりついていた。

「マ……マチさんに、何をした…………！」

一瞬でカミィルは怒りに震え、斧を振り上げると、やみくもに男たちの中に飛び込んだ。

「うわっ！」

「あぶねえ！」

それぞれに声を上げながら散る男たち。

「マチさん！ マチさん！」

カミィルはマチの傍にたどり着き、その身体にすがりつくと、その体を揺らした。 気を失っているのか、抵抗のない体が重く感じた。

「マチさん！ 目を覚まして！」

懸命に声を掛けるカミィルの体が不意に宙に浮いた。

「ここのガキがあ！」

カミィルは首根っこを捕まれたまま持ち上げられ、斧を振り回そうとしたが、簡単に奪われてしまった。

斧を奪い取った男は、部屋の奥を見た。

「このガキ、どうします、ガラオルさん？」

すると一番奥に悠々と座っていたがつしりした体格の男が、余裕の笑顔で言つた。

「つるせえ虫は、殺して捨てとけ」

氣にする素振りもなく、ガラオルは軽い口調で言いながら唾を吐いた。

「はい！」

カミィルを捕まえている男は、淡々とテーブルの上に置いてあつたナイフを取ると、開け放たれた扉のところまで行き、ナイフを持つ手を振りかざした。

「悪く思うなよ…」

半ば口元がにやけた顔が、次の瞬間には苦痛に歪んだ。

「うああっ！」

金属音と共にナイフが落ちると同時に、フォーグが同じようこ金属音を立てて転がった。 拍子に男の手が緩み、カミィルは地面に尻餅をついた。

「カミィル、逃げなさい！」

声がした部屋の奥を見ると、マチが上半身だけ起き上がりて必死

な表情で叫んでいた。

「マチさん！」

喜びもつかの間、マチは背後からガラオルに髪を掴まれ、腕を取られると後ろへ捻り上げられた。

「あああっ！……くつ！」

マチの悲痛な声が狭い部屋に響く。

「マチさんっ！」

「逃げなさいカミィル！」

苦痛に歪むマチの顔。だが、それでもマチは必死にカミィルを見つめた。

「逃げるなんてやだ……」

カミィルは咳きながら足元に転がるナイフを拾うと、男の足元をすり抜けて、マチのもとへと走りだした。

「このガキっ！」

捕まえようとする男たちの手をすり抜け、カミィルはマチの腕を握っているガラオルに突進した。

「カミィル！ やめて！ 手を出してはダメ！」

もはやマチの声は届かず、カミィルはガラオルの顔面にむかってナイフを振り下ろした。

「がああっ！」

マチの腕を離して後退りしたガラオルは、両手で顔を押さえて膝をついた。

「ガラオルさんっ！」

男たちがガラオルに気を取られている間に、カミィルは座り込んだままのマチの腕を引き起こし、外へと連れ出そうとした。

「待て、この野郎！」

その声と共に、ドスン！といつ鈍い音がした。

急に足を止めたマチを振り向き

「マチさんっ！ 急いで！」

と言つカミイルの両肩を優しく抱いたマチは

「カミイル、早く行きなさい。 そして、オツカとカゲと、一緒に仲良く生きるのよ」

と言つた。 不気味なほどに優しい口調に心感いながら、カミイルが首を横に振つた。

「やだよ……マチさんと一緒に……」

マチは微笑んでいた。

「ホントに……あんたたちはいい子に育つてくれた。 あんたたちと出会えて、ホントによかった」

その瞳から涙をこぼしながら、マチは両膝をついた。

「マチさん……？」

戸惑うカミイルに、マチは突然睨みをきかせた。

「早く行きな！ あんたが今すべき事は、逃げ延びることだよ！ さあー！」

カミイルはいきなり怒鳴られて訳も分からず、その気迫に押され思わず後ずさりをした。

「マチさん……？」

だがマチの瞳は、厳しくカミイルを突き放すようだつた。 もう近寄れない雰囲気を感じ取つたカミイルは、きつく目をつむると、振り切るように踵を返して走りだした。

涙がとめどもなく溢れて視界が揺れ続ける森の中を、無我夢中で走つた。

小さくなるカミイルの背中を見送りながら、マチは再び微笑んだ。

「生きるのよ……」

そして、氣を失いながら力なく倒れた。 その背中には、短剣が深々と刺さっていた。

マチの横を擦り抜けながら、男たちがわらわらとカミイルを追い

掛けようとしたが、すでにその小さな背中は森の中に消えていた。

部屋の奥で片膝をつき左半分の顔を押さえるガラオル。 左手の指の間から鮮血がしたたり落ちていた。 ガラオルは怒りに満ちた声で呟いた。

「あのガキ……絶対許さん！」

後ろの方で、かすかに怒号が聞こえた。 それでも振り返らずに、

カミールはひたすら走った。

何か泥ついた心を振り落とすように、ただ走るしかなかつた。

勘違いから生まれた幸運

「俺は、それからしばらく森の中で息を殺して隠れていた。気が付いたら、セブンスヘブンの一階に寝かされていた。オッカが言うには、ボロボロの服と体で、店の前に倒れていたらしい。マチさんの葬儀も終わっていて、家も壊された。残つたのは、新しい墓だけだった」

カイルは少しうつむいたままで、落ち着いた口調で淡々と話していた。まるで、他人事のように。

「どうして、セブンスヘブンに残らなかつたんですか？」

シリウの問いに、カイルは顔を上げた。その瞳には何かを見据える光が宿つていた。

「俺はアイツを許さない。必ず見つけだして、マチさんの敵討ちをするんだ」

「それで兵士養成学校に？」

カイルは頷いた。

「でも、何も男の真似をしなくてもいいんじゃないですか？」

シリウの問いに、カイルは少し不機嫌な顔になつた。

「女は嚴凜される。俺は、自分自身を高めるためにも、本当の評価をしてもらひたかつた。……それより、何故俺があの店に居ると分かつたんだ？」

するとシリウは、微笑みながら町の中心を指差した。

その方向には、時計台がそびえ立つている。この町では、どこに居てもこの時計台が見える。時計台は、ザック町の象徴とも言える建造物なのだ。

「あそここの時計盤に登つて、見つけました」

軽く言つシリウに、カイルは驚いた顔をした。

「あそこって……高さが五十メートル以上もあるんだぞ！ そこか

ら町を見下ろしたとしても、人は米粒くらいにしか見えないだろ？」

？」

シリウは余裕の表情でカイルに微笑んだ。

「僕の目は……」

言いながら眼鏡を取ると、青みがかつた瞳が港の明かりを反射した。

「強度の遠視が入ってるんですよ。だからね、眼鏡を取れば、どんなに遠くに居るカイルの姿もぱっちり見えるんです」

「遠視……？」

シリウは頷いた。

「子供の時の病気が原因らしくて、普通の人気が見えないものが見えると言つて、よく氣味悪がられました。今では眼鏡で矯正してますが、まさか役に立つことがあるとはねえ」

半ば嬉しそうに話すシリウ。カイルは黙つて彼を見つめていた。眼鏡を取った顔など初めて見たが、案外整つた顔をしている。青く透き通つた瞳が、カイルを惹きこむようだつた。

「？」「どうしました？」

シリウに覗き込まれるように見られたカイルは、反射的に視線をそらせ、焦つて言葉を探した。

「皆には、内緒だぞ！」

カイルの言葉に、シリウはきょとんとした。

「仲間なのに、ですか？」

カイルは強く頷いた。

「これまで男で通してきたんだ。学校の中に居れば、ばれる事もない。今更言つ必要はないだろ？俺は、男として生きていくと決めたんだ！」

シリウは、ため息をついた。

「じゃあ、約束してくれますか？」

「約束？」

カイルは怪訝な表情になつた。シリウは優しく微笑んだ。

「無事に生きて帰ることができたから、『ドートしましょー!』

「でつ?」

カイルはあからさまに嫌な顔をした。

「そんな約束できるか!」

顔を背けるカイルの横顔に

「あ、じゃあ皆にバラします!」

とからかい気味に言つと、慌てて振り向いたカイルは

「卑怯だぞ!」

と声を上げた。シリウは笑いながら

「では、約束してくれますね?」

と無邪気に首を傾げた。

「……」

「冗談ともとれるようなシリウの言動に言葉を失つてしまつたカイルに、決まりですね、と微笑むと、再び眼鏡をかけて勢いよく立ち上がつた。

「いい町ですね、ここは」

深呼吸するシリウの背中を、赤い顔で見つめるカイルだった。

そんな様子を見ていた二つの影があつた。

サクとヤツハだ。

二人を見つけたのはいいが、声を掛けるタイミングをすっかり逃してしまつた二人は、草影に隠れて覗き見をしていたのだった。

「お、俺は別に気にしないけどなつ!」

動搖しているサクに、ヤツハも強張つた笑顔で言つた。

「あ、あたしもよ。恋愛なんて自由ですもの」

二人はふらふらと宿への道を帰つて行つた。

翌朝、朝食の席で四人が揃つた。サクとヤツハの様子がどうもよそよそしいのに気が付いたシリウとカイルは、二人を見比べながら怪訝に思っていた。

「サクとヤツハ、どうしたんでしょうかねえ?」

シリウが囁くと、カイルも少し眉をひそめて挨拶も何かぎこちなかつたしな

と囁き返した。その様子を見ながら、サクとヤツハは気にしないふりをしながらも、どこか手元があほつかなく、しまいにはサクがパンを落としてしまった事態に陥ってしまった。

「?」

サクとヤツハに疑問を感じながら、シリウとカイルは様子をみるとした。

荷物をまとめ、昼過ぎに四人はザックの町を出発することにした。カイルは少し心残りを感じるかのように、何度も町を振り返りながら歩いていた。そして、シリウとカイルから、どこか距離を保つている二人。

「一体どうしたんだよ、一人とも!」

業を煮やしてイラついたカイルは、とうとうサクとヤツハに声を掛けた。二人は途端に戸惑う顔をした。

「昨晚、何かあつたんですか?」

シリウも心配そうに尋ねると、サクが少し頬を赤らめた。

「な、なにがあつたって……それはシリウたちが知つてることであつて……俺たちは何も」

「僕たちが何を知つてるって?」

シリウとカイルは、お互いに顔を見合せた。

「何よ。そんな隠すことじやないわ。あたしたち仲間なんだし

!」

「そりだぜ!俺たちは気にしないからさー。」

「何を言つて……!」

カイルは途端に動搖した。

『まさか昨日の話を聞かれた……？』

シリウを見たが、もともとクールな上に、眼鏡と前髪に隠れて表情が分からぬ。

「恋愛って、自由だと思つの」

ヤツハがモジモジしながら顔を赤らめて俯き、視線を外して言った。

「は？」

ヤツハの言葉の意味が理解できず、言葉を失つてしまつたカイルに、シリウが耳打ちをした。

「どうやら、少し違うみたいですねえ」

「ほら、また近い！」

ヤツハが恥ずかしそうな顔をしている。

「仕方ないじやんか……俺たちの事なんて見えてないんだから……」「寂しそうな顔をして言つサク。

「ちょ、ちょっと待て！　お前ら何を勘違いしてんだよ？」

カイルが慌てて言つと、サクとヤツハは顔を見合させた後、シリウとカイルを見てにんまりとした。

「タベ一人で寄り添つて公園のベンチに座つてたことは、学校に帰つても誰にも言わないから安心しろ！」

ここでやつとカイルも事態が理解でき、心にはさつきまでと違つた動搖が走つた。

「違うつて！　昨日はそんなんじゃなくて！　いや、だから、そんな関係とかじやなくて！」

しじるもどりになるカイルは、シリウに助けを求めた。

「なあ、シリウー！」

「僕は好きですけどね」

「はあっ？」

カイルは顔を赤らめた。

「シリウまで何を言つてんだつ！」

シリウは眼鏡を光らせて微笑んでいる。顔を近付けると
「ま、話が聞かれたわけじやないみたいですし、カモフラーージュに
は最適じやないですか？」

と囁いた。

「変な勘違いされたままでいいのかよ？」

「じゃあ、本当の事を話しますか？」

「ぐ……」

言葉を失つたカイルをおいて、シリウはサクの肩を勢いよく叩いた。

「全く！ 覗き見なんて趣味が悪い」

「えー、だつてさ！ 声を掛けるタイミング無くしたんだもんよー！」
サクがヒリヒリする肩を押さえながら言つた。シリウはなおも
サクの背中を叩きながら

「絶対学校の皆さんには内緒ですよー！ 僕たちの趣味が疑われてし
まいますから！」

と釘を刺した。その様子を後ろから見ながら、カイルはただた
だ呆然としていた。話を聞かれなくて良かつたという安堵感と、
おかげでシリウとの仲を勘違いされているという衝撃が頭の中を駆
け巡り、ただ立ちつくすだけだった。

「カイルー！ 何やつてんだよー？ おいてくぞー！」

サクの声に我に返つたカイルは、ため息をついた。

「とりあえず、様子を見るか……

ひとり呟いて、ため息をついた。

「複雑だけど……」

そう言つカイルの口元には、どこか笑みが生まれていた。

モノリス村は土の匂い

アルコドまでの、最後の中継地点モリノス。小さな村である。それに似つかわしい位の厳格な門をぐぐると、村人たちは見渡す限り一面に張り巡らされた畠で仕事をしていた。

精が出ますね

「おや、珍しい。旅人ですか？」

「はい、アルコドまで旅をしていま

額に汗を光らせ、柔らかい笑顔で尋ねる村人に丁寧に答えるシリ

「力サ力サだな」

村人は悲しそうな顔をした。

「そうなんだよ。」この村の士官は、せんぜんどんとか死んでしまつた。

「もしかして、アルゴードの影響がここまで来ていてるの？」

ヤツハが畠を見渡す。 村人も同じように見回した。 放射線状

が自分たちの住む場所なのだと、村人は言つた。

INCINERATION

「そんな……」

ヤツハは悲痛な顔をした。

「アルヒで一体何が起りてているの？」

「サク? ビジ行へんのだよ?」

カイルの問いにも答えず、サクはめぐりと歩いていく。畠と畠の間は、人がやつと通りすがれる位の狭さだ。　ヤツハは吸い寄せ

せられるようひたすらの背中を追つた。

「ヤツハまで！」

止めようとするカイルを制止して、シリウが村人に尋ねた。

「一晩、宿をお借りしたいのですが……」

村人は汗を拭きながら少し考えた後、少し離れたところで鍬を振り下ろしている一人の老人を指差した。

「オレは何も言つてやれんが……あの人人が村長だ。聞いてみな」

悪いな、と軽く頭を下げる、また黙々と畠仕事に戻った。シリウとカイルは村人に頭を下げて礼を言つと、紹介された老人に近づき声を掛けた。

「ここにちは、僕たちは旅の者です」

老人は顔を上げると汗を拭いた。

「ああ、君たちかね、ソラール兵士養成学校から來たというのは？ ファンネル校長から、連絡は来ておるぞ。わしは村長のシカワじゃ。ここは、見たとおり何もない。畠しかない村じゃ。旅人をもてなす宿も馳走もない。それでも良いと言つのなら、寝床は、村人たちが使う共同宿舎を自由に使っていいぞ。皆、雑魚寝で良ければな」

シカワは本当に何も無いぞ、と念を押した。

「構いません。安全な場所を提供していただき、ありがとうございます」

シリウとカイルは畠仕事に戻ったシカワの背中に丁寧にお辞儀をすると、その場を後にした。

「サク、待つて！ 待つてつてば！」

ヤツハが追い付くと、サクは振り返つてヤツハを見ずに一面の畠を見た。何十人という村人たちが、ただ黙々と畠仕事をしている。

「サク、一体どうしたの？」

「俺たち、こんなのがんびりしてていいのかな？」

「え？」

サクの表情は、珍しく神妙だった。

「ここの人たちは、きっと朝から晩までこうやって畠仕事をしている。瘦せてカラカラの土をひたすら耕して、種を植えて、育てて

……俺は、ここの人たちを救いたい」

ヤツハは黙つてサクの横顔を見つめていた。すると突然、サクはどびきりの笑顔を見せた。

「サク？」

「なあんてな！」

そう言うと、サクは自分の荷物をヤツハに持たせて畠に入つていくと、村人の足元にある鍬をつかんだ。驚いて見つめる村人に「俺も手伝うよ！」

軽がると肩にかつき、戸惑う村人に指示を貢うと、サクは意気揚々と畠を耕し始めた。その様子を見ていたヤツハは、クスッと笑つた。

「サクつたら、素直じゃないんだから」

シリウとカイルは、村の中心にある、周りを畠に囲まれた建物の中に入った。

「本当に何もありませんね」

幾つかある部屋の中は、がらんとした空間が広がっていた。棚も机も何も無い。ただ襖で仕切られた畳み敷きの部屋が並んでいた。

「皆さん、働きに出掛けているんでしょうか？」

シリウは、人の気配の無い部屋の片隅に、邪魔にならないように荷物を置くと、ゆっくりと伸びをした。

「お客様？」

不意な声に振り向くと、廊下から女性が顔を覗かせていた。小さな顔をした可愛らしい女性は、しとやかな微笑みを見せた。

「すみません。入口のところでご挨拶はしたのですが、答えがなかつたので勝手に入つてしましました」

「ヴィルス町のソラール兵士養成学校から来たという旅の方ですね？お疲れ様です。何もないところですが、ゆっくりしていいってくださいね」

静かに優しく声を掛けると、適当に座るよつに促した。

「少し待つていてくださいね」

と言うと、部屋を出ていった。

「シリウ、今の人……」

カイルの囁きに、シリウが頷いた。

「妊婦さん、ですね」

二人は、女性のお腹が異常に膨れていのにすぐ気が付いた。

「初めて見た……」

「僕もです」

シリウは微笑んだ。そうしていると、また女性が戻ってきた。

押入れからテーブルを出そうとするので、二人は手伝った。

「本当に、こんなものしか出せませんけど……」

申し訳なさそうに言いながらお茶を差し出す女性に、二人は手を振った。

「いえ、すみません、こちらこそ気を遣つていただいて」

「あの、そのお腹……」

カイルの言葉に、女性は微笑んで自分の腹をさすった。

「ええ。もうすぐ産まれるんです」

いとおしそうに腹をさする女性の名前は、ラクラ・サクラと言つた。

ラクラが出してくれたお茶は、適度に温かかつたが、味は無いに等しいほど薄かつた。それでも、二人はその気持ちに深く感謝していた。

「この村は本当に何もないところですが、皆の心はいつも、豊かだつた頃を夢見ているんです」

「先ほどご挨拶させていただいた皆さん、疲れた顔はしていましたが、一人も暗い顔はしていませんでした」

シリウが言うと、ラクラは頷いた。

「畠が枯れるのに習つて、私たちの心まで暗くあつてはならないと、村長シカワが説いたんです。 そうでないと、どんなに一生懸命働いても、畠は私たちの心を映してしまふと」

シリウとカイルは、窓から見える畠を眺めた。 畠には点々と働く人の姿が見える。 シリウはそれらを眺めながら呟いた。

「僕たちは、こんなにのんびりしていてもいいのでしょうか？」

カイルは、すぐに答えを見つけられずに黙ってしまった。 する

とそんなカイルに、シリウはにっこりと微笑んだ。

「悩んでいるのは、皆一緒ですよね」

カイルは小さく頷くしか出来なかつた。 不意にカイルは立ち上がり

「お手洗いを……」

と、ラクラと共に部屋を出でいった。

なだらかな畑の真ん中で

「何やつてんだ？」

突然、顔中を土だらけにしたサクが、ヤツハの目の前に現れた。

「わっ！」

驚いたヤツハは、思わずサクの頬を殴ってしまった。

「いつてえなあ！」

頬をさするサクに、ヤツハは頬を赤くして膨れつ面で言った。

「あんたがいきなり目の前に現れるからでしょうが！」

「んで、何をやってんだ？　じつとどこかを見てたけど」

見てたの？と恥ずかしそうな顔をしたヤツハは、さつきまで見ていた方を見つめた。

「あんな小さな子たちまで、一生懸命働いてる…………」

サクもそつちを見ると、畑仕事をする親子の姿があった。まだ歩き始めたばかりくらいの男の子が、父の後ろをおぼつかない足取りで追い掛けている。そのまま幼い腕には、今しがた収穫したのであらう、細く頼りない野菜を幾つか抱えている。

「あっ！」

サクとヤツハが見る前で、その男の子は勢いよく転んでしまった。拍子に、腕に抱えていた野菜が宙に飛び、バラバラと落ちてしまった。

「！」

助けにいこうとするサクの腕を掴んで、ヤツハは彼を止めた。

「なんで止めるんだよ？」

不機嫌に言うサクにヤツハは、見て、と親子の方へ促した。父は振り向いて、転んだ子をじっと見つめていた。

「なんで助けないんだ？」

あきらかにイラついているサクの肩をしっかりと抱いて、ヤツハは親子の様子を見守った。

やがて、ゆっくりと手をつき膝をつき、立ち上がった息子は、散らばってしまった野菜を一つ一つ広い集めると、再び腕いっぱいに抱えて父のもとへと歩きだした。父は近づく息子を見つめながらしゃがんだ。そして

「よくやつたな！ すごいぞ！」

と笑いながらその頭を撫でた。息子は嬉しそうに、土まみれの笑顔を見せた。

「もう何回も転んでるけど、お父さんはあやつて、息子さんを見守ってるの」

ヤツハの瞳は、ことおしくてたまらない」といつた輝きを放つていた。

「私は、お父さんにああやつて頭を撫でられたことも、抱き締められた記憶もないわ。でもきっと、あんな感じなんだろうな……」

サクはまだ少し不機嫌そうにヤツハを見た。

「俺は、殴られてばかりだつたけどな」

サクが言つと、ヤツハはサクを見て微笑んだ。

「知つてる。いつも追い掛けられてたもんね。でも……」

ヤツハはまた親子を見た。

「それも、うらやましかつたんだ……」

サクは返答に困つた。

ヤツハがあの親子を見て、父を恋しく思つてているのは容易に分かる。出会つた時からずっと、ヤツハはまだ見ぬ父親の像を見つめ続けているのだから。幼い頃から、思い描く父親の話を、サクはよく聞かされていた。

サクは振り払つようじこぐるつと踵を返すと

「畑仕事に戻るぞー！」

と言葉を残し、ヤツハをおいて再び鍔を構えた。

正直、サクには何をしてあげればいいのかわからず、もう何年もヤツハの近くにいる。ソラール兵士養成学校に、サクを追つて入

学してきたヤツハを見たとき、彼女の本気な気持ちが分かった。

ヤツハは、自分を高め、父親を探す旅に出るつもりなのだ。

だがサクは、もしヤツハが父親と再会した時があつても、絶対に許したくなかった。

ヤツハが途方も無い苦労をして今まで生きてきたのを、自らの目で見ているからだ。そしてヤツハは、母が亡くなった時も、気丈にしていた。涙一つこぼさず、むしろ葬式の手助けをしてくれた村の人たちに笑顔で礼を言つていた。

だが、サクは知つていてる。

誰も居なくなつた小さな家の中で、月の光に包まれながらひとり、泣いていたことを。

『俺は一体、どうしたらいいんだよ？』

サクの苛立ちと焦りは、アルコドの一件も加わつて大きくなつていた。

やがて日が暮れ始め、畠仕事に出ていた人たちが続々と共同宿舎に戻り始めた。陽が落ちてしまえば、外灯もない畠は真っ暗になる。

「そういえば、シリウとカイルが居ない」

二人はやつとそのことに気付き、顔を見合わせると途端に赤い顔をした。

「何考えてんだよ？」

「サクこそ！」

言い争いが始まりかけた一人に、村人が声を掛けた。

「手伝ってくれてありがとうよ。お仲間さんがいたのかい？ 村の外に行くことはないだろうから、あの宿舎にいるかもしねえ。案内するよ。ついてきな！」

村人はアルシス・ツバックといった。二十一歳で、畠仕事で鍛

えられてか体格も良く、陽に焼けた健康そうな肌に、黒い短髪と白い歯が似合う。話し方が老けているのは、周りに若者が少ないからだと言っていた。

「だけどもよ、今度子供が産まれるんだ！」

畠仕事の疲れも忘れたように、嬉しそうに話すアルシス。ヤツハの笑顔が弾けた。

「素敵！ 元気な子が産まるるよに、祈らなきやー…」

そう言いながら、胸の前で手を組んだ。

「もうすぐ産まれるはずなんだが、こんな瘦せた土地で育つた野菜を食べていては、母子共に元氣でいられるかどうか……」

不安な考えに襲われて、アルシスの表情が曇った。

「数年前までは、この村ももつと豊かだつた。縁にあふれ、それぞれの家族に家も一軒持てた。ところが、短い間に、急にこんなふうになつてしまつた……」

三人は周りを見回した。ぞろぞろと宿舎に戻る人影以外には、畠以外何もない。見渡す畠の向こうには、重厚な壁が景色を遮る。獣避けの壁は、悲しいかな、景観を損ねてしまう。

「何もないところだが、今晚はゆつくり休んでくれよー！」

アルシスが気を取り直したように微笑んだ。

「笑顔だけは絶やさないどこ、素敵だと思うわ。きっと思いは届くし、きっと、元気な赤ちゃんが産まれるわよー！」

ヤツハはアルシスの背中を叩いた。

「そうだな、君たちには救われるよ。そして元気をくれる。私たちには想像も出来ない、危険な旅をしてきたのだからなー！」
背中をさすりながら、アルシスは痛みを我慢するように、苦笑いにも似た微笑みを見せた。

「サクとヤツハ！ どこに行つてたんだ？」

カイルが宿舎の窓から顔を出した。

「おー！ カイル！ 畠仕事してたんだ！」

大きく手を振るサク。続いてシリウが、同じように窓から顔を

出した。

「大変なことが起きました！」

「？」

「顔を見合わすサクとヤツハに、カイルの声が飛んだ。

「産まれそうなんだ！」

「なんだって！」

その言葉に体を震わせ、持っていた烟道具を足元に落とすと、アルシスは走りだした。

「アルシス！」

サクの声も届かず走るアルシスの後を、ヤツハも追つた。

「サク、それ持つて、急いで！」

残されたサクは、慌てて足元に散らばる烟道具や野菜が入った籠を持ち、両手いっぱいになりながらフラフラと一人の後を追つた。

宿舎の中では一室の扉の前に村人たちが集まり、ざわついている。

「ラクラは？ 子供は？」

駆け込んできたアルシスが、人々をかきわけて扉の前に現れた。中から産婆のハルが現れると、アルシスはその両肩をつかんで言った。

「ハルさん、ラクラはつ？ 子供はつ？」

頭を大きく振られて眩暈に襲われたハルは、アルシスにげんこつを落とした。

「しつかりせいつ！ お前が落ち着かんで、どうするんじや！」

「しつ……しかしハルさん……」

こぶができた頭をさすりながら、アルシスが不安げにしている。その横に、追ってきたヤツハがやつと現れた。

「きつと大丈夫！ 信じるのよ！」

ヤツハがじつとアルシスを見つめると、彼もやつと落ち着いたようになついた。そしてヤツハはハルを見て言った。

「あたしにもお手伝いさせてください！」

「あんたは？」

「ソラール兵士養成学校から来ました。医学のことも勉強してます！ お願ひ！ あたしも何か手伝いたいの！」

ヤツハにまっすぐに見つめられたハルは、ふむ、と微笑んで頷いた。

「いいだろう！ 今は少しでも人手が必要じゃ。まずは湯を沸かして来てくれんか？」

ヤツハは大きく頷いて、大きななたらいを持つ他の女性たちと一緒に台所へと急いだ。

「お……俺はどうしたら……？」

「男は役にたたん！ 外で静かにしておれ！」

不安げにたたずむアルシスに、ハルは微笑んだ。

「ラクラは芯の強い子。きっと大丈夫じゃ。信じてあれ！」

アルシスはふっと息をついた。

「ハルさん、よろしくお願ひします！」

深くお辞儀をするアルシスに、ハルは小さく何度も頷きながら部屋の中へ入つていった。

新しい命

「サク、あんなところで何やつてんだ?」

窓から、真っ暗な煙の真ん中で立つたまま空を見つめているサクが見える。不審に思ったカイルはサクを呼び込もうとしたが、シリウがそれを止めた。

「シリウ?」

「サクは、時々ああして空を見つめるときがあるんですよ」

「空?」

すっかり日も暮れて、真っ黒な空には三田円が浮かび、満天の星が瞬いている。

「サクがああする時は、決まって、強い想いがある時なんです」「強い想い……？」

カイルとシリウはサクを見つめた。

「きっと、無事に赤ちゃんが産まれるのを空に願っているのだと思いますよ。だからそつとしておきましょう」

サクは畠にひとり佇んで、ずっと動かずに空を見つめている。そのままサクが空へ吸い込まれてしまうような感覚に陥ったカイルは、視線を外して瞬きをした。

シリウは微笑むと、そういうえば、と前置きをした。

「カイル、さつきラクラさんから水を貰つて何か飲んでいたでしょう? まだ僕に何か隠していますね?」

するとカイルは頬を赤くした。

「また覗き見か?」

不機嫌に言うカイルに、シリウは気にしない風に言った。

「どこか悪いところがあるなら、言つてほしいだけです。放つて

おけるわけ、ないでしきう? 大事な旅なんですから

静かながら強い意志を持つた口調に、カイルはひとつ息を吐いた。

「あれは、痛み止めだ」

「やつぱりどこか悪いんじゃないですか！」

少し焦りを見せたシリウに、カイルは首を横に振った。

「月経だよ」

「ゲッケイ……？ で、どこが悪いんですか？」

「え？ 生理のことだよ。……知らないのか？」

思わずカイルが驚くと、シリウは苦笑いをした。

「医武道では、人の急所や怪我の応急処置などの外傷を専門に勉強していたので、ヤツハのように病気のことまではあまり学べていなっています。まだ勉強不足ですね」

それにしても、と、カイルはひとつため息をついて、月経の事をシリウに教えた。

女性だけに訪れる、体のなかに新しい命を宿らせるための準備。毎月決まった時期に繰り返される生命の鼓動は、素晴らしいものもある。だが人によって、それは苦しみも与える。

「俺は多分、人よりもその痛みが強いんだと思う。怪我や打撲の痛みには耐えられるけど、これはまったくの別物だ」

カイルは切なそうにため息をつくと、下腹をさすった。

「それで定期的にミラン先生の所に？」

シリウの問いに、カイルは頷いた。

「じゃあ、ミラン先生も、カイルが女だということを知っていたんですね？」

カイルは窓の外に広がる空を仰ぎ見た。

「ミラン先生は、育ての親だった人の妹なんだ」

「えっ？」

「昔、まだ四人で平和に暮らしていた時、マチさんに言われたことがある。『もし私に何かあった時は、セブンスヘブンのマスターかソラール兵士養成学校のミランを訪ねなさい。必ず力になってくれるから』と」

シリウは静かに聞いていた。

「それで、オツカとカゲはセブンスヘブンのマスターに預け、俺は

兵士養成学校を選んだ。入つてすぐ、ミラン先生に会いに行つた。俺は既に偽名を使つていたが、ミドルネームに『マチ』と付けていたからすぐに気付いてもらえた。話を聞いてもらつて、なんとか先生には味方になつて欲しいと頼み込んだ。けど最初は反対された。性を偽つたところで、何も変わることはない。でも、それでも、俺はこうしたかったんだ

「そうだったんですね？」

シリウは、下腹をゆつくり撫でるカイルの手を見つめた。

「それが、あらがえない証なんですね」

カイルは突然、窓から外へ飛びだした。

「カイル？」

驚くシリウに振り返ったカイルは微笑んだ。

「男は部屋の中に入れないとらしいからな、サクと一緒に祈つてくる！」

そう言つて、カイルはサクのもとへ走りだした。その背中を見ながら、シリウは小さく呟いた。

「僕は、あなたのことたくさん知りたい……」

サクは近づいてきたカイルに気付いたが、夜空を見上げたまま言った。

「オレは、ヴァンドル・バードは必ず存在すると思つてる！」
「サク？」

「オレは必ずヴァンドル・バードに会つ。平和に生きたい人たちに、苦しみや悲しみは、あっちゃいけねえんだ！」

ヴァンドル・バードとは、伝説上の生き物だ。太陽と共に飛び、世界に夜明けを知らせる鳥。そのヴァンドル・バードに出会つた者は、どんな願いでもひとつだけ叶えてもらえるという噂だつた。所詮人の口から口へと流れ伝わつた想像の産物だと思われていた。サクはそのヴァンドル・バードを探し求めるために、自分を鍛え高める手段として、ソラール兵士養成学校に入つたと、カイルは聞

いたことがあつた。その時も今も、ヴァンドル・バードの事を話すときは、サクはいつも真面目な顔をする。

カイルは否定もせず、空を見上げた。

「そうだな。俺も、そう思う」

そして二人は、今にも降つてきそうな満天の星空の下でひたすら祈つた。

『元気な子が無事に産まれますように』

ラクラの部屋では、ヤツハが村の女性たちに交じつて、額に汗をにじませて苦しむラクラの手を握つていた。村人たちも、それに母子の無事を祈つていた。この干上がりそうな村にとつて、一つの命はとても有難く何にも代えがたい大切な存在なのだ。部屋の奥で、村長シカワも座り込んで目を閉じ、祈つていた。

やがて、けたたましい泣き声が部屋の中から宿舎中に響いた。その途端、アルシスは勢いよく立ち上がって、おそるおそる扉の前に近づいた。

静かに扉が開き、ハルが現れた。アルシスは震える声で尋ねた。

「あ、あの……」

ハルは疲れで少しあがれた声で、それでもしつかりと、見守つていた村人たちに伝えた。

「元気な女の子じゃよ。ラクラも無事じゃ」

途端に村人たち歓声を上げた。その中でアルシスは、日焼けと土で真っ黒な顔を歪めて涙をこぼした。

「ありがとうございます！」

深々と頭を下げるハルは微笑み

「さ、早く一人に会いなさい」

と部屋に招き入れた。外にいたサクとカイルにも、皆の歓喜の

声が届いていた。

「うまくいったみたいだな」

サクが夜空から視線を外し、ホッとした表情で言つと、カイルも微笑みを浮かべて頷いた。

その時、窓辺で二人の様子を見ていたシリウに、ヤツハが駆け寄ってきた。そしていきなり彼に抱きついた。

「ヤツハ！ お疲れ様です！」

シリウが微笑んで言うと、ヤツハは体を離して満面の笑みを浮かべた。

「あたしなんて何もしていないわ！ 頑張ったのはラクラさんよー…」
そして外の一人に気付くと、窓から飛び出した。

「あっ！ ヤツハまで！ ……皆さん、行儀が悪いですねえ…」
あきれたように言うシリウを置き去りに、ヤツハは一人に駆け寄ると、間にに入るよつに飛び付いた。サクとカイルは驚いた顔で受けとめ、ヤツハはうつすらと涙をためた瞳を閉じて言った。

「生命つて、本当に素敵！ いとおしいよ！」

そして体を離すと、満面の笑みで一人に伝えた。

「とっても元気な女の子よ！ ラクラさんも元気！」

「そつか！」

サクも笑顔で返し

「ヤツハ、お疲れさま」とカイルも微笑んだ。

命が生きる村

その夜は、サクたち四人も交えて、新しい生命の誕生を祝つた。分厚い布に守られて優しく抱かれている赤ん坊は、ゆっくりした寝息を立てて眠っている。皆代わる代わるに顔を覗き、サクも驚かさないように静かに覗きこんだ。

「うわあ……ちっせえな」

小さい手が、時々ピクピクと動く。はち切れそうな頬がかすかに桃色がかっている。食い入るように見つめていると、不意に赤ん坊は目を覚ました。突然泣き始めた赤ん坊に、サクも驚いて後ずさりした。

「サク！ 何やつてんのよ？」

ヤツハに頭を叩かれ

「オレ、何もしてないよな？」

と呟きながらすこすこと離れるサク。

「可愛い寝顔でしたね」

シリウが、部屋の片隅に座つて窓の外を見ていたカイルに話し掛けた。だがカイルは彼に目もくれず

「そうだな」

とそつけない返事をただけだった。

「？」

シリウが不思議に思つていると、村長シカワが近づいてきた。

「あなた方が訪れたことと、新しい生命が産まれたことは、何か関係があるのじやねつか？ 本当に今日はめでたい日だ。ありがとう」

笑顔で言つシカワに、シリウは驚いて両手を振つた。

「いえ、僕たちは何もしていません。むしろ、お邪魔をしてしまつたようです」

苦笑いをするシリウに、シカワは笑つた。

「苦笑いをするシリウに、シカワは笑つた。

「いやいや。 何もなかつたこの村に、一つの出来事が起きた。
それだけでも、皆の気持ちは変わつたはずじや。 このところずつ
と、畠とココの往復の繰り返し。 皆の心も落ち込んできていた所
じゃつたからの」

テーブルの上には最初からわざかな食料しか載つていないので、
村人たちは和氣あいあいと語り合ひ、喜びを分かち合つてゐる。
その中に、何故かサクの姿もあつた。 違和感もなく、村人たちの
中に入つて何やら語り合つてゐる。

「明らかに、今日を境に村は救われた氣がするんじや」
シカワは、村人たちの様子を嬉しそうに見つめていた。

「でも、まだこの状況は解決していません」

シリウは瘦せた畠を思い出していた。 シカワは顔をしかめて頷
いた。

「ほんの三年前じや……川の水が止まつてしまつた。 この村は、
アルコドから流れてくる川が生活を支えてくれていた。 ジヤが、
日に日にその勢いが弱くなり、とうとう二年前にまったく流れでこ
なくなつた」

「アルコドに何があつたのでしょうか？」

「あの国には大きな城があつて、その中心には泉があるんじや。
そこから湧き出る水が集まつて、川となり、アルコドだけでなく周
りの町や村を潤してある。 その泉が、枯れてしまつたという話じ
や」

「泉が枯れた？」

カイルもシカワの話に聞き入つてゐる。

「泉は、人々の生活を潤すだけでなく、土地の浄化もする。 それ
が止まつてしまつたことで、土にたまつた汚染物が悪さをはじめ
ているんじや。 アルコドは規模は小さいながらも、ちゃんとした
王国。 民の生活もままならないと、シーノ王も頭を抱えておるこ
とじやろう…… 悪いお人では無いんじや。 きっと心を痛めて、
今も出来る限りの努力をしているハズじや……」

「僕たちも急がなくてはいけませんね」

神妙な面持ちで言うシリウと田が合ったカイルは、すぐに田を逸らせた。 それにはさすがに気に障ったシリウ。

「カイル？ 一体何

「シリウー、カイルー！ ちょっと来てみろよっ！」

サクの声がそれを制した。 カイルは素早く立ち上がり、サクのもとへ向かった。

「何なんですか？ 今日のカイルはおかしいですね……」

どこかよそよそしいカイルの態度に理由がわからず、シリウは苛立ちを感じていた。 いつも冷静な彼には珍しいことだ。 それでも遅れを取つて、シリウもサクの所へ向かった。

「これ、見てみるよ！」

サクに嬉しそうに差し出された一枚の紙。 そこには、一羽の鳥が描かれていた。

赤い空にオレンジ色の羽根を広げ、長い首をくねらせて飛ぶ鳥。

「これは？」

シリウはサクに尋ねた。 するとサクは満面の笑顔で答えた。

「ヴァンドル・バードだよ！」

「ヴァンドル・バード……」

カイルが呟いた。 サクがずっと追い求めている伝説の鳥。 語り継がれるだけで、誰も見た者はいなかつた。

「ラーニャが見たっていうんだ！」

サクに肩を抱かれて紹介されたラーニャという少女は、黒く大きな目をしばたかせてシリウとカイルを見た。 背中までの黒髪を二つの三つ編みに束ね、まだ六歳だが、しっかりした雰囲気が見てとれる。

「お兄ちゃんたちも、信じてくれる？」

あまりにまっすぐに見つめるので、シリウとカイルは最初少し怖気づいてしまつたが、すぐに彼女の真剣な思いを感じ取つた。

「ラーニャは、ヴァンドル・バードを見たんですね？」

膝を曲げ、視線をラーニャに合わせて微笑みながら尋ねるシリウ
に、「ラーニャは大きく頷いた。

「朝早くにね、突然外が明るくなつて、急いで起きて外を見たら、
東の空から飛んできたの！」

懸命に説明するラーニャを、近くにいた村人が鼻で笑つた。

「ふん！ そんなの夢だつて言つてんのに、まだ言つてるのか
「本當だもん！ 本当に見たんだもん！」

ラーニャは顔を赤らめて言うが、誰も相手にしない。皆、まだ
子供だし、夢を見たのだろうと思つてているのだ。今までずっと、
一人で言い張つてきたのだろう。自分で描いた絵を掲げながら。
「ヴァンドル・バードはいるよ！」

サクがそんな空気を切り裂いた。

「オレは見たことないけど、絶対ヴァンドル・バードはいるんだ！
オレはいつかきっと、ヴァンドル・バードに自分の夢を叶えても
らうんだ！」

一瞬、部屋の空気が止まつた。だがすぐに、村人たちの笑い声
で揺れ始めた。その中で、サクとラーニャは真つ赤な顔で必死に
説得している。

「どちらも譲りませんね……」

どちらが幼いのか、シリウが呆れた顔で言つと、シカワがその
様子を見ながら苦笑いで言つた。

「皆自分の信じるものしか信じない。大人たちは、今この生活だけ
をこなしていくのに必死なんじやよ。夢を見る余裕も無くなつ
てしまつた……」

シリウは、そうですか……と眉をひそめた。

こうしている間も、日々一刻と事態は悪くなつてゐるのだろう。
笑う村人の中で必死に説明しているサクとラーニャ。ラクラに
付いて看病を続いているヤツハ。少し離れてじつと窓の外を静観
しているカイル。何か情報を得ようと村の人たちと話すシリウ。
四人はそれぞれの夜を過ごした。

夜明けと共に村人たちは起き上がり、それぞれに道具を持つて畠へと赴いていく。それは、いつもと何一つ変わらないモリノス村の日常。サクが大口を開けて眠つている横で同じように寝ていたラーニャも起き上がり、サクを起こさないよう部屋を出た。

「ラーニャ」

そつと呼び止めたのは、カイルだった。部屋を出た所の廊下は、

昇り始めた陽の光を浴びて明るくなりかけていた。

「おはよう、お兄ちゃん！ 随分早起きなんだね。 サク兄ちゃん

なんて、まだいびきかいて寝てるよ」

寝起きが良いのか、キシリと笑う口元に白い歯がまぶしい。カイルはしゃがんで目線をラーニャに合わせ、微笑んだ。

「ラーニャ、ヴァンドル・バードは、いるよね？」

ラーニャは、少し驚いた顔をしたがすぐにニッコリと笑った。

「いるよ。この田で見たんだ！」

輝く瞳でそう言つたラーニャをカイルは優しく抱き締めた。

「お兄……ちゃん？」

その意味もわからずにいるラーニャに、カイルは呟いた。

「俺も信じよう」

そして体を離すと、ラーニャをまっすぐに見つめた。

「俺たちは必ずこの村を救う！だから、夢をあきらめないで。

ラーニャは、自分を信じればいいんだよ。周りの大人が何を言つても！」

ラーニャはじっとカイルを見つめ、そして大きく頷いた。

「お兄ちゃんの事、信じてる！ 絶対村を救つて！」

カイルは微笑んだ。

小さな体には大きすぎるほどの大鍬を持ち、走つていく背中を見送るカイルに、いつの間にか隣にいたシリウが言った。

「あの子の瞳だけは、曇らせたくありませんね」

「……ああ」

カイルは相変わらず彼の顔を見ずに部屋へと足を進めた。
そして大いびきをかいているサクを起こすと、自分の荷物を担いだ。

その頃、ヤツハもラクラに別れの言葉を伝えていた。

「必ずこの村は元通りになるわ。だから、あきらめないで！」
布団の上で横たわっているラクラの手を握り、ヤツハは優しく微笑んだ。ラクラは頷いてその手を握り返した。栄養不足の状態で出産したラクラの身体は、疲労が溜まっていた。しばらく安静にしていれば、やがて体力も取り戻すのだろうが、この村にはまだ、充分な栄養源が無かつた。それを取り戻す為にも、ヤツハたちはアルコドへ向かわなくてはならない。

「ヤツハさん、本当にありがとうございます。この子は立派に育てます！」

そしてまた、ここに訪れてください」

ヤツハは頷いて改めて言葉を掛けると、部屋を出た。

ヴァンドル・バードの繪

ヤツハが宿舎の外に出ると、サク、シリウとカイルがすでに待っていた。

「さ、行こう！」

サクを先頭に、四人は畠仕事に精を出すシカワに一言挨拶をすると、畠の間の道を歩き、村出口の門辺りまで近づいた。すると、後ろから走つて追い掛けてくる人影があつた。

ラーニャだつた。

すでに頬を乾いた土だらけにして、細い足で駆けてくる。勢い余つてつんのめつたラーニャを、サクが受けとめた。

「うわっ！ ごめんっ！」

「どうしたんだ、ラーニャ？」

ラーニャは明るく顔を上げると、荒い息のまま、手に持つていた紙をサクに渡した。

「えっ、これ……？」

それは、昨夜見せていた、ラーニャが描いたヴァンドル・バードの絵だつた。

「これ、持つていって欲しいの。いつかヴァンドル・バードに会つたとき、聞違えないように！」

田を丸くしながら聞いていたサクは、その場にしゃがんで目線をラーニャに合わせると、笑顔で言つた。

「ありがとう。お守りにするよ。そしてまた、ラーニャに会いにくるからな！」

そして、ラーニャの頭をグリグリッと撫でると立ち上がつた。

「お兄ちゃんたち、頑張つてね！」

ラーニャは門の向こう側で大きく手を振つて見送つていた。それは、門が固く閉じられるまで続いていた。

「元気な女の子だったわね」

ヤツハが閉じた門を振り返り、いとおしそうに微笑んだ。

「ラクラさんの赤ちゃんも、あんな風に元気に健康に、育つてくれたらいいな」

壁に囲まれてもう見えないモノリス村を思いながら見つめるヤツハ。茶色の肩までの髪が風を受けている。サクはラーニャにもらったヴァンドル・バードの絵を丁寧にたたみ、懐にしまった。「大丈夫さ。そのためにオレたちがアルコドに遣わされたんだ。必ず元に戻してやる！」

拳を握って前を見据えるサクは、振り向いて言った。

「シリウ！ ハミウカはちゃんと持ってるだろうな？」

すると、シリウは三人から意外なほど遠く離れていた。立ち止まつたまま、少し俯いている。

「シリウ？ どうしたんだよ？」

サクの言葉に、ヤツハとカイルも立ち止まってシリウを見た。道の途中で佇んでいるシリウ。

「一体どうしたのよ？」

ヤツハが尋ねると、シリウが小さな声で呟いた。

「出来ません」

「？ 何って？ 聞こえねえよ！」

サクが問い合わせると、今度は叫ぶように言った。

「理由を教えてもらわなければ、旅を続ける事は出来ません！」「？」

一同、意味がわからずには言葉を失った。シリウは怒っているようだった。クールな表情はそれほど変わっていないが、叫ぶほど口調が強くなるのは珍しい。

「何言ってんだよ？」

サクが少し動搖しながら聞いた。すると、シリウはまた叫ぶようになっていた。

「何故僕に対して急によそよそしい態度になつたのか、理由を教えてください、カイル！」

急に名前を呼ばれて驚くカイル。 だがすぐにその意味に気が付いたように視線を逸らした。

「気のせいだよ！ 早く行くぞ！」

そして踵を返すと、先に進もうとした。

「イヤです！ わけもわからずに素つ氣ない態度をされて、普通に居られるわけがないじゃないですか！」

カイルは背中を向けたままため息をついた。 その一人を見比べるサクとヤツハ。

「一体、どうしたの？ 昨夜何かあつたの？ 喧嘩でも、した？」
ヤツハはuzzとラクラに付いていたので、三人に何が起つたのか分からぬ。 すると、サクが軽い口調で言つた。

「お前がシリウに抱きついたりなんかするからだろ？」

「？」

「！」

きょとんとするヤツハの向こうで、カイルの肩が動いた。
「好きな奴が目の前で誰かに抱きつかれたら、気にならないわけないよな、カイルー？」

頭の後ろで手を組んで、からかうように言つサク。

「ちつ、ちがつ……」

カイルは慌てて振り向いた。 その頬は真っ赤だ。

「あれ、当たり？」

サクが笑う。 ヤツハは口を手で押さえて目を丸くした。

「やだ！ あたし、そんなつもりじゃなかつたのよ？」

ヤツハは焦りながらカイルの手を引いた。

「ラクラさんの事で興奮して、つい抱きついただけ！ 何もやましい気持ちなんてないんだから！」

「やあ……！ だからヤツハッ！ ちがつ！」

カイルは弁明しながらも、ヤツハに引きずられるようにシリウの所まで連れてこられると、その背中をドンと押された。 つんのめるカイルの両肩を、シリウが受けとめた。

「だから、へんに勘違いしなくていいの！ 分かつたつ？」

ヤツハは半ば苛立つたように言つて、サクのもとへと駆けていった。

「ね、せつきのリーナの絵を見せてよー。」

「ん？ ああ」

サクが懐から出した絵を見ながら、ヤツハは微笑んだ。
「素敵な絵ね。 もうと、野草や花をすり潰したりして色を作った
んだわ」

所々茶色く変色している所も味があり、懸命に塗りたくった跡が、躍動感に満ちている。 もうと、頭の中にあるうちに描いてしまったかったのだろう。

「大げにしてあげるのよ？」

優しい瞳で絵を見ながらヤツハが言つて、サクは笑顔で言つた。

「当たり前だ。 これはオレの宝物だからなー。」

ヤツハはニッコリと頷いた。

ディンゴの逆襲！

「あの二人も、なかなかお似合いじゃないですか」耳元で言うシリウの声に我に返ったカイルは、同時に、自分の両肩に置かれたシリウの手に気付いた。

「いつまでそうしてんだよ！……！」

慌てて身体を離したカイルは、シリウの後ろから襲つてくる獣に気付いた。

反射的に、腰に装備していたナイフを手に取り

「シリウ動くなよ！」

と一喝するが早いかソレを獣に投げ付けた。ナイフは獣の足を大きくえぐつた。

「キャンキャンッ！」

と鳴きながら逃げていく獣を見送り、ゆっくりと振り向いたシリウは、カイルに微笑んだ。

「ありがとうございます」

「ふん……」

カイルは照れたようにまた頬を赤くして、落ちたナイフを拾つた。刃先に、さつきの獣の血液が付いている。それを近くの木から採つた葉で拭き取ると、また腰に装備した。

「くそつ……仕留められなかつた」

悔しげに言うカイルに、シリウは嬉しそうに言った。

「嫉妬なんてカイルらしくないですよ。僕を信じてください！」

カイルはビクッとしてシリウを睨んだ。

「だからそれ、やめろつて！」

迷惑そうに言うカイルに、シリウは嬉しそうに微笑んでいる。

「シリウ、カイル、大丈夫か？」

サクとヤツハが駆け寄つてくるのを見て、シリウは微笑んで言った。

「大丈夫ですよ。 カイルが僕を守ってくれましたから」「シリウ！」

咎めるカイルに、サクが笑つた。

「なんだ、仲直りしたんじやんか！」

「でも、仕留められなかつた……」

悔しそうに獣が逃げていつた方を見ながら言うカイルに、ヤツハも眉をひそめた。

「今のはデインゴでしょ？ 仲間を呼ぶかもしれない。 ここから離れましよう！」

四人はとりあえずの距離を稼ごうと、少し走ることにした。

仲間意識の強いデインゴの鼻は異常に発達している。 道に残つた僅かな匂いも嗅ぎつけ、どこまでも獲物を狙う。 四人は方角を見失わないようにしながら、木々の間を縫つて先を急いだ。

だが、野性の力は想像以上に侮れないものだつた。 程なくして、走り続ける四人の前に、何十頭というデインゴの群れが立ちはだかつた。

「うわっ！ やべえ！」

サクが木の枝にしがみついて急停止すると、他の三人も木の枝に乗つたまま立ち往生してしまつた。

大きなものは、体長二メートル以上にもなる大型の犬科の動物デインゴたちが、サクたちが乗る木の幹によじ登るうと爪を立て、うなり声を上げながら攻め立てる。 口の端を大きく吊り上げ、よだれを垂らしながら、デインゴの群れは怒りに満ちている。 やはりさつきのデインゴの仲間なのだろう。

「目の前にアルコドが見えているのに……」

シリウが残念そうに呟くと、カイルが装備していた剣を抜いた。

「ここは俺がおとりになる！ お前たちは先を急げ！」

と三人に残すと、カイルは地を覆うかのような巨大なデインゴ群

に飛び込むように切り掛けた。

「**剣舞四奏！**」

カイルの剣がまるで四本になつたかのように増殖し、ディングゴを切り裂いていく。だが、ヤツハが戦況を見極めた。

「一人でなんて無茶よ！ 相手の数が多すぎる！」

「俺も行く！」

サクが拳を握つて飛び降りた。

「**爆拳刀刹！**」

繰り出されるサクの拳から無数の氣の弾が放たれ、ディングゴの巨体を薙ぎ倒していく。カイルと背中合わせになつたサクは、叫ぶように言つた。

「無茶するなカイル！」

「こつなる原因を作つたのは俺だ。せめて、シリウだけは先に進ませたい！ 道を切り開く！」

カイルはサクから離れると、剣を上段に構えた。

「シリウ！ 先に進め！ **剣舞道轟！**」

気合いを込めて振り下ろすと、切つ先から旋風が生まれ、森の中に道を作るようないでインゴも木も、全ての障害物を薙ぎ倒していく。

「シリウ、急げ！」

カイルの声に

「あたしが援護する！」

と一足先に降り立つヤツハ。シリウはひとつ頷いて飛び降り、森の中にぽつかりと空いた道を走りだした。

「オレたちも後から行く！」

サクの声を背中に受け、シリウの俊足はカイルが作った道を風のように滑つていった。その後ろ姿を遮るように立つたヤツハが、腕を交差させて構えた。

「皆、息を止めて！」

サクとカイルが頷くと同時に、振り上げられたヤツハの両手から旋風が生まれた。

「百花眠眠！」
ヒャッカミンミン

風の中に交じって紫色の花びらが舞い踊り、デインゴ群を囲んだ。それを吸い込んだデインゴたちが次々に倒れていく。そして寝息を立て始めた。いち早く息を止め、その場を離れたサクとカイルは、ヤツハと共にシリウの後を追つた。

それでもデインゴの数頭がまだ追つてくる。

「つたく、しつこいなあ！」

振り返りながら迷惑そうに言つサク。デインゴたちは怒りに我を忘れたようにひたすら三人を目指してくる。走る速度では、完全にデインゴの方が速い。すぐに追いつかれるだろう。再びカイルが振り返り、剣を構えたその時

「皆、早くここへ！」

と言づシリウの声が響いた。

「シリウ！」

サクはカイルとヤツハの腕を引いて、シリウのもとへ飛び込んだ。その脇でシリウの両腕が空を仰ぎ、念と共に円を描いた。

「蒼炎花！」
ソウエンカ

四人の前に蒼い炎の壁が立ち上つた。

勢い余つて触れたデインゴが焼け焦げていく。

「さあ、今のうちに！」

四人は頷きあつて踵を返した。その時、炎の壁を抜けて、一頭のデインゴが飛び込んで来た。

「きやあああっ！」

デインゴはヤツハの足に牙を立て、振り抜いた。

「ヤツハっ！」

驚くサクの目の前を、ヤツハの体が舞づ。

「くつ！」

カイルの剣がデインゴの体を切り裂いた時、ヤツハの体は地面に叩きつけられていた。

「ヤツハっ！」

サクが急いで駆け寄つて体を起こすと、ヤツハは気を失っていた。太ももからは大量に出血している。咬まれた傷も深そうだ。

「ヤツハっ！ なんてこつた！」

「急ぎましょう！ アルコドはすぐそこです！」

シリウの言葉に、サクは唇を噛んでヤツハの体を抱き上げた。

乾いた国、アルコード

アルコード国。

かつては人口一万人以上を抱える商業国だったが、五年前に、国を支えていたとされる泉が突然枯渇。人や物で賑わっていた町の中から活気が薄れ、人々は次々に国を捨てて出ていった。今は、だだつ広い町のなかに点々と二百人程度残るだけだ。それに伴い、周辺の町や村にも影響が出始めていた。水が届かなくなつたモリノス村も例外ではない。

アルコード国の異変の影響は、広がる一方だった。

そんなアルコード国に、気を失つたままのヤツハを抱えたサクたちが駆け込んでいった。彼らは診療所を見つけると、診察を仰いだ。

「ヤツハの具合はどうなんだっ？」

サクが、部屋から出てきたシリウに詰め寄つた。シリウは神妙な顔で答えた。

「まだ時間が経たないと、はつきりとは分からないらしいのですが、もしかしたら狂犬病にかかっているかもしれないそうです」

「狂犬病……」

サクの顔から血の気が失せた。

「……治るのか？ 治るんだよな？」

シリウの襟元をつかんでなおも詰め寄るサクに、部屋から出てきたドクター・テリストムが静かに言つた。

「あまり騒ぐな。とにかく、こっちで話をしよう」

テリストムが隣の診察室に一人を促した。落ち着きなく椅子に座るサクと隣に静かに座るシリウを前に、テリストムはため息をついた。「薬はある。それで一時は持ちこたえるだろう。ただ、毒素を体から出すためには、大量の水分が必要なんだ。ここには、それに対応出来る充分な水がもう無いんだよ……」

サクは思わず立ち上がった。

「それじゃ、どうしたらいいんだよ？　このまま放つておくのか？」

今にも暴れだしそうなサクの肩を押さえて、シリウが静かに尋ねた。

「何か方法は無いのですか？　彼女は僕たちの大切な仲間なんです。どうしても、死なせるわけにはいかないんです」

必死な表情で見つめるサクとシリウを見て、テリストムはため息をついた。

「せめて、泉が戻れば……」

その言葉に、二人はハツとなつた。

「ヤツハ」

サクは病室に入り、熱に冒され荒い息をしているヤツハが横たわるベッドの傍らに近づくと言つた。

「お前の病気を治すために、大量の水が必要らしいんだ。だからオレたちはこれから、枯れた泉を元に戻しに行く。だから、ヤツハは自分のことだけ考えて、がんばれ！　絶対へこたれんじゃねーぞ！」

ヤツハはうつすらと目を開けた。

「サク……」

「？　なんだ？」

サクが小さく呟くヤツハの顔に耳を近付けた。

「ケガ……しないでね」

サクは微笑んでみせた。

「心配すんな！　オレたちを信じて、お前はゆっくり寝てろ！」

ヤツハは熱に冒された赤い頬で、それでもわずかに笑顔を見せた。サクがヤツハと話をしている間にシリウが病院の外に出ると、壁にもたれていたカイルが駆け寄ってきた。

「ヤツハは……？」

心配そうに見上げるカイルに、シリウは微笑みさえ見せられなか

つた。その顔を見て、カイルもヤツハの状態が良くないことを察知した。

「俺が悪いんだ……」

唇を噛んで俯くカイル。

「俺が『ディング』を寄せ付けたばかりに……」

「カイル！」

シリウがいつになく強い口調で言つたので、カイルは驚いて顔を上げた。

「今は、僕たちが出来ることをしなくてはいけません。今のヤツハには、大量の水が必要です。だから、枯れた泉を戻さなくては

「泉を……？」

シリウは強く頷いた。

「それから……」

と、カイルを真っすぐに見つめた。その瞳には、少し涙が滲んでいる。

「自分で背負わないでください。それに、自分で犠牲になるなどと、一度と言わないでください。あなたは……」

自然に伸びたシリウの手が、カイルの頬に触れた。

その時、病院の扉が開き、シリウの手はすぐに下げられた。

「行くぞ！」

出てきたサクの顔は、今までになく真剣で頼もしい顔をしていた。シリウとカイルも気を改めて頷いた。

目的の泉は、アルコド国のはば中央に位置する城の中庭にあるとテリスマが教えてくれた。

かつてはそこから四方に水路が引かれ、透き通つた水が止め処もなく勢いよく流れていたと言う。その水路も今は、ただの枯れた溝に成り果て、あちこちに木の葉や枝が残り、異臭も漂つて荒れた状態になっている。それを横目に眺めながら、サクとシリウ、カ

イルは静かにそびえ立つ城へと急いだ。

「ソラール兵士養成学校から命を受け、やつてきました。 シーノ

王と面会したいのですが」

シリウが、応対した執事セツナに挨拶をした。 セツナは静かに返した。

「お待ちしておりました。 ですが情報によれば、ソラール養成学校から旅立つたのは四人ということでしたが？」

静かにはつきりとした口調で言うセツナに、サクが口を開いた。
「ヤツハは旅の途中で病気になつて、今病院にいる。 水が必要なんだ！」

逸る心を押さえ切れず、サクはセツナに詰め寄つた。 セツナは迷惑そうに少し眉をひそめた。

「そうですか。 わかりました。 では、こちらへ……」

セツナはほとんど無表情で踵を返した。 冷たい態度を、背中まで伸びたストレートの紅い髪が余計に強調させる。 すらりとした足首が見え隠れするロングのタイトスカートが、どこか知性も感じさせる。

「シーノ王はあちらです」

中庭の前まで来て、セツナは三人に振り返つた。

「どこだよ？」

サクが言う先には、広めの庭園と、中央の土山に土木作業員風の男が一人見えるだけだ。 セツナは抑揚の無い口調でその男を紹介した。

「あの方が、アルコド国王、シーノ・ソラーオ王です」

それを聞いた途端、一同は啞然とした。

全身が土埃にまみれ、簡素な服も所々端切れ、髪も伸ばし放題でひとり土を掘っているその男が、一国の王だというのだ。

「まさか……」

シリウが驚いて咳くと、セツナが無表情のまま

「泉が枯れ、国が衰退していくほどに、シーノ王は悩み、もう半年以上ずっとああやつて、泉の辺りを掘り続けているのです」

と言うのを聞きながら、カイルは歩を進めた。その後を追うサクとシリウ。

近づいてくる人影に気付いたシーノ王は、ゆっくりと腰を伸ばした。

「やつと、来てくれたんだね……」

頬は痩せこけ、くぼんだ瞳が疲労を溜め込んでいる。よろめきながら体の半分ほどまで掘った穴からはいだすと、服の埃を叩き落とした。周りには水気の無い土が散乱し、時折吹く風に土ぼこりを舞い上がらせ、他にも同じような穴が数カ所点在し、庭は荒れ放題だ。とても一国の城の中庭とは思えない。シーノ王は力ない笑顔を見せながら

「こんな姿ですまない。広間へ案内しよう……」

と小さな声を絞りだすシーノ王の体がふわりと崩れ、サクとカイルが支えた。

「すまない……」

衣服越しに、そのガリガリに痩せ細った様子が、一人にも痛く伝わった。

セツナが先導し、一同は広間へと場所を移した。

静まり返つただだつ広間には、大きすぎるほどのテーブルが中央に置かれ、四十脚ほどの席が並べられている。

その奥にシーノ王を座らせ、サクとシリウ、カイルがテーブルの脇に並んで椅子に座った。

セツナがすぐにお茶をたてて配膳した。まるで白湯のような薄い波がカップの中に揺れている。

泉が枯れた原因

「遠いところを、よく来てくれた。心から礼を言つ」
座つたまま頭を下げるシーノ王に、シリウが尋ねた。

「さつきの穴が、問題の枯れた泉なのですか？見たところ、一滴の水も無いようでしたが……」

シーノ王はため息をつき、話し始めた。

「何の前触れもなかつた。ある日突然、ひと時も途切れることなく湧き続けていた泉が枯れはじめたのだ。徐々に水量が少なくなり、その日が終わる頃には四本の水路が賄いきれなくなつた。慌てて水路を半分にし、次に一本にして、やつどぎりぎり人々の生活を支えてきたが、一ヶ月後には、遂に一滴の水も出なくなつてしまつた。やがて人々も希望を捨てて国を出ていった。君たちも見てきたのだろう？すっかり寂れきつた国の姿を……」

シーノ王はもはや、威厳の欠けらも無くしていた。三人は墮ちた国の姿をさまざまと見せ付けられ、衝撃を受けていた。

「何故、泉が枯れてしまったのでしょうか？」

シリウは冷静に考えようとしていた。同情してては前に進めない。ヤツハの状態も、一刻を争うのだ。

「枯れた原因是必ずあるはずなんです。何か心当たりはありますか？ほんの小さな事でもいいんです」

カイルも身を乗り出してシーノ王の顔を伺つた。シーノ王の言葉を待ちながら、サクもじつと見つめている。シーノ王はうつむいたまま、深いため息をついた。そして、ゆっくりと首を横に振ると

「何もわからんのだ……」

と力なくうなだれた。

突然サクが立ち上がり、広間を出て行こうとするので、シリウとカイルも慌てて立ち上ると彼を追つた。

シーノ王はその背中をじつと見つめ

「セツナ、肩を貸してくれ」

と、自分もゆっくりと立ち上がり、セツナに支えられながら三人の後を追つた。サクは穴だらけの庭園に戻っていた。

「サク、一体何をする気ですか？」

シリウが落ち着かせるように静かに言つのを背に、サクは庭園の中央まで行くと、おもむろに両手を上段に構えた。

「サクつ？」

シリウとカイルが止める間もなく

「爆拳放火！」

という気合咆哮と共にその両拳が地面に叩きつけられた。

「サク！」

飛び散り襲つてくる爆風を腕で避けながら、シリウとカイルは立ち尽くしていた。

飛んできた土の塊が、シーノ王の頬にも当たり、赤く腫れた。だが、彼は何も言わずにただ黙つて庭に大きな穴が開くのを見つめていた。傍で支えるセツナもまた、無表情で庭の土が舞い上がるのを見つめていた。

土煙が治まつたのを見計らつてサクの所に集まつた面々は、ぽつかりと開いた穴を見下ろしていた。

「穴を掘つても水は出でこねえ。 だけど、この国の周りには、緑の葉っぱをたんまり抱えた森で囲まれてる。 それがどういう事か分かるか？ ここにあつた泉だけが枯れた。 人間が生きるために支えていた、必要な物だけが、人間の前から姿を消したんだ。 必ず何か原因があるはずだ！」

サクはシーノ王を睨んでいた。

その気迫にシリウとカイルは何も言えず、サクに睨まれたままのシーノ王は膝をついて、無言で穴を見つめていた。

「水が一滴もない今、ハミウカは使うことが出来ません。 これは、

流れる水と共に浄化を広めるのですから」「ひ

シリウはうなだれるシーノ王に静かに言った。

静まり返った庭園に、穏やかな風が吹き、地面を覆つ土を軽く巻

き上げた。

苛立ちの嵐の中で

「くそつー。」

診療所の壁を悔しげに殴るサク。シリウとカイルは簡素な椅子に座り、うつむいていた。結局何も出来ずに、シーノ王に明日の出直しを伝えて、三人はヤツハの待つ診療所に戻ってきたのだった。シリウはため息をついて言った。

「僕たちは、ただハミウカをここに届ける為だけに、ファンネル校長に依頼されたのでしょうか？」

「どうということだ？」

カイルがゆっくりと顔を上げて、シリウを見た。

「もつと何か、あるような気がするのですが……」

眼鏡を上げながら考えるが、答えは出てこない。シリウは、そこにヒントがあるような気がして仕方ないのだ。

「そんなこと、どうでもいい。今は、枯れた泉をなんとかしなきゃいけないだろ？」

サクは無造作に椅子に座つたが、落ち着かない様子でいる。数秒もしないうちに

「ヤツハの様子を見てくる！」

と立ち上がり、ヤツハが眠る部屋に向かつた。

シリウとカイルが見送るなか、そつと部屋に入つたサクは、静かにヤツハのそばに近づいた。薬が効いているのか、息も落ち着き、静かに眠っているようだった。サクはベッドの脇に座り、ヤツハの顔を覗いた。

「ヤツハ、もう少し待つてくれ。必ず、泉に水を戻すから

囁くように言い、名残惜しそうに立ち上がったサクの手を、握る温もりがあった。

「ヤツハ、起きてたのか？」

熱っぽい手を握り返して座り直すサクを、ヤツハは薄目を開けて

見つめた。

「ケガ、してない？」

か弱い声は、サクの耳にしつかり届いていた。サクは頷いた。
「当たり前だ。シーノ王に会つてきた。泉が枯れた原因は、分
からないつて言つてたけど、必ず何かあるはずなんだ」

説明するサクの口元を見つめるヤツハは、微笑んで小さく頷いた。
「あたしは大丈夫……サク、アルコード国の人々の願いを叶えてあ
げて」

サクは、自分のことよりも自分とはまるで関係のない国の人ことを
心配するヤツハの手をぎゅっと握り、そつと布団の中へ戻した。

「もう少しの辛抱だからな！」

サクは笑顔でそう言い、ゆっくり眠るように告げて部屋を出てい
つた。ヤツハはしばらくぼんやりと天井を見つめ、やがてまた眠
りについた。

一日中、何度も目は覚めたが、身体が全く動かなかつた。薬の
性か、眠気も激しい。何も出来ないヤツハは、ただサクたちが無
事に泉を元に戻すことを祈るしかなかつた。

『サク、皆……ごめんね……』

朝がやつてきた。朝日は田も眩むほどの光で國中を包んでいく。
人の往来はほとんど無い。静か過ぎる朝を迎えていた。

サクはすでに目を覚ましていて、窓から色付いていく建物を見つ
めていた。

「早起きですね」

声に振り向くと、シリウが立っていた。

「何か悩み事があると、決まって空を眺めている……。眠つてい
ないのですか？」

サクは答えずに再び外を見た。

「ヴァンドル・バーードに会えたら、こんな悩みなんて吹き飛んでし

まうにな

サクは自分の手元を見つめた。その手には、ラーニャから貰つたヴァンドル・バーの絵が握られている。シリウはそれを見ながらひとつ息をついた。

「伝説を追いかけても、身にならないことが多いんですよ」「何だと?」

サクがシリウを睨んだ。

「シリウは、オレやラーニャの事を否定しようと/orしてるのか?」立ち上がりてラーニャの絵を見せながら、シリウに詰め寄るサク。シリウは何も言わずにその絵を見つめていた。

「何か言えよ!」

声を荒げるサクに、シリウは瞳をまっすぐ向けた。
「現実から逃げるのは、負けと同じです」

その瞬間、シリウの体が宙に舞つた。

サクの拳が、シリウの頬を直撃したのだ。床に叩きつけられたシリウはゆっくりと起き上り、口元を手で拭つた。口の中を切つたのだろう、わずかに血が流れた。

「幻想なんかに頼つてヤツハが良くなるのなら、皆とっくにしてますよ!」

今度はシリウの拳がサクの頬をとらえた。サクの手から絵が離れ、ヒラヒラと床に落ちた。悔しそうに口元を拭いながら起き上がったサクは、再びシリウに飛び掛かつて行つた。

「待てっ!」

二人の間に入つたのはカイルだつた。お互いの胸に肘をあて、二人を止めていた。

「いい加減にしろよ……」

カイルは静かに言いながら体を離した。サクとシリウはお互いから視線を外し、黙つて立ち去っていた。

「ヤツハのことを心配してるのは、皆同じだ」

そして床に落ちているラーニャの絵をゆっくり拾つと、サクに手渡した。

「イライラしても、何も進まないだろ?」

二人の顔を見ながら、カイルはあきれたようにため息をついた。そして二人分の椅子を並べ、そこに座るように促した。おとなしく座つた二人を前に、カイルは話し始めた。

「今、ヤツハから伝言を預かつた。 昨夜、ヤツハの夢の中に声が響いたらしい。 男の子のような声で『ボクのことを忘れないで』って。 それがどういう意味があるのか分からぬけど、何かのヒントになるような気がするつてヤツハは言つてた」

シリウが口を開いた。

「『忘れないで』……ですか」

「忘れられた奴がいるつてことか? 誰が、誰に?」

サクが困惑している。

「何かを忘れるつて事は、過去から今の間に何かあつたつてことじやないでしようか?」

シリウがカイルを見た。 ファンネル校長が、旅立つ前に言つていた。 話はカイルから聞けど。

「俺も、国のどこかに原因があると思つてる。 けど……」

カイルも考えるが、全く手がかりになりそうな記憶がない。 えて言うなら、という記憶がひとつあった。

「あの城には化け物が住んでいて、外界から閉ざされた秘密があるつてことを、子供の頃に聞いたことがある。 まだ子供の時の記憶だ。 信憑性は無い」

「化け物……? 何か関係があるのでしょうか?」

シリウはため息をついて、指先で眼鏡を上げた。

「とりあえず、また城へ行つてみよう。 何か分かるかもしない」

サクが立ち上がった。

もうイラついてなどいなかつた。三人は、自分たちに出来ることが精一杯やるしかないと思っていた。三人は診療所を出た。

城へ向かう道中、カイルにシリウが声を掛けた。

「ヤツハに、顔を合わせられたんですね？」

ヤツハが怪我をしたのは自分の性だと、自らを責めていたカイルの姿を見ていただけに、シリウなりに心配していたのだろう。カイルはふつと微笑んだ。

「『なんて顔をしてんだ』って、怒られたよ……そして、俺たちの事を信じてるから、やれるだけ頑張つてつて。病人に励まされて、ホントに情けないよ」

シリウは微笑んでカイルの肩を優しく叩いた。

「行きましょうか！」

サクも話を聞いて微笑み、三人は風のように城へと走った。

城に着き、昨日と同じように無表情で応対したセツナに案内され中庭に行くと、シーノ王は石段に座つてぼんやりしていた。

「何やつてんだよ？」

その姿を見た途端にサクが苛立ち、殴りかかるように叫んだ。だがそれに驚きもせず、ぼうつと中庭を見つめながら独り言のようにつぶやいた。

「どれだけ穴を掘つても水は一滴も出でこない。頼みの綱のハミウカも使えず……もうこの国は終わりだ……」

その途端、パンッ！と軽い音が響いた。

セツナがシーノ王の頬をはつたのだ。

シーノ王は驚いたようにゆっくりと見上げた。その先には、涙をためるセツナが震えながら立ち尽くしていた。

「何故……何故そんな風になつてしまわれたのですか？シーノ王は……いいえ、私の知っているシーノは、そんな人ではなかつた！」

……

じりじりと後ずさりをし、遂に踵を返すと走り去ってしまった。

「セツナさんっ！」

カイルは思わず彼女の後を追つた。

シリウとサクはその後ろ姿を見送ると、再びシーノ王を見下ろした。

「とりあえず、その昔の話をしてもらいませんか？　忘れられた過去が、助けてくれるかも知れません」

シリウが言い聞かすように言った。

シーノ王は、石段に座ったまま再び中庭に視線を移しながら遠い目をした。それははるか過去に遡るかのようだった。

「忘れられた過去か……この頃の私には、過去を振り返る余裕など無いに等しかった。頭脳の全てをこの国に費やして、どうしたら繁栄するのか、どうしたら豊かになるのかだけを考える毎日だった

……

一方、広間を出ていったセツナに追い付いたカイルは、小さな執事部屋で涙を落とすセツナをただ見守ることしかできなかつた。

しばらくして、セツナは立ち尽くしているカイルに振り向き、涙を拭いて微笑んだ。赤くさらさらのストレート髪がはらはらと顔をなぞる。セツナは端正な顔立ちの、美しい女性だ。カイル自身女でありながらも、目を見張るものがあつた。

「こんな墮ち切つた國の為に、あなた方は命を懸けて旅をしてきた

……何と感謝をしたら良いのか……

セツナは椅子に座り直し、カイルを向かいの椅子に促した。カイルはおとなしく座り、セツナを見つめた。

「俺たちは、ファンネル校長に言い渡された目的を果たすだけに来つもりでしたが、途中でアクシデントがあつて、一緒に旅をしてきた仲間が今病氣で苦しんでいます。彼女を治す為にも、どうしても泉を蘇らなくてはならないんです。その仲間が、気になる

夢を見たと言つていました

「夢を？」

カイルは頷いた。

「小さな男の子のような声で『僕を忘れないで』と
その途端、セツナはハツとした顔で口を押された。
激を与えないように、静かに尋ねた。

「何か、知っているんですね？」

セツナは少しうつむいて、ひとつ小さく頷いた。

カイルは刺

シーノ王、心の旅

シーノ王は石段に座つて、遠い景色を見つめながら話し始めた。
それは彼にとって、思い出をたどる旅のようだつた。

「アルコードの泉はコダマが作ってくれた泉。 泉が生まれてから今まで、どんな時でも枯れることはなかつた」

「コダマとは、伝説と語り継がれている森の妖精【コダマ】のことですか？」

シリウの問ひに、シーノ王は頷いた。 話を始める前に、まずは

森の妖精【コダマ】の事を説明しなくてはならなかつた。

「アルコード国では、代々コダマを敬い祭る伝統がある。 そして、國の王はそれを受け継ぎ伝えていく責任と義務を背負つているのだよ」

「コダマって、伝説上の生き物なんだろ？ 本当に存在するのか？」
サクが尋ねたが、そもそもサク本人も伝説上の生き物であるヴァンドル・バードを信じているのだから、おかしな質問だ。 それを知らぬシーノ王は、自虐的に微笑んだ。

「今となつては、國の民さえももう誰も信じなくなつたがな。 コダマは本来、森の護り神だ。 人間などのエゴの集まつた國に祭られることなど、望んでいないかもしれん」

ため息をついて、シーノ王は続けた。

「だが私は、実際にコダマに会つている

「コダマに？」

サクの瞳が輝いた。

「どんな奴なんだ、コダマつて？」

サクは隣に座つて、すっかり興味津々だ。 シーノ王は遠い目をして思いを馳せた。

「背丈は、人間でいうと十歳位で、全身緑がかつた肌と髪の毛、深い緑色の瞳が印象的だった。 見つめられると、心を深く見透かさ

れるようでな。 それから、とても身軽で、まるで木の葉か風のように走り回る元気な妖精だつた」

シーノ王の頬に赤みがさした。 まるで子供の時に戻つたかのように、瞳が昔を思い出していた。

「ゴダマはいつも、城の中でひとりだつた私の話し相手をしてくれた。 ゴダマは、不思議なことに私たち王家の家系にしかその姿を見せることはなかつた。だから、私たちがおかしいのではと不信感を抱く家来たちも、少なからず居た」

「そういえば、この城の中には執事しかいないのか？」

サクが周りを見渡した。 本来ならば、数人の兵士なりが警護し、客と王を放置することはないだろう。 だがぐるりと見渡しても、あるのはだだつ広い広間や荒れ果てた中庭。 人の気配が全く無い。

シーノ王は言った。

「今この城には、私と、私の世話をする最低限の人間である執事のセツナと数人のメイドが居るだけだ。他の者達は、辺境の山などから水を運んでくる任務に就いている」

シーノ王はため息をついた。

「荒れ果て、人も居ないような、廃墟のようなこの国に、攻め入ろうなどという稀有な者はいないだらうな」

シーノ王は息を吐きながらゆつくりと立ち上がり、フラフラと中庭に入つていった。

「楽しく幸せな日々だつた。 だが、ずっと平和だつたわけではない。 ゴダマの存在を手に入れようとする族たちが、度々攻め入つてきた」

「ゴダマを欲しがる理由つて、一体なんだ？」

サクの疑問に、シリウが代わりに答えた。

「声は癒し、泣けば水晶……」

「？」

サクが首をひねつたので、シリウは説明を付け足した。

「その存在が手に入れば、さぞや稼げるでしょうね。 水晶がタダ

で手に入るんですから」「

するとサクは手を叩いた。

「そうか、コダマを泣かせて水晶を出させて、それを売れば大金持ちだ！」

サクのストレートな言葉に、シリウの眉が寄つた。

「サク、言葉を選んでくださいー」

たしなめられ、サクは舌を出して謝つた。シーノ王は振り返つて微笑んだ。

「間違つてはいない。心が悪い方向に傾いたとき、自然と狙われるのは私たちだからな。ある日、辺境の国がそういう目的で攻め入ってきた。まだ十代だった私は、「コダマに姿を消すように言い、自分も隠れるように森に逃げた。だがそれもすぐに見つかり、連れ戻された。城に引きずられながら入つた私が見たのは、全身傷だらけで虫の息の、父の姿だった」

サクの目が、シーノ王の背中をじっと見つめている。自然にその拳が握られた。

「奴らのリーダー、ジアントが言った。『コダマの居所を言えば、命だけは助けてやる』と。不敵に笑いながら勝ち誇つたように仁王立ちするジアントに、私は強い屈辱を覚えた。これで国は終わるのだと、本気でそう思った。その時、父は必死で顔を上げて、叫ぶように言った。『国を捨ててはならない。それは、コダマにとつて地獄の始まりだ。シーノ、お前はこの国を、コダマを守る義務がある!』その言葉を聞いたとき、私は全身が震え上がった。もう国の運命は自分ひとりにかかるつているのだと。そして、いつも一緒にいたコダマの姿が目に浮かんだ。心が溢れるように、私は泣きながら叫んでいた。『私は国を捨てない! 例えここで手足を失おうとも、この国は私が守る!』」

サクとシリウはじつと黙つていた。シーノ王は、空を仰いだ。暗雲が空を包み始めていた。それらを見つめ、シーノ王は瞳を開いた。

「そう叫んだとき、突然辺りが真っ暗になり、風が吹き荒れた。

それは私の周りを包み、辺りを巻き上げた。ジアントたちは驚いてひるみ、一目散に逃げ出した。『コダマの呪いだ!』と口々に

しながら

そのうち、ぽつぽつと小さな雨粒が空から落ちてきた。乾いた土に、いくつもの黒い染みが刻まれていく。

「気が付くと、すっかり荒れ果てた城と父だけが目の前にあり、ジアントたちは姿を消していた。その時、私の前にコダマが現れた。だがその姿は、私が知っている姿をしていなかつた……」

シーノ王は全身を激しくなった雨に打たれながら見上げ、目を細めた。

「まるで枯葉のように赤茶けた肌、髪、手足もか細く痩せ細つてしまっていた。言葉を失う私に、コダマは微笑んで言つた。『僕のこと、忘れてしまつても構わない。だけど、国を思うその気持ちは無くさないで』何か言おうとしても、何も言葉が思い浮かばなかつた。やがてその体は薄くなり、向こう側が見えるほどになり……とうとう消えてしまった

サクはつづむき、シリウは眼鏡をそっと上げた。シーノ王は、無残にも荒れ果てた中庭を指した。

「その途端、まさにこの場所に、泉が湧き始めたのだ。私はあの時改めて、自分に課せられた責任を思い知つた。泉から湧き出す水は見る見るうちに庭から溢れだし、国を潤した。国を守らなければ……そう思い続けて今まで必死に来たつもりだ……

「王は、忘れておしまいになつた……」

不意な声に三人が振り向くと、セツナが立つていた。すぐ横にカイルが見守るよつに居る。セツナは、か細くもしつかりとした声で言つた。

「王は、一番大事なことを、無くしてしまいました

「私が何を無くしたというのだ?」

セツナを細い目で見るずぶ濡れの王は、すっかりみすぼらしく見えた。セツナはそんな王を切なく見つめた。

「国の豊かさを求めるあまり、民衆の声を聞かなくなくなりました。『自分の思うように動かせば、全てうまくいくとは限りません。それをあなたは……』

おそらく、セツナは初めて王に意見を言ったのだろう。震えながら訴えるセツナを、付き添うカイルが優しく見守っていた。シーノ王はセツナの言葉に息を飲み、目を見開いて、そして膝をついた。

「おい！」

駆け寄りつけるサクをシリウが止めた。小さく首を横に振ると、王を見守るように促した。ひとり中庭でずぶ濡れになつている王は、痩せ細った背中を丸めて震えていた。

「私は、何ということをしたのだ……」

流れ落ちる雨に紛れて、その瞳からは大粒の涙が零れ、顔は歪んでいた。

「国から民衆が離れていったのも、泉が枯れた性ではないのか……？」

「泉が枯れよつと、国が衰退しよつと、王の存在が頼れるものであれば、皆ここに残つてくれていたはずです」「

セツナは悲痛な思いをシーノ王に訴えかけた。

「ゴダマよ……私はこれから、どうしたら良いのだ？ もう私には何もない。富も権威も何も残つておらん。これから私はどうしたら……」

「私たちが居るじゃありませんか！」

突然の声に驚いた一同が振り向くと、広間にはいつの間にか数十人ほどの兵士たちが並んでいた。 真ん中に立つ女性が、腰に両手をあててあきれたように言った。

「ちょっと出かけていた間に、なんてみすぼらしい格好をしてんだい？ それじゃあ誰も一国の王だと認めてくれないよー。」

今はすっかり威厳も何も無くなっているが、仮にも国の王に對して失礼極まりない言葉に、サクたちは言葉を失った。 気迫のこもつたオーラをまとった彼女は、この衰退しきった国には不釣合いなほど【元気】だった。 顔も血色が良いし、体格も少しふくらとしていて、頼りがいがある印象を与えていた。 栗色の髪の毛を一つにまとめ、くっきりした一重の瞳がキラキラと輝いている。 カイルの横で、セツナが無言で改まったお辞儀をした。

「カリン……」

シーノ王はそう呟きながら、雨が降る中庭から彼女を見つめた。

カリンと呼ばれた女性は、サクたちに気付いて微笑んだ。

「お客さんかい？ こんなしょぼくれた国に何の様なんだい？」

シリウが姿勢を正して挨拶をした。

「僕たちはソラール兵士養成学校から来た者です。 王に頼まれたものを届けに」

するとカリンは、ああ、と思い出したように手を叩いた。

「どうか、あんたたちハミウカを？ ……その割には、庭が前よりも荒れているようだけど……」

カリンは中庭の荒れ果てた様子を見て、何事かと目を丸くした。

「一体何があつたんだい？ 私たちが居ない間に？」

シリウとカイルが冷たい目で見る先には、頭を搔きながら苦笑いをしているサクがいた。シーノ王は力なく微笑んだ。

「いや、何もなかつたよ」

カリンはそれ以上追及せずに、ため息をついた。

「で、なんであんた、泣いてんだい？」

一国の王である相手を見下すように細い目で見るカリンに、シリウはやつと恐々尋ねた。

「あ、あの、あなたは……？」

カリンはサクたちを見て笑った。

「ああ、自己紹介がまだだつたね、私はこの人の妻だよ！」

一同、目を丸くした。

「じゃあ……王妃……？」

サクが動搖しかされた声で言つと、カリン王妃は微笑んで頷いた。そこにはどこか気品も混じっていた。

「随分強そうな……」

弱気な王よりも、カリン王妃ひとりで国を動かせそうな勢いである。

「全く！ こんなことになるなら、残していくんじゃないなかつたよ！」
そう言い、後ろに控える兵士たちに、運んできた水を民衆に配るよう命じた。滑舌よく返事をして、それぞれの持ち場に向かっていく兵士たち。広間には、また静かな空間が戻つた。

カリン王妃は改めて話しあじめた。

「私はね、この人のもとに嫁ぐとき、あらゆることはこの人に習い、抗わず、黙つて半歩後ろを歩けと両親に言われて来たんだよ。最初はそれでよかつた。この人は私を深く愛してくれたし、何不自由ない暮らしもさせてもらつた。政治のこともうまく回して、

近隣の国々とも仲良くやつっていた。何も息苦しいことなんてなかつた。ところがいつからだつたか、人が変わつたように富を求めるようになった。民衆の相談も聞き入れなくなり、全て自分の思うままに国を動かすようになった

「何故そんなことに？」

シリウがシーノ王に尋ねた。その横で、サクが理解できていな顔で腕を組み、太い柱にもたれている。カイルとシリウに見つめられたシーノ王は、濡れた髪の毛をガシガシとかきむしった。「それが得策だと思ったからだ。国のことと思えば、民衆の相談ごとが、小さなもののように思えてきて、民衆の意見に振り回されるようでは王の威儀も損なわれる心配にも襲われた。怖くなつて、自分の意見を押し通すことにしたのだ」

悔い恥じるように告白するシーノ王に、カリーン王妃はため息をついた。

「だから、私が立ち上がるしかないと思ってね。一発ガツンと言つてやつたんだよ。そうしたら何のことはない。こんなに小さな人だつたんだよ」

シーノ王は膝をついたままうなだれた。

「私は取り返しのつかないことをしてしまつた……国を守ろうとしたのに、滅ぼすことになるとは……」

カリーン王妃が雨の中を歩き、シーノ王の横に膝をついて肩を抱いた。

「何を言つてんだい！これからやり直せばいいんだよ。あんたは根が弱すぎる。一人で抱えずに、私やセツナ、兵士や家来、皆に頼ればいいんだ。王様つて言つたつてただの一人の人間だ。強がるだけじゃ、誰も前には進めないとだよ」

シーノ王はカリーン王妃を見つめた。

「出来るだろうか？これから私は、やり直せるだろうか？」

カリーン王妃はにつこりと微笑んで頷くと、シーノ王を立ち上がらせ、城の中へと促した。

その時、中庭から地を揺るがす響きと共に大きな音がした。驚いて皆が中庭を見ると、中央の辺りから、何千年といつ巨木のよくな太さの水柱が怒号と共に吹き上がっていた。

「な、なんなんだ？」

サクたちはただ驚いて見上げるばかり。シーノ王は立ち上がる
と、ゆっくりと水柱に近づいていった。

「シーノ王、危険です！」

止めようとしたシリウを、カリン王妃が制した。

「王のしたいようにさせてあげて！」

その目は、強気なだけではない、芯の強い輝きが生まれていた。
「何故突然……？」

カイルは独り言のように呟いた。だが誰も答えられなかつた。
そんななか、シーノ王は笑みを浮かべながら降り注ぐ水を浴びて
見上げた。

「帰ってきたんだね……」

流れ落ちる涙は、絶え間なく降り注ぐ水に紛れている。その時、
吹き出すしぶきの中から声が聞こえてきた。

……シーノ……

「？」

サクたちは耳を疑つた。

「なんだ、この声は……？」

頭の中に直接響く幼い男の子のような声。カリン王妃も驚いた
ように耳を押さえながら目を見開いていた。

「コダマだね？」

シーノ王は全身ずぶぬれになりながら、嬉しそうに微笑んだ。
すると、しぶきの中に小さな影が現れた。それはやがて子供の形
になり、宙に浮かびながらシーノ王を見下ろしていた。

「コダマ……」

シーノ王は切ない顔で「コダマに手を差し伸べた。

シーノ……覚えていて……ボクの事は忘れてしまつても構わない
……だけど、国の人々や森の声を忘れないで……いつも周りにある
ものを大切にして欲しいんだ……

シーノ王はまるで子供が泣く寸前のように顔を歪めながら、大きく頷いた。コダマは微笑んだ。

シーノ……ボクが助けられるのはこれで最後だよ……だけど、いつだつてシーノのすぐ近くにいる。見守っているからね

「コダマ……！」

差し伸べるシーノ王の指先がコダマに触れそうなどころで、その体は透けていく。

「コダマ！」

シーノ、大好きだよ……

「コダマは微笑みながらゆっくりと消えていった。

「…………」
シーノ王はゆっくりと腕を下げる、コダマが消えた宙を見上げたまま濡れた顔で微笑んだ。

「僕も大好きだよ……ありがとう、コダマ……」

そして、気持ちを振り切るように踵を返すと、カリン王妃やサクたちを振り返った。その表情は王の貫禄を備え、瞳には力強い輝きが生まれていた。

「あなた……」

カリン王妃がホッと顔をした。

「長い間心配をかけてすまなかつた。私は自分に夢を見ていたようだ。国を取り戻すために、全力を注ぐぞ！」

シーノ王は力強く微笑んだ。サクたちもそれを見て、安心して微笑んだ。

「では、コレはもう必要なそぞりですね」

シリウが懐に縫い付けられていたハミウカを取り出すと、シーノ王は頷いた。

「アルゴードの泉から湧き出た水は、普通の水ではない。ハミウカを使わずとも、必ず国を復興させてみせよう！」

するとサクはにっこり微笑み、シリウの手からハミウカを取ると、
破り捨てた。それは降り注ぐしぶきの中に光を放ちながら消えて
いった。

「破つてしまつたら、効果はないんだぞ……」

カイルが心配そうに言つと、サクは吹き出す泉を見ながら言つた。
「いいんだ。コダマの願いは、シーノ王が国と共に蘇ること。
何かに頼らなきやいけないほど、もう弱くはないんだろ？」

サクに見つめられ、シーノ王は微笑んだ。

「君の言うとおりだ。私は甘やかされすぎた」

しぶきに舞う光を見つめながら、柔らかな表情をしていた。

「もうコダマに心配はさせられないな」

「では、私はまたおとなしい王妃に戻りましょ」

カリン王妃は優しく笑うと、シーノ王は苦笑した。

「強いカリンも悪くはないがな」

「意地の悪い……」

小さく睨むカリン王妃。サクたちも交えて、笑い声が中庭に響
いた。

いつの間にか雨もやみ、空には青空が広がって、天高く吹き上げ
るしぶきに虹が生まれていた。

旅立ちは微笑みながら

サクたちは急いで泉の水を汲み、ヤツハのもとへと走った。

「ドクター！ 泉の水を持ってきたぞ！」

サクが病院に駆け込み一番にそう叫び、たっぷりと水を湛えた木桶を掲げると、ヤツハを診ていたドクター・テリスムは目を丸くした。

「本当に泉が戻ってきたのか？ 信じられん……」この数年、誰が何をしても効果ひとつなかつたのに……

「いいから！ 早くヤツハに！」

サクたちに攻め立てられながら、テリスムは早速ヤツハに治療を始めた。

数時間後

「もう大丈夫だ。しばらく安静にして毒素を出してしまえば、完全に治るはずだ！」

テリスムはあご鬚を満足気に撫でながら、ホッとしたように微笑んだ。 サクたちもやっと胸を撫で下ろし

「良かつた」

と、誰からともなく安堵の言葉が出た。

そして数日後には、ヤツハは歩けるまでに回復した。

「心配かけてごめんね」

ベッドの上に座り、まだ少しやつれた顔をしながらも、ヤツハはすつと心配してくれていた三人に声をかけた。

「それに、アルコドの泉のために何も出来なくて……」

と申し訳なさそうに言うヤツハに、サクが被せるように言った。

「何言ってんだよ！ ヤツハがヒントをくれたんじゃないかなよ！」

「そうだよ。ヤツハが夢の中での声を聞かなかったら、今だって俺たちは悩み続けていたと思う

カイルも微笑んだ。

「結局シーノ王が自ら泉を復活させたので、僕たち、何もしていませんけどね」

シリウの言葉に、三人は苦笑した。 それらを見ながらヤツハは思い出すように話した。

「とにかく意識が朦朧としていた時に、小さな男の子みたいな声が聞こえてきたの。 途切れがちだつたけど、すごく必死な気持ちっていうのは伝わってきて、皆に言わなきやつて、あたしも必死に意識を取り戻したの」

「それは、コダマという森の妖精だったんだ。 可愛らしい小さな男の子だったよ」

カイルが言うと、ヤツハは驚いたように尋ねた。

「姿見たの？」

「少しだけでしたけどね。 シーノ王の事を、心底心配しているようでした」

シリウが言った。 ヤツハが

「あたしも見たかったなあ」

と残念そうに言つと

「いつか会えるさー」

とサクが明るい口調で言つた。 ヤツハは微笑みながら頷き

「とにかく早く治さんきやね

と痩せた拳を握つた。

それから数日後、だいぶ回復したヤツハも含め、サクたち四人は城に呼ばれた。

国を救つてくれたお礼をしたいとシーノ王直々の通達だった。

町には、泉が蘇つたと知った民衆たちが戻つてきていた。 中には、まだ王を信じられないが、交通の弁がいいために商売だけのために戻つてきた者もいて、まだ悶々とした空気は拭えずについた。

だが確実に、復興への道を歩き始めていたのが、城下町の空氣で感じ取ることができた。

以前は人っ子一人いなかつた城への道には、往来が戻り始める。その中を歩きながら、サクたち四人は嬉しそうに微笑んだ。

「変わるもんだな」

両手を頭の後ろに組んで、開き始めた店先を眺める。

「でもまだだ。これから王次第ですね」

シリウも嬉しそうに微笑みながら歩いている。

「あたし、城へ入るのは初めてよ。でも、何もしてないのに呼ばれて良かつたのかしら?」

少し上気した頬をして言ひヤツハに、カイルは微笑んで言つた。
「ヤツハも立派に貢献してたじやないか。堂々としていればいいんだよ」

「そうですよ、ヤツハはれつきとした仲間なんですし」

シリウが微笑む横で、いつの間にか手についていた果実をかじりながら、サクが楽しそうに言つた。

「何食わせてもらえるんだろう?」

途端にヤツハは白い目で睨んだ。

「ホントにあんたは、遠慮つてものが無いわけ?」

するとサクは口を尖らせた。

「だつてさあ、ここんとこまともな物食べてないんだぜ! ヤツハは病氣だつたから滋養のあるもの食べてたんだろうけどさー」

「あたしの事は関係ないでしょ? それ以前の問題ー!」

そして、パカッとサクの頭を叩いた。

「いてえなあ!」

「バカは叩いても治らないのよーなら、叩いておいて損は無いわ
頭を押さえるサクにさらりと言ひヤツハの様子に笑いながら、シリウは楽しそうに言つた。

「ヤツハも元気になつて良かつたです」

「そうだな」

横でそう言つたカイルは不意にシリウと目が合い、照れたように微笑んだ。シリウは思わずカイルの頭を撫でた。

「つ！ 何するんだよ！」

驚いたカイルは後退りした。その頬は真っ赤だ。

「どうした？」

サクとヤツハが見ると、シリウは笑つた。

「いやあ、可愛いな、と思つてつい」

「つい、じゃない！ 城へ急ぐぞ！ 王を待たせるな！」

三人の間を突つ切りながら、赤い顔をしたカイルは早歩きで城へ向かつた。笑い合いながら、三人もカイルの後を追つた。

セツナに案内され、四人はシーノ王たちが待つという広間へと通される為に、廊下を歩いていた。

最初に訪れた時には殺伐としていた城内は綺麗に掃除され、ボロボロだった国旗も新しく掲げられ、装飾品も飾られて、威厳ある城へと変貌していた。離れていた家来たちも再び戻ってきたことで、活氣づいていた。

通された広間も、前に来たときはすっかり様変わりしていた。中庭も泉と共に綺麗に整備され、とてもあの穴だらけだった同じ場所だとは考えられないほどだった。

「ずいぶん立派になりましたね」

シリウの言葉に、迎えたシーノ王は微笑んだ。シーノ王もまた、血色を取り戻し、幾分か健康的な体つきになつたようだ。もうボロボロの服ではなく、立派なマントを携えた貴族らしい煌びやかな服を着ている。

「皆よく働いてくれたのでな。作業も早く進んだのだ」

「王が自ら動いたので、皆が我もと働いたのですよ」

カリソ王妃が姿を現した。綺麗なドレスを身につけ、化粧も綺麗に施され、以前に見た時の勝気な雰囲気がほとんどかき消されて

いた。

「変わるもんだな……」

サクが悪びれも無く言つと、隣のヤツハにしつかりと制裁を入れられた。カリン王妃は玉がころがるような笑い声を出し構いませんよ。私は王妃として、シーノ王を慕い添い遂げる身。その為には、自身の変革も必要な時があるのですから」四人が促されて椅子に座ると、テーブルの上には次々に料理が運び込まれ始めた。

シリウがシーノ王とカリン王妃にヤツハを紹介し、挨拶を交わした。

「あなたがコダマの声を聞いてくれなかつたら、私たちは今も迷い苦しんでいたでしょう」

カリン王妃の感謝の言葉に、ヤツハは激しく首を横に振つた。
「あたしは何も……ただ、意識の狭間でかすかに聞こえてただけですから」

シーノ王は微笑んだ。

「それでも、私たちの恩人には変わり無い。その礼の代わりと言つてはなんだが、たいしたもてなしは出来ないが、ゆつくりしていつてくれ！」

サクはすでに、目の前のじちそうに目が釘づけになつていて、「行儀悪いでしょ！」

頭を小突いて注意するヤツハに、カリン王妃は笑つた。

「さあ、遠慮なく楽しんでくれ！」

シーノ王の声で、宴会は始まつた。

サクとシリウ、カイルは、シーノ王が経験してきた話を興味深く聞き、ヤツハはカリン王妃との女の会話に花が咲いた。

「そうか、キミはヴァンドル・バードを探しているのか？」

シーノ王が言うと、サクは頬一杯に料理を詰め込んだ顔で頷くと、

懐からラーニャに貰つた絵を取り出して見せた。

「ラーニャも見たんだ。絶対どこかにいるはずなんだ！」

そう語る瞳はいつも光り輝いている。シーノ王はうむ、と大きく頷いた。

「ヴァンドル・バードの噂は聞くが、姿を見たことはない。だが、必ず存在すると私は思う！ 伝説と謳われるコダマが居るようにな！」

力強く話すシーノ王には説得力があった。噂話、戯言とも取られるコダマの存在をこの国は信じているのだから。現に、つい数日前にサクたちも目にした。幻は確かに目の前に在ったのだ。サクもまた、シーノ王に勇気づけられていた。

「中庭もすっかり綺麗にしたのですね？」

食事も落ち着いた頃、カイルは中庭に下りた。まだあちこちの土があらわになつていて、いくつもあつた穴も綺麗にならされている。

その中央には、透明な水がコンコンと湧き出る泉が太陽の光を浴びて輝いている。その周りにはすでに小さな草が生えはじめ、泉は緑に包まれかけている。

「泉の周りだけ、植物の成長が早いのね？」

いつの間にか近くに来ていたヤツハが泉の傍に膝をついた。

「これが、アルコードの泉……」

手を伸ばし、そつと水に触れた。

「温かい……？」

ヤツハが不思議そうに呟くと、カイルも習つてそつと水に手を入れた。

「本當だ、温かい……それに、優しい感じがする……」

カイルとヤツハは不思議そうな顔をして見合させた。

「アルコードの泉は、コダマの意志を映すという話があるのよ」「人が振り向くと、カリン王妃が微笑みながら立っていた。

「コダマの意志？」

ヤツハが繰り返す横で、カイルは少し意味が分かるような気がした。

「この泉は、コダマそのものだから」

カリン王妃も二人の間に膝をつき、いとおしそうに泉の水に触れた。

その時、一陣の風が吹き、三人は顔を覆つた。
ありがとう……

「…………？」

突然、頭に響いた声に見上げた三人の前に、小さな男の子が現わっていた。普通と違うとすぐ分かつたのは、その髪や皮膚が緑がかつた色をし、宙に浮いていたからだった。深緑の瞳は深く心を見透かすようにじっと三人を見つめていた。

「コダマ……」

再びの出現に言葉を失い、ただ見つめる三人を、コダマは嬉しそうな表情で順番に眺め、ヤツハに止まった。

ボクの言葉、ありがとう

ニッコリと微笑むコダマに最初は驚いていたヤツハだったが、すぐには意味を理解して微笑み返した。

「あたしは何も。あなたの気持ちが強かつただけよ」

コダマは笑った。そして、くるつとひとつ回ると、愛嬌のある笑顔で微笑み、その姿はやがて薄くなつて消えてしまった。ヤツハは温かくなる胸を感じた。

「守つてあげてくださいね、この国を……」

コダマが消えた空を見ながらヤツハが呟くと、カイルは優しく見守り、カリン王妃は微笑み頷いた。

その様子を見つめるシーノ王とサク、シリウ。広間を、静かで平和な時が流れた。

やがて、旅立つ時が来た。

サクたちは、わざわざ国の外門まで見送りに来た王家に改めて挨拶をした。周りには、久しぶりに見る王の姿を興味深そうに見る民衆の人だかりだ。

「お世話になりました」

シリウの言葉に、シーノ王は首を大きく振った。

「いや、こちらの方が世話になつた。だが、まだやることは山積みだ。これから私は、皆と共に国を作り上げる。だから君たちも、自分を信じて突き進めよ！」

サクたちはその言葉を深く受け止め、大きく頷いた。

カリン王妃は、ヤツハに近づくと抱きしめた。そこには深い愛情がこもっていた。ヤツハとカリン王妃は、コダマを共に見たことで、どこか心が通じ合うようになつていた。名残惜しむ抱擁の後、カリン王妃はそつと身体を離し、ヤツハを見つめた。

「またいつでもいらっしゃい。歓迎するわ」

「ありがとうございます。必ずまた来ます！」

ヤツハはカリン王妃と固く握手を交わした。そして、カリン王妃はカイルに近づくと、同じように抱きしめた。

「えっ？」

突然のことで戸惑うカイルに、カリン王妃は優しく微笑んだ。「あなたも、自分の思う道を。でも無理はしないで。必ず、助けてくれる仲間がいることを忘れないで」

「カリン……王妃？」

カリン王妃の瞳は深く輝き、吸い込まれるようだった。

「知つていたのですか？」

『俺が女だってことを……』

カリン王妃は何も言わずに微笑んだ。カイルは、フッと息をつくと、頷いた。

「ありがとうございました！」

四人は手を振りながら見送る王家を何度も振り返りながら、一路ソラール兵士養成学校への帰路に着いた。

「アルコード国が復興したら、また来ような！」

サクが皆を見ながら笑顔で言った。ヴァンドル・バードの話で意気投合したシーノ王との仲も深まり、気持ち良く述べることが出来るのが嬉しかった。

「そうですね、是非また訪れましょう。コダマの加護を受けた国、アルコードに」

四人は高台に着くと、アルコード国を見下ろした。まだ所々に茶色く廃墟と化した建物が見える。次に訪れる時には、きっと立派な商業国になっていると信じて、四人はアルコード国を後にした。

ディックとの出会い

『女……女の匂いがする……』

「きやつ！」

森の中で声を上げたヤツハに驚き、サクが思わず身構えた。

「どうした、ヤツハ？」

シリウとカイルも周りを警戒した。するとすぐにヤツハが苦笑して、一方を指差した。

「あれは……」

カイルはゆっくりと草むらに分け入り、ヤツハが指差したほうを見た。

「ディングの死骸だ。この間襲われたときに戦った跡だな……」

カイルは足元にゴロゴロと転がるディングたちの死骸を見ながら、感傷にふけった。自分のミスで群れを呼び、無駄な殺生をし、挙げ句の果て、ヤツハに重傷を負わせてしまった。

それに気付いたヤツハは、カイルの肩にそっと手を置いた。切

なげに振り向くカイルに、ヤツハは微笑んだ。

「あたしはもう大丈夫よ。だからカイルも、もう気にしなくていいの！」

笑顔で言つヤツハに、カイルは微笑み返した。

「すまない……」

「こり！ 謝らない！ ……あ……」

ヤツハはカイルの頭を小突いた拍子に、その向こうに何かを見つけた。その視線の先には、小さなディングが、息絶え倒れている大きなディングに擦り寄つて小さく鳴いていた。

「ディングの子供ですね？」

シリウが眼鏡を上げた。

「もしかして、親……？」

カイルが言つより先に、ヤツハはその子デインゴに近づいて行った。

「ヤツハ、危ないぞ！」

サクたちの心配も顧みず、そつとヤツハが近づくと、それに気付いた子デインゴが一步後退りして歯を剥き出した。唸る子デインゴを見つめながら、ヤツハは少し離れたところで静かに両膝をついた。

「あなたのお母さんなのね？」

そう優しく声を掛けるヤツハの前でしばらく警戒していた子デインゴは、やがて傍らに倒れている子デインゴの腹に鼻を擦り付けた。「乳を探してるんだ……」

カイルもそつとヤツハの近くで子デインゴを見つめていた。ヤツハはおもむろに子デインゴへと手を差し伸べた。

「ヤツハ！」

驚いて止めようとするカイル。シリウとサクも心配そうに見つめる前で、ヤツハは

「大丈夫」

と呟いた。その手が背に触れる直前に、驚いた子デインゴは咄嗟に牙を剥けた。

「！」

手を引いたヤツハの手から、赤い血が伝い落ちた。

「ヤツハ、危ないって！ 子供とはいえ、野生だぞ！」

カイルがヤツハの肩に触れると、ヤツハは振り向いて微笑んだ。

「大丈夫だから。たいしたことないよ」

そして、牙を剥いて威嚇している子デインゴに話し掛けた。

「こんな怪我より、親を亡くす方がずっと悲しい」

カイルはハツと我に返った。

ヤツハは子供の頃に、母親を亡くしている。父親も行方不明で、その顔さえ知らない。そして、カイルもまた、育ての母マチを亡くした。一人とも、目の前の子デインゴに自分を映した。

「あたしたちと、一緒に来る？」

「ヤツハ……？」

立ち上がるヤツハを、カイルは見上げた。

「来たかったら、ついておいで」

ヤツハは子デインゴに微笑みかけ、踵を返した。カイルは子デインゴに何度も振り向きながら、急いでヤツハを追った。

約十分後。

「ヤツハ……」

とシリウが後ろを促すと、少し離れた所を小さな影が動いていた。ヤツハが声をかけた子デインゴがついてきていたのだ。

「さっきの！」

ヤツハは笑顔で子デインゴに近寄ると、まだ警戒しているのか、少し離れてヤツハたちを伺っている。

「大丈夫。皆優しいわ。何も怖いことなんてしない。一緒に

行きましょう」

ヤツハは子デインゴに微笑みかけ、そつとサクたちの方に戻った。

「いいのか？」

カイルが聞くと、ヤツハは頷いた。

「せめてものお詫び……気持ちは、分かるもの……」

そう言つて、ヤツハは軽い足取りで歩き始めた。

それから三十分もしないうちに、子デインゴはその距離を次第に縮め、やがてヤツハの傍にぴたりついて歩き始めた。

「すっかり慣れたみたいだね」

カイルが子デインゴの頭を撫でると、気持ちよさそうに目を細めた。ヤツハは嬉しそうに笑い、子デインゴの背を撫でた。硬い

毛の感触は、すっかり大人のものだ。

「乳を欲しがつていたから、まだ生まれたてのようですが、随分大きいですねえ」

シリウの言う通り、子ティーンゴとはい、四本足で歩くその背は、ヤツハの膝上まである。時折じやれるように立ち上がりと、ヤツハの腰に軽く屈ぐ。

「成犬でも三メートルを超すというから、子供ならこれくらいでも小さい方なんじゃないか？」

カイルもすっかり子ティーンゴが気に入ったように微笑みながら見つめていた。

「野生だから、いつ何が起こるか分からないじゃないか！」

「？」

見ると、サクがかなり距離を取つて前を歩いている。

「さつきから静かだと思ってたら、そんな先に行つっていたんですね。大丈夫ですよ。急ぐ旅ではありませんから」

あとはソラール兵士養成学校に帰るだけだ。とりあえず、ファンネル校長宛てに手紙も飛ばした。アルコドの泉を元に戻すとう依頼も無事に済んだ今、ゆっくり帰れば良いのだ。

「いいよ、俺は先に行く！お前らはゆっくり来ればいいぞ！」

「？」

三人がきょとんとしていると、サクを田指して子ティーンゴが走つて行つた。途端に、サクは顔を引きつらせ、慌てて近くの木によじ登つた。

「まさか……」

ヤツハが口を押さえて笑いをこらえた。カイルも勘付いて、思わず吹き出した。

「サク、犬系が苦手なのか？」

するとサクは顔を赤らめて叫んだ。

「そつ！そんなわけねーだろ？が！俺はそんな弱くねえつ！」

ほら、こいつをそつちにやれつ！ヤツハのだろつ？」

サクを見上げて木の根元に立ち上がり、舌を出してちぎれんばかりに尻尾を振る子ティンゴ。

「このは、サクと仲良くなりたがってるみたいですよ」シリウの眼鏡が意地悪く輝いた。それを見たサクは「シリウ、お前つ！ お前までつ！」

と目を丸くして叫んだ。カイルがシリウに尋ねた。「シリウはもしかして、知つてたのか？」

「はい！」

シリウの力強い返事に、ヤツハとカイルは大笑いをした。

「笑つてないで、こいつをなんとかしろって！」

困つたように口調が変わつたサクに、ヤツハは涙を拭きながら言った。

「この子は犬じゃないわ。これから一緒に生きてく仲間！ 名前も決めたの。ティック！」

ティックは嬉しそうに二度吠えた。

「ヤツハ、噛まれたトラウマがあるだろうが？」

サクが木の上から言うと、ヤツハは少し怒った表情で言った。

「サク！ あたしが咬されたのは、攻撃したからよ！ 何もしなければ、群れのままおとなしくしていただいたはず。それにトラウマなんてないから大丈夫。だからサクも下りておいでっ！」

まるで親のように叱るヤツハに、サクは渋々下り始めたが、ティ

ックがちぎれんばかりに尻尾を振りながら吠えるので

「頼むから、そいつ向こうにやつてくれよ……」

とサクは懇願した。ヤツハは軽く笑つてティックの背を軽く叩いた。

「ティック、サクはあんたが苦手みたい

ティックはヤツハの顔を見上げ、理解したのか、寂しそうに木の下から離れた。やつと地面に下りられたサクは、ティックを警戒しながら

「先を急ぐぞつ！」

と先頭を切つて歩き始めた。シリウたち三人は顔を見合させて笑い、サクの後を付いていった。

「へへへ……女……女の匂いがするぞ……」

「ツキとの再会

ディックはサク以外の三人にも慣れ、たまにじゃれあいながら森の中を歩いていた。 サクはその様子を困惑した顔で見ながら、少し離れた先を歩いている。

「サク。 ディックはとても賢いので、突然襲つことはないと思いまますよ」

シリウがサクに説明するが、彼は全く聞く耳を持たない。 ヤツハが不思議そうに呟いた。

「小さい頃は、犬が苦手だなんてことはなかったのに……」

「小さい頃？」

ヤツハはカイルの問いに頷いた。

「サクとあたしは、同じ村の生まれなの。 小さい頃は、サクも村の人気が飼つてる犬とよく遊んでるのをよく見たのよ。だから変なの。 サクが犬のことが苦手だなんて……」

するとシリウが、振り返った。

「サクは、以前学校の実戦試験でワルカラと戦つたときに、ひどい怪我を負つたことがあるんですよ。 辛うじて試験には合格したんですけど、それ以来、似たような獣は苦手みたいなんですね」

「ワルカラって、巨大な狼型の幻獣だね？」

カイルが思い出しながら言つた。

「そうだつたんだ？ でもワルカラは、シャルサム教官が作り出した幻獣じゃない？」

あきれたように言うヤツハに、サクが焦つたように振り向いた。

「アイツは桁違いに強かつただけだ！ ホントはオレが完勝する予定だつたんだつ！」

「ワルカラの唾液にすつころんで、頭からその口のなかに突っ込んでいきましたよね」

シリウが暴露すると、他の一人は腹を抱えて激しく笑つた。 そ

れらを不思議そうに見上げながら、ディックはひと呟えした。恥ずかしさをこまかしながら一步先行くサクの後ろを、三人と一匹が楽しげについて歩いた。

途中、彼らはモリノス村に寄つた。

最初、村人たちは、ヤツハにぴたりと寄り添うティックに驚いたが、信用できるヤツハたちの説得の末、すぐに危害はないないと信じてもらい、村の中へと入ることができた。

再びラーニャに会つたサクは、抱き合つて喜んだ。二人の弾けた笑顔に、周りの心も和んだ。

「元気そудな、ラーニャ！ オレ、アルコド国で「ダマに会つたんだぜ！」

「へえ！ 「ダマつて本当に居たんだ？ どんな姿してたの？ 教えて！」

興味津々で瞳を輝かせながら尋ねるラーニャに、サクは自慢げに「ダマのことを説明しはじめた。シリウとカイルはシカワ村長に会い、無事にアルコドの泉を復活させたと告げた。村長は

「良かった。これでこの村も直に潤うだろ。なんとお礼を言えば良いのか……」

土まみれの頬を上げ、心底ホッとしたように笑顔を見せた。

「もう少しの辛抱ですね」

カイルが微笑むと、村長もまた微笑み、頷き返した。

「本当に良かつたですね。皆が今まで苦労してきたことが、報われようとしている……」

シリウとカイルは村外れの高台に立ち、畑仕事に勤しむ村人たちを眺めていた。緩やかな風が心地よく、畑に辛うじて育つている細い茎葉を揺らしている。

「もうすぐ、この村に豊かに育つた畑が広がるんだな」

カイルはしみじみと呟いた。シリウはカイルを見つめると、そ

の顔を覗き込んだ。

「！ な、何だよ？」

シリウは、驚いて一步後退りをしたカイルに微笑み
「ラクラさんのところに行つてみましょうか？」
すでにラクラのところにはヤツハが向かっているはずだ。 ヤツ
ハはラクラのことをずっと気にしていて、村に寄ろうと言つたのも
ヤツハだった。

「ヤツハが見に行つてるんだろう？」

カイルが言うと、シリウは眼鏡を上げて微笑んだ。

「カイルも気になるんでしょう？ 赤ちゃんのこと」

カイルはふいと視線を逸らせたが、その頬は少し赤らんでいた。
シリウはにっこり笑うと、村の中央に建つ宿舎に向かつて歩き始めた。
そして振り向くと、まだ立ち尽くしているカイルに微笑んで手を差し伸べた。

「さ、行きましょう！」

部屋の扉がそつと開いたのに気付いたラクラは静かに振り返り
「誰？ アルシス？」
と扉へと声をかけた。
キイ……と小さな音を立てて開いた扉の向こうに、ヤツハが照れ
臭そうに立っていた。

「ヤツハさん！ 来てくれたのね？ 元気そうで何より！」

ラクラは嬉しそうに椅子から立ち上がり、ヤツハに駆け寄つて抱きついた。 ヤツハは笑顔で言つた。

「ラクラさんも元気そうね。 良かった！」

笑顔で見つめ合つ二人を、けたたましい泣き声が包んだ。

「あらあら！ 起きちゃったのね？ 「ごめんねー」

ラクラは、部屋の隅にある小さなベッドへと慌てて駆け寄つた。
ヤツハも後を追つと、そこでは小さな赤ちゃんが泣いていた。

「きつとお腹が空いたのね。ずっと眠りっぱなしだったからラクラはそつと抱き上げた。細腕の中であやされ、やがてラクラの胸に落ち着いた。

「すごい勢いで飲んでる……」

じつと見つめるヤツハに構わず、ラクラの子は一生懸命に乳を飲んでいる。

「最初は痛くてたまらなかつたんだけど、そのうち、この痛みはこの子を生かしてる証なんだつて思つたら、気にならなくなつたの。不思議よねえ」

「とおしそうに見つめるラクラの顔は、母親のソレになつていた。「ラクラさん、すっかりお母さんなのね？」

ヤツハが微笑むと、ラクラは照れ臭そうに笑つた。

「私なりに、この子を守らなきやつていつも思つてる。けど、村の皆が居なかつたら、どうなつていたか分からぬわ。このベッドもね、旦那と村の人たちが畠時間の合間に縫つて作つてくれたのよ」

木で出来た簡素なベッドだが、所々に丸みを帯たフォームは優しさを醸し出している。皆の愛情がこもつているのだ。村人たちも、子供の誕生を心から祝つているのだ。

「素敵なベッドだわ」

ヤツハが言うとラクラも

「この子も気に入つてゐみたいで、このベッドに寝かせると、ぐつすり眠るのよ」

「名前はもう決めたのかしら？」

「ああ、まだ言つてなかつたわね。旦那と一緒に考えて、『ユヅキ』と名付けたの」

「ユヅキ……素敵な名前だわ。よろしくね、ユヅキ！」

ヤツハは、腹がふくれて既に眠そうなユヅキに微笑んだ。ユヅキはチラリとヤツハを見やると、何の反応もなく眠り始めた。

「つ……強い子に育ちそうね」

ゴヅキから貰えると思つていた笑顔を見る」とが出来なくて拍子抜けしたヤツハは、ラクラと共に苦笑した。

「こんなにちは〜！」

玄関の方から声がした。

「シリウだわ！」

ヤツハが玄関に行き、静かにするよつに言しながら、シリウとカイルを迎えた。

「あら、眠つてゐるみたいですね」

シリウはこりとベッドの中のゴヅキを見下ろした。

「ゴヅキと言ひつの」

と言うラクラに

「いい名前ですねえ」

と微笑んだ。

「さつき眠つたところ。このベッドがお気に入りみたい」

ヤツハも並んでゴヅキを見ている。どれだけ見ていても見飽きないようだ。ベッドが村人たちの手作りだと聞くと
「きっと皆さんの優しい気持ちがこもつているんでしょう。カイル？」

シリウは、後ろの方で所在なさげに立つてゐるカイルに振り向き、手招いた。

カイルとユヅキ

「カイルも見て御覧なさい。ユヅキちゃん、とても可愛いですよ」シリウに誘われ、ヤツハに手を引かれてベッドの傍に立ったカイルが、戸惑いながらもそつと見下ろすと、無防備にも両手を広げて気持ちよさそうに眠るユヅキの寝顔があつた。思わず見とれていると、突然ユヅキの目が開いた。

「お、起きた！」

カイルが驚くと、ユヅキはカイルをじっと見つめ、そして両手を差し伸べた。

「え？」

黒目がちな瞳は全く視線を外さず、ユヅキはカイルに言葉にならない声を上げた。

「な、何？」

「何が言いたいのかしら？」

「目は必死な感じですけど……」

カイルたち三人が動搖していると、ラクラが言った。

「もしかしたら、抱かれたいんじゃないかしら？」

「えっ！ 僕っ？」

カイルが自分を指差すと、ラクラは微笑んで頷いた。そしてユヅキを優しく抱き上げると、カイルへと近付けた。

「えっ！ お、僕、抱き方なんて知らないしつ！」

ユヅキが必死に腕を伸ばす前ですっかり戸惑うカイルの肩を優しく叩き、ヤツハが教えながらユヅキを抱かせた。温かな体温が、カイルの腕に体に伝わる。身体の全てを預けるユヅキに、カイルは恐怖さえ覚えた。

「あ～あ～う～」

カイルの腕の中に収まると、ユヅキは笑い、満足そうな顔をした。

「ユヅキちゃん、カイルの腕の中気がに入つたようね」

ヤツハが覗き込むと、ヤツハにも笑いかけた。

かわいい！

その可愛さに一瞬で落ちたヤツハは、私も、とユヅキを抱き上げようとしたが、ユヅキは何故かカイルにしがみついて離れようとしない。

-
[?]

どうしたらいいかわからず、固まっているカイル。

ナイル川とアフリカ

シリウが尋ねると、カイルは首を不器用に向けて苦笑した。

ヤツハが手振りでやつてみせるのを見ながら、カイルは戸惑いながらもユヅキを揺らした。

卷之二

ヤツバが嬉しそうに言い横でテクテは微笑んでいた

「コッキ、たゞ 気持ち悪せば、な顔をしてるわー

途端にカイルの頬が赤くなり、シリウを睨んだ。

「シリウス！」

その声に驚いたコツキがけたましい泣き声を上げた。

「うわー、うめんコッヂー！」

カイルは慌ててあやし、両脇でヤツハとシリウが顔を歪めてなんとか泣き止ませようと懸命になつてゐる。 そんな様子を見ながら、ラクラはお腹を抱えて笑つていた。

「なんだ、皆ここに居たのか！」

サクがラーニャと一緒にやつてきた。

ちょうどゴジキをラクラに返したところのカイルは、近くの椅子にぐつたりとしていた。

「ん？ どうしたんだ、カイル？」

「……疲れた……」

疲労困憊のカイルに理由が分からず、きょとんとした顔で見つめるサク。

「サク、ユヅキだよ！」

ラーニャの声に、小さなベッドに近づき中を覗くと、再び眠りについたユヅキが寝かされていた。

「可愛いでしょう？」

ラーニャが自慢げに語りつと、サクは彼女の頭をぐりぐりと撫で、笑った。

「ラーニャの妹みたいだな！」

するとラクラが

「そうなの。本当に自分の妹のようにな世話をしてくれて、助かってるのよ。村の人たち皆そう。感謝してるわ」と嬉しそうに言った。

「この子は、皆の優しさを一身に受けて、とても幸せな子」

ユヅキをいとおしそうに見つめるラクラに、四人は胸が暖かくなつた。

その夜はそのまま宿舎に泊まり、希望の止まらない話に沸いた。アルコドの泉が蘇つたことで、村人たちにも明るい未来が見え始めていた。今度はそれを現実にする番だ。

「もう行っちゃうの？」

翌朝早く、ラーニャが門まで見送りについてきた。とても残念そうな顔でサクたちを見つめるが、仕方のないことだというのも、ラーニャは分かっていた。

「絶対！ また来てね！」

ラーニャはサクたちが見えなくなるまで手を振り続けた。必ずまた会えるとお互いに信じて、ひとまづの別れだ。四人と一匹は、

ソラール兵士養成学校へと進路を取つた。

ヤツハ、さらわれの身！

ガルルル……！

突然デイツクが唸りだし、四人は立ち止まつた。鬱蒼と茂つた森の中、周りを見渡すその目は、警戒心にあふれていた。

「何か、いますね……」

「囮まれてる……？」

背中合わせで四方を警戒するが、草木一本揺れる気配もなく、四人を緊張感が包んだ。

「誰だ！ 出てこいつ！」

サクがたまらなくなつて声を上げ、拳を握つた。

額に汗が滲む。

「サク、落ち着いて！ まだ攻撃しちゃダメよ！ 相手を見なきや！」

ヤツハが小声で制し、サクは唇を噛んで抑えた。

数秒の静寂のあと、突然八方から矢の雨が降り注いだ。

「！」

四人は散り散りに避けながら、見えない相手を懸命に探した。

「くそつ！ どこから攻撃してくるんだ？」

サクは、矢が放たれたらしき草むらに攻撃を与えた。

「爆拳放火！」

土煙が舞う中を離れたところから伺つたが、すでに何の気配も無くなつていた。

「ハズレかよつ！」

歯痒さをあらわにして舌打ちをするサクに、シリウが声を掛けた。

「相手は動きながら攻撃しています！ 先を読まないと……！」

「んなの、分かるかよ！ 超能力者じゃあるまいし！」

サクが苛立ちながら言つと、カイルも腹立たしく剣を振り下ろし

た。

「人数もわからねえ！」

やがて数十本という矢の雨が止み、サクが息を整えながら周りを見た。シリウとカイルもサクのもとへと駆け寄った。

「あれ、ヤツハはっ？」

「そういえば！」

カイルとシリウも周りを見渡したが、ヤツハの姿が見えない。その時、離れたところから激しい咆哮が聞こえた。

「ディック！」

三人は弾けたように、声がした方へと急いだ。

ディックは一本の木の根元に一本足で立ち上がり、幹をガリガリと前足の爪で削りながら見上げ、吠え続けていた。三人が立ち止まって見上げる先に、枝に立ち見下ろす人影があつた。全身を覆うマントにすっぽりと被つたフードで、風貌が全く分からない。

「ヤツハっ！」

サクはその人影の腕に抱えられているヤツハを見つけた。だが気を失っているようで、ぐつたりと体を預けている。

「ヤツハっ！ 今助けるからなっ！」

飛び上がろうとして、グッと足を踏みしめたサクを、その人影は笑った。

「お前らに用はない。 ガキはおとなしく家に帰りな！」

声は男のようだ。小馬鹿にしたような見下した口調に、三人の気分はことごとく害された。

「お前誰だよ！ ヤツハに何をする気だ！」

睨むサクに、男はフードを上げて顔を見せた。肩までの紺色のウェーブの髪の毛が顔を半分ほど隠しているが、その奥にあるくつきりした二重の瞳は眼光するどく、大きめの口はいかにも楽しげにニッタリと歪んでいる。

「威勢がいいなあ！ だが、この女はあきらめろ！ 悪いことは言

わねえから、ま、大人しく帰んな！」

「そういうわけにはいきませんねえ」

「ヤツハを返してもらおつか！」

シリウとカイルも武器を手に構えて威嚇した。すると男は肩をすくめて大げさに驚いてみせた。

「おいおい。そんな危なつかしいもんを振りかざしたら、この女も傷つけちまうぞ！ それに、あまりお前らと遊んでる暇はないんだ。じゃあな！」

と言葉を残し踵を返した。

「待てよ！」

サクが近くの枝に飛び乗った。男は振り返り

「俺の名はラディン。またどつかで会えるかもなあ！」

と笑いながら空いている手を振り、身軽に枝を飛び移り、その姿はあつと言つ間に木々の間に消えた。

「くそっ！ 待て！」

サクが追いかけたが、山の中に場慣れしているのか、すぐにラディンの姿を見失ってしまった。

「サク！ 大丈夫か？」

息が上がつて立ち止まつてしまつたサクに、シリウとカイルが追い付いた。その傍らにはピッタリと、興奮した様子のディックがついてきている。

「ディック！」

サクがいきなりそう言いながらディックに近づいたので、シリウとカイルは驚いた。

「お前、ヤツハの後を追えるなつ？」

サクの言葉が分かつたのか、ディックはひと吠えして走りだした。

「行くぞっ！」

シリウとカイルに声をかけると、サクはディックの後を追つた。

慌てて二人も彼らの後を追つた。

「苦手なはずだったんですけどねえ……」

走りながらおどけるシリウを一瞥して
「目的が重なつたからだろうな！」

とカイルはサクの背中を見つめた。

『サクは本当に、ヤツハのことを……』
ディックはまだ幼生とはいえ、野性の脚力は一人前に近い。行く者を襲うように生える草木を器用に避けながら、風のように疾走している。それに遅れまいと、サクたちは養成学校で鍛えた足で森の中を走り抜けた。

ところが

「！」

「なんだこりやつ！」

突然立ち止まつたディックと三人を強風が襲つた。田の前には、地面が裂けたように深い谷があり、そこから吹き上がる風が襲つてきたのだ。

「行き止まりかよっ！」

腕でガードしながらサクが悔しそうに言い、カイルは周りを探つてみたが、この谷を渡れそうなところは見当たらない。

「あいつ、どうやって向こう側へ行つたんだ？」

「ディック、ヤツハは本当にこの向こう側なのか？」

サクが尋ねると、ディックは鼻をクンッと上げ、イエスとばかりに吠えた。

「参りましたねえ……」

シリウが眼鏡を上げてため息をついた。すっかり足止めを食つてしまつた三人は、途方に暮れてしまつた。

中でもサクは苛立ちが募り、地面に拳をぶつけた。下からの強風が、土煙を舞上げる。シリウは眼鏡を外して下を覗き込んだ。遥か底の方に、細く川が流れているのが見える。

「落ちたら一溜まりもありませんね……一度下りて、向こうの崖を

上のも……」

シリウは視線を辿った。

「難しそうですね……急すぎる……」

すると傍を離れていたカイルが戻ってきた。

「近くを探つてみたら、多分あいつが使つたような跡があつたぞ！」
カイルの案内で少し離れた岩壁に行くと、ちぎれたツルが揺れていた。サクは声を上げた。

「これを使つたんだ！」

周りを見ると、目ぼしいツルは全て切り取られていた。

「用意周到というわけですか」

シリウは肩を落として眼鏡をかけた。

「くそっ！ どうしたらいいんだよっ！ せめて空を飛べたら…」

サクが悔しげに声を上げた。

ヤツハ奪還の為、帆走中！！

その時、ザワツと木々が揺れた。 風の性ではないそのざわめきの中から

“コマツテル？ コマツテルヨ。 ヤサシイヒトタチガ、ボクタチノトモダチガ、コマツテル”

と、いくつもの声が聞こえてきた。 と言うより頭に直接響く声。

「？」

サクたちは耳を澄ませた。

「誰だ？」

“コマツテルヨ、トモダチ、タスケナキヤ、タスケナキヤ”
囁きとも思える声が、三人を取り囲む。

「この感じどこかで……」

耳を傾けながら、カイルが呟いた。

「コダマ……ですか？」

シリウが声に尋ねた。 すると

“コダマ……ニンゲンハ、ソウイウ……トモダチ、タスケル”
その時一陣の風が吹き、三人とディックは顔を覆った。 途端に、周りの枝がみるみる伸びて複雑に絡み合い、それは谷の方へと伸び続け、やがて向こう岸に繋がった。 呆気にとられる三人に

“カゼニキヲツケテ”

“トバサレルヨ”

“ボクタチノトモダチ”

“キヲツケテ”

と幾つものコダマの声が風に舞つた。

「コダマ、ありがとう！ 行くぞっ！」

サクが意氣揚々と声を上げ、三人は走るうとするが、ディックは立ち尽くして尻込みをしていた。

「ディック、どうした？ 早く行くぞっ！」

サクが声をかけたが、ディックは尻尾を股の下に入れて切ない鳴き声を発している。

「もしかして……高い所が苦手なのか？」

察したカイルが言うと、ディックは俯いて目を逸らした。

「つとに！ しょうがねえなあ！」

弾けたように舞い戻ったサクは、小さくなっているディックを軽々と肩に担いだ。

「キヤウンッ！」

「バカ！ 暴れたり噛んだりしたら、谷底に落とすからなっ！」

と一喝すると、ディックは途端におとなしくなった。 サクはすぐ近くにあるディックの顔を見つめた。

「ヤツハを助けたいんだろ？」

ディックは瞳を輝かせた。 そのひと吠えに、サクは大きく頷いた。

「さ、行こう！」

サクたちはゴダマが作ってくれた薦の橋を渡り始めた。

『ゴダマ、ありがとう！』

カイルは途中で振り返り、森を見渡した。 木々は普段どおりに風に揺れ、何の気配も感じなかつた。

「カイル？」

振り返ったシリウが声をかけると、カイルは森に微笑みかけて踵を返した。 三人は谷底から吹き上げる風をものともせず、薦の橋を一気に渡り切つた。

サクの肩から下ろされたディックは、二、三度体を震わせてから、再び何事も無かつたかのように走り始めた。 振り返り、早く来いとばかりに吠えるディックに

『途端に元気になるんだな！』

と、サクはあきれ氣味に言いながら笑つてディックを追つた。

「本当に」

シリウとカイルも吹き出し、走り始めた。

ディックを追う森の中は相変わらず道もなく、そんな中を走つていくには、人間には辛すぎた。あちこちが枝葉で切れ、足を取られた。だが三人はヤツハを助けたい一心で、一足先を行くディックを追いかけた。

数分走つたところで突然、ディックの体が弾き飛ばされた。悲鳴と共に転がるディックを受け止め、サクは周りを伺つた。

「誰だ！」

「帰りなつて、言つただろ？」「

「その声は、ラディン！」

カイルが仰ぎ見ると、木の枝に座り、葉をくわえてニヤリと微笑みながら見下ろすラディンがいた。

「てめえ！ ヤツハをどうした？」

ラディンは手ぶらだった。彼は悠然と三人と一匹を見下ろし、笑つた。

「あきらめなつて、言つただろ？ お前ら耳が悪いの？」

からかうように自分の耳をほじり、吹いた。

「もう間に合わねえよ。森の出口くらいなら教えてやるから、ついてこいよ！」

ラディンは立ち上がりて隣の枝に移つた。

「てめえ！ ヤツハの居場所を教えろっ！」

サクの拳パンチが振り上げられた。

「爆拳放火！」

気の球が赤く燃えながらラディンへ襲い掛かつた。

「うわっ！」

ラディンは驚いてのけぞり、落ちると見せ掛け、器用に枝に手を掛け別の枝に移つた。

「あつぶねえなあ！ なにすんだよ！」

「下りてこい！ ヤツハの居場所を吐かせてやる！」

サクが今にも噛み付きそうな勢いで睨んだ。ラディンは肩をす

くめておどけた。

「ラティンさん、でしたね？」

シリウが口を開いた。

「見たところ、ヤツハさんが近くに居なにようですが、どこかに閉じ込められているのでしょうか？ 間に合わない、とは、どういうことなんですか？」

静かな口調が、森の中に響いた。 ラティンは再び枝に座ると、へえ、と肩肘をついた。

「あんた、頭良さそうだな。 それに、後ろで様子伺つてのお前！ そんな危ないもの、しまつとけよな」

カイルは息を飲んでナイフを懐にしまつた。 ラティンは続けた。

「ああそれとさ、こいつ、うるさいからだまらせてくれない？」

木の根元で吠えるように叫んでいるサクを指差すと

「分かりました」

とシリウは音もなくサクの背後に忍び寄り、延髄に手刀を打ち込んだ。

「つ！」

氣を失つて膝から崩れ落ちるサクを、慌ててカイルが支えた。

「シリウ！ 何するんだ！ 気でも狂つたか？」

シリウは睨むカイルの前にしゃがむと、囁いた。

「あのラティンという男、おチャラけて見えますが実力はあるようです。 あなたも分かるでしょう？ 今のサクは頭に血が上つている状態です。 残念ですが、彼にはしばらく眠つていてもらうほつが得策かと思いまして」

「なるほど……」

カイルは腕の中でぐつたりしているサクを見つめた。 今のサクには冷静に判断することは出来ない。

「カイルは、サクとディックを連れて離れていてください」

シリウはカイルに微笑んだ。

「シリウ？」

「僕は……」

シリウは立ち上がりラティンを見上げた。彼は憎々しげに口元を歪めた。

「もしかして、俺とやる気?」

「手、出さないでくださいね」

シリウはカイルにワインクをし、眼鏡をそっと上げた。

「話しても埒があかないようなので、手つ取り早く済ませることになります」

静かに言うシリウに対し、ラティンは嬉しそうにこやけ、立ち上がった。カイルはシリウの気持ちを組んで、サクと倒れていく。ティックを抱えると、少し離れたところに彼らを寝かせた。

「シリウ……」

戦う時は、一対一。そう教えられてきた。不意討ちをしているのは、自分の身が保障出来なくなつた時だけ。カイルは拳を握つて、二人の対峙を見守つた。ラティンは地面に下り立つと、指を鳴らした。

「久しぶりに、楽しそうな相手みたいだな。 そうだ! ルールを決めないか?」

「ルール?」

シリウはじつとラティンを見つめている。そこにはさつきまでの、彼特有の柔らかい雰囲気は無かつた。張り詰めた空気がカイルにも伝わつた。

「シリウの気配が変わった……」

カイルは息を飲んだ。ラティンは相変わらず余裕の表情で言った。

「お互い、飛び道具や武器は使わない。ま、俺は最初から丸腰だけどな。あんただつて戦士の端くれなら、フェアな戦い、したいだろ?」

軽い衣服をまとつただけの体を叩きながら、武器は何も無いこと

を証明するラディンに、シリウは眼鏡を上げた。

「あいにく僕は戦士ではありませんが……あなたの言うことも一利ありますね。 分かりました。 武器を一切捨てましょう」

シリウはスルスルと懐にあつた武器を取り出し、カイルへと投げた。「ちょっと預かってください」

カイルは黙つて受け取つたが、内心は不安で押しつぶされそうだった。 シリウは養成学校でもトップクラスの実力を持つている。 だがそれはあくまでも養成学校の中だけの話であつて、世界にはもつと実力がある人物や強い獣は山ほどいると聞かされている。 どれほどの実力があるか分からないラディン相手にシリウが対抗出来るのかどうか。 カイルの心は大きく揺れ動いていた。

シリウはラディンを見据えたまま、カイルに言った。

「カイル、合図をお願いします」

カイルは何も言わず、一人の間に立つた。

「このコインが落ちたら。 それが合図だ」

二人はお互いを見たまま頷いた。 カイルは指先にコインを乗せ、間合いをはかると、弾き上げた。

捕らわれのヤツハ！

ヤツハは、身体に圧迫感を感じて田を覚ました。 ゆっくり田を開けると、乾いた土の地面が田に映り、湿りこもった空気が胸を害した。 そつと顔を上げると、屈強な一人の男が地べたに座り、向かい合ってカードゲームをしていた。

『つ！ 体が動かない……』

ヤツハは、後ろ手に柱のようなものに縛られ、座らされていた。

『な……なんなのこれ？ 一体何が……？』

次に、首の後ろの痛みに気付いた。

『そうか……あたし、森の中で誰かに襲われて、氣を失つて……』
サツと血の気が引いた。

『皆はどう？ 無事なの？』

思案しているうちに、二人の男はヤツハに気が付いた。

「あれ、目が覚めたみたいやで！」

異常にふくれた腹の大男が、カードを無造作に地面に置くと、大きな鼻を膨らませてヤツハに近づいた。 草の匂いと体臭が混ざつて、ヤツハの気分を害した。

「ラテンの奴、なかなかの上玉を捕つてきたやん。ちょっとガキやけど、いい感じやと思わん？ ドウラス？」

ドウラスと呼ばれた、これまた太った腹を持つた男も、厚い唇を歪ませてヤツハに近づいた。

「そうやな。 ボスも喜ぶやろなあ、何しろ久しぶりの女やからなー」

二人の男に囲まれたヤツハは嫌悪感をあらわにした。

「なあ、ちょっとだけ味見したらあかんかなあ？」

ドウラスはいやらしく顔を歪ませてヤツハの顔に鼻を近付けた。

「あかんて、ドウラス！ ボスより先に手を付けたら、殴られるどころじや済まされへんで！」

大鼻の男は怯えたようにドウラスの肩を掴んだ。ドウラスは笑いながら離れた。口臭がヤツハの鼻を包み、思わず顔をそむけた。「分かつとるわ。マナスカは怖がりやあかん！オレかて死にとうないで！」

「あーよかつた。ドウラスは冗談に見えんからな」

マナスカはホツとしたようにヤツハを見た。

「そう言えばこいつ、喋らんな。口が聞けんのか？」

「ラディンは何も言つてへんかつたけどなあ。おい、お前！」

ドウラスはヤツハの顎をつかみ、自分の方へ向かせた。物怖じせずキツと睨むヤツハに、同じように睨み返しながら

「何か喋つてみろや！怖くて口も開かんか？ん？」と言つて顔を振り動かした。

「…」

弾くように手を離すと、ドウラスは臭い息を吐いた。

「つまらんのう！泣くとか喚くとかすれば、ちょっとは可愛げがあるのに！」

「ドウラス、ちょっとやりすぎやないか？」

マナスカが心配げに言つた。ヤツハは黙つたまま俯き、吐き気と頭痛をこらえていた。

『サク……皆……助けて……一体どこに居るの？』

ドウラスは巨体を揺らしながら、さつきの場所に座り直した。

「まあええわ。どうせオレらには残り物しか回つてこんからな。マナスカ、ボスが帰つてくるまでカードゲームやろうやー！」

「ふふん」

マナスカは唇をパカパカしながらドウラスの対面に座り直し、カードを手に取つた。

「さて、オレの番からやつたかな？」

再び盛り上がる二人を盗み見ながら、ヤツハは周りを見た。壁も床と同様に土か岩のようで、淡いランプの光を浴びた一人の巨体の影が揺れている。家具らしいものも無い殺風景でさほど広

くない空間には、男たちのむせ苦しい空気が充満し、ヤツハはますます気分が悪くなるのだった。

しばらくすると、遠くの方が賑わしくなった。

ドウラスが首を外の方へ向けた。

「フン？ ボスがお帰りのようやな」

ヤツハは気持ちを構えた。どうにかして隙を見つけて逃げ出さなくてはならない。後ろで縛られている腕を焦らすように動かしてみたが、全く外れる気配もない。そうしているうちに、賑やかな声は近づき、扉のない部屋の壁に黒い影が大きく揺れるのが見えた。

ドウラスとマナスカは立ち上がって、やつて来る影を待っていた。
「久しぶりの獲物らしいなあ…」

ドス深い声が部屋に響き、大きな体が姿を現した。

「お帰りなさい！ ガラオルさん！」

ドウラスとマナスカが丁寧にお辞儀をした。それを無視しながらドスンと足音を響かせて部屋に分け入るとヤツハを見ながら「おお、こいつか！」

と嬉しそうににやけ、唇を舐めた。

「ラティンが、森で捕つてきたそうです」

ドウラスがうやうやしく言うと、横目で流したガラオルはヤツハの前まで近づくと、勢い良くしゃがんで目線をヤツハに合わせた。拍子に起きた風が、ヤツハの顔を撫でた。

「？」

その時ヤツハは不思議な感覚を覚えた。ガラオルは二タ二タといやらしく微笑みながら、ヤツハを舐めるように見つめた。

「ほう！ なかなか良いじゃないか！ 今夜は楽しみだ！」
と笑い、ヤツハの顔を覗き込んだ。

「おいお前、名前は何と言うんだ？」

ヤツハは答える気などさらさらなかつたが、マナスカが口を挟ん

だ。

「ラティンが、『ヤツハ』と言つひじいと言つてました！」

途端に、マナスカの体が吹き飛んだ。

「！」

ヤツハは冷静を装いながらも、動搖していた。

『見えなかつた……！』

だが確かに、マナスカを吹き飛ばしたのはガラオルだった。振り向いただけのように思えたが、確かにガラオルの腕からは波動を感じられた。

『こいつ、強い……』

ヤツハはガラオルの顔をうかがい見た。分厚い体に簡素な服をまとい、左目に眼帯をしている。髪は綺麗にそつており、赤黒い肌に鍛え抜かれた筋肉が輝いている。ガラオルは

「勝手に口を開くな！俺はこの女から聞きたいんだ！」

と倒れているマナスカを睨み、再びゆっくりとヤツハと向かい合つた。

「……ヤツハ？」

ガラオルは眉をひそめてヤツハの顔を見つめた。ヤツハは訳が分からぬまま、それでも視線を外せなかつた。それは恐怖のためではなかつた。

『なんだろう……この感じは……？』

しばらく見つめた後、ガラオルは口元を歪ませて笑つた。

「これは面白くなりそうだな。今夜が楽しみだ！」

そして勢い良く立ち上ると、部屋を後にした。

ガラオルが手下たちと共に去つた後、倒れていたマナスカがムクリと起き上がつた。そして、赤く腫れた頬を撫でながら苦笑した。

「ああ、びっくりした！」

それを見たドウラスが厚い唇を歪ませて笑つた。

「ほらみろ！ボスに余計なことするからやー！」

マナスカはいつもの事のように平然と立ち上がり、体に付いた土を払い落とした。

「つい口を挟んでもうた！　こいつ、喋る気配ないからなあ！　イライラするわ！」

マナスカはヤツハを見下ろした。

「ま、こいつはボスのもんやからな、オレたちは見張りするだけ！　ホンマ、いっつもいっつも、つまらん役所やのう」

ドウラスは大きくあぐびをしてあぐらをかいた。　マナスカもドウラスと向かい合つてあぐらをかき、任務に戻つた……というより、カードゲームの続きを始めた。　ヤツハは出来るだけ一人を視界に入れないように俯いて、静かにため息を吐いた。

『なんだろう……さつきの感じ……』

しばらく考えてみたが、何も分からなかつた。　ただ、初対面の人物に対する感情にしてはおかしいとだけ、感じていた。

激闘！そしてヤツハのもとへ！

カイルの目の前ではあちこちで土埃が立ち、木の幹には破片を飛び散らせながら傷を刻まれ続けていた。空気の固まりが飛び回り、周りを異様な雰囲気が包んでいる。カイルの目には、しつかりと戦う二人の姿が映っていた。

実力は互角のように見えるが、シリウの体には次第に傷が増え始めていた。

『シリウの方が押されている……』

カイルは手を出せない苛立ちと悔しさに唇を噛みながら、二人の様子を見ているしかなかつた。足元には、木の幹にもたれさせた氣を失つたままのサクとディックが横たわつている。

その時、ラデインがカイルたちの方へ向かつてきました。

「！」

カイルがサクたちを庇うように身構えると、目の前にシリウが立ちはだかつた。ピタリと止まつたラデインは、にやけながら肩を回した。

「なかなかやるじゃん！」

「傍観者たちには手を出さない。それが戦う者同士の常識でしょう？」

「ああ、それは失礼しました」

ラデインは鼻で笑つた。一人ともほんの少し息が上がるだけで、スタミナには問題なさそうに見える。だが、確實にシリウの傷の方が目立つている。袖が切れ、血が滲んでいる。頬も赤く腫れているようだ。

「隙ありつ！」

ラデインはいきなりシリウの腕を掴むと、傍の木へと叩きつけた。

「うあっ！」

うめき声と共に、シリウの腕の関節が壊される音が響いた。

「シリウッ！」

左肘を押さえ立つシリウの後ろ姿を、カイルは悲痛な顔で見つめた。

「大丈夫ですよ」

シリウは少し振り返って微笑んだが、その額からは脂汗が浮いている。

「カイルさん、彼が怪我をしたので、戦線離脱ですよ。次はあなたが来ますか？」

ラディンは余裕の表情でシリウの真似をしながら、カイルに向かつて手招きをした。

「お前！」

カイルはたまらなくなつて身構えた。すぐにでも飛びかかるれる体勢だ。

「カイル……頼みがあります」

シリウが声をかけた。

「なんだ！ 本当に選手交代か？」

からかうラディンを無視して、シリウは眼鏡を外した。

「これを、預かっていてもらえますか？」

笑顔で手渡すシリウに、カイルは何も言えなかつた。見えない気迫に、喉が締め付けられていた。

「大事な眼鏡なので、傷付けないでくださいね」

傷だらけの顔で再びにっこりと微笑み、シリウはラディンへと向かい合つた。

「これで、少しばかり軽になります」

と言つシリウにラディンが爆笑した。腹に両手を沿え、うずくまる勢いだ。

「は、腹いてえ！ 面白いじゃんか！ ま、それ位の冗談は許してやるよ！ 見えない目でどうやって戦つてんだよ？ ははははは！」

涙まで流して笑うラディン。カイルは歯痒さを必死で我慢していた。だがシリウは平然とした顔で左肘を気にしながら腕を回した。

「さて」

言つが早いが、シリウの姿が消えた。次の瞬間には、ラディンの体が弾け飛んだ。背中を木に叩きつけられ、ラディンは地面にバウンスした。

「つなんだ？」

顔を上げるとそこにシリウの足があり、目を見開くと共に蹴り上げられた。ラディンの体は木の葉のように舞い上がり、すぐに地面に叩きつけられた。

「ぐあっ！」

ラディンの潰れた声が響いた。

「つんだよ？ 急に動きが良くなりやがった！」

言いながら唇を拭うと、親指が赤く染まった。口の中を切つたのか、ラディンは赤い唾を吐き出した。それでも気丈に立ち上がると、事もなげに立つているシリウを睨んだ。

「てめえ、何をした？」

「別に何も。言つたでしょ？ 身が軽くなつたと」

「ふざけるな！」

ラディンはシリウへと突進した。それを軽く脇にかわすと腕をつかみ、捻りながら地面に叩きつけた。

「あああっ！」

ラディンの顔の大半は縮れた紺色の髪に隠れていたが、その様子は苦悶に満ちていると容易に見て取れた。腕を固められたまま身動きができない体を震わせながら、背中にいるシリウに言つた。

「折れよ！ お前なら簡単に折れるだろうが！」

シリウは氷のように冷たい目でラディンを見下ろし、無表情で掴む腕に力を込めた。

「やめろー！」

「！」

シリウの力が一瞬緩んだ。その隙にラティンの体がするりと逃れたかに思えたが、シリウの手は一瞬早くラティンの髪の毛を掴んで引き戻した。再び腕を取られ、シリウに背を向けた形で座られたラティンの前に、カイルがナイフを突き付けた。

「シリウの力は分かつただろ？ おとなしくヤツハの居場所を教えろ！」

ラティンはしばらくカイルと睨み合っていたが、やがて観念したように体の力を抜いた。

「仕方ねえ。……負けは負けだ！」

シリウとカイルは身支度を整えると、早々とラティンから聞いた場所へと向かった。途中応急処置をした左肘を気にしながら、シリウはカイルに尋ねた。

「何故あの時、止めたんですか？ 腕を折った後でも、尋問は出来たはずですが」

シリウはカイルから返してもらつた眼鏡を丁寧にかけた。カイルは少し考えて答えた。

「なんとなく……」めん。 手出ししないのが常識なのに……つい

シリウはふつと笑つた。

「カイルは、それでいいと思いますよ」

シリウは責める気など毛頭無かつた。それに彼にはもうひとつ、気掛かりなことがあった。ラティンからヤツハの居場所を聞いた後から、カイルの様子が変なのだ。カイルの妙に焦つた雰囲気に、シリウは心配に思つた。

「カイル……」

「急ぐぞ！」

カイルの瞳にはもう次のことしか見えていなかった。

「カイル、大丈夫ですか？」

カイルは苛立つたような口調で振り向いた。

「俺のことはいい！」

言うなり、先に走りだした。シリウも後に続き、二人はヤツハの居る場所へと急いだ。事は一刻を争う。森の中はだいぶ暗くなつてきていた。

一方ヤツハは、ガラオルの部屋にひとり座らされていた。相変わらず言葉を発することはなかつたが、抵抗もしなかつた。拘束されていた腕も自由になつていて、無駄なことだと分かつていて。ヤツハが今居るところは、洞窟のようだつた。曲がりくねつた穴の中を歩かされ、一番奥のガラオルの部屋に入れられたようだつた。

まだ誰も居ない部屋には壁際に太いろうそくが一本立てられ、一本だけが火を灯され、部屋の中をぼんやりと照らしている。静寂だけが部屋に充满していた。床には固い御座が敷かれ、所々がほつれて汚れている。隅に積まれている厚い布は、布団の代わりだろうか。小さな物入れのようなタンスが端っこに佇んでいる。ヤツハは周りを観察し終わるとため息をついた。

『これからどうなるんだろう……』

窓一つない穴蔵では、外の様子がまったく分からぬ。さらわれてからずいぶん時間が経つていうよつた気がする。

『とにかく、なんとかしなくちゃ……』

そう思つてみても、さつきのガラオルの動きは、明らかに手慣れたものだつた。訓練を受けてきたとはいえ、今のヤツハに適う相手ではないことははつきりと分かつていた。

考えあぐねていると、地面を踏みしめながら歩く足音が聞こえてきた。それは次第に大きくなり、ヤツハに近づいてきた。

『待たせたなあー！』

爪楊枝をくわえた二タリ顔のガラオルがゆっくりと覗いた。

「おや、何も食べてないのか？」

ヤツハの前に置いてある皿の上には、手付かずの食事が乗つていた。その前にドカリと座り、皿をヤツハへ近付けた。

「腹減ってるだろ？ 夜は長いんだ。 食つておけ」

その優しい口調はわざとらしく、ヤツハには耳障りなだけだった。鼻先に近づけられた皿を両手で払いのけ

「あたしをどうする気？」

と、ガラオルを睨んだ。すると、臆することなく鼻で笑うと、にやつと微笑んだ。

「まあいい。 女は元気なほうが好きだ」

そう言いながら、その巨体はヤツハにゆっくりと覆いかぶさつていった。

「ヤツハ——！」

カイルの怒号が洞窟のなかに響いた。その足元には、見張り番をしていた男一人が倒れている。

「カイル！ そんな大きな声を出しては、相手に『出てこい』と言つていいようなものです！」

シリウが慌ててカイルの前に立つて制止した。その身体を押し返すようにのけると、カイルは前へと進んだ。

「出てくれるならその方が早い！ 行くぞ！」

そのうち、なんだなんだと入り口の異変に気付いた仲間たちが出てきた。

「なんだ、お前ら？ こにはガキが来るといひじゃねえ！ 帰れ帰れ！」

シッシッと手で払う仕草をしながら近づいてくる男に、カイルの体が飛んだ。

「！」

カイルの後ろで倒れる男に、仲間たちは驚き、次の瞬間には激昂した。次々に現れ近づいてくる男たちに、カイルの両手が振り下ろされた。

ソウハヘキサイ
「蒼刃壁碎！」

気合と共に振り下ろした剣から蒼い切っ先が一本、地面をひた走り、男たちを薙ぎ倒した。

「シリウ！ 急ぐぞ！」

カイルは振り向きもせずに走り始め、シリウは無言でその背中を追いかけて。しかし、一人はすぐに立ち止まってしまった。

穴が縦横無尽に走り、まるで迷路のようだった。真っ暗闇のなか、標識があるわけでもない。闇雲に走り回っても迷うだけだ。

「くそつ！」

ちぎれるかと思つほどに唇をかみ、悔しがるカイルの肩をシリウが掴んだ。

「カイル！ 落ち着いて！」

その腕を振り払い、カイルはシリウを睨んだ。

「一刻を争うんだ！ アイツにさらわれたとしたら、こんな所で立ち止まつている余裕なんて無いんだよ！」

「カイル、もしかしてガラオルとは流族の……」

シリウはあえて静かな口調でカイルに尋ねた。 カイルは小さく、それでもしつかりと頷いた。 その瞳は、焦りでユラユラと泳いでいた。

「アイツは……マチさんの仇だ！」

シリウは息を飲んだ。 そして自身を落ち着かせるように眼鏡を上げ

「そうでしたか……」
と息をついた。

「ガラオルは女好きで有名な流族だ。 今までにたくさんの中たちが餌食になってきた。 まさかヤツハがアイツなんかに捕まつたなんて！」

憎たらしそうに周りを見るカイル。 シリウが冷静に判断を下した。

「ガラオルがボスだとするなら、多分一番奥の方に居るでしょうね」「くそっ！ 足止め食つてる場合じゃないのに！」

壁を蹴り上げるカイル。 その時、遠く小さく吠える声が聞こえた。

「！」

二人が振り向くと、猛スピードで走つてくる小さな一つの光が見えた。

「ディック！」

小さな二つの光は、ディックの目だった。 あつという間に一人を追い抜くと、くるつと振り向いてひと吠えした。

「ディック！ やつと気が付いたんですね！ ヤツハの所へ案内してください！」

嬉しそうに言うシリウ。二人は走り始めたディックを追い、洞窟の暗やみの中へ消えていった。

「！」

ヤツハの体から離れたガラオルは、再びあぐらをかいて、太い葉巻に火をつけた。ガラオルはヤツハを襲わなかつた。腕を取り馬乗りにはなつたが、すぐに身体を離したのだ。

『なんなの？』

ガラオルの意図がわからずにただ黙つていると、ガラオルはふつと鼻で笑い、俯いた。

「やはりとは思つたが、さすがにいい気分はしねえな、自分の娘を手に掛けるのは」

「？ それ、どういうこと？」

ヤツハが恐る恐る尋ねると、ガラオルはニヤリと微笑んだ。

「お前は、俺の娘だつてことだよ！」

その時、仲間の男が駆け込んできた。

「ボスっ！ 侵入者ですっ！」

そしてその場で倒れた背後に、カイルの姿があつた。その脇を、風のようにディックが走り込み、ヤツハの傍に寄り添つた。ヤツハを守るように、唸り声を上げるディック。

「ヤツハ、大丈夫ですか？」

すぐにシリウの姿も現れた。カイルは床にあぐらをかくガラオルを睨んでいた。ガラオルは驚く様子もなく、落ち着いた目でじつとカイルを見ていた。

「マチさんの仇！ 覚悟しろ！」

カイルは剣を構えるとガラオルへと突つ込んでいった。

「うあっ！」

うめき声と共に、カイルの体は横殴りにされ吹き飛ばされた。壁に叩きつけられ、剣はぐぐもつた金属音と共に床に転がった。その隙に、何故かティックが外へと飛び出して行つた。

「カイルっ！」

シリウは倒れているカイルの前に立ち、ガラオルに向かつて構えた。

「無茶です！ 相手もよく知らないで突つ込むなんて！」

「くつ……！」

カイルは腕を立てて起き上がり、拳を握つた。そしてソレを振りかざした。
「ダンバッカ弾刃抜花！」

シリウの脇を抜け、ガラオルへと氣の弾が飛びかかった。ガラオルはそれを事もなげに手で払つた。

氣の弾は壁に当たり、拳大の穴にへこんだ。瓦礫がパラパラと地面に落ちた。

「素手で弾いた！」

カイルは驚いた声を上げた。ガラオルは太く笑い、空気を揺らした。

「挨拶にしては手荒すぎだな！ この女を助けに来たのか？ ガキのくせに、たいした勇気だ！」

余裕の表情で笑い続けるガラオルに、遂にカイルがキレた。

「お前は必ず殺す！」

シリウを突き飛ばして地面に転がる剣を拾つと、ガラオルへとまた襲い掛かった。

「まだ分からんか？」

ガラオルはカイルが振り下ろした剣を軽くかわし、片手で両腕をつかむと引き上げた。

「このつ！」

足が地面から離れ、吊されたカイルは必死でもがいた。シリウも手出しが出来ないでいた。

ガラオルはカイルの顔を覗き込んだ。

「ほほう。よく見るとお前もなかなか綺麗な顔をしてるな！」

カイルはそのいやらしく笑うガラオルに唾を飛ばした。ガラオルは一瞬驚いた顔をしたが、すぐににやけた。

「ふん。威勢のいいガキだ。心配するな。俺はそっちの趣味はねえ！」

そう言つと、ガラオルはカイルをシリウに向けて投げ飛ばした。

「カイルっ！」

シリウに受けとめられたカイルは、すぐに立ち上がつた。

「カイル！ 落ち着いて！」

肩を掴むシリウに、カイルは構わずまた向かつていこうとしている。シリウの言葉などまるで耳に入つていないようだつた。

その時、轟音と共に入り口付近の壁が崩れ、大きな穴が開き、土煙が部屋を待つた。

「ヤツハ！」

荒い息と共に現れたのはサクだつた。

ラティン、本当は良い人？ サクはやっぱ天然！

数分前

やつと気が付いたサクの目の前には、静かな森が広がっていた。鳥たちのさえずりが辺りに響き渡り、穏やかな雰囲気にしばらくぼうつとしていたが、すぐに我に返つて頭を振つた。そして立ち上がろうとしたが、起き上がれない。

「！ っ？ なんだ？ なんだよつ？」

見ると、サクの体は木の幹に縛り付けられていた。

「なんでオレ、縛られてんだよ！」

半ばキレ気味にもがいたが、ロープはびくともしない。周りを見ると、足元に一本のロープが落ちていた。

「おい！ あんまり動くなよ！ 痛えだろうが！」

不意に後ろから声がした。サクは振り向こうとしたが、木の幹にピッタリと背中が付いているので後ろに誰がいるのか分からぬ。「誰か居るのか？ なあ、これ、外してくれよ！」

「俺もそうしてえんだけどな！」

それはラティンだつた。二人は同じ木の幹に縛られていたのだ。サクはすぐにその声の主がヤツハをさらつた男だと気付き、声を荒げた。

「ああつ！ お前、ヤツハをさらつた奴だろ！ てめえ！ 絶対許さねえからな！ ヤツハをどこへやつた！ ロープ外せ〜〜！」
「なんか、こいつを縛つて行つたあいつらの気持ちが分かる気がする……」

ラティンはあきれながら咳き、後頭部を軽く木に当てる。

「もう負けを認めたから、戦う気はねえよ。ヤツハとかいう女の居所は、あなたの仲間に言つた。今頃着いてんじゃねえの？ うまく助けだせるかどうかは分かんねえけどな！」

捨て台詞の様に言つたラティンを、サクは睨むように振り返った。

「オレも行かなきやならないんだ！ ヤツハを助けなきや！」

ラティンは少し考える仕草をしたあと、サクに尋ねた。

「なあ、なんでそのヤツハって奴を助けたいんだよ？ お前の彼女か？」

サクはじつと前を向いて、ぽつんと落ちているロープを見つめた。
「あいつは、小さい頃から病弱の母ちゃんを世話してて、いつも大
変だったはずなのに、今まで一度だって泣いた所を見たことがない
んだ。いつも自分で解決しようとして、無理して……だからあい
つが兵士養成学校に入るって聞いたとき、オレも強くなつて、オレ
がヤツハを守つてやるつて決めたんだ！」

ラティンは黙つて聞いた後、ため息にも似た細く長い息を吐いた。
「仕方ねえなあ……これだけは使いたくなかったんだが……」

呟くように言うと、肩をすくめた。同時に乾いた音が何度かす
ると、サクの体が軽くなつた。張りの無くなつたロープがサクの
足元に落ちた。

「？ なんだ？」

訳が分からず動搖するサクの後ろから、ラティンの声がした。

「早く行けよ！ まだ間に合うかも知れねえ！」

サクが立ち上がり木の裏側を見ると、力なくうなだれるラティ
ンの姿があつた。

「お前、どうしたんだよ？」

ラティンは弱々しく頭を上げると、サクを睨むように見た。

「俺のことはいいんだよ！ 急いでんだろ？ 早く行けつて！」

「でもお前、体が……」

「関節外しだけだ。すぐ治せる。ほら早く！」

顎をしゃくつて促すラティンに、サクは後ろ髪引かれる思いで後
退りを始めた。すると森の中から鳴き声が聞こえ、それは次第に
近づいて来た。

ザンツー！

と勢いよく草むらから飛び出したソレは「ティックだつた。

「ティック！」

言つが早いが、「ゴンツー！…」とサクのげんこつが「ティックの頭を

はたいだ。悲鳴を上げるティックに

「あの落ちてたロープはお前のだつたのか？ オレを置いていくとは、覚悟してたんだろうな！」

指を鳴らし見下ろすサクに、イカつこたラティンの声が飛んだ。

「早く行けって！」

我に返つたサクはラティンに振り返り、微笑んだ。

「おう！ ありがとうな！」

と言葉を残して走り去つとするサクを、再びラティンが呼び止

めた。立ち止まり振り向くサクに

「俺を縛りつけていかなくていいのかよ！？」

と言つと

「いや、やめとく。お前、オレを助けてくれたからな、借りは返

す！ じゃな！」

「なあ！」

ラティンは顔を覆つ髪の毛の間からサクを見つめた。

「お前の仲間、強いな」

サクは笑つた。

「当たり前だろ！ 自慢の仲間たちだぜ！」

そう言つサクは、誇りのある瞳をしていた。走り去る背中を見

送りながら、ラティンは

「仲間か……」

と咳きながらふつと微笑み、外れたままだった肩の関節をガコン、
と戻した。

逃亡！巨体のガラオル、姿を消す！

ディックに導かれてヤツハのもとに駆け込んだサクは、息が上がり興奮している。サクは部屋の奥にヤツハの姿を見つけると、目を見開いて声をかけた。

「ヤツハ！ 大丈夫かつ？ ケガとかないか？」

ヤツハは床にペタリと座つたまま呆然とサクを見つめていた。

「サク……」

それ以上は言葉にならなかつた。サクは部屋の中央に陣取るガラオルを見ると、激昂した。

「お前だな！ ヤツハをさらつたのは…」

サクは拳を握つて気を溜めた。壁ぎわに立つて、必死にカイルを押さえていたシリウが

「よくここが分かりましたね？」

と言うと、サクは彼らにも吠えかかつた。

「ディックが案内してくれたんだ！ お前ら、オレを置いていくとはどういうことだよつ！」

シリウは苦笑した。

「まだ氣を失つてたので、荷物になると思いまして」「荷物つてなんだよ！」

サクは今にもシリウに噛み付く勢いだつたが、ふと我に返つてガラオルを睨んだ。

「喧嘩は後だ！ まずはこいつを倒す！」

カイルも頷いてシリウを振り払うと、剣を構えた。サクとカイル、いや、シリウも含めて三人揃えば力は何十倍にもなるだろう。その時、それまで呆然としていたヤツハが声を上げた。

「やめて！」

サクとカイルは驚いてヤツハの方を見た。 ヤツハは震えながら床にペタリと座つたままそう叫んだ。

「それはどういう事だ、ヤツハ？」

目を丸くして言うカイルに、ヤツハはそれ以上何も言えないまま俯いていたが、それを見たガラオルはまた豪快に笑つた。

「そうだな！ それがいい！」

笑い続けるガラオルに訳が分からず、ヤツハとガラオルを見比べるカイルとシリウ。 ガラオルは壁ぎわにゆっくりとにじりよつた。「ヤツハ、今回は見逃してやる！ だがな、次は確実に食うからな！ 気を付けていろよ！」

「待つて！」

ヤツハがガラオルを呼び止めた。

「本当に……本当に、あたしのお父さんなの？」

震える声で言うヤツハに、サクを始めシリウやカイルも身震いがするほど驚いた。 ガラオルは

「ちょっと違うがな。 僕様のなかにお前の父親は生きている。
確實にな」

と不敵な微笑みを残しながらその太く分厚い手で壁をポンと叩くと、同時に壁が回転し、その姿は一瞬で壁の向こうへと消えた。

「待て！ 逃げるのかつ！」

慌ててカイルが追い掛けようとしたが、すぐに壁はもとのように戻り、どんなに叩いてもピクリとも動かなかつた。

「カイル！ どいてろ！」

サクの声にカイルが壁から離れると同時に、サクの拳が壁に撃ち

付けられた。

「爆拳弾！」

幾つもの拳が弾の様に壁を攻撃し、土煙と共に瓦礫が飛び散ったが、そこには大きな穴が空いただけだった。

「なんだよ？ 向こう側に道があるんじゃないのかよ？」

サクが驚き、カイルも信じられないという表情をした。

「何らかの念が込められているんでしょう。このルートは望めないようですね」

シリウが冷静に分析すると

「くそっ！」

カイルとサクは、取り逃がした悔しさに壁を叩いた。

その時、天井から小さな石が落ち始めた。同時に壁に亀裂が生じ始めた。

「いけません！ 洞窟が崩れます！ すぐにここを出ましょー！」

「ああ！ ヤツハ！ 立てるか？」

サクは座り込んだままのヤツハを無理やり立たせ、抱えると、四人と一匹は洞窟を脱出した。

「ヤツハ！ しつかりしろ、ヤツハ！」

サクの声が森の中に響いていた。

さつきまでいた洞窟は入り口まで崩れ落ち、まだ少し土煙が漂っている。ヤツハをそっと木の根元に座らせたサクは、ずっと彼女の顔を覗き込んでいた。ヤツハの目は焦点を失い、唇には少しの震えが残っていた。その瞳はサクの顔さえ映すこともない。

「ヤツハ！ ヤツハ！」

肩を揺すつてみても、言葉ひとつ発することなく、目は開いていても意識がない状態だった。ティックもヤツハの横にぴったりとついて、潤んだ瞳で見上げている。

ヤツハを心配するサクを気にしながら、シリウは崩れ落ちた洞窟の入り口を振り返った。

「脱出する時も、それまでに倒した仲間たちの姿がありませんでしたね。ガラオルと一緒に逃げたのでしょうか……」

「ガラオル……！」

カイルは唇を噛んで悔しさをあらわにした。握る拳が震えている。シリウはそれを見ながら小さく息をつくと、眼鏡を上げた。

「もう真夜中ですし、今晚はここで野宿ですね」と言い、周りを見回した。

崖と森に囲まれ、静かな所だ。公道からもずいぶん外れた場所のようで、なるほど、ガラオルたち流族にとつては、ひと目につかない好条件な場所だ。

「ここがどこかも分からなくなってしましましたね

シリウは独り言の様に呟き、苦笑すると、荷物を広げて寝床を作つた。

「とりあえず、ヤツハを冷やさないようにしないこと……」

手際よく小枝を集めて山を作り、火を起した。この旅で、こうすることにもだいぶ慣れた。

サクが座った。ディックも、火が怖いはずなのに、ヤツハがよほど心配なのだろう、火を気にしながら彼女の傍に寄つた。

「あれ、カイルは……？」

シリウはカイルが居ないことに気付き、立ち上がつた。

「ちょっと探してきますね」

ヤツハは勿論、サクからも返事はなく、ヤツハを見つめ続けるサクを確かめて、シリウはその場を離れた。

「ヤツハ……オレは一体、どうしたらいいんだよ……？」

サクは悔しさと苦悩で声を震わせ、空を見上げた。憎らしいほどに綺麗な夜空の下、二人を静けさが包んだ。ディックも切ない声を出してヤツハを見つめていた。

「……」「居たんですね？」

シリウの声に驚き振り向いたカイルは、皆から少し離れた木の幹に座つて何かしていた。

「やつぱり……」

シリウが近づこうとするが、カイルは慌てて拒んだ。

「俺のことは心配ない！ ヤツハに、付いててやれよ！」

「そういう訳にはいきませんよ。それに、ヤツハにはサクが付いているから、大丈夫です」

そう言い、カイルの足元にある白い布を取つた。暗がりだったが、カイルの腰の辺りが赤く腫れているのが分かる。「ガラオルにやられた所ですね？」

胸下まで衣服をまくり、あらわになっている患部に触れようとするシリウに、カイルは慌てて衣服を戻してシリウを睨んだ。

「自分でやる！」

赤い顔で言うカイルに優しく微笑み、シリウは柔らかい口調で言

つた。

「僕は医武道も畠つているので、心配いりませんよ。怪我の手当でなら、頭に入っていますから」

「いや、そうじゃなくて！」

カイルは頬を赤らめたまま視線を反らせた。シリウは、ああ、という表情をした。

「変なこともしませんから」

「当たり前だつ！」

叫んだ拍子に、カイルの体が痛みに震え、つづくまたた。

「ほら！ 無理しないで。薬草はもう用意してあるんですね？」
布と一緒にいくつかの薬草が並び、その中からいくつかを選んで取ると、手際よく潰して白い布に塗った。

「さあ、患部を出して」

シリウの言葉に一瞬躊躇したカイルだが、黙つて微笑みながら見つめるシリウに、やがてゆっくりと衣服を上げた。

「つ！」

布が当たると小さくうめき声を上げたが、唇を噛んで我慢していた。そして、静かにシリウの治療を受けた。細い腰が白い布で巻かれしていく。シリウの手際は良く、手馴れたものだった。よほど練習もしてきたのだろう。さすがに学校一を謳われるほどどの実力者だ。

やがて治療が終わると、カイルはまだ赤い頬で礼を言った。

「ありがとう……」

シリウはニーチ「コリと微笑んだ。

「まだ無理をしてはいけませんよ」

「それより、シリウの腕の方はどうなんだ？」

カイルが、ラディンに痛めつけられたシリウの左肘を気にすると

「そうですね、念のため、手当てしておきましょうか……」
と残っている白い布を手に取つた。

「俺が、やってやる」

一言呴いて、カイルがその手から布を取り、薬草を手早くすり潰すと、シリウに肘を出すように促した。ゆっくりと差し出されたソレは赤く腫れ、熱を持っていた。

「少しひどいな…… 鞄帯までいつてるかもしない……」

眉をよせるカイルだったが、シリウの顔があまりにも無表情だつたので

「シリウ、痛くないのか？」

と尋ねると

「痛いです。どうも僕は、弱味を見せるのが嫌いなんですね」と苦笑した。カイルは少し笑つた。その気持ちは、カイルにも理解できるものだつたからだ。とりあえず応急処置だけをして、動きを制限しない程度に包帯を巻いた。

「カイル」

と言つシリウにその顔を見ると、シリウはこゝも、と、自分の頬のキズを指差していた。

「つー」

少し顔を赤らめて、カイルはその頬に薬草を塗つた。シリウは「ありがとうございます」と嬉しそうに微笑んだ。

「ヤツハの具合は、どう?」

道具を片付けながらカイルが尋ねると、シリウは少し顔を曇らせた。

「まだ何も反応は無い状態です。医者に診せるにも、原因が原因ですからねえ……」

「ガラオルがヤツハの父親ってのは……本当なんだろつか……？」
カイルは呴いた。シリウはしばらく黙つていたが、気持ちを振り切るように微笑みを見せた。一人だけで考えていても答えは見つからない。なにしろ

「本当に、あたしのお父さんなの?」

そのたつた一言だけを聞いただけなのだから。

「とにかく、二人の所に戻りましょうか」

カイルとシリウは、立ち上がった。

ヤツハは相変わらず、俯いたままで黙り込んでいた。

「どうですか？」

シリウがそつとサクに尋ねると、彼は無言で首を横に振った。

「そうですか……」

とため息をつく後ろで、カイルの顔も険しかった。

「一体、ヤツハは何を聞いたのでしょうか？　僕たちは断片的にしか聞いていない」

「ガラオルがヤツハの父親だって、ことか？」

サクの言葉に、シリウとカイルが頷いた。　サクはヤツハの憔悴仕切つた姿を見つめた。

「オレは信じねえ。　あんな奴がヤツハの父親だなんて、そんなわけねえ！」

サクは眉を寄せた。

「僕たちもそう信じていますが……ガラオルが言った『俺様の中にお前の父親が生きている』という言葉が、どうも気になります」

「一体どういうことなんだよ？　全然わからんねえ！」

苛立ちながらサクが叫ぶように言った。このモヤモヤした気持ちをどこにぶつけたらいいのか分からるのは、三人とも同じだった。

「あいつは、人を喰うんだ」

突然の声に、三人は驚いて辺りを見渡した。サクは立ち上がり、ヤツハを守るように構えた。ディックが一方に向かつて吠えだした。

「！お前はっ！」

少し離れた木にもたれるように立ち、四人を見ている人影は、ラディンだった。

ラティンの助言

「お前！ 何しに来たつ！」

カイルが叫び剣を構えると、シリウも同じように身構えた。

「ちょ、ちょっと待てつて！ 僕は戦つ氣はねえよー。」

困惑した表情で両手を上げて、待てよと仕草をするラティン。

「では、何か用事でも？」

シリウが構えを解かずに尋ねた。 その目は冷静さながらである。

「ガラオルの秘密を教えようと思つてさー。」

飘々と言つラティンに、三人は戸惑いを隠せなかつた。

「どういうことだよ？」

サクが疑いの目で見つめながら尋ねた。 ラティンは腰に手をあてて言つた。

「ガラオルは女好きで有名だ。 ちょっと気に入つた女なら誰でもいい。 食るようにその体を楽しむ。 だが、それだけじゃない。 アイツは、何十年かに一度、男を喰らうんだ」

「男を喰うだつて？」

サクが怪訝な顔をした。 ラティンは頷いた。

「俺は実際に見たことはないけどよ、仲間がそう言つてたのを聞いたことがある。 長くガラオルに付いてた奴らにどつては、有名な話だ。 ガラオルは定期的に健康で頭の良さそうな男をさらう、喰うんだと」

「なんだよそれ……？」

サクたちは動搖していた。 人が人を食べるなんて考えられない。 言葉が出ないままでいるサクたちに、ラティンはこれ見よがしにヤツハを見ながら、思い出したように言つた。

「そう言えば、たまに頭を抱えてた時があつたなあ。 『つぜえ。 頭の中にあいつの精神がまだ生きてる』って。 でもすぐに治るみ

たいだつたけどな

シリウは眼鏡を上げてラディンを見つめた。構えも解いたが、

まだその田は警戒していた。

「その話は、信じても良いのですね？」

「ラディンは肩をすくめて笑った。

「俺はもうガラオルの所には戻れねえ。だから今の俺は自由なのよ。何言つたところで、誰に咎められることもねえ。ま、信じてもらおうとも思つちゃいねえけどなー！」

「信じてもいいのね？」

全員がヤツハを見た。ヤツハはじつとラディンを見つめていた。

「あたしのお父さんは、あいつに喰われたのだと？」

「ヤツハ！」

シリウは驚いて駆け寄った。

「そんなこと……」

「いいえ。あいつそのものが父親だなんて、信じられないもの……もしそうなら、あたしは舌を噛み切つて死ぬ！でも、もしラディンの言つ通り、あいつの中にお父さんが生きているとしたら、あたしがしなくちゃならない」とは一つよ！」

ヤツハの瞳に光が宿った。それを見て、サクがラディンを見た。

「お前の言つたこと、本当に信じるぞー！」

ラディンはにっこり笑つた。

「じ自由に」

まるで他人事のような口振りのラディンに少し苛立ちながら、カイルが口を開いた。

「ヤツハの父親の精神が身体の中に残つているところのなら、その精神をガラオルから離すことは出来るのか？」

「僕も同じ事を考えていました。ヤツハもでしょ？」

シリウが言つと、ヤツハは頷いた。

「あたし、お父さんを助けなきや！」

答えを仰ぐシリウたちに、ラディンは眉をしかめて首を傾げた。

「生憎だけど、その方法は知らねえ」

「そうか……」

カイルは悔しそうな表情で俯いた。

「だけど、必ず方法はあるはずだ。 ガラオルからヤツハの父親を離して、俺はあいつを必ず倒す！」

強い口調で言いながら、カイルの両拳がぐつと握られた。

「？」

まだ事情の分からぬサクとヤツハは、ガラオルにやつきになつてゐるカイルを不思議に思いながら、二人で顔を見合せた。 それに気が付いたシリウが、重い口を開いた。

「ガラオルは、カイルの仇なんです。 カイルは、育ての親を殺されたんです」

「！ カイル……」

複雑な感情に襲われて、潤んだ目で見るヤツハに、カイルは少しの微笑みを返し、静かに言った。

「大丈夫。 まずヤツハの父親を助けてから。 それが先決だ」
シリウはそんなカイルを見て、安心したように顔をゆるませた。
「では、朝までは体を休めて、明日、作戦会議をしましょう！」
するとヤツハが座り直して言った。

「そんな余裕はないわ！ あたしは大丈夫！」

「オレもだ！」

「俺も同じだ！」

サクとカイルも円陣のように座り直した。 それを見たシリウは微笑み、実は自分も、と皆と同じように座り直した。 ヤツハの隣には、ちゃつかりとティックも座っている。 もうすっかり仲間の一員だ。

「では、とりあえずやらなくてはならないことを挙げましよう」
シリウが言い、皆が耳を傾け始めると、ラティンはいつの間にか居なくなっていた。

やがて眠らずに夜が明けた。崖の上から周りを見ていたシリウが器用に岩場を伝い飛びながら戻ってきた。

「どうやらここは、サツフル村の近くのようです」

地図を片手に、外していた眼鏡を掛け直しながらシリウが言った。するとその途端、サクとヤツハが顔を見合せた。

「オレたちの故郷だ！」

意外に知っている場所だったので、一人は半ば拍子抜けしていた。まさか自分の故郷の近くで事件が起っていたとは思ってもいかつたのだ。

「じゃあ、サツフル村に行つてみましょうか？ 何か情報も手に入るかもしれませんし」

四人は同意し、早速サツフル村へと足を運んだ。

サツフウル村の豪快かあちゃん

「うわあ！ 懐かしいなあ！」

「ホント！ 何年ぶりかしら？」

目を輝かせて村に入ったサクとヤツハの後ろ姿を見ながら、ついていくシリウとカイルは顔を見合させて微笑んだ。

サツフウル村は、牧場や果樹園が広がるのどかで穏やかな雰囲気に包まれ、とても近くに惨悪な流族が巢食っていたとは信じがたいものだった。点々と建つ木製の家や、細く長い道が続く村の風景が、サクとヤツハにはとても懐かしいものだった。なにしろ、ソラール兵士養成学校に入学してから数年、一度も帰省していないのだ。

「サク！」

「ヤツハ！」

外で作業していた村人たちが、すぐに一人に気付いて近寄ってきた。

「もう帰ってきたのか？」

「ヤツハちゃん、大きくなつたわね！」

口々に言いながらサクとヤツハを囲む村人たち。次々に声を掛けられ、「人はしじるもどろになつていた」やがてその中心から大手を振つてサクがシリウたちを呼んだ。すると、カイルの傍らに立つディックを見た一人の男が

「ディンゴだ！」

とひどく驚いた。無理もない。成長すれば、体長三メートルを超すまでになるディンゴは、その凶暴な性格もあって、武器を持たない普通の人々にとつては害のある敵でしかないのだ。恐れて後退りをする村人たちに、ヤツハが説得した。

「大丈夫よ。ディックはあたしたちの仲間なの。とても優しい子よ！」

ヤツハに手招きをされたディックは、軽い足取りでヤツハに駆け寄つた。途端にヤツハたちを囲む輪が大きくなり、怪訝な村人たちの視線が注がれたその中心で、ヤツハとディックは仲良く寄り添つた。

「こいつ、賢いやつだから、森にいる奴らみたいに無闇に襲つたりしないんだ！」

サクが言うと、ヤツハはきょとんとした顔で言つた。

「あれ、サク、犬が苦手じゃなかつたの？」

「そんなことあつたつけ？」

と頭をかきむしりながらとぼけるサクに、シリウが笑つた。そ

れに気付いたサクが、二人を村人たちに紹介した。

「シリウとカイル！ オレたちの仲間だ！」

「よろしく」

軽くお辞儀をして微笑む一人に、村人たちの反応も良かつた。二人とも賢そうな雰囲気で、信用できると思ったのだろう。

「サク！」

突然大きな声が場の空氣を引き裂いた。

「か……母ちゃん！」

サクは一瞬怯えたように体を震わせた。村人たちの間を押しのけるように、恰幅の良い女性が現れた。彼女はサクの顔を見た途端に

「帰つて来るなら来るで、連絡くらいよこしな！」

と言いながらげんこつを作り、サクの頭を勢いよく叩いた。

「痛つてえ～～！」

大きな乾いた音と共に、サクの悲鳴が響いた。

「懐かしいなあ、このやりとり！」

村人が笑いながら話した。

「サクが出ていつてから、パンナさん、どこか元気なかつたんだよな！」

「そうそう。子供たちが悪さをしても、前みたいに激しく怒つたりしなくなつたしな！」

「そ、そんなことないよー。さあ皆、うちに休んでいきなー。疲れただろう？」「うう？」

はぐらかしながら言うサクの母パンナの後をついて、四人と一匹はサクの家へと向かつた。

サクの家は木で出来た簡素なもので、必要なものしかないような、シンプルな内装をしていた。村の様子から、どこの家もこんな感じなのだろう。外では、すっかり仲良くなつたディックと村の子供たちが走り回つていた。

「何にもないけど、とりあえずこれを飲んで。今日はゆっくりしていけるんだろ？」

パンナがそれぞれに温かいミルクを渡した。白く揺れる水面から、優しい湯気が立つてゐる。一口飲むと、なんとも優しい甘味が心まで潤すようだつた。三人がホッとしている横で

「オレ、これ嫌いなんだよー！」

眉を寄せてあからさまに嫌がるサク。

「あんたは昔から好き嫌いが多かつたからねー。だから背が伸びないんだよー！」

「関係ねえよ！ ちゃんと肉とかたくさん食うぞー！」

「肉ばっかりじゃなくて、何でもバランス良く食べるんだよー！」

そんなやり取りを、半ば呆れながら見ているシリウたち。ヤツハも笑いながら一人を見ている。ヤツハにとつては、これも懐かしい風景だつた。

「ねえパンナおばさん、ザクラスおじさんはどこに行つてるの？」

パンナと共に食事の準備をしながら、ヤツハが尋ねた。ザクラ

スとは、サクの父親だ。

もうすぐ夕食時だというのに、ザクラス

は姿を現さない。パンナは食事の用意をしながら答えた。

「父ちゃんは、今ちょっと村の外に出かけてるんだよ。明日にでも戻ってくると思うけどね」

パンナは明るく言つて、こんなに大人数分の食事を作るのは久し

ぶりだと、嬉しそうに腕を奮つた。

その夜は、サクの家に泊まることにした。

一つの部屋に雑魚寝することにしたサクたちは、久しぶりに屋根のある場所で安心できる眠りを約束された。

やがて皆が寝静まつた頃、カイルがふと目を覚ますと、ヤツハが皆を起こさないように布団から出て、外に出ていくのを目撃した。

「？」

気になつたカイルは、自分もそつと布団から抜け出して後を追つた。

隣のサクは、気付くことなく大きな寝息をたてている。久しぶりの自宅に、すっかり心が落ち着いているようだ。

シリウは村の長に用があると言つてまだ帰つてきていない。話に盛り上がり、一泊することになつたのかもしれない。

カイルはヤツハに気付かれないように物陰に隠れながら、彼女の後を付けて行つた。外灯などない。月明かりにぼんやりと照らされた道を、ヤツハは慣れた足取りで歩いていく。

やがてヤツハは、一軒の家の前で立ち止まつた。木製の小さな一軒家はカーテンもなく、中は暗く、誰も住んでいないようだつた。ヤツハはその家の前で、入ろうともせず、立つたままじっと見つめていた。それを見守るカイル。

その時、人影がヤツハに近づいた。

「ヤツハちゃん、ここだと思ったよ」

それはサクの母親、パンナだった。

寝巻に上着を羽織つたまま

で、パンナはヤツハに微笑んだ。

「おばさん……」

「何も隠れて来ることはないんだよ。」

「なんだから」「ほれ、ヤツハちゃんの家

村の外にあるこの小さな一軒家は、ヤツハが育つたところだつたのだ。ヤツハは俯いた。

「でも……あたし、ここにはもう帰つてこないつもりで……」

パンナはヤツハの肩を軽く叩いて通り過ぎると、家の扉の前に立つた。そして懐を探り、一本の鍵を取り出した。

「なに言つてんだい。思い出がたくさん詰まつたこの家を、なんで捨てようとするんだい？」

パンナは鍵を回して扉を開けると、ヤツハに振り向いた。

「さあ、入りなよ。」

パンナに促され、ヤツハは最初躊躇したが、ゆっくりと歩を進めた。

「あんたも隠れてないで、おいで！」

ヤツハは、自分の後方に向かつて声をかけたパンナに驚いて振り向いた。すると、木の陰からカイルの姿が現れた。

「カイル……？」

「心配して、来てくれたんだろう？」

パンナは優しく声をかけてカイルを呼び込んだ。カイルは照れたように小さく頷くと、おとなしくヤツハと共に家のなかに入った。

家の中は、必要なものしか置いていないシンプルなものだった。生活の匂いは無いが、ホコリもほとんど無い。見回すヤツハは

「変わつてない……」

と驚いた顔で言った。

「たまに来では掃除をしてるだけだよ。他には何も触っちゃいな

い」

ヤツハとカイルは、パンナを挟むようにベッドに座った。目の

前の窓から、月明かりに照らされた草原が見える。外は穏やかな風が吹き、静かだ。

「ヤツハちゃん、あたしはね、いつでも帰ってきていいと思ってるんだよ！」

「おばさん……」

「あんたの母親はね、いつもあんたのことを心配してた。自分が病に冒された時も、最期まで、あんたを思つてた」

パンナの脳裏に、ヤツハの母親が言つた言葉がよぎつた。

『ヤツハに、父親を会わせてはいけない……』

だがパンナは、ずっとそれを伝えずに来た。言つたら、ヤツハは自分の父親がまだ生きていることを知り、会いたいと思うだろう。それだけは出来ない。なぜなら、ヤツハの父親は……。それは、ヤツハの母親と、古くからの友人であつたパンナしか知らない事のはずだった。

「だけど、あんたは父親を探すと言いだしてしまつた……」

ヤツハは俯いた。

「そりゃあ、誰だつて、自分の親に会いたいと思つるのは普通だろう。だけどね、ヤツハちゃん」

「知つてる

「え？」

パンナは、耳を疑い聞き返した。

「な、何を知つてるつていうんだい？」

パンナは動搖を隠しきれないのでいた。

ヤツハは少し微笑んでみせた。

「あたし、自分の父親がどうなつたのか、知つてるの。今は、もう一度会つて、真相を確かめたいと思ってる……」

ヤツハを見つめるカイルの表情が固くなつた。カイルもまた、自分の仇と思う相手が仲間の父親と知つて、複雑な心境なのだ。

パンナは大きなため息をついた。

「……そうだつたのかい……すまなかつたねえ」

申し訳なさそうに言うパンナにヤツハは首を振り、微笑んでみせた。

「おばさんの気持ちは分かるから」

ヤツハの気丈な笑みに、パンナはホッとしたように微笑んだ。そしておもむろにカイルの方を向いた。

新しいお母さん

「な、何ですか？」
いきなり見つめられて戸惑うカイルに、パンナは少し強い口調で
言った。

「あんた！」

「？ 僕？」

たじろぐカイルに、パンナは少し睨みながらパンパンに膨れた頬
をした顔を近付けた。

「パンナおばさん？ カイルが、どうかしたの？」

ヤツハがパンナの大きな肩口から覗くように言いつと、パンナは目
線をカイルに定めたまま言つた。

「ヤツハも気付いてるんだわつ？」

「あたし？」

「カイル、あんた、そのまま隠し続けるつもりなのかい？」

大きな丸い目で見つめられ、カイルは言葉を失つた。パンナは
もう睨んではいない。優しく深い瞳に吸い込まれそうになつた。
「あたしは、あんたに何があつたのか、あれこれ聞くつもりはない
よ。ただ、自分を押し殺すのはしちゃいけない。いずれ、自分
が壊れる日が来るよ」

カイルは視線を外せないでいた。得体の知れない不安感に襲わ
れ、何か言わなくてはと思いながらも、何の言葉も出てこない。
カイルは、からうじてかされた声を出した。

「僕……は……」

「『僕』じゃないだろ？」

眉をしかめ、息を吐いて呆れたように肩をすぼめたパンナの後ろ

から、ヤツハがそっと口を挟んだ。

「カイル、もしかして本当は、女の子なんじゃない？」

「えっ！」

カイルは飛び上がるよつに立ち上ると、窓辺へと後ずさりをした。

「な……なんで……？」

二人に見つめられ、立ち去くすカイル。 ヤツハは優しく微笑んだ。

「なんとなく。 一番最初に握手した時、『あ、これ、男の子の手じゃないな』って思ったの。 シリウとの事は、最初は誤解しちゃつたけど、そのうち、もしかしてって」

「あ……ああ……」

カイルは俯いた。

そう言えば、初めてヤツハと握手した時、彼女の反応が少しおかしかったのを思い出した。 だがすぐになんでもないように振る舞い、接してきたので、いつの間にか忘れてしまっていたのだ。

「もしかして、シリウももう知ってるんじゃない？」

ヤツハの優しい問いに、カイルは小さく頷いた。

「辛かつたろ？」

「！」

カイルは思いがけない言葉に、思わずパンナの顔を見た。 そこには、すべてを包み込んでくれそうな笑顔があった。

懐かしい……。

カイルがずっと閉ざしてきた心に蘇る、過去の温もり。

全てが楽しくて希望に満ちていて、温かかった日々。 ふざけあえるオッカやカゲがいた。 そして、厳しくも優しく見守ってくれていたマチの笑顔が、いつもそこにあった。

パンナはヤツハの肩を抱き、カイルを見つめながら言った。

「あんたたちは、強くなりすぎた。どんなに強くても、所詮は女だ。時には弱音を見せなきや、息が詰まっちゃうよ？ なんといつても、あんたたちは、素敵な仲間がいるじゃないか！」

「…」

「……っ」

途端に、カイルとヤツハは息が詰まつた。そして、今まで押されてきたものが一気に溢れだした。

パンナは立ち尽くしたまま声もなく涙を流すカイルを自分の脇に座らせ、ヤツハとカイルの肩を引き寄せて抱き締めた。二人共が大粒の涙を流しながら、パンナの温もりの中で、開放された喜びを噛み締めていた。

「いつでも帰つておいで。あたしが、あんたたちの母親になつてやるからさ」

パンナは一人の頭をポンポンと優しく叩きながら、優しい笑みで、泣きじやぐる一人をただ黙つて抱き締めていた。

しばらくして、緩やかにゆづやくの灯りが部屋を灯すなか、ヤツハとカイルは落ち着きを取り戻した。そして顔を見合わせると、お互に照れ笑いをした。

「もう、これで、隠し事は無しょ！」

からかうように言うヤツハに、カイルは

「サクにも言わなきゃね」

と苦笑した。すると

「ああ、あの子には言わなくていいよ！」

と年配の女性特有の、手振りをしながらパンナが言った。

「面白そだだから、しばらくは黙つてなよ。その代わり、真相が分かつた時、あの子がどんな反応したか、教えてよ！」

片目をつぶつて微笑むパンナに、二人は笑つた。

「そうね、サクのことだから、すゞぐびつくりしそうだわ！ 思い込みの激しい子だから！」

ヤツハも楽しそうな口調で話し、カイルも含み笑いをしながら頷いた。

月明かりがぼんやりと照らす道を三人が並んでサクの家へ歩きながら、カイルが呟くように言った。

「俺の本当の名前、『カミィル』って言つんだ」

ヤツハは目を輝かせた。

「素敵な名前！ 勿体ないわよ！ シリウは名前ももう、知つてるので？」

カイルは頷いた。

「名前も、どうしてガラオルを追つているのかも。 シリウには、何も隠せなかつた」

「あんたまさか、親の仇を打とうとでも思つてるんじゃないかい？」パンナは強い口調で言つた。

「あたしは反対だよ！ かたき討ちなんて古くさい！ それに、自分の娘が怪我をするなんて、考えただけでも寒氣がするよ！ 全く！ バカなことを考えるんじゃないよ！」

そして、その丸っこい手を握ると、容赦なくカイルの頭を叩いた。

「つ！ 痛いよ！」

眉を寄せて頭を押さえるカイル。 だが、内心は嬉しさを感じていた。 マチにもよく悪さをして怒鳴られ、叩かれたものだ。

「パンナおばさん、あたしたち仲間だもん！ きっと良い方法を見つけて、願いは叶えてみせる！」

ヤツハが拳を握つて微笑んだ。 パンナは困った顔をして、ため息をついた。

「カイル、行こう！」

ヤツハはカイルの腕を取ると、まるで恋人同士のように寄り添つてパンナの先を歩いた。

「こら、お前たち！」

困惑した口調のパンナには振り向かず、一人は笑いながら歩いていく。

「じゃ、シリウはあなたに譲るわ！」

笑うヤツハに、カイルは顔を赤らめた。

「そ、そんなんじやないって！ それに、ヤツハだってシリウの事、好きだつたんじゃないのか？」

するとヤツハは少し頬を赤らめた。

「そりゃあ、確かにシリウはカッコいいし、頭もいいし、申し分ない人よ。でも、一番安心して傍に居られるのはサクだけ……」

「ヤツハ……？」

「言いたいことも、サクなら何故かラクに言えるしね！」

ヤツハは照れ臭そうに笑い、急ぎ足になつた。

「そうか、ヤツハは最初からサクの傍にいたいから……」

「もういいからっ！」

カイルは照れるヤツハに引っ張られるように歩いた。パンナは、その後ろ姿を見守るように微笑みながら歩き、呟いた。

「手の掛かる娘が増えたね」

月明かりが、煌々と辺りを照らしている。気持ちの良い夜道だつた。カイルとヤツハの心も、まるで靄が晴れたようにすっきりしていた。

やがてサクの家に近づくと、その辺りが何やら騒がしい様子が見えた。

「何だるう？」

カイルとヤツハは胸騒ぎがして、思わず走りだした。家の前に人だかりが出来、村人たちの手には松明が握られている。

「どうかしたんですか？」

ヤツハが息せき切つて声をかけると、村人たちの中からシリウが現れた。

「カイル、ヤツハ！ 一体どこに行つてたんですか？ パンナさんまで居なくなつてるんですね！」

珍しく慌てた様子で一人に駆け寄るシリウからは、切羽詰まつた雰囲気が感じられた。 カイルは後ろから巨体を揺らして走つてくるパンナを指差した。

「パンナさんはあそこに……一体何があつたんだ？」

シリウは、近づいてくるパンナを見つめながら固い表情をした。

「？」

カイルとヤツハは不思議そうに顔を見合せた。

サクの父誘拐さる！そりゃ助けに行くでしょ！！

やつと追い付いたパンナが膝に手を付けて息を整えていると、その視界に細い足首が映った。小さい体に曲がった腰、杖を付いたその老人は、村長の印である羊の足のペンドントをぶら下げていた。

「ワンドさん？」

氣付いたパンナが汗だくの顔を上げると、村長ワンドは固い表情で言った。

「パンナさん、氣をしつかり持つて聞きなさい」

ワンドは息を洩らしながらゆっくりと話した。

「ザクラスさんが、行方不明になつた……」

「なんだつて？」

パンナは驚いて大きな目をさらに丸くした。

「あの人自身に、何かあつたのかい？」

すると村長の後ろから、村人に肩を借りながら怪我だらけの一人の男がヨタヨタと現れた。

「パンナさん、すまねえ……ザクラスさんが、ガラオルの手下野郎にさらわれちまつた！」

「！」

カイルとヤツハに、衝撃が走った。パンナはショックで何も言えずに立ち尽くしていた。

「行くぞ！」

皆がその声がした方を向くと、いつの間にかサクが立っていた。全身から燃えるようなオーラを放っている。その瞳は輝き、怒りが溢れだしていた。

「ヤツハだけじゃ飽き足らず、オレの父ちゃんにまで手を出すとは！ 絶対許さねえ！」

勢いよく両拳を打ち合せると、気が辺りに放たれた。シリウも黙つて頷いた。

「本当に、許すまじ行為です！」

「俺も行く！」

カイルがサクとシリウのもとに歩み寄った。身体中から気合いで溢れている。

「あたしも！」

ヤツハが言うと、カイルは手を挙げて彼女を制した。

「ヤツハは、パンナさんの傍に居てあげるんだ！ ヤツハにしか出来ないことだから！」

ヤツハはゆっくりとパンナを振り向いた。焦点が定まらない目で、小刻みに震えながら立ち去くパンナ。ヤツハはどちらも選べない自分に切なくなり、悲痛な表情でカイルを見た。

「でも……！」

「ヤツハ、頼む！」

カイルは、黒い瞳でじっとヤツハを見つめた。カイルの瞳から思いを受け取ったヤツハは、唇を噛み締めて頷いた。安心したよううに微笑むカイルに、ヤツハは駆け寄つた。

「必ず、無事で帰ってきて！」

カイルは安心させるように、ヤツハの肩を抱いて頷いた。

「分かってる。もう、パンナさんを心配させたりしないから！ サクもヤツハに強い言葉を掛けた。

「必ず父ちゃんを助けて帰つてくるから！ 信じて待つてろよ！ ディックも留守番頼んだぞ！」

ヤツハに寄り添いひと吠えしたディックを見てにっこり笑い、サクは踵を返した。手には、それぞれの武器を持っている。心には、ガラオルへの熱い闘志をみなぎらせながら、村人たちに見守られながら出かけていった。

「シリウ、案内頼む！」

暗やみの林の中を風のように走るサクが言つと、シリウが頷いて一步前を走つた。 カイルもその後に続いた。

「命からがら帰つて来たトモトさんの話によれば、裏山の中腹辺りでガラオルたちと遭遇したようです。 昼間の、僕たちが起こした落盤を見に行つていたようです」

「オレたちの性じやないだろ？ 勝手に崩れたんだ！」

「どちらにしろ、聞いた場所に行つてみるんだ！ 何か手がかりがあるかもしれない！」

カイルが言うと、サクとシリウは頷いて走るスピードを増した。

「ひどいな……」

程なく付いた場所には、傷だらけの木々と血痕が残つていた。

「かなり、やりあつたみたいですね」

「そうまでして、ザクラスさんをさらつたかった理由つて、なんなんだ？」

顔をしかめて周りを見るカイルに、シリウは呟くように言つた。
「喰つため……じゃないでしょつか？」

「！」

サクが睨むようにシリウを見た。 それを受け止めながら、シリウは自分の見解を静かに話しあじめた。

「今、ガラオルの中には、ヤツハの父親の精神が残つている。 ラディンの話に

よれば、ガラオルにとつて、それがストレスになつっていたようです。 だとすれば、違う誰かを喰らえば、上書きされるようにヤツハの父親が消えるかもしれないと考えてもおかしくはない」「そんな単純なものかな？」

カイルが言つた。 だが、今まで人を喰つてきたキャリアから得

たものもあるのかもしない。世の中には、常識では計り知れない、分からぬことがたくさんあるのだ。その時、ずっとシリウを睨むように見つめていたサクが呟くように言った。

「オレの父ちゃんが喰われれば、ヤツハの父ちゃんは助かるのか？」

「サク！ 何言つてんだ！」

カイルが驚いてサクを見た。サクは複雑な顔で視線を背けた。

「サクの父親も、ヤツハの父親も、助けてます！」

シリウが叫んだ。

「何人たりとも、犠牲者を出してはいけません！」

サクはシリウを見つめ、苦笑した。

「そうだな！」

「何をモタモタしてんだよ？」

「！」

三人の前に、ラティンがどこからか現れた。

「ラティン！ てめえ、何しに来た？」

サクが臨戦態勢を取ると、ラティンは

「んな場合じゃねえだろ！ お前の相手は俺じゃねえはずだ！」と一喝した。

「そうですよ、ラティンは昨日も僕たちに助言をしてくれました。もう、敵対する理由はないと私は」

と、シリウもサクの肩を押された。ラティンはやつと分かつたか、という風に肩をすくめた。

「ガラオルの居場所を知ってるのか？」

カイルが聞くと、ラティンは頷いて林の方を指差した。

「案内する！ 急げ、時間がない！」

言つが早いが、ラティンは風のように走りだし、三人も後を追つた。

どこかで訓練を受けていたのか、ラティンの身体能力は高い。シリウは自分で戦つて知っているし、カイルはその一部始終を見ている。サクもまた、ラティンに助けられた。特殊な技も持つて

いるようだ。まだ謎だらけの人物だが、瞳には嘘をつかないまつすぐな輝きがあつた。今の三人には、彼を信じるしか道はなかつた。

蛇のような男、ガング登場！

「ちょっと待てやあっ！」

突然、人影が四人の前に立ちふさがった。

「！」

足止めを食らつたサクは、そのままの勢いで拳を振りかぶつた。

「どけええっ！」

だがその人影は軽がると避けると、木の枝に飛び乗つた。

「ガラオル様は、今から崇高な食事をなさるんだ。 その邪魔をするのなら、ここで倒れてもらう！」

すっぽりとかぶつたフードで顔は分からぬが、その声は若い男のものだった。

「何を言つてんだ！ お前なんかの相手をしている暇はねえんだ！」

サクは、木の枝に器用にしゃがんで見下ろす男に噛み付くように吠えた。 するとラディンがサクの肩に手を置いた。

「ここは俺に任せてくれ！ あんたたちは先を急げ！ ここを真つ直ぐ行けば、ガラオルのアジトがある…」

「お前……！」

驚くサクにラディンは頷き、シリウを見た。

「急げ！ 時間がない！」

シリウは

「分かりました！ ここはあなたに任せます！ さあ、サク、カイル、行きましょう！」

呼ばれた一人は、後ろ髪をひかれるようにラディンを見やりながら林の中を案内された方へ走りだした。

「おっ！ 逃がさないよ！」

男が素早く動き、手のひらを広げた。

「紅糸千波！」

手のひらから無数の細糸の束が放たれ、三人の背中を襲つた。

「そうはいくかよ！」

ラディンが助走をつけて三人に襲い掛かる細糸束に突っ込んで行つた。

「ぐつ！」

体をねじつて巻き取ると、勢いをなくした細糸は地面へと力なく落ちた。

「邪魔をするなよ、ラディンさんよお！仲間じゃないか！」

苛立ちながら言つ男に、ラディンは睨みをきかせた。

「あいつらには、借りがあるんだよ！ それにもうお前らの仲間じやねえ！ ガンク！ お前の相手は俺だ！」

「うぜえ……何があつたか知らねえけど、いつの間にか裏切りやがつて……」

ガンクは睨むように見下ろした。そして音もなくラディンの前に降り立つと、その脇に蹴を入れた。

「ぐあつ！」

「その体じやあ、動きたくても動けねえだろ？ そのまま寝ながら息絶える！」

吹つ飛ばされて転がるラディンの体半分はさつきの細糸に巻かれ、右腕が体にピッタリと縛られた形になつっていた。

「なりふり構わずに他人を助けようとするから、自滅するんだよ！」
と言いながら駆け寄り、再び蹴ろうとするガンクの足をナイフがかすつた。

「！」

慌てて避けたガンクが振り向くと、カイルが立つていた。

「ちつ！ お前はいつも俺の邪魔をする……」

ガンクは不機嫌な口調で言いながら、無造作にフードを取つた。

ガンクの顔が、あらわになつた。

カツと見開かれた瞳は薄い灰色で、まるでとかげのように長い舌を出していた。それを見た途端、カイルは驚きの声を上げた。

「あっ！ お前！」

「知ってるのか？ カイル？」

木の根元に転がつて呻きながら言つラディンに、カイルが頷いた。「同じ養成学校にいた奴だ。試験に落ちて退学したって聞いたが……」

「あんなとこに居なくとも、俺の実力はこうして認められるんだ！ 丁度よかつた！ 悠々とトップを走っていた優等生さんを、ここで倒せるなんてな！」

楽しげに口元を歪ませ、長い舌を漂わせた。カイルは嫌悪感丸出しで顔をしかめたが、すぐに手にしていた剣を構えた。

「力を試したいなら、もつと違う方法があつただろう？ ガラオルなんかに手を貸して、良いことなんて何もないぞ！」

「お前には分かんねえよ！ 学校を追い出されて、国にも帰れず、行くところもないまま、さ迷つてた俺の気持ちなんてな！」

苛立ちを憎しみに代えるように、ガンクはカイルに襲い掛かつた。

『速い！』

カイルはガンクの素早さに驚きながらも、襲つてくる両手のナイフを避けながら彼の様子を見た。カイルはいつも、初めて戦う相手を分析する。しばらく様子を見て、弱点を見つけてから攻撃に反映させる。【静武道】の基本的な戦い方だ。

『速いだけか……』

すぐに分析したカイルはふわっと舞い上がり、木の枝に飛び乗ろうとした。

「ばあか！ 飛んでる間は無防備なんだよ！」

ガンクはそう言つと、手のひらを広げた。そこから再び細糸の

束が吹き出し、宙を舞うカイルの体を襲う。

「カイル、あぶねえっ！」

ラディンは転がつて身動きできないまま、悔しげに叫んだ。糸の束は剣を持つカイルの腕に絡み付き、その体は木の枝を通り越して向こう側に着地した。カイルの右腕は吊られた格好になり、ガンクは笑いながら長い舌を出した。
「そらみろ！ もうお前はなぶり殺し決定だな！」
そう言つて笑うガンク。カイルは右腕と共に固定されてしまつた剣を振つて切り離そうとしたが、何故か切つ先は糸の束を滑るばかり。

『切れないのか？』

カイルの気持ちを読んだように、ガンクはにやりと笑つた。

「そんなに簡単に切れるわけないだろ？ コレは俺の手製の糸だからな。あきらめな！ お前はもう逃げられない！」

勝ち誇つた顔でいるガンクに、カイルはにやりと笑つた。

「それは、どうかな？」

「ほざけ！」

ガンクは細糸を握つたままナイフをかざしてカイルへと突進した。カイルは少し右腕に力を入れて強度を確認すると、再び近くの枝に飛び、また違う枝にと飛び回つた。糸はまるでゴムのよう、強い強度のまま伸びる。

「逃げても無駄だぞ！ お前はすでに、俺の手の中にある！」

ガンクは長い舌を揺らしながらカイルを追つた。だが、カイルの動きに翻弄され、苛立つたガンクは自分の糸の束を握つた。

「もう鬼ごつこは終わりだ！」

そう言い、勢い良く引っ張つた はずだった。

「つ！ んっ？」

びくともしない糸を辿るガンクの目が見開かれた。

ガンクとカイルの死闘！

「なんだこれはああつ！」

いつの間にか、ガンクとカイルを繋ぐ細糸束は木々の間を蜘蛛の巣のように張り巡らされ、ガンク自身の身体にも巻き付いていた。「随分と頑丈な糸を作り出せるようになつたもんだな！ だが、これでお前も身動きが取れなくなつた！」

カイルは木の枝に立つて見下ろしている。

「ふんっ！ こうなつたら、これは捨てるしかないな！」

ガンクはカイルを睨みながら見上げ、細糸を握る手を顔の辺りまで上げ、左手に持つたナイフでザクッと切り落とした。

「何っ！」

驚くカイルの下で、身体に巻き付く糸をいとも簡単に切り落としていくガンク。

「さあ、これで俺は自由だ！」

ガンクは両手を広げて舌を出し、嘲笑つた。

カイルの腕に巻き付いている糸は、さつきも試した通り、切れるわけもなく、散々伸ばした糸が締め付けを増し、右腕は血の気を失いつつあつた。

「わははは！ これは俺が作り出したモノ。 そう簡単に切れてもらつては困るんだよ！」

勝ち誇った顔でナイフを構えたガンクは、その自由になつた体でカイルへと襲い掛かつた。

「くっ！」

剣で応戦するカイルだったが、力の入らない右腕を利き腕でない

左でカバーするリスクは大きかつた。

「どうしたどうした？ そんなに弱かったんですか？ 先輩っ！」

剣がぶつかり、目の前で弾ける火花。 カイルは足を滑らせて地

面へ落下した。

「つう！」

その身体は、地面すれすれの所で止まつた。宙を揺れるカイルの頭上からガンクの声が降つた。

「危ないとこりでしたねえ、先輩！」

木の枝に座つて見下ろすガンクの手には、しつかりと細糸の束が握られていた。カイルは地面に落下する直前に、ガンクに捕まつたのだ。

「くそつ！」

もがいたところで、身体は虚しく宙を泳ぐだけ。吊り上げられた右腕は、既に感覚が無くなつていた。カイルはガンクを睨んだ。

「おお、怖い怖い。綺麗な顔が台無しですよ！」

ガンクは手際良く細糸を枝に固定すると、カイルの前に降り立つた。その頸を撫で上げ、いやらしく微笑むガンクに、カイルは渾身の頭突きを食らわせた。

「ぐああっ！」

「汚ねえ顔を近付けるな！ ハゲ！」

「ハッ……！」

ガンクの目が見開かれた。フードが外されたガンクの頭部は、まだ二十歳前だというのに額は異様に広く、にじむ汗に輝いていた。養成学校時代から、ガンクはそうからかわれていた経歴があつた。

「そつ、それは禁句だぞ！ てめえー！」

ガンクの手がカイルの胸ぐらを掴み上げた。

「すんなりとは殺してやらねえからな！」

怒りに震える声で睨みをきかせたガンクの平手がカイルの頬を打つた。そこが赤く腫れる間もなく、腹に拳を叩きつけ、防戦する左手はもはや何の助けにもならなかつた。

「ははははは！ ザまあみろ！」

さも楽しげに拳や蹴りをカイルの身体に叩きつけ、まるでサンドバッグのように揺れるカイルの体。

ガンクの足がカイルの脇腹を捉えたとき、カイルの口から一際大きな声が上がった。 ガラオルとの対決の時に負傷した脇腹は、まだ癒えていなかつた。

「うああっ！」

「？」

苦痛に歪む顔。 腫れあがつた頬。 唇からは一筋の赤い血が流れ落ちている。

「なんだ？ もう怪我でもしてんのか？」

ガンクは、脇腹の様子を見ようと、カイルの服の裾を捲り上げようとした。

「ガンク！ それ以上カイルに触れるな！」

「！」

ガンクの視線の先には、ラディンが立つていた。 彼の息は上がり、その額からは汗がにじみ出でていた。 ふらふらと立つて居元には、さつきまでラディンの身体を拘束していた細糸が力なくとぐろを巻いて落ちていた。

「ほう、縄脱けの術を使ったのか？ そういうえば、得意だったもんな、お前」

特に驚いた様子もなく冷たい視線を送るガンクに、ラディンは輝きを讃える瞳で睨んだ。

「クセになるから本当はやりたくないんだけどな、お前のやり方が気に食わねえんだよ！」

口だけはどうとも動くが、ラディンの身体はまだ充分に動ける状態ではなかつた。

『さて、どうするか……』

ラディンは力なくだらりと下がる腕に入れて感覚を確かめた

が、わずかに震えるだけだった。自由なのは、ダメージのなかつた片方の腕と両足。

『なんとかガunkの動きを封じなきや……！』

ラディンは隙を探りながらじつとガunkを睨みつけていた。なかなか動きだそうとしないラディンに、ガunkはふっとにやけた。

「まあ、その身体で俺に敵うと思う心意気だけは、認めてやるよ！」

そしてラディンに向き直り、歩き始めた。

長い舌を揺らしながらゆづくづく近づいてくるガunkを睨みながら、ラディンは動けずにいた。

その時、空気が裂ける音と共に乾いた音が林のなかに響いた。

「ぐあっ！」

突然ガunkが地面に倒れこみ、そのまま氣を失った。

「カイル！」

ラディンが驚いて見る先に、カイルが右腕を吊られたままで大きく揺れていた。カイルは吊られたまま自らの体を揺らし、ガunkを背後から襲い、その足が、見事にガunkの延髄を捉えたのだった。

「かはっ！」

衝撃で血を吐くカイルに駆け寄り、ラディンは動かせる腕でカイルを縛り付ける細糸の束を外そうとした。だが、深く食い込んだ細糸の束は指一本も許さなかつた。

カイル負傷……そしてラディンは……

「くそっ！取れねえ！」

思うように動かない自分の体と、なかなか緩まない細糸の束に焦るラディンに、カイルが震える声で言つた。

「ラディン……」

カイルが傷だらけの左腕で指す方を見ると、倒れているガンクの近くに、彼のナイフが落ちていた。

「そうか、あいつのナイフならもしかしたら！」

ラディンは急いでナイフを拾うと、カイルを縛り付ける細糸にあてた。乾いた音とともに、細糸はいとも簡単に切れ、カイルの身体は力なく地面に落ちるようにラディンへと倒れこんだ。

「カイル！ 大丈夫かっ！」

カイルの顔を覗き込んだラディンは、その痛々しい傷に息を飲んだ。

「とにかく手当てをしないと……！」

運ぼうとするラディンに、カイルが踏ん張つた。

「ラディン……俺は大丈夫だ……」

そしてふらつきながら自力で立つと、右手を数回振つて、血の循環を促した。ドス黒い右腕は、まだ冷たいまま。カイルは、動かせる左手で落ちている自分の剣を拾うと、懷にしまった。

「俺は先を急いでる。手当てなんてしてる暇ないんだ！」

そのまま歩きだそうとしたカイルだったが、すぐに膝を着いてしまつた。

「カイル！ 動いちゃダメだ！ そんな身体で、行こうとするなんて……殺されに行くようなもんだぜ！」

「だけど！ 行かなくちゃならないんだ！」

腫れた顔で見上げるカイルに、ラディンは説得するように言った。

「あの二人が向かってんだろう？ あいつらも強いから、絶対大丈夫

だ！ 逆にお前が行つたら足手まいになるだけじゃねーか！ 仲間のことを思うなら、無理するんじゃねーよ！」

するとカイルは目を丸くして、ラティンをじっと見つめた。

「な、なんだよ？」

思わず赤くなつて言つたラティンに、カイルはふつと微笑んだ。

「お前が、仲間のことを思うなら、なんて言つからだ」

「ばつ！ そんなこといいんだよ！ とにかくそんな身体で戦うとか言うな！」

ラティンにも、何故こんなことを言つのか分からなかつたが、目の前のカイルの事を心配に思うことは確かだつた。 カイルは自分の身体の限界を感じながら、かろうじて声を出した。

「……じゃあ、あいつらのこと、頼んでいいか？」

「俺、に？」

戸惑うラティンに、カイルは小さく微笑んだ。

「あいつらだけでも大丈夫だろ？ けど……な」

そしてカイルは、気を失つて倒れた。

「カイルっ！ カイル、しつかりしろっ！」

ラティンはカイルの身体を支えて声を掛けたが、もう答えはなかつた。

その頃、サクとシリウはガラオルのアジト近くに着き、様子を伺つていた。

小さな洞穴の入り口には、二人の見張りが退屈そうに立つてゐる。それ以外は鳥のさえずりと風の音に和む、静かな山の中だ。

「突つ込むか？」

今にも飛び出していきそうなサクの肩を押さえて

「サク、もう少し様子を見ましょー！」

と言いながら、シリウは後ろを気にした。 ラティンを心配して

引き返したカイルが心に引っかかるのだ。そんなシリウに、サクは明るい声で言った。

「カイルなら大丈夫だ！　あいつはあんなハゲに倒れる奴じゃないぜ！」

「気付いていたんですか？」

驚くシリウに、サクは鼻をこすった。

「匂いがした！　あいつ、養成学校にいた時、なんか目について仕方なかつたんだ。いつもズルいことばつか考えてたから、一度ぶん殴つてやろうと思ってた！」

サクは拳を打ち合せた。いつも真正面から立ち向かうサクにとっては、苛立つ対象だったのだろう。シリウはそんなサクに笑つた。

「カイルに任せておけば大丈夫でしょうね？　僕たちは、これからのことを考えなくては！」

シリウはカイルの事が気掛かりだったが、眼鏡を上げて気持ちを切り替えた。カイルはサクとシリウに託してラディンを救いに行つた。以前なら考えられない事だった。彼も変わってきたといふことだろう。

その時、後ろの方で草むらが揺れる音がした。

「カイルか？　敵か？」

サクとシリウは身構えた。すると、二人の前に勢いよく現われたのはラディンだった。

「おっ！　お前っ！」

「カイルは？」

驚く二人に、ラディンは足早に近づいて見張りの様子を伺つた。

「カイルは大丈夫だ。今サツフル村に居る」

「ケガをしたんですか？」

詰め寄るシリウに、ラディンは眉をひそめて指を唇に当てた。

「しつ！　あいつは強い！　安心しろ、大丈夫だ！　俺たちには、

やることがあるだろ？」「俺たち？」

サクが繰り返すと、ラディンは

「あんたらには借りをたくさん作つちまつた。俺に出来るかぎりの協力は、させてもらう！ こっちだ！」

ラディンは一人を手招いて素早く腰を上げた。

「どこに行くんだ？」

見張りのいる洞穴から離れていくラディンに、サクは怪訝な顔で尋ねた。ラディンは振り向かずに言った。

「あの出入り口から行つても、敵を大勢群がらせるだけだ。裏から出た所に、儀式をする場所がある！ ガラオルはそこで、獲物に月のパワーを貯えさせてから頂くつもりだ！」

「よく、知つてますね？」

シリウの問いに

「俺は実際に見たことは無い。けど、その場所は神聖な場所だからって、掃除とかやらされたし。話は仲間だつた奴らに聞いたんだ。皆、気味悪がつてたけどな」

『仲間だつた……』

シリウは、ラディンの言葉を心の中で反芻すると、嬉しそうに微笑んだ。

「そうですか、では、急ぎましょう！」

サクも強く頷き、三人は木々の間を身軽に避けながら、山を上り始めた。やがて中腹辺りでラディンは立ち止まり、二人に

「あそこだ」

と指し示した。山の斜面を切り崩してちょっととした広場があり、祭壇らしき棚と、両脇には豪華な花が飾られている。

何人かの男たちがうろうろと準備に追われているが、ガラオルの姿は見えない。

「今夜、あそこで捕まえられた男は儀式を与えられ、ガラオルの胃のなかに入る。あんたたちが、さらわれてつた男とどういう関係

か知らないけど、助けるんだろ?」

ラティンが淡々と言つと、シリウが静かに言つた。

「サクの父親なんです」

ラティンはハツと息を飲んでサクを見た。

「悪い! 変なこと言つちまつたか?」

サクはにっこり笑つて見せた。

「いや! 気にすんな! で、助け出す方法はあるか?」

ラティンは頷いた。

「あんたたちは、ここで待つててくれ。 そして合図を送るから、タイミングを見計らつて助けだせ!」

そう言つて立ち去るうとするラティンに

「あなたは?」

と言つシリウの言葉に、ラティンは振り返つて親指を立てて微笑んだ。

「必ず隙を作る! あとは、あんたたち次第だぜ!」

そして、ラティンは姿を消した。

スパイ・ラティン！

「サク、ここにはラティンの事を信じるしかなさそうですね」シリウの言葉に、サクは素直に頷いた。

「ここまで連れててくれたんだ。嘘は言つてないと思つー。」

そういうサクの瞳には決意の輝きが灯り、目の前の広場を見据えていた。

ラティンは再び洞穴の前に来ると、見張りの前に姿を現した。

「お前！ ラティンじゃねーか！ ビに行つてたんだよ？」

驚く見張り番に、ラティンは白々しく頭をくしゃくしゃととかきむしりながら笑った。

「女の仲間にやられて、林の中で氣を失つてたんだ！ そしたら、アジトが崩壊してるしよ、なんかあつたのか？」

「あつたも何も、女は取り返されるし、アジトは破壊されるし、散々だつたんだぜ！ 今からボスが儀式をするんだ！ 新しい獲物を手に入れて、また若さと力を補充するんだと！」

「へえー！ そりやすげえ！」

目を丸くして驚くラティンに、見張り番が耳打ちした。

「俺も聞いた話なんだけどよ、そりゃあもう凄い凄惨な食事シーンらしいぞ」

「へえー！ そりゃあ、ボスらしき！ 俺らみたいなチキンには從うしかねーよな！」

ラティンは大げさに驚いてみせ、見張り番たちにねぎらいの言葉を掛けると、悠々と洞穴の中へ入つていった。

『潜入成功！』

口笛を吹きながら奥へと進むと、横穴から明かりが漏れていた。

そつと覗くと、奥の暗がりに、鎖に繋がれた人影が力なく座り込んでいる。蠟燭の炎に揺れながら、生氣の無い身体は微動だにしなかった。ラディンは、彼がさらわれたサクの父親だと確信した。

その時

「なんだ、ラディンじゃねえか！」

以前ヤツハの見張りをしていたドウラスとマナスカの二人が、ラディンに声を掛けた。驚いて振り向くラディンに、マナスカが大きな鼻を近づけた。

「行方不明になつたつて聞いたから、俺はつきり死んだと思ってたんやぞ！」

ラディンは無駄に大きな声で言ひマナスカに眉をしかめながら

「あいつ、死んでるのか？」

と尋ねた。

「いんや！ 殺さずに、生きたまま喰らうんだと！ いや、喰われたら死ぬかあ！」

大声で笑うマナスカに、相方ドウラスが拳を降らせた。

「うるさい！ 隣にボスが居るんやぞ！」

ハッとした表情で口をつぐんだマナスカ。ラディンは、人質となつているサクの父親に近づいた。

「おい、おめえ！」

制止しようとするドウラスに、ラディンは

「まあまあ。顔を見るぐらい良いだろ？」

と笑い、かまわずに部屋の奥へと入つた。

ザクラスに近づいたラディンは、暗がりでうなだれる彼の後ろ髪を引っ張り、無理やり顔を上げさせると、傷だらけの顔をしながら、ぎらつかせた瞳でラディンを睨んだ。その輝きに射ぬかれたように、ラディンの胸がキリキリと痛んだ。

『さすが、サクの父親だ。気迫がすげえ……』

「まだ元氣がありそうだな」

とわざとらしく言ったラディンは後ろの一人に背を向け、ザクラ

スに囁いた。

「必ず助ける！ 信じる！」

「？」

何か聞きたげな表情をしたザクラスだったが、彼も状況を理解して、小さく頷くだけで止めた。ラディンは再び無造作にザクロスの髪の毛を引っ張り、顔をうつむかせた。そして振り返ると、何食わぬ顔をして部屋の外へと出た。

「どこに行くんや？」

ドウラスが尋ねると、ラディンは面倒くさそうに頭を搔きながら答えた。

「一応、ボスに挨拶しなきゃなんないだろ？ しばらく留守にしていたんだから」

「そいやな。何発かじぶが出来る」とは覚悟しておこたほうがええで！」

半ばにやけながら、マナスカは可哀相に、と肩をすくめた。

『ゴブだけで済めばいいけどな……』

ラディンは小さくため息をついて部屋を後にした。そしてゆっくりと歩いて隣の部屋の前に立った。もう一度小さくため息をつくと、堅く閉ざされた扉を叩こうとした。

カチヤリ。

「…」

ラディンが触れる前に扉が少し開き、中から灯りが漏れた。

「ラディンか。今まで何をしていた？」

ガラオルの落ち着いた野太い声が、中から響いてきた。再び扉は軋みながらゆっくりと開き、奥のソファに深々と座るガラオルの姿が見えた。

吸い込まれるように部屋の中に入ると、静かに扉が閉じられた。

『クロウチ……』

ラディンの後ろで、静かに扉を塞ぐように立つ男、クロウチ。この儀式の責任者だ。ガラオルが一目置き、信じている人物。全身ローブで覆った正装をして、細い眼鏡の奥にある細い瞳は冷たく光っていた。

『いつ見ても薄気味悪い男だぜ』

胸の内で悪態をつきながら、ラディンはゆっくりとガラオルに近づいた。そして頭を垂れると

「すみませんでした！ 女の仲間にやられ、しばらく動けなかつたんです！ でももう大丈夫です！ またあいつらを見つけだして必ず仕留めてみせます！」

ガラオルは目を細めて肩肘を付き、ラディンの話を聞いていた。ラディンが顔を上げると、ガラオルはにやりと笑った。

「お前の性で、女は逃がすわアジトは壊されるわで、かなりの損害を受けた。それが、どういう意味か分かるよなあ？」

ガラオルはゆっくりと立ち上がった。

一閃！

ラディンの身体が部屋の壁に打ち付けられた。

「ぐつ！」

地面に膝まづくラディンの頭を踏み付け、ガラオルは唾を飛ばした。

「頭が高えんだよ！」

グリグリと顔を地面に踏み付けられ、ラディンの頬と額から血が滲みだした。

「お前、今度失敗したら、これだけじゃあ済まねえからな！」

ラディンの頭が軽くなり、ガラオルの足が離れた途端、その横つ腹に鈍痛が走った。数回転がったラディンは、三口三口と両膝を付いて土下座をした。

「すみませんでした！」

叫ぶように言うラディンを冷たく見下るしながら、ガラオルは再

びソファに座った。

「許すのですか？」

クロウチが抑揚の無い声で言つた。 するとガラオルはまた肩肘をついて答えた。

「これから俺様の将来が決まる大事な儀式をするつて時に殺生なんかしたら、縁起が悪いだろ？ こんな奴の命なんて、いつでも取れる。 な、ラディン！ お前はそれを知つているから、ここに戻つて来たんだろ？」

ラディンは震えた身体で、まだ額を地面に付けていた。 無言で冷たく見下ろしていたクロウチは

「ガラオル様の申す通りに」

静かにそう言つと、部屋の隅にある台で水を器に注ぎ、一枚のラハウの葉をはらりと水面に浮かべた。 ラハウは温めると薰りが生まれ、瞑想をする心を落ち着かせる効果がある。 世間一般的にく使われるものだ。 器の下に火を点けると

「では、そろそろ瞑想を始めましょう」

と、ラディンを無視して静かにガラオルの方へ向き直した。

「…………」

部屋を出たラディンは、ズキズキと痛む脇腹と頬を擦りながらも、少しにやけていた。

『これでよし……！』

瞑想を始めたガラオルは、小一時間ほどは動かない。 ラディンは痛む体をおして、なおも奥に進み、祭壇のある広場に出た。

もうすぐ夕刻。

夕陽が、周りの景色を紅く染めている。 何もなければ、いつもでも見つめていたい絶景だ。

ラディンは、祭壇の周りで忙しそうに働く男たちにねぎらいの言葉を掛け、チラリと向かいの斜面を見た。 そして、周囲にばれまいようにそつと親指を立てた。

『後はタイミングだけだ！』

ラディンの合図は、木々の間で息を潜めていたサクとシリウの目にはしっかりと届いていた。

「必ず助けだすぜ！」

ラディンの血だらけの顔を見ながら、サクは拳を握り唇を噛んだ。

「はい！」

シリウは静かに眼鏡を外し、懷に忍ばせた。二人とも、ラディンが自分の身を犠牲にして潜入してくれたことに胸を痛めた。

「あいつの気持ち、無駄にはしねえ！」

二人は少しの隙も見逃すまいと、じつと広場を見つめた。

やがて陽が落ちゆき、辺りは次第に暗くなつていった。広場に設置されている燭台には次々に灯りが灯され、祭壇がぼんやりと照らされて幻想的な風景を生み出した。そんな中を、クロウチが祭壇へと歩み寄り、鎮座した。

「あいつは……？」

「儀式の進行をする人でしょうか？」

サクとシリウが見守るなか、洞穴から人の固まりが現れた。両脇を抱えられ、引きずるように連れ出されたザクラスだった。

「どうつ

「サク！」

シリウが辛うじて飛び出そうとするサクの肩を押された。

「気持ちは分かりますが、もう少し我慢してください！」

必死で止めるシリウに、サクは唇を噛み締めながらゆっくりと腰を下ろした。ザクラスを抱える一人はラディンだ。

「むやみに動くのは危険です！ ラディンが隙を作ってくれるはず。もう少し、様子をみましよう！」

ラディンたちに連れられ、祭壇の前まで来ると、ザクラスはクロ

ウチに促されて壇上に上げられた。

ランディたちはうやうやしくその場を離れ、膝を付かされたザクラスの頭上で、クロウチの手が踊った。

すっかり陽が落ちて広がった夜空には、満月が眩しく浮かんでいる。クロウチは月を仰ぎ見て両手を上げた。

「大いなる神祕の力を持つて、この者を清めたまへ！」

そして大きくなればと、体中から氣を発した。その氣迫は突風のように辺りに飛び散り、ランディたちは腕で自分を守った。

『なんて氣迫だよ？』

ランディは間近で見るクロウチの力に、胸がざわついた。どうにかして、ザクラスを解放しなくては。そうしている間にも、ザクラスは苦しみはじめ、手足を繋ぐ鎖がジャリジャリと踊った。

「あいつ、何を…」

サクは身を乗り出した。

「何かで読んだことがあります……月の力で身を清め、生け贋を捧げる儀式があると……全身が熱くなり、精神が抜け、脱け殻になつた体だけを伝説の獣ゴルムが喰らうと、特定の人物にその能力が乗り移るのだと……まさか一流族であるガラオルという人間が、その儀式を行うといふのか……。まさかこの世に、それが実在するとは！」

シリウの頬を汗が伝った。眼鏡を外しているので、いつもよりも視界が良好だ。親指ほどのザクラスの様子がはつきり見える。そこまでではないサクも、父親の苦悶の表情はしっかりと伝わっていた。

「くそつ！ まだかよ？」

苛立つサクの前で、ザクラスは身をよじって苦しんでいる。

その時、祭壇の横にある花瓶が大きな音を立てて倒れた。

祭壇崩壊！

「！」

驚くクロウチの視線の先に、足を上げたままのラティンが立っていた。口角を上げて細い目で見るラティンを

「神聖な儀式を、壊すおつもりですね？」

と冷たい目で射ぬくように見つめ、クロウチは両手を軽く下げて立っている。その足元には、クロウチの呪文が解かれて苦しみから解放されたザクラスが、息を荒げて倒れこんでいる。

「なあにが神聖な儀式だ！ こんなのは、ぶち壊してやるよー。」

「お前、何を言つてるとんのか分かつてんのか？」

仲間の男が背後から羽交い絞めにしようと襲つたが、ラティンは体を曲げて簡単にかわすと、顔面に拳を叩き入れた。

「ぐあっ！」

と顔を押さえて倒れこむ男。

その時、ラティンの傍らにサクとシリウが立った。

「待たせたな！」

「おせえよ！」

拳を握りながら言うサクに、悪態を吐くラティン。

「お前の合図が分かりにくいんだよー。」

とサクが返した。だがその顔は、信頼を寄せた穏やかな表情だった。その奥で、シリウは眼鏡を上げて微笑んだ。サクは拳を打ち合わせた。

「暴れてもいいんだよな？」

「存分にどうぞ！」

「よっしゃー！」

サクは嬉しそうに数回両拳をぶつけ合させた。

「ガラオルは今、瞑想に入つてる。しばらく動けないはずだ！」

ラティンの言葉に、周りの男たちにも緊張が走った。

「お前ら、どこから来たんだ？ ラティン、裏切ったのか！」

「ただで帰すわけにはいかないな！」

それぞれに武器を握りサクたちを囮む男たちに、迎え撃つ準備は

万端だつた。なにしろ爪を噛んでずつと待ち続けていたのだから。

「ガラオル様は、やはり、あなたを許すべきではなかつた」

クロウチの冷たく静かな言葉に、三人がその方を見ると、クロウチは足元に転がるザクラスにナイフを向けていた。

「あなた方のお目当てはこの男でしょう？ 儀式が壊された今、この男はもう使えない」

「じゃあ、円満に返してもらおつか！」

サクは言つが早いか、クロウチに突っ込んでいった。

「くつ！」

いきなり向かつてくるサクに意表をつかれたクロウチは、辛うじてサクの拳を避けて後退した。

「わっ！ 私はっ、人質にナイフを向けていたのですよっ！」

戸惑うクロウチに

「そんなの関係あるかつ！」

とさらに向かっていくサク。

「サクはそういう人なんですよ」

二人が離れたのを見計らつて、シリウがザクラスの手足を繋いでいた鎖にナイフを突き刺した。

「はつ！」

気合いを入れると、鎖は重い音を立てて跳ね切れた。

「サクが……何故ここに……？ ゴホッ！」

言い掛けるザクラスの口から鮮血が吐き出された。シリウはザ

クラスの腕を取り、肩に担いで立ち上がつた。

「詳しい話は後です！ 今はここから逃げることに専念してください！」

静かに、けれど強い口調で言い、懐から錠剤を取り出して飲ませた。

「強壮剤です。その場しのぎですが、村まではなんとか持つはずです」

シリウたちの後ろでは、ラティンが迫りくる男たちを退けていた。「援護する！ でも長くは持たないからな！ 早く行け！」

そう言つて祭壇に立つ装飾品を、力任せに棚ごと倒していくラティン。足を取られて倒れる男の後頭部を蹴り、背後から襲う男には肘を打ち込んだ。

「すみません！ ラティンも、無理はしないでくださいね！」

シリウはザクラスを肩に担いだまま広場を飛び出し、林のなかに消えていった。

「待てっ！」

クロウチが目を見開いて、シリウたちの背中に向かつてナイフを投げた。だがそれは、横から放たれた氣の弾によつて打ち落とされた。

「間違えるな！ お前の相手はオレだぜ！」

サクがクロウチの頬を殴り、弾き飛ばした。

「くああっ！」

軽がると吹き飛び、転がつたクロウチの身体は、粉々に破壊された祭壇に土煙を上げながら突っ込んだ。

「くつ……！」

クロウチは後ろ手に何かを探つた。

「！ サク、気を付ける！」

ラティンがクロウチの不審な動きに気付き、サクに声を掛けた。「何か仕掛けるつもりだ！」

サクとラティンは背中合わせに立ち、同時に周りの様子を伺つた。男たちもジリジリと二人に近づいていく。

その時、一瞬空気が冷え、風が止まった。

「なんだ？」

サクの体に悪寒が走った。

その時、倒れた祭壇の棚が盛り上がり、山のようになつたかと思うと、中から「ミミを押しのけるように巨大な獣が現れた。

「んだよ、あれ！」

驚くサクに、クロウチは腰を抜かして座つたまま、にやりと答えた。

「ゴルム。この祭壇の守り神です。起こしたが最後、すべてを破壊し食い尽くすでしょう！ あなたたちもこの祭壇も全て、チリとなり消滅するのです！」

ゴルムの肢体には茶色い剛毛が覆いつくし、首元まで裂けた口からは唾液と共に、鋭い牙が月明かりに輝いている。体全体に力をこめて咆哮を上げると、空気が歪み、木々が震えた。その咆哮の振動は、林の中を走るシリウにも届いた。

シリウはザクラスの身体をしつかりと支えながら、振り向いた。

『サク……ラディン……』

ザクラスは息を荒げ、立つてゐるだけでもつらそうだ。シリウは心を鬼にして、一路サツフウル村へと向かつた。

祭壇の広場では、男たちが次々と洞穴へと逃げこんでいた。ゴルム出現に、自分たちではどうすることもできないと感じ取ったのだろう。ガラオルが騒ぎに氣付いて現われる前に、サクたちもここから逃げ出さなくてはならない。

「一気に片を付けるぜ！」

サクとラディンは顔を見合わせて拳を握つた。ゴルムはその長い腕を振り下ろし、二人はソレを素早い動きで避けた。ゴルムは二人に照準を合わせたように、追い回つた。太い足から伸びる爪が、広場の床に深々と傷を残し、破片を散り放つ。

「ははははあっ！ 逃げる逃げる！ そして自分のしたことを悔

いるのだあつ！」

クロウチは狂ったように笑っていた。その顔面に、ゴルムが蹴り上げた瓦礫が当たり、下敷きになると、それ以上物言わなくなつた。

「逃げ回るのにも飽きたな！」

「サク！ お前、余裕だな！」

ラディンが額に汗をたらしながら、飛んでくる瓦礫やゴルムの爪を避けながら言うと、サクはラディンに笑つた。

「ラディン！ 少しだけ時間作れるか？」

「えつ？」

「オレに時間を作ってくれ！ 動き回つてちゃあ、力が溜まらねえ！」

軽がると障害を避けながら、サクがラディンに頼んだ。 ラディンはぐつとゴルムを睨み

「分かつた！ 任せとけッ！ 頼むぜ、サク！」

と、迫りくるゴルムの前に立ちはだかつた。

「こや田の前にくると、でかいなあ！」

ラディンの三倍はあるつかといふ巨体に一瞬ひるみかけたが、目を閉じて精神を集中させるサクを見つめ、信じることにした。

「お前の相手は俺だあ！」

半ばヤケになつて叫ぶラディンを、ゴルムは巨体を揺らしながら追う。 ラディンはできるだけサクがゴルムの視界に入らないように、少しづつ遠くへと誘導していった。

ガリツ！

「うわあつ！」

足元の瓦礫が崩れ、ラディンの体がバランスを失つた。

「つ！」

倒れながら慌てて振り返ると、田の前にゴルムが迫ってきていた。口元から流れ落ちる唾液が、ラディンの傍らに落ちる。

「サク！ もう限界だぞー！」

ラディンは両腕を顔の前で覆い、やがて訪れるだろう強い衝撃を覚悟した。

「ラディン、充分だ！ 行くぜゴルム！」バッケンゴウマ

ゴルムの背後からまばゆい光と共に赤い馬の形になつた気の固まりが襲い、ゴルムの頭は溶けるように吹き飛ばされた。

「！ すげえ……」

ラディンが首のないゴルムを見上げていると、その体がバランスを失い、ゆっくりとラディンの上へと倒れはじめた。

「えっ！ うわあっ！」

慌てて逃れ、立ち上った土煙が治ると、その向こうにはサクが技を放つた両手を構えたまま立っていた。

「サク……お前って、すげーんだな！」

ラディンが呆然とうと、サクは背を伸ばし鼻をすすつて笑つた。ラディンはサクに駆け寄つてその肩を叩いた。

「よし、この調子でガラオルの野郎もやつづけて・・

「ダメだ！」

「？ なんでだよ？」

ラディンが意表を突かれた顔をすると、サクは固い表情をして言った。

「今はダメだ。あいつの中には、まだヤツハの父ちゃんが生きてる。今倒すわけにはいかねえ！」

「だけど！ 今ガラオルは瞑想中で動けねえはずだ！ このチャンスをみすみす逃すのかよ？」

ラディンが焦つて言つと、サクはラディンを強い眼差しで見つめた。

「それでも！ 今はダメだ！」

「サク……」

ラティンはサクの真つすぐな視線に言葉を失った。

「今のオレは、ヤツハの気持ちが分かる。オレもヤツハと同じようく父親をなくして、あいつの中に生きてると知つたら、オレもまづは父ちゃんを助けたいと思うー！」

「分かつたよ……勿体ねえけど……仕方ないよな。また絶対、チヤンスはあるよなー！」

ラティンが元気付けるようにサクの肩を叩くと、彼はにっこり笑つた。

「じゃあ、早くここから逃げ出やうぜー！」

サクとラティンは、今や瓦礫の山となつた祭壇の広場を後にした。

しばしの静かな時……

サクとラディンがサツフル村に着いたころには、夜が明け始めていた。

戦闘の時にラディンが負った傷が思ったより深く、それに疲労も重なつて、移動に時間が掛かつたのだ。昇り始める太陽につつらと照らされながら一人がやつとのことで村に近づくと、村の入り口に人影が見えた。

「？」

眩しさにしばたかせながら目を凝らすと、その人影も一人に気付いたように走ってきた。

「サク！ ラディン！」

駆け寄ってきたのはヤツハだった。

「ヤツハ！ ちゃんと留守ば……んがつ！」

いきなりサクの顎にヤツハの膝が入った。

「何やつてんのよ！ カイルもザクラスさんも大ケガだし、あんたたちはなかなか帰つて来ないしつ！ 心配したんだからねつ！」

息まくヤツハに呆然となるラディンの前で、吹っ飛ばされたサクは涙目で

「仕方ねえだろ？ 色々大変だつたんだ！」

と強気な表情をした。ラディンもサクの傍に寄り添い

「俺が思つたより深手で、戻るのに時間が掛かつただけなんだ。

心配かけて悪かった」

とヤツハに弁解した。するとヤツハは、サクとラディンの間に寄りかかるようにその肩を抱き締めた。

「でも良かつた！ 無事で！」

その瞳には、うつすらと涙が滲んでいた。サクとラディンは驚いた顔をしたが、すぐに顔を見合わせて微笑んだ。

「さ、皆待つてる！」

ヤツハが一人を立たせて先導しようとすると、ラティンの足が止まつた。

「ラティン？」

「俺は……」

視線を落として躊躇するラティンに、サクが微笑んだ。

「何やつてんだよ？ 行くぞ！」

「でも俺、お前らの借りを返しただけで……」

「オレたち、仲間だろ！」

ラティンの言葉を遮って、サクは言った。

「借りとか貸しとか、もう無いんだよー あー腹減った！ 早く行こうぜ！」

「サク……」

驚いた顔をしたラティンに、ヤツハも微笑んだ。

「たくさん料理を作つて待つてたのよー パンナさんの手料理は、すごく美味しいんだから！」

ヤツハに手を引かれ、ラティンは歩き始めた。

「あ、料理の前に、パンナさんのげんこつが先だと思つけどね いたずらっぽく笑うヤツハに、サクは慌てて頭を抱えた。

「パンナ……つて？」

ラティンの問いに、サクが苦い顔をして答えた。

「オレの母ちゃん……」

数刻後……

たくさんの料理が並んだテーブルの前に、大きなたんこぶをこじらえたサクとラティンが並んで座っていた。

「さああんたたち、たくさん食べておくれよー」

パンナが満面の笑みで言つた。

彼女は帰ってきた二人の顔を見るなり

「あんたたちはっ！ 心配ばかりさせて！」

と大きな拳で鉄拳を『えたが、すぐに一人を抱き締めて無事を喜んだ。

『なんで俺まで……』

たんこぶをさすりながらふてくされるラティンの横で、サクは何事もなかつたかのように料理を口に運んでいる。

「あなたの話はヤツハに聞いたよ！ 色々助けてくれたそうじゃないか！ あたしからも礼を言つよ！ ありがとう…」

パンナはラティンにそう言つて、部屋に響くほど明るく大きな声で笑つた。

「で、でも俺、最初は敵で……」

恐縮するラティンに、パンナは笑い飛ばした。

「昔のことなんていいんだよ！ や、早く食べないと、サクに全部食われちまうよ…」

「え？ ……ふつ！」

ラティンは横で両頬いっぱいに頬張るサクを見て、思わず吹き出した。

「どうしたの、ラティン？」

ヤツハが不思議そうに聞くと

「さっきまで命懸けで戦つてきた奴の顔じゃないなって」とラティンが答えた。 ヤツハは首をかしげて笑つた。

「サクはそういう人よ。 いつだつて緊張感がまるで無いの」

「なんだよ… オレだつて緊張感くらい」

口から食物を飛ばしながら話すサクに、またパンナのげんこつが飛んだ。

「行儀の悪いことをするんじゃないよ… 全くこの子は！ ちゃんとしたしつけもしてくれるので言つから兵士養成学校へ行かせたのに、全然変わつてないじゃないか！」

パンナは顔をしかめた。 サクは叩かれた頭をさすりながら、それでも料理を口に運んでいる。 と、ラティンを見ると

「あれ、ラティン食わないのか？ 美味いぞ、これ！」

そう言つて、目の前の大皿から骨付きのモモ肉を取り、手渡した。ラディンは終始押され気味にいたが、すぐに微笑むと、サクと同じように料理にかぶりついた。疲れきった体に染みこむような良質のたんぱく質の旨みが口中に広がった。

「う、美味しい！」

脂を口の周りに付けたまま驚いて言つたラディンに、サクは笑つた。

「なっ！」

「たくさんあるから、遠慮なく食べな！」

パンナも嬉しそうに微笑み、ラディンは大きく頷いて、サクと競争するように空いた腹を満たしていった。

「……ん」

静かな部屋のなか、カイルは目覚めた。

頭がぼんやりしたまま、周りを目だけで確認しようとすると、目の前に人影が現れた。

「カイル、目を覚ましたのですね？」

カイルの左側に、シリウが座っていた。心配そうな顔で覗き込んでいる。気付くと、シリウはカイルの手を握り締めていた。汗ばんだ温もりが、カイルの左手を包んでいた。

「……シリウ……俺は……？」

カイルは自分がどうしてここにいるかを思い出すのに、しばらくの時間を要した。

「ガシクを倒して……それから……はつ！」

カイルは慌てて起き上がるが、シリウに両肩を優しく押さえられた。

「まだ、寝ていてください。大丈夫。もう終わりましたから」

シリウは落ち着かせるように優しく微笑んだ。

「ザクラスさんは？」

再び寝かされたながらカイルが聞くと、シリウは頷いて言った。

「命に別状はありません。今、隣の部屋で寝ています。ここはサツフル村の医者の家です。あなたは、ラディンに連れられてここに来たようです」

シリウのゆっくりした説明に、カイルは力なくベッドに沈んだ。

「そうか……俺は何も出来なかつたんだな……」

シリウは首を横に振つた。

「いいえ。そんなことありませんよ。あなたは、僕たちを先へ行かせてくれたじゃないですか。もう少し遅かつたら、間に合わなくなるところでした。でも……」

シリウは口調を落として眉をしかめた。

「あなたにこんな怪我をさせてしまつた……僕の方こそ、申し訳なくて……」

カイルの右腕には、肩から指先まで包帯が巻かれ、体の至るところにあざが出来、顔はまだ少し腫れていた。シリウはカイルの頬を優しく撫でた。

「ヤツハにも、バレてしまつたみたいですね？」

「ああ……そのことなら、出かける少し前にもう。それに、パンナさんにも」

「そうだったんですね。ヤツハが一人あなたの看病をしてくれていたみたいですよ。皆にバレないようじつて」「ヤツハに礼を言わなきや……」

カイルは苦笑した。シリウは優しく微笑み

「本当に、心配しましたよ」

と言いながら、少しその瞳には涙が滲んでいた。

「シリウ……」

「良かった。目を覚ましてくれて……」

カイルはその言葉に胸が熱くなつた。

「ありがとう」

シリウはフツと笑うと微笑み、カイルにゆっくりと近づいた。

カイルの退院祝い

「カイル～～！ 無事かあつ？」

いきなりけたたましい声と共に扉が開き、シリウは弾けるように座り直した。

飛び込んできたサクを捕まえ損ねたヤツハが、二人を見て気まずい顔をした。

「こらあつ！ いきなり入つたら、二人の邪魔でしょうが！」

改めてサクの腕をつかんで出てこようとするヤツハを、カイルの言葉が引き止めた。

「ヤツハ！ いいよ。俺も、皆と話がしたい」

「ほら、なつ！」

サクが無邪気に笑うと、ヤツハはその頭を軽く叩いて

「だから少しは気を遣いなさいっての！ 良かつた！ カイル、気が付いたのね？」

と、嬉しそうにカイルのベッドの傍らに近づいた。 その顔には少し疲れが浮かんでいたが、はちきれそうな笑顔に吹き飛ぶようになった。

サクは、シリウに助けられながらゆっくりとベッドに座るカイルを見て

「だいぶやられたみたいだな！」

と笑った。 だがそれは、心底安心した心から出た言葉だった。

カイルは苦笑した。

「あの男は、ガancockだつたんだ。 養成学校に居た頃より随分強くなつていた」

カイルは包帯に包まれた右腕をそっとさすった。

「ガancockって、あの悪知恵だけは働いてたガancockの事？ あいつ、

退学になつてからガラオルの手下なんかになつてたの？」

ヤツハが驚いて言うと

「オレもシリウも気付いてた。　まさかカイルがこんなに追い詰められるとは思わなかつたけどな」

サクは苦笑した。二人とも、もしガンクならカイル一人で充分だろうと思っていたのだ。　まさかガンクがそこまで実力を上げているとは思つていなかつた。

「僕たちの迷惑が甘かつたんですね。　ホントに申し訳ない……」

シリウはうなだれていた。　カイルは苦笑し

「シリウたちの性じやない。　俺が勝手にラティンの加勢をしたいと思つただけだから」

と慰めた。　ヤツハは

「そうよ。　カイルの怪我はもう大丈夫。　後は痛み止めを使いながら、自己治癒力に任せることにかく、まだ絶対安静だからね」

と微笑みながら、カイルの傍らに立つて薬の調合を始めた。

「カイル、痛みはどう?」

と聞くと、カイルは少し顔をしかめた。

「まだ少し……指先の感覚が鈍いんだ」

「だいぶ締め付けられてたみたいだつたし。　しばらくは無理しないように!」

強い口調で言いながら、ヤツハはカイルに飲み薬を与えた。

「ありがとう、ヤツハ。　ずっと看病していくてくれてたみたいで……」

おとなしく薬を飲み、礼を言つと、ヤツハは顔を赤らめた。

「いいのよ、そんなの……あたしに出来ることはこれくらいしか無かつたから……」

「そう言えば、ラティンは?」

カイルの言葉に、三人は扉の方を見た。誰も居なかつたが、皆は気配を感じていた。　ヤツハが小さく笑つてパタパタと走つていき、廊下を覗き込むと、そこには壁に寄りかかつて静かに俯いているラティンがいた。　ヤツハが明るく

「ラティンもさ、中に入つておいでよー。」

と声を掛けると、ラティンはゆっくりと顔を上げ

「あ、ああ……」

と戸惑つた表情をしながら部屋の中へ入つた。

「ラティン、俺をここまで連れて来てくれてありがとう。よくこの村つて分かつたね」

カイルが微笑むと、ラティンは照れたように頬を赤らめ、視線を外して

「いや、俺はただ、借りを」

と言いかけると、サクがその肩を抱いて言葉を遮つた。

「貸し借りの話は無しだって言つたろ？ ラティンはオレたちの仲間なんだから！ 皆もいいだろ？」

三人の答えは決まつていた。

「勿論」

「ああ」

「喜んで！」

それぞれが頷き、声を掛けた。

「お前ら……いいのかよ？」

ラティンは驚き、皆の笑みを見ながら鼻を擦ると、やつと照れ笑いを浮かべた。

それから数日の間、カイルの状態を見ながら、四人は病院とパンナの世話になつた。

サクはラティンと訓練に明け暮れ、シリウは穏やかに読書をし、カイルはヤツハの手当を受けながら、怪我の回復に専念した。

四人はソラール兵士養成学校を出てから、しばらくぶりの穏やかな時を過ごした。

やがてカイルが歩けるようになり、退院をした夜、パンナは手料理を用意してカイルを迎える用意をした。

サクやシリウ、ラティンに交じつて、先に具合もすっかり良くなつたザクラスも、パンナにあれこれと指示されてバタバタと動き回つている。

「俺も病人だつたんだから……」

と言ひつと

「男が泣き言を言つんぢやないよ！　あんたの命の恩人を、そんな気持ちで迎える氣かい！」

とパンナの怒号が飛んだ。大黒柱が悲惨なものである。やがてヤツハに付き添われてカイルがやつてきた。足取りもしつかりしている。顔の腫れもすっかりひき、少しのあざが残るだけだ。

「すごい！」

家に入るなり飾り立てられた部屋の様子に驚くカイルを、パンナは早速テーブルへと促した。

「まったく、男は雑でしようがないよ。本当はもつと綺麗に盛り付けるつもりだつたんだけどね……」

パンナは奥から大皿を持ってきた。

「自分たちでやりたいって言つもんだから……」

見ると、大皿の上には大きなケーキが乗つていて、色とりどりのフルーツやクリームで不均一に盛り付けられた中央には、チョコペンで書いたようなメッセージが、いびつな文字と絵で飾られていた。

『おかえるなさい、カイル』

「ふつ！　一体誰が書いたんだよ？」

笑いながら言うカイルの前で、サクとラティンが肘を突きあつている。

「でも、ありがとう。こんな俺のために。嬉しいよ！」

満面の笑みは、今までサクもシリウもヤツハもラティンだつて見

たことのない眩しさを放つた。初めて会った時の仏頂面とは打って変わつて、カイルの笑顔は柔らかく優しいものになつていた。

それは、カイル本人も気付いていないことだつた。

「お帰りなさい、カイル！」

ヤツハが言うと、サクとシリウ、ラティンも笑顔で頷き、カイルの退院祝いは和やかに始まつた。

皆パンナの手料理に舌鼓を打ち、久しぶりに集まつた仲間たちは盛り上がつた。ザクラスも久しぶりに帰ってきた息子サクの冒険話に、興味深く聞き入つた。

ザクラス自身も若いときは兵士をめざし訓練をしていたのだが、腰を痛め断念するしかなかつた。男としては、出来れば兵士として強くありたいもの。それが出来なかつた心の痛みは、サクへと受け継がれた。ザクラスからそんな話を聞いたわけではなかつたが、サクは心のどこかで察知していたのかもしれない。ザクラスは、サクが元気に話す姿を目を細めて見つめていた。

やがて料理も無くなりかけた頃、シリウが切り出した。

「では、カイルがもう少し回復したら、ヴィルスへ向かいましょう。学校へはまだ何も連絡していませんし、明らかに進路も外れている……きっと心配しています」

「そうだな。でもガラオルのことは、どうするんだ？」

ヤツハも緊張した顔をした。シリウは眼鏡を上げた。

「今の僕たちには、知識が足りません。それに実力も。ここは焦らずに、養成学校に戻つてレベルをアップさせることを最優先したほうがいいと思うんです」

その時、カイルは強く言つた。

「俺のことなら、もう心配ない。明日からでも出発出来るよ！」

「ちょっとあんたたち！ 一体何の話をしてるんだい？ また危険なことをしようとしているんじゃないだろうね？」

パンナが焦りながら言葉を挟んだ。するとザクラスが彼女の肩

を押さえた。

「パンナ。彼らはもう立派な経験をしてきている。 もう子供じゃないんだ。 見守つてやるひじやないか！」

「でもあんた……」

心配そうに眉をひそめるパンナに、ザクラスは深い輝きを持つ瞳でしつかりと頷いた。 そしてサクたちを見ると、ゆっくりと話した。

「私のかつての夢を君たちが叶えてくれることは、とても嬉しい。だが、今君たちがしようとしていることは、大人でも難しいことだ。 生半可な努力では絶対に叶えられないだろう。 ただ、こんなに深い絆に繋がれた仲間たちがいる。 一人じゃないことを心に留めなさい。 そして……」

ザクラスは微笑んだ。

「私たちを実の親だと思つて、何があれば頼つてきなさい」

サクはじつと父ザクラスの顔を見つめていた。 シリウたちの心に、ザクラスの言葉が深く染み込んだ。

「そうか、サクたちには、帰る場所があるんだ……」

ふとしたラディンの咳きに、一同は息を飲んだ。 それに気付いたラディンは、わざと肩をすくめて唇を尖らせた。

「俺には帰る場所が無いからさ」

そうおどけて言うラディンに、サクがわざと大きな声で

「そんなのこれから作ればいいじゃないか？ 養成学校に入るのが嫌なら、ヴィルスの町に住めばいい。 仕事だってすぐに見つけられるだろうしさ！」

とフオローした。

「そうよー。 ヴィルスなら、あたしたちはいつだって会いに行けるし！」

ヤツハも微笑んだ。 すると、パンナが口を開いた。

「そうだ！ 行くところが無いなら、うちに居れば？」

サクが驚いて母パンナを見た。

「何言つてんだよ？」

パンナはザクラスと顔を見合わせて微笑んだ。

「IJの村に居てくれれば、心強いしね！ 実際、頼りになる若者が少なくて困ってるんだよ」

教養や稼ぎを求めて栄えた町に行く若者は多い。 サツフル村も、そんな状態だった。 そして、帰つて来る者も多くない。 若く強い者が居てくれれば、万が一、流族や獣たちに村を襲われても対処できる。

そんな状況も話しながら、ザクラスとパンナはひとつつの案を出したのだった。

ラティンは一つの選択を迫られ、困惑していた。

「考えがまとまるまで待つてるからさー ゆっくり考えたらいいさ！」

サクがラティンの肩をポンと叩くと、安心したように頭を「そうする」と答えた。

静かで穏やかな夜が村を包んでいた。

衝撃の別れ

その夜、カイルは物音に気付いて目が覚めた。

「？」

隣のベッドで眠るヤツハを起こさないようになると、そっと起き上がり、部屋を出た。隣の部屋では、サクとシリウが寝息をたてている。カイルはそつと家の扉を開くと、周りを見渡した。すると、月明かりに照らされて、庭に横たわった大木に座る人影が目に写った。

『ラディン？』

ラディンはベンチ代わりの大木に座り、じっと夜空を眺めていた。カイルは彼に近づいてその横にそつと座ると、同じように夜空を見上げた。

『カイル？』

気付いたラディンは少し驚いたような目をしたが、すぐにふつと笑って再び見上げた。

『綺麗だな』

カイルが静かに言うと、ラディンは後ろに手を付いて微笑んだ。「こんなにゆっくりと夜空を眺めたのなんて、初めてかもしだねえ」カイルはちらとラディンを見て俯いた。

「俺は、いつも眺めてた。そういう間は、心が解放される気がしていったから……」

「そつか。こんな宝を知らなかつたのが勿体ない気がするよ」ラディンは笑つた。その瞳には、星が映つたように輝きが灯つていた。穏やかな表情だつた。

カイルは再び見上げると呟いた。

『まだ、迷つてるのか？』

ラディンは黙つていた。カイルは静かに話し始めた。

『養成学校で……俺はずつと一人でいたんだ。誰かとつるむ気なんて塵とも思つてなかつた。一人で全て終わらせる氣でいたから』

ラディンは黙つて聞いていた。

「けど、あいつらと出会つて、最初は面倒臭いだけだつたけど、そのうちに何でいうか……心が落ち着く感じがし始めたんだ。旅を始めて、同じ目的を果たすために助け合つ。本当は俺、危険な事に周りを巻き込むのが怖かつたんだと思う」

ラディンはいつの間にか、少し後ろからカイルをじつと見つめていた。

「今になつて思うんだ。仲間つて、いいなつて」

カイルの横顔は、月明かりに照らされて輝いていた。その頬には、柔らかい笑みさえ浮かんでいた。

「それに、ラディン」

カイルは少し振り向いて、照れたよつに言った。

「お前に『仲間の事を思つなら』って言われた時、衝撃受けた」「そう？」

「俺にも、仲間だつていう心があつたんだつて、気付かれてさ」ラディンはふつと微笑み、そつと呟いた。

「……あんたつてさ……」

「？」

カイルが振り向くと、ラディンはフツと微笑んだ。

「まあ、どつちでもいいや！」

そして勢よく立ち上ると両手を挙げて大きく伸びをした。

大きく息を吐くと、両手を腰に当てた。

「やっぱ、俺はまだまだだな！」

「ラディン？」

カイルはラディンの背中を見上げた。

今までひとつ苦労を重ねてきた背中だ。隆起した筋肉が、服の上からでも容易に分かる。幾多の困難を乗り越えて来たであろう後ろ姿をぼんやりと見ていると、ラディンがため息と共に言葉を吐き出した。

「俺は、やっぱあんたたちとは行けない」

「えっ！」「ここに残るつてことか？」

カイルは振り向かない背中に尋ねた。

「ラディンは首を横に振つた。

「いや……俺はここに残ることもしない
！」

「じゃあ……？」

カイルは思わず立ち上がつた。

「どこに行くつもりなんだよ？」

その言葉は、放浪の身であるラディンには厳しい問いかけだつた。ラディンは空を見上げた。

「さあ……わかんねえ……けど……」

ラディンはゆっくりと振り返つた。

「必ずまた会えるぞ」

「ラディン……？」

ラディンのまっすぐな視線を受けて、カイルは何故か胸がざわついた。ラディンはそれを見透かしたように微笑んだ。

「俺は、男でも女でもどっちでもいいと思つてゐる。今は、シリウがあんたを好きな気持ちが理解できる」

「？ 何言つて……？」

カイルの言葉は、ラディンに遮られた。ラディンの唇に、カイルのソレが優しく包まれていた。

「！ つ？」

カイルは弾かれるよじに後退りをした。

「なっ！ 何っ！」

ラディンは真っ赤になつて唇を拭うカイルを、頭を搔きながら苦笑して見つめた。

「！ ごめん、つい」

「つつっ！ ついって！ お前っ！」

泡を食つて涙目になつて言うカイルに、ラディンは優しく言った。

「俺、もっと強くなるよ。そして、あんたを迎えて行くから」

「え？ なんだつて？」

カイルは動搖し、ラディンの言葉が全く頭に入らなかつた。 ラディンはゆっくりと後退りをした。

「じゃあな」

カイルはやつと、うつすらとした理解が出来た。

「ラディン！」

彼はシーツと口の前に人差し指を立ててウインクした。

「皆によろしく言つておいてくれよー！」

「ラディン……！」

思わずラディンの裾をつかもうとしたカイルの手は、宙を待つていた。 彼の姿は、夜の闇と共に消えてしまつっていた。

「……ラディン……勝手な奴……」

カイルは唇にそつと触れた。 ほんの何秒かの間、感じた感触は、カイルの胸を熱くしていた。 カイルにとつては、初めての体験だつた。

今にもこぼれ落ちそうな満天の星空が、ずつと立ち尽くすカイルを見下ろしていた。

「ラディンが居ねえ！」

サクの大声で、カイルは目が覚めた。

隣で眠つていたヤツハはすでに起きてベッドには居ない。 カイルは横になつたまま、綺麗に畳まれた毛布をぼんやり見つめていた。 昨夜の事は夢だつたような気がしていただが、再び響き渡るサクの声に、強引なほどに現実に引き戻された。

「ラディーンー！ どおこだあー？」

「ゴチン！ という、ヤツハがパンナが食らわせたであらうゲンコツの音に、サクの気配が一瞬小さくなつた。

いつもの賑やかな朝だ。

賑やかな……ただ違うのは、ラディンがもう居ない事だつた。

ソレを知っているのは、まだカイルだけだ。カイルはゆっくり起き上がり、軽い頭痛を感じて左手で顔を覆つた。小さくため息を吐くと、意を決して部屋を出た。

すると、ヤツハがディックと共に必死な顔をして駆け寄ってきた。「カイル！ ラディンがどこにもいないの！ ディックにも探してもらつてるんだけど、気配さえ無いみたいで……」

あちこち探し回つたのだろう、息が上がつている。

「外も探しましたが、どこにも居ません！」

シリウが窓から中を覗きながら言った。

「荷物も無いみたいなんだ！」

サクはキヨロキヨロしながらラディンを探している。カイルは静かに息を吸つた。

「ラディンは旅に出たよ」

「えっ？」

驚いたヤツハがカイルを見つめた。サクとシリウも動きが止まり、カイルを凝視している。

「今、なんて言つた？」

「ラディンは、旅に出たんだ。ここにはもう居ない」

「なんでだよ？」

サクがカイルの胸ぐらをつかんだ。

「オレたち仲間じゃなかつたのかよ？ なんで何も言わずに別れなきやなんないんだよ？ おかしいだろ！」

「サク！」

シリウが慌てて窓枠を飛び越えて部屋の中に入り、サクの肩を引いた。

「カイルを責めても仕方ないでしょう？ ラディンは、カイルにそれを伝えたんですね？」

カイルは俯いて答えた。

「ああ。『皆によろしく言つておいてくれ』と

「なんだよそれっ！」

サクがシリウの制止も振り払うほど、カイルに突っ掛かった。

カイルはなすがままに揺られ、シリウとヤツハはサクをカイルから引き離すことが精一杯だった。やつとのことで引き離し、シリウの腕に阻まれたサクは、息を荒げて言った。

「なんで引き止めなかつたんだ？」

カイルはハツと顔を上げた。だがすぐに視線を落とし、眉を寄せた。

「きっと、二人は似てるから……」

ヤツハが静かに言った。

「カイルもラディンも、ずっと一人で生きてきた。何か通じるものがあつたのよ、きっと……ね？」

優しく尋ねるヤツハに、カイルは切ない顔を見せた。

「皆（めん）。その代わり、必ずまた会うと約束してくれた」

「ラディンのことだもの！ またひょっこり顔を出すわよ！」

わざと元気な声を出して、ヤツハはサクとカイルの顔を覗いた。

「……分かつた」

ふてくされたように咳くサクの肩を掴んでいたシリウの手から、安心したように力が抜けた。

「ふう……ラディンはきっと大丈夫です。今まで強く生きていたんですから。それに僕たちはまだ、やることがあります。気持ちを切り替えましょう！」

シリウはサクの肩を叩いてキッチンへと向かった。ヤツハも踵を返して後を追った。まだ立ち尽くすカイルに、サクがそつと言つた。

「いきなり手を出して悪かつたな。オレもビックリしてさ」

少し頬を赤らめてモジモジしながら言つサクに、カイルはフッと微笑んだ。

「いや……本当なら、あいつも皆に一言残すべきだったんだ。でも、強く言えなかつた……」

サクはカイルの肩をポンと叩いて笑つた。

「また、忘れた頃に現れるやー。今までだつてそうだつたもんなつ！」

サクは吹つ切るように伸びをすると

「あー！ 腹減つたあー！」

とキツチンへと向かつた。その後ろ姿を見ながら、カイルは一安心したように息をついた。そして、気持ちを振り切るように皆

の後を追つた。

サツフル村から……一路ヴィルスへ

出発の日。

村の外門まで見送りに来たのは、パンナやザクラスだけではなかった。サツフル村に住むほとんどの村人たちが、サクたちの旅立ちを見送ろうと集まつた。

「村の財産でもあるザクラスを救つてくれた恩は決して忘れない。また近くに来たら、必ず立ち寄つてくださいな！」

村長ワンドガ村人たちの代表として言葉を送つた。

「あなたたち、絶対に無理はしないで仲良く元気でやるんだよ！またいつでも帰つておいで！ 美味しい料理をたくさん用意して待つてるからね！」

パンナは、あらうことか自分の息子サクではなくヤツハとカイルを抱き締めた。

「おばさん……」

涙目のヤツハを見て、カイルまでももらい泣きしそうになつた。パンナはそんなカイルの頭をポンと優しく叩き、微笑んだ。カイルはそつとそのふくよかな胸に顔をうずめて、涙を拭いた。シリウとサクは、その様子を優しく見守つていた。

「こちらこそ、お世話になりました！」

シリウの言葉に、サクたちは大きく手を振つて村を出た。

見送る村人たちの中、子供たちの間にちょこんと座るディックがいた。

「いいんですか？ ディックを残して……」

シリウの心配げな問いに、ヤツハは微笑んで答えた。

「ええ。皆優しい人ばかりだし、ディックの事を理解してくれて、子供たちとも仲良くなつたもの。それに養成学校に連れて帰つても、きっと入れてはくれないわ」

ヤツハは、ディックを村の番犬として置いていくことにしたのだ。

最初はヤツハの言葉が理解できなくて、ディックは哀しげな声を出してついてこようとしたが、ヤツハの根気強い説得で、ようやく理解した。ヤツハは一度だけ名残惜しそうに振り向いたが、もう小さな固まりに見えるだけだった。

「あの子はここで暮らしたほうが幸せだと思うの」

「そうだな！ オレも苦手な犬と離れられてほっとしたし！」

サクは両手を頭の後ろに組んで口笛を吹いた。

「その割りには、結構いいコンビだつたけど」

カイルが笑うと、サクはぐるりと振り向いて怒った。

「あんな！ あいつは、オレがラディンと縛られてた時に一人で逃げ出した奴だぜ！」

「あの時は、僕たちにヤツハの居所を知らせようとしてくれたんですよ。それに、すぐに引き返してサクを迎えに行つたでしょう？」

「なんだよ！ 皆でディックの味方になるんだな！」

シリウの言葉に口を尖らせてすねるサクを、カイルとヤツハは楽しそうに笑つた。

「そんなことより！」

突然のシリウの叫びに似た声で、三人は驚いてシリウを見た。

「な、なによ、いきなり？」

ヤツハが言うと、シリウは眼鏡を光らせて言つた。

「何故ラディンはカイルにだけ旅立ちを伝えていったのでしょうか？」

「えつ？ 今、それ？」

ヤツハは目を丸くした。もうとっくの昔に終わった話題だっただけに、サクもきょとんとした顔でシリウを見た。その中でカイルは冷や汗を垂らしながらも、平静を装つた。シリウはカイルを怪訝な目で見ながら言つた。

「僕は、カイルがラディンと二人だけでいたということに腹を立てているんです！」

「それって、ただの嫉妬じゃない……」

ヤツハは呆れたため息をついた。カイルはそつとヤツハの後ろ

に隠れて、気配を消していた。

「だつて！ 夜の夜中に二人きりですよ！ 僕としてはですね

」

「はいはい！」

ヤツハはシリウの言葉を遮りながら、後ろに隠れているカイルの腕を引っ張り、シリウに押しつけた。

「シリウがカイルを愛しているのは分かつたから…」

「ヤツハっ！」

真っ赤になつて言うカイルに、ヤツハは目を細めた。

「カイルだつて素直にならなきゃダメよ…」

人差し指をカイルの鼻先に立てて笑うと、先を歩くサクを追つた。

「全く……ヤツハは強引なんだから…」

「僕は嬉しいんですけどね」

シリウは嬉しそうにカイルの肩に手を乗せて引き寄せた。

「シリウ、俺は……っ」

カイルはその手を避け、頬を赤らめて何か言おうとしたが、シリウは優しく笑い、遮るように

「さあ、ヴィルスまで急ぎましょー！」

と首を急き立てた。

「お前らが遅いんだろ？ 早く行くぞっ！」

と迷惑そうに言つサクを囮みながら、四人はワイワイとヴィルスへの帰路に着いた。

「サクたちが帰ってきた！」

「てつ生きり死んだものだと嘘言つてたのになー！」

「怪我一つしてないって！」

「一体どうやつて？」

ソラール兵士養成学校の中では大きな騒ぎになっていた。

サクたちが入つていった校長室の前には人だかりが出来、長い旅から無事に生還した彼らを一目見ようとしている。

「いいから、授業に戻れ！」

何度もゴンドル風紀教官の怒号が響いたが、生徒たちの群れが散らばることはなかつた。

「お前ら邪魔だつ！ どきやがれい！」

野太い声と共に、生徒たちをかきわけて巨体が現れた。ナトウだ。

「サクが帰つてきただと？」

顔に脂汗を垂らしながら、まだ疑惑の表情をしている。

「本当に帰つてきたのか……？」

ナトウはぴたりと閉ざされた扉を見つめ、信じられないという顔で呟いた。

外の喧騒を遮断された静かな校長室の中では、サク、シリウ、ヤツハ、カイルが並んで立たされ、ファンネル校長からの有難い説教がこんこんとされていた。

「なんでオレたち、怒られなきやならないんだよ？」

俯いたままサクが眉をしかめて隣のシリウに囁くと、シリウもまた苦笑で返した。

「仕方ありませんよ……色々と心配かけてしまつたんですから」

「そこ！ 聞いてあるのかつ？」

「はつ、はいつ！」

サクとシリウは弾けるように返事をした。

「まったく！ 連絡ひとつよこさないで、散々心配かけおつて！」

実力を試すためとはいえ、軽々しくお前たちを行かせたことを何度も後悔したか！ 大切な生徒であるお前たちを、たつた一度の試験に合格ただけで安易に信じてはならんと、心底胸を痛めておつた！

「ファンネル校長！ もうその辺りで。この子たちも、生半可な経験をしてきたわけではないのですから。無事に帰ってきたことだけでも有難く思わなくては」

脇に控えていたミランが見かねて助け船を出した。

『ほつ！』

四人が心中で息をついた。ファンネル校長は小さく息をつくと、和やかな表情になった。

「そうじやな。小言は終わりじや。——アルコド国から手紙が着いた。『国を救ってくれたこと、大変感謝している』と。私もらも礼を言おう！ よくやつたな！」

校長は、サクにアルコド国からの手紙を渡した。白い簡素な封筒に、しつかりとシーノ王の名前が書かれている。四人は微笑みあつた。

「しばらくは旅の疲れをいやすが良い。来週から、従来の生活に戻し、自身を高めるために励むこと。良いな？」

「「「「はい」」」

帰還、そして……

四人はファンネル校長の説教から解放され、ホッとしながら校長室の扉を開けた。

その途端、生徒たちの歓声が沸いた。

「サクだ！」

「シリウ！ カイルもいるぞ！」

数々の言葉がサクたちに飛び掛った。 そんな中

「ヤツハあつ！」

と、小柄の少女がヤツハに飛びついた。

「心配してたんだよ！ ホントに、生きて帰ってきて良かった！」

「サリナ……！」

ヤツハは涙目で抱きついているサリナを抱き締め返した。

サリナはヤツハの一年後輩で、まだ小さな体だが頑張り屋だ。いつもヤツハの後ろにくつづいて授業を受けていた、ヤツハにとつて可愛い後輩の一人だ。 今回のアルコド国件で、ヤツハの事をひどく心配し、一緒に行けなかつた事を後悔していた。

「心配かけてごめんね！ ただいま、サリナ！」

サリナは申し訳なさそうに言つヤツハを見上げ、やつと微笑みを見せた。

「サクう！」

「はっ！ お前、まだ居たのか！」

サクは目の前に立ちはだかる黒い巨体、ナトウを見上げて嬉しそうに笑つた。

「とつぐに試験落ちしてると思つてたぜ！」「なんだとあつ！」

激昂するナトウに、サクは身構えた。

「やるかつ！」

「当たり前だつ！ お前がいなくて体がなまるところだつたぜ！」

ナトウも嬉しそうにやけた。暴れだすであろう二人を予想し

て、生徒たちの輪が広がつた。

「ひらつ！ ここをどこだと思つてるんだ！ 校長室の」

動武道の教官であるサライナが一人を制止しようとしたが、その

肩を軽く引かれ振り向いた。

「こ、校長……？」

見下ろすサライナ教官の肩に手を置いたまま、ファンネル校長は微笑みながら首を横に振つた。

「好きなようにやらせておきなさい。久しづりに会つたんじゃ。

見なさい、一人とも嬉しそうな顔をしているではないか

「で……ですが」

ガシャーン！

どこの窓ガラスが割れる音がした。途端に、ファンネル校長は冷や汗を垂らした。

「ま、まあ、ほどほどにしておくよに言つておきなさい」

そして、逃げるよう部屋へと入つていってしまった。

「こらーーー サク！ ナトウ！ 物を壊すな！」

サクとナトウを追うサライナ教官を見送りながら、生徒たちの喧騒の中シリウとカイルは微笑み合つた。

「さ、行きましょうか」

二人は風のよう人に混みをすり抜け、その場を離れた。

「しばらくは、賑やかになりそうですね」

シリウは参つた、という顔をして人だかりに振り向いた。

「カイル！」

呼ばれたほうを見ると、ミランが少し離れた所に立つていた。

「//ラン先生……」

//ランはカイルを手招きして、医務室へと招いた。

「さて、僕は久しぶりに部屋でゆっくりしましようかね」

シリウは察知すると、独り言を言いながら自分の部屋へと向かおうとした。すると、後ろから黄色い声が追いかけてきた。

「シリウ先輩があんな所に！」

「先輩！」

成績優秀なシリウは、それなりに人気もある。女子生徒たちが、団体となつてシリウに走りよってきたので、彼は慌てて踵を返して逃げ出した。

「無事で良かった……」

//ランは静かな医務室に入ると白衣を着て椅子に座り、足を組むとかつたるそうな仕草でタバコを吸いはじめた。促されてカイルも対面の椅子に座ると、//ランはじっとその顔を見つめながら長く白い息を吐いた。

「変わったねえ」

「？」

「表情が柔らかくなつた」

「そう……ですか？」

カイルは少し赤らんで、自分の頬を押された。//ランはフツと笑つた。

「外では、色んな経験をしてきたんだろう？」

その言葉に、カイルは背筋を伸ばした。

「はい。今回の旅で、本当にたくさんの方と話をしました。あ、

それと……」

カイルの脳裏には//ランに伝えたいことがたくさん浮かび、少し戸惑つた。一呼吸置いて、一番大事だと思ったことを口にした。

「あの……俺の事……シリウとヤツハには、知られました」

「そう」

ミランはたいして驚いた顔もなく、聞き返した。

「つらかったかい？」

カイルは首を横に振った。

「いえ……不思議に、なんだかホッとしたというか……つらくなかつたです」

「ん。 そうか」

ミランは少し微笑んで頷くと、立ち上がりて窓辺に立つた。

「じゃあ、もう心配ないね」

ミランは窓から外を見ながら、呟くように言った。

「？」

「正直、私一人ではこの秘密は重すぎた。 やがてバレた時に、お前を守りきる自信がなかった。 マチ姉さんのようにね……」

「ミラン先生……」

ミランは振り向き、カイルに微笑んだ。

「これからは、何があろうと味方になってくれる仲間が出来たね？」

カイルは息を飲んでミランの話を聞いていた。 カイルの秘密をたつた一人で背負い、守ろうとしてくれた事を、カイル自身は軽く考えていた。 そこまで負担にしていたとは思つていなかつたのだ。カイルは立ち上がつた。

「ミラン先生、俺はもう大丈夫です。 皆が居てくれるから」

その言葉を聞いて、ミランは安心したように優しい微笑みを見せた。 カイルもまた、感謝を込めて微笑み返した。

その時、窓の外で爆音が聞こえた。

「何があつたんですか！」

急いでカイルはミランの隣に歩み寄つて外を見た。 階下のグラウンドでは、サクとナトウが激しく戦いあつていた。

「あいつ……」

そう言うカイルの口元には笑みがこぼれていた。 その横顔を見

ながらミランはクスリと笑い、カイルの頭を軽く撫でた。

「？」

「マチ姉さんの育て方は間違っちゃいなかつた」

「とおしそうに見つめるその目は、眼鏡を取ればマチそつくりだ。ミランはすぐに視線を外に向か、空を仰ぎ見た。

「私にもね、いたんだ」

「何がですか？」

「……息子……」

ゆつくりと瞼み縫めるように答えたミランを、カイルは驚いた顔で見つめた。

「ちょうどカイル、あんたと同じくらいの年になるかな……生きていたら……」

「生きて……いたら……？」

カイルは胸騒ぎに襲われた。ミランは遠くを見た。

「捨てたんだ。私は、自分の子供を捨てた……」

ミランは、自分の過去の話を始めた。

//ランの過去……カイルとヤシハのトーク

「まだ若い頃、私は荒れていてね。夜な夜な街で遊んでは男を引つ掛けていた。そんなとき、間違いを起こした。身籠つたんだ。まだ十八歳だった。親にも相手にされなくなつてた私に、子供なんて育てられるわけがない。家族には散々責められ、答えを求められた。それは必然的に、【墮ろせ】という脅迫だつた。けれど私は、たつた一人で痛みをこらえて産んだ。血を拭き取つて抱きかかえた腕の中の息子は、そりやあくしゃくしゃの顔をして、おとなしく眠つていた。その寝顔を見ていたら、私では母になれないと急に怖気づいた。だから、夜中、人がいなくなつた公園の端っこに、タオルにくるんで置き去りにした。……私は、自分の子供を捨てたんだよ……」

「//ラン……先生？」

カイルは言葉を無くして//ランを見つめていた。//ランの頬には一筋の涙が伝い落ちていた。それに気付いた//ランは、慌てて指先で拭くと苦笑した。

「首の後ろに、カモメみたいなアザを持つてた。ソルティヤなんて名前まで付けちました。今でもあの子が生きているのか、死んでしまつたのかもわからない。けれど、私は生き続けてしまつた。その罪を背負うために、医者を目指したのさ」

//ランは白衣の襟を正した。

「少しでも、生ける命を救いたくてね……詫びにもならないけれど……」

//ランはいつも勝ち気で、怪我をしてきた生徒に罵声を浴びせながらも治療の腕は確かだった。内心は、自分に頼ってくれるのが嬉しかったのかもしれない。生徒達を自分の息子の様に思いやり、

見守っていたのだろう。

カイルはじつとミランの顔を見つめていた。どんなに考えても、かけてやれる言葉を見つけられなかつた。ミランは自虐的にフツと笑い

「変な話をしちまつたね。 ちょっとと思い出しちまつただけさ。忘れてくれ。 カイルには関係ないことだ」

ミランは弾けるようにカイルから離れ、ベッドのシーツを整頓しはじめた。

「カイル」

「は、はい？」

ミランはカイルを見ずに手を止めた。

「シリウは、あんたを一目見たときからずっと気に掛けていた。何かあつたら、彼を頼りなさい。 決して、一人だけで無理をするんじゃないよ」

カイルは胸の動悸を感じた。

「シリウが……？」

「シリウだけじゃない。 サクもヤツハも、信じること。 出来るね？」

命令口調で言いつミラン。 眼鏡の奥で光る瞳を証拠に、いつものミランに戻つていた。 カイルは安心し、頷いて微笑んだ。

グラウンドでは、サライナ教官が必死にサクとナトウを制止していた。 そのうち風紀教官のゴンドルが現れ、罰と説教の嵐が二人を襲うのだろう。

ソラール兵士養成学校には、再び騒がしい風景が戻つていた。

翌日。

シリウは朝から図書室で読書をしていた。

学校に帰つてきてからずっと、シリウは図書室に入り浸つて何か調べものをしてくる。 そこへカイルがやってきた。 それに気付

き、書物から目を離したシリウの目は、いつも通りの優しい雰囲気を漂わせていた。

「おはよう、カイル。もう体の調子はいいんですか？」

カイルは頷いてシリウの対面に座った。若さ故だろうか、一晩眠つただけで随分体が軽くなっていた。慣れた場所に戻ってきたことが、回復を助けたのかもしない。

「シリウこそ、しつかり休めたのか？腕の調子はどう？」

カイルが尋ねると、シリウはにつこりと微笑んだ。

「ええ。体調はもうすっかり戻りました。まだ肘には少し痛みが残っていますけど、ミラン先生の腕は確かですから。しかし、ラディンもひどいことをしますよねえ」

シリウはおどけながら、包帯に包まれている左肘を動かしてみせた。カイルは苦笑いをしながら、シリウの手元に山積みになっている本の山を見た。

「何か調べものをしているのか？」

その一冊を手に取つて見ると、淡くぼやけた紺色の表紙に白文字で【魂の行方】と小さくタイトルが載つていた。

「魂の……？」

シリウはカイルの手から優しく本を取り上げると

「ガラオルからヤツハの父親の魂を解放させる方法を探しているんです。でも、こんな小さな図書室では、情報量が少なすぎる……」

シリウは眉を寄せた。

「何か、俺にも手伝えることはないか？」

カイルがシリウの顔を覗くように言つと、シリウは一変して嬉しそうに微笑んだ。その時

「カイルっ！」

不意に背中を叩かれ、驚いて振り向くと、ヤツハが満面の笑顔で立つていた。

「なんだ、ヤツハか」

息をつくカイルに、ヤツハは膨れつ面をした。

「何よ！ お楽しみのところを邪魔して悪かったわね！」

カイルはその声量に焦つてシーツと唇の前で人差し指を立てた。

周りの生徒たちが迷惑そうな顔で見ている。

「邪魔じゃないですよ。おはようございます、ヤツハ」

シリウは微笑んだ。ヤツハは少しへーと落として話した。

「シリウは本当に優しいわね。邪魔ついでにいいかな？」

「？」

ヤツハはカイルを見つめた。

「ね、今日時間空いてる？」

「えっ！ 僕？」

「そう！」

「いや、今日はあの……っ！ ちよ、ちょっとヤツハ」

「シリウ、ちょっとカイルを借りるわね！」

有無を言わさず、ヤツハはカイルの腕を抱えて、引きずるように図書室を出ていった。

「カイルとヤツハ、すっかり仲良しですねえ」

消えた二人の余韻に浸りながら呟いて、シリウはまた静かに書物へと視線を落とした。

「ちょっとヤツハ！ 一体どこに行くつもりなんだよ？」

「町！」

「えっ？」

引かれるままにカイルは養成学校の敷地を出て、山を下り、気付くと麓の町、ヴィルスに立っていた。

「ヤツハー？」

意図が分からず、若干息が上がりながら、カイルはヤツハに答えを求めた。

「一体どういう事だよ？」

ヤツハはっこりと微笑んだ。

「プレゼント！」

「プレゼント？」

ヤツハは頷いた。

「そう！ 明後日ね、サクの誕生日なの！ だから、誕生日プレゼントを渡してあげたいのよ」

カイルはやつと離してくれた腕を腰に当てて、迷惑そうに顔をしかめた。

「俺は関係ないだろ？」

するとヤツハは目を丸くして驚いた。

「何言つてんのよ？ カイルだつてサクにはお世話になつてるでしょ？ 一緒に選んでよ！」

当たり前の様に言うヤツハに押されながら、カイルは

「世話つて……」

世話になつた覚えはない、と言こそうになつたが、言葉を飲み込んだ。今のヤツハの顔は真剣そのものだ。胸の前で握る細い指に力がこもつている。カイルはその心に免じて、仕方なく、とう風に

「分かつた」

と頷いた。

「ありがとう！ カイル！」

ヤツハは満面の笑みでカイルの腕に絡み付き、まるで恋人同士のように歩き始めた。

「ちょ、この腕！」

恥ずかしそうに言うカイルに

「イヤなの？ じゃ、手を繋ぐ？」

「どつちも嫌だ！」

逃げ腰のカイルに、ヤツハは楽しそうになおもじがみついた。

『む……胸が当たるんだよ……』

カイルの腕に、ヤツハの胸のふくらみが伝わっている。いくら女同士でも、やはり動搖する。それを知つてか知らずか、ヤツハ

はぐいぐいと自分の胸を押しつける。

「やめろつてー！」

叫びにも似た訴えに、ヤツハは笑った。 そういうつまづいているうちに、二人は雑貨屋に入った。

「うわあ……」

棚の中だけでなく、壁や天井までもがファンシーなグッズで覆い尽くされている店内で、カイルはただただ呆然と周りを見渡していた。

今までほんとモノクロの世界で生きてきたカイルにとって、カラフルで煌びやかな店内は、異世界そのものだった。

「カイルっ！ こつちこつち！」

手招きされ、フラフラしながら近づくと、ヤツハはピンク色のカチューシャを付けて微笑んでいた。 眺しさに目が眩んでいると、カイルの頭上に暖かい感触が触れた。

「ほら、見て！」

姿鏡の前でヤツハと並ぶカイルは、フワフワの帽子を被らされていた。

「わっ！ なんだこれっ！」

驚いて帽子を取ると、ヤツハは残念な声を出した。

「なんで取っちゃうのよ？ 似合うわよ、カイル」

ヤツハは微笑んだ。 カチューシャに光が反射して、カイルの目がまた眩んだ。 ヤツハは目を細めるカイルに笑いながら、棚に並ぶ雑貨の品定めをしている。

カイルも手持ち無沙汰で、すぐ横にある棚から小さなぬいぐるみを取り、見つめた。 熊の形をしたソレは、愛らしい表情でカイルを見つめ返している。 フワフワの毛皮が手のひらを暖め、優しい感触に心が和む気がした。

「カイルも、シリウに何か選んであげたら？」

その言葉にカイルは戸惑い、急いでぬいぐるみを棚に戻した。

「なつ！ 何で俺がっ！ シリウなんかにつー！」

ヤツハは笑いながら

「まあまあ……きっと喜ぶと思つわよー」

と、雑貨のひとつを手にして会計を済ませた。 カイルはまた店内を眩しそうに見回した。

「ね、何か食べようか！」

と言うヤツハの言葉に、気付くと昼も過ぎていた。 人の往来は賑やかで、町の繁栄を物語っていた。 ヤツハとカイルは、一角のレストランに入った。

「平日なのに、どこもすゞい人ねー！」

ヤツハは窓の外を見て目を輝かせた。

「町へはよく来るのか？」

カイルは店員が持つてきた水を飲み、ほっとした顔をした。 正

直、慣れないことをして少し疲れていた。 ヤツハは微笑んだ。

「たまに友達とね。 でも休日にしか来れないから、凄く混んでるのよ。 今日みたいに平日なら空いてると思ったのにな……ヴィルスの町を甘く見てたわ」

残念そうな顔をして、水に口をつけた。

「俺は初めて来た」

カイルの言葉に、ヤツハは驚いた顔をした。

「今まで一度も來たことないの？」

カイルは苦笑した。

「ここに來る理由なんてなかつたから。 それに、そんな余裕もなかつた」

カイルはずつと一人で暗い過去を背負い、ただガラオルへの復讐のためだけに生きてきた。 だから、町へ遊びに行く考えなど思いつかなかつたのだ。 ヤツハはそれを察知して、切ない顔をした。

「あたしの父さんがアイツの中で生きていなかつたら、もつと早く

解決していたかもしれないわね……」

少し俯いて言うヤツハに、カイルは驚いて首を横に振った。

「ヤツハ、自分を責めるな！ 必ずヤツハの父さんは助ける！ そ

れに……」

「？」

「ヤツハの父さんのおかげで、考える時間が出来た。 それがなかつたら多分……犬死にしていた」

ヤツハは息を呑んだ。 そこまで追い詰められていたのかと感じたのだ。 カイルは安心させるように、微笑んで見せた。

「だから俺は、ヤツハの父さんに助けられたんだと思うんだ」

ヤツハは息をついてカイルを見つめた。

「カイルに笑顔が戻るよう、あたしも頑張るから」

その言葉に、カイルは胸を打たれた。

見えない父親を追いかけた結果、大悪党の体の中に息づいているのを知つて、落胆しているはずなのに。 目の前のヤツハは、ただ仲間のために元気づけようとしている。 カイルは頷いた。

「お互い、頑張ろう！ 願いを叶えるために！ 俺たちなら出来るよ、きっと！」

二人は笑いあつた。 お互いに、本当の友達を見つけた気がしていた。

そしてさつきとは一変して肘をついてカイルを見つめるヤツハに、カイルは怪訝な表情で尋ねた。

「何？」

「あたしたちって、デートしているように見えるかしら？」

いたずらっぽく微笑むヤツハに、カイルは周りを見渡した。 レストランは八割の客で埋まり、誰もお互いを気にする風もなく、自分たちの私欲のために料理を楽しんでいる。 カイルは不意におかしくなつて吹き出した。

「何よ？」

ヤツハが顎を上げて不機嫌そうに言った。

「いや、誰もそんなこと気にしてないんだろうなって」

するとヤツハも周りを見渡して、また顎に手を置くとため息をついた。

「なんだ、つまんない！」

膨れつ面をするヤツハの前に、オーダーした料理が運ばれてきた。その途端に、ヤツハの顔がほころび、笑顔になつた。

「わあい！ もうお腹ペコペコ！」

すぐにカイルの前にも料理が運ばれ、テーブルの上は美味しそうな香りに包まれた。

「いただきます！」

と満面の笑みを浮かべて食べ始めるヤツハを見ながら、カイルはクスリと笑つた。

「何よ？」

気付いたヤツハが料理で頬をいっぱいにして聞くと、カイルはまた笑つて言つた。

「いや、サクみたいだなあつて」

「えつ！ どういう事？」

目を丸くするヤツハ。

「やつぱり、好きな人に似るのかな？」

するとヤツハは顔を真っ赤にした。

「そつ！ そんなの氣のせいよ！ あんな雑な食べ方なんてしてないでしょつ！」

懸命に言うヤツハが可愛らしく思えて、カイルはまた笑つた。
「カイルだつて、しつかりシリウへのプレゼント、買つてあるじゃない！」

ヤツハはカイルの隣の席に置いてある小さな紙袋を指差した。
さつきの店で、カイルも選んで買つていたのだ。だがカイルは二
ヤツと笑つて

「これはサクにだよ！ ヤツハがあげて、俺が渡さないわけにいかないだろ？」「

いたずらっぽく見つめるカイルに、またヤツハの頬が膨れた。

「もう！ カイルも早く食べなさい！ 冷めちゃうわよっ！」

まるで母のように急かすヤツハに

「はいはい」

と笑いながら、カイルはフォークを手にした。

それぞれの思い

「ラディン、元気かなあ？」

店から出て歩き始めたヤツハが、ふと呟いた。カイルは空を見上げた。曇下がりの穏やかな日差しが気持ち良くて、眠気を誘われる。

「元気だよ、絶対」

カイルも呟いた。ヤツハはその横顔をちらりと見て微笑み、そうね、と頷いた。

やがて二人は広い芝生の整備された公園につき、一角のベンチに座つた。

「ねえ、別れるときのラディンの様子、どうだったの？ 旅立つこと、カイルにだけ伝えて行つたんでしょう？ やっぱり、すごく悩んでた？」

ヤツハはカイルの顔を覗き込みながら言つた。カイルは少し困つたように黙つていた。

「正直、少し悔しかつたの。できれば、私達にも一言言つて欲しかつたなあつて。だつて仲間なんだもん……」

ヤツハは芝生の上で遊ぶ家族連れを見つめていた。

長いまつげがぐるりと上を向き、女の子らしい目元。緩やかな風に、栗色の前髪が揺れている。心から和んだ表情で、父と子が戯れる様子を見つめている。カイルはその横顔を見ながら、ヤツハになら話せると思った。

「ヤツハ、実は……」

カイルはあの夜のことと思い出しながら、ゆっくりと話した。

数分後

「ええええっ！ カイル、ラディンとキスしたのっ？」

案の定、ヤツハの驚きようは半端では無かった。思わず立ち上

がり

「なんでカイルばかりもてるのよつー！」

と悔しそうに言つヤツハに、カイルは

『そこかよ？』

と苦笑するしかなかつた。 ヤツハはぐいっとカイルの瞳を覗き込んだ。

「じゃつ……じゃあ、カイルのファーストキスはラティンなの？」
そう言われて、カイルは思わず迫るヤツハから視線を外すと

「そ、そななるよな……」

と頬を赤らめながら咳いた。 実際、あの時は一瞬の出来事だったが、近づいてくる顔の速度や唇の感触は鮮明に覚えている。

「シリウには絶対言つちゃだめよ！」

少し睨むように言つヤツハに、カイルは

「い……言わないよ……」

と押され氣味に答えた。 ヤツハはベンチに座りなおすとふんぞり返り、遠く空を見上げた。

「あーあ！ シリウが知つたら落ち込むだらうなあ～」

そして再びカイルに向き直つた。

「あたしもシリウには言わない！ 約束するから、安心して！」
と小指を差し出した。

「約束！」

カイルは促されて自分の小指を出してヤツハのそれに絡めた。

『約束……か……』

二人の絡む小指を見つめながら、カイルの脳裏には何故か、故郷ザックで自分を待つてくれているオッカやカゲ、マスターの姿が浮かんだ。

『必ず生きて帰つて、セブンスヘブンの用心棒になるよ』

カイルはそう約束をした。 そんな会話も、かなり昔の話の様に思えた。 今までたくさん色んなことがありすぎた。 そして今は、ひと時の平和な時間を過ごしていることに、不思議な気分もあつた。

「今度オツカを紹介するよ

「オツカ？」

見知らぬ名前を聞きなおすヤツハに、カイルは微笑んで頷いた。

「俺の友達。故郷に居るんだ」

「素敵！会いたい！絶対会わせてね！」

ヤツハはとても嬉しそうに言った。

夕刻に向かう公園に、一人の楽しげな会話が響いた。一人共、とても輝いた笑顔をしていた。

一方その日、シリウはサクを訪ねていた。

サクは、動武道場で汗を流していた。旅から帰ってきてから、訓練に余念が無い。動かすにいられない性格もあるのだろうが、一番は、ガラオルの件だろう。

学校に戻ってきた時、報告の中にガラオルの件は入つていなかつた。サクたち四人だけの胸に秘め、次の行動のために自分が出来ることをすることに皆で決めた。サクたちがガラオル討伐の為に動いているということは、誰にも内緒だ。

シリウはストレッチをするサクに近寄った。気付いたサクは動きを止め、汗の滲んだ顔を上げ、シリウと分かると健康的に微笑んだ。

「おう、シリウ！元気でやつてるか？」

昨日のナトウとの乱闘騒ぎで負った頬の怪我が、大きなバンドエイドで手当てされている。シリウはそれには触れず、いつになく真面目な顔でサクに話し掛けた。

その数分後、動武道場は喧騒に包まれた。

サクとシリウが殴り合いを始めたのだ。

普段仲の良い二人が……しかもいつも温厚なシリウがいきなり喧嘩を始めたとあっては、生徒達も戸惑いを隠せなかった。ざわつ

き、手も出せなくて取り囲む生徒たちや、教官を呼びに走っていく生徒。

しばらくして動武道の教官サラライナが駆け付けたときには、二人は殴り合いも終えて武道場の真ん中で並び、大の字になつて寝転んでいた。その顔は、二人ともどこか満足した表情だつた。傷だらけの体で手足を投げ出したまま、サクは天井を見ながら言つた。

「分かつた！ シリウに任せる！」

シリウは同じように天井を見ながら微笑んだ。

「ありがとう、サク。必ず目的を果たしてきます」

「お前なら出来るさ！」

サクはシリウを見てにっこり笑い、彼も汚れた眼鏡で笑つた。取り囲む生徒たちやサラライナ教官は理解が出来ず、ただ呆然と見ているだけだった。

突然の決意表明！

翌日、カイルはシリウを訪ねた。相変わらず図書室で書物の山に隠れるようにして調べものをしているシリウの背中に、カイルはそつと近づいた。そして……

「？ これは？」

シリウは手元にそつと置かれた小さな紙袋を見た。そして驚いたように振り返った。

「別に……えっ！ シリウ、その顔は……？」

思わず目を丸くして言うカイルに、昨日の乱闘で頬が腫れて額にもアザを作っていたシリウは、調べものをする手を止めて苦笑いをした。

「いえ、これは、何でもないんです。それよりコレ、開けてもいいですか？」

「…………うん……」

怪訝な顔をしながら小さく頷くカイル。シリウは嬉しそうに紙袋を手に取り、丁寧に封を開けた。そして手を差し込み取り出したのは、カイルのこれまでの雰囲気からは似つかわしい、かわいらしくプリントがされた眼鏡拭きだった。

「おお！」

シリウの頬が緩んだ。

「これを、僕に？」

見上げて微笑むシリウに、カイルは頬を赤らめて言った。

「勘違いするなよ！ サクの誕生日だからプレゼントを買つって、昨日ヤツハに町へ連れて行かれて……そのついでだからな！ ついで！」

カイルはそう言い捨て、そそぐと図書室を出よつとした。

「カイル！」

呼び止められて立ち止まつたカイルが振り返ると

「カイル！」

「ありがとう。 大切に使いますね」

と、シリウは素直に微笑んだ。 カイルは照れたように頬を赤らめ
「何の傷か知らないけど、早く治せよ…」

とだけ言つと、ブイツと踵を返して図書室を出ていった。 シリ
ウはふつと笑つて、それから愛おしい表情で手に納まっている眼鏡
拭きを見つめた。 そしてすぐに振り向くと、カイルが出て行つた
図書室の扉を見て切ない表情をした。

その翌日はサクの十六歳になる誕生日だった。

だが、カイルを引つ張つて町にまで行き、プレゼントを買ったヤ
ツハの心境はそれどころではなかつた。

「シリウー、『卒業』するつて、どうこいことよー。」

突つ掛かるヤツハに、シリウはされるがままになつていた。 目
を吊り上げているヤツハの少し後ろには、黙つて立つカイルがいた。
ソラール兵士養成学校では、卒業する時期も自分で決める。 自
分の力量に限界を感じたとき、将来の職業が決まったとき、自分に
満足感を得られたとき、その理由はさまざまであり、それを尋問さ
れることもない。 卒業したいと思つたときが、その生徒の卒業す
る時期なのだ。

ヤツハは、朝の集会でファンネル校長が発表した卒業希望者の名
前の中にシリウの名前があつたことに驚き、カイルを連れてシリウ

に理由を聞いただそうとしたのだ。

「なんで卒業なのよ？　まだやることはあるはずよー。」

「だからです」

シリウはサクに殴られ腫らした頬のまま、真面目な口調で言った。
「まだやるべきことはたくさんあります。　けれど、口元に居ては限界があるんです」

「……どうこうこと？」

ヤツハはひとまずシリウの胸ぐらから手を離した。　シリウは少し襟を正すと、眼鏡を指先で上げた。

「図書室にあるどんな優秀な書物にも、ガラオルの行方は載っていないません。　どこかで力を溜めているかも知れない。　もしかしたら、もつと大きな力を手に入れているかも知れない。　それを知るには、自ら外に出て情報を得るしかないのです。　長い外出をするのであれば、学校に申請しなくてはならない。　そこで、僕たちのやううとしていることを知られるわけにはいかないでしょう？　だから、卒業して自由の身になるしかないんです」

淡々と話すシリウ。　ヤツハは震えながら後退りした。

「なんで……よ？　なんでそんなこと、簡単に決めちやうのよ？」
ヤツハはゆっくりと首を横に振りながら、信じられないといった風に呟いた。　そして堰を切ったように

「カイルはっ！　カイルはどうなるのよ？　捨てて行くつもりなの？」

と叫んだ。　カイルは黙つて立ち尽くしていた。　もはや言葉もないという表情で、ただじつとシリウを見つめていた。

「あんまりよ！」

シリウの答えを待たずに叫ぶヤツハの瞳からは、涙が溢れだしていた。

その時

「オレは構わねえよ」

とサクが現れた。　その顔はシリウと同じように頬を腫らし、体

のあちこちにアザが出来ていた。シリウよりもひどいほどの傷だらけの顔には、いつものくつたくない微笑みが浮かんでいた。

「サク、その顔……じゃあ、シリウのそれも……？」

ヤツハとカイルは驚いた顔で一人を見比べた。サクは

「オレも最初は理解出来なくて、思わず一発殴つちまつた。その後、拳で語り合った結果がこれだ！」

と、にっこり笑って頬の傷を指差してみせた。シリウは静かに俯いた。

「オレは頭が悪いから、シリウみたいに難しいことは考えられねえし、出来ねえ。だから、オレに出来ねえことは、シリウに任せることにした」

ヤツハは俯いて唇を噛んだ。その後ろから、カイルが呟いた。

「分かった……」

驚いてヤツハが振り向くと、カイルがその場を離れようとしていた。

「カイル！ どこに行くつもり？」

引き止めようとするヤツハに、カイルは無表情で答えた。

「シリウが決めたことだ。好きにしたらい。俺も忙しい。

授業があるから」

そう言つて小さく手を振つて踵を返すと、ヤツハの悲痛な引き止めも空しく、カイルはその場から去つた。ヤツハは再びシリウとサクを交互に見ると、睨むように顔を歪ませ、叫ぶように言つた。

「皆、馬鹿よ！ もう知らないっ！」

そしてヤツハもまた、どこかへ走り去つてしまつた。その後ろ姿を見ながら、サクが静かに言つた。

「シリウ、お前はカイルのどこに行つてやれ。どうせ何も言つてなかつたんだろ？」

シリウはその意外にも冷静な様子のサクを驚いたように見つめた。

「ヤツハのことはオレに任せろ」

サクはシリウに笑つてみせた。それは思いがけなく頼りがいの

ある表情だった。

「では……お願ひします！」

シリウは頷くとサクの肩を信頼を寄せた手で叩き、走りだした。

それぞれの説得

「こんな所にいたのか！」

ヤツハは校庭の隅にある花壇に隠れるようにうずくまっていた。後ろから明るい声をかけたサクの息が上がっている。ヤツハの事を、校内中ずっと探し回っていたのだ。サクは続けてヤツハの背中に何か言い掛けたが、気配を察知したヤツハの方から口を開いた。

「皆、何考えてるのか分かんない……」

涙声のヤツハ。顔を見なくても、今の今まで泣いていたのはサクでも気が付いた。サクはため息を一つついて、優しく声をかけた。

「あまりシリウに心配かけるなよ」

「心配かけてるのはそっちじゃない！ 皆バラバラになっちゃうのよ！ ……っ！」

ヤツハは振り向いて睨み、今こそ思いのたけを吐き出そうとしたが、思わずその口がつぐんでしまった。サクの表情が、いつになく固くシリアスだったからだ。

「じゃあ、お前が行けるのか？」

その言葉に、ヤツハは何も言い返せなかつた。

「シリウだからやることなんだ。オレたちはオレたちで、ここで出来ることをするしかないんだ」

サクの口調からは、静かながらも説得力があつた。ヤツハはじつとサクを見つめていた。

「シリウは、何も学校から出たいわけじやねえ。オレたちと離れて、淋しくないわけがねえ。だけどそれよりも大切なものがあるから、シリウは旅立つことを決めたんだ」

諭すように言つサクの言葉を聞き、ヤツハは再び俯いて涙を拭いた。サクはそつとヤツハの横に座ると、同じように膝を抱えた。

「シリウが居なくなるのは、オレも寂しい。けど、信じられなきや仲間じゃねえよ……」

「仲間……」

ヤツハはサクを見つめた。強い眼差しをしているサクの横顔から、どこかで切なさがにじみ出ていた。それでもシリウを送出そうとしていることに、心を打たれていた。信じて送り出すことも仲間の役目……。だがヤツハには、心に大きく引っかかることがあった。

「サク……でもカイルは……」

ヤツハは同性として、友人として、カイルの心境が心配でならなかつた。カイルはシリウの事が好きなのだ。はっきり言わなくとも、それくらい分かる。

サクは大きく頷いた。

「大丈夫さ！ あいつだって立派な男だ！ いつまでもクヨクヨしてたら、オレが一発ぶん殴ってやるぜ！」

『違うの……！』

ヤツハは勢いで口から出そうになつた言葉を飲み込んだ。本当のことは、カイル自身から告げるべきだ。ヤツハは必死に黙つているしかなかつた。

サクは、それに、と前置きして

「ヤツハの笑顔、見たいからさ。オレはオレで頑張るからよ！」

サクは照れたように指先で鼻を擦つた。ヤツハは、予想もしていなかつた言葉に思わず頬を赤らめて俯いた。熱くなる心に、ヤツハは複雑な心境を抱いていた。自分だけこんなに幸せを感じていいのだろうかと。心にカイルの姿が蘇つていた。ヤツハは複雑なまま、傍らに置いてある袋に手を伸ばした。

不意にサクの頭がふわりとした感触に包まれた。

「？」

触れると、帽子を被らされていることに気付いた。

「なんだ？」

手に取ると、真横に赤い羽根がアクセントになつてゐる紺色のツバ付き帽子だつた。一昨日カイルと町へ出たときにヤツハが買つた物だ。

帽子の触れ書きには『ヴァンドル・バードの羽根付き帽子』と書いてあつた。

ヴァンドル・バード自体が伝説上の生物なのに、羽根などが手に入るわけがない。売り文句なのだろうが、サクなら素直に喜んでくれるだろうと、ヤツハが決めた物だつた。

「こんな時に何だけど……サクの誕生日でしょ、今日？」

サクは、たつた今思い出したように目を丸くした。

「！ そうだつた！ ケーキ食つ日だつ！」

ヤツハは思わず吹き出した。

「もう、サクつたら……」

サクは満面の笑顔で

「サンキューな！」

と、再び帽子を被つた。

風に揺れる赤い羽根を見つめながら、ヤツハの中で、少しだけ落ち着きを取り戻していた。シリウが居ない間、カイルを守れるのは自分だけだと感じていた。

「やはりココに居たんですね？」
シリウはカイルの背中に言つた。授業に出るなどと嘘を言つて、カイルは行方をくらませていた。

それを知つた時、シリウは真つ先にこの場所が頭に浮かんだ。案の定、カイルは屋上の貯水タンクに掛かる鉄梯子に座つて膝を抱えていた。

ここは、シリウが初めてカイルを見かけた場所だ。そして、自

分たちの仲間にならないかと勧誘した場所もある。

シリウはそつと近づいた。 カイルは気付いているはずだつたが、膝に顔を押しつけたまま微動だにしなかつた。 シリウは気まずそうにカイルの隣に立つた。 ちょうど長身のシリウの目線とカイルの高さが同じくらいになつた。

「止めても行くんだろ?」

俯いたままで、カイルが言つた。 シリウは少し俯いて「はい」

とだけ言つた。 しばらく間があつて、カイルの小さな咳き声が聞こえた。

「皆……勝手に離れて行くんだ……」

シリウはそつとカイルを見た。

「カイル……僕は - -」

その言葉を遮るように、カイルは梯子から飛び降りてシリウに抱きついていた。 首筋からカイルの押し殺した泣き声が聞こえる。「もう、誰かと別れるのはいやだ! 一人に……しないで……!」「カ……ミール!」

シリウは思わず抱き締め返し、カイルの本当の名前を口にした。カイルはより一層シリウにしがみつくように力を入れた。

しばらくそうしていた後、フッとカイルの力が緩み、その体はゆっくりとシリウから離れた。

シリウは俯いているカイルの頬を両手で優しく包み、自分に向かせた。 カイルの目は真っ赤に充血し、涙がまだ残っていたが、素直にシリウの目と合わせた。

「カイル……僕は、僕にしか出来ないことをやらなきゃいけないと思っています。 分かってくれますか?」

カイルはじつとシリウを見つめ、そして小さく頷いた。

「そんなこと分かつてる……シリウが考えなしで動くほどバカじやないことくらい……」

シリウがホッとした時、カイルは、だけど、と続けた。

「約束して……必ず、帰つてくると……」

シリウは切ない顔で見上げるカイルに頷いた。

「必ずカイルを迎えに来ます」

シリウの両手に包まれたカイルは目を閉じ、シリウはその唇にそつと自分の唇を合わせた。

一瞬か……果たして長い時間がと思われた口づけの後、シリウはカイルにもう一つ約束をした。

「すべて終わつたら、今度こそ、『デート』しましょうね」

カイルは真っ赤な目で小さく笑つた。

許せる涙

数時間経ち、カイルはまだそこにいた。 梯子に座つて一人で空を眺めながら、夜風に髪を梳いていた。 静かに屋上の扉が開き、ヤツハが訪れた。 カイルはそれに気付くと、ゆっくり振り向いた。

「ヤツハ、どうした、それ？」

カイルは囁くように言った。 ヤツハの目は赤く泣き腫らしている。

「そういうカイルだつて」

言われたカイルも同じように赤い目をしていたが、だいぶ落ち着きを取り戻しているような穏やかな表情をしている。 ヤツハは梯子に上るとカイルの横に座つた。

「気持ちいい風ね……」

「ここにいると、気持ちまで風に吹かれるようで、自分さえも忘れそうになる。 考え事をする時は、いつもここで夜空を見つめるんだ」

カイルは夜空を見上げたまま、そつと目を閉じた。 ヤツハの栗色の髪も、風に揺れている。 ヤツハは静かに言った。

「あたしね、考えてたの」

「……」

カイルは目を閉じたままでヤツハの言葉を待っていた。

「あたし、やっぱリシリウを止めるわ」

カイルはゆっくりと目を開けた。

「シリウは、カイルの仇であるガラオルを倒すのと同時に、あたしの父親を助けようとしてくれてる。 そんな魔法みたいな術を探そうとしてる。 それはとても嬉しいことだわ。 だけど、皆がバラバラになるのは嫌……。 サクは『仲間なら信じる』って言つたけど、あたしは、危険を冒してまでして欲しくないの！」

カイルはヤツハの話を聞きながらじっと夜空を眺めていた。

「だからあたし、シリウに、行くのをやめるよつて言つた。」

「ヤツハ」

優しい声でカイルが口を開いた。

「あいつが、そんな理由で考えを変えると思つか？」

「それは……だけど……！」

ヤツハは悲痛な顔をして呟いた。 ヤツハも、シリウが生半可な気持ちで決めたことではない事くらい分かっているつもりだ。 だが、それよりも強い思いがヤツハの心にはあった。

「大好きなカイルとシリウが離ればなれになるのなんて考えられない！ それに……」

ヤツハは息を吸い込み、言葉を吐き出すように言った。

「死んじゃつたらどうするの？」

その途端、カイルは振り切るように勢いよく梯子から飛び降りた。そしてヤツハに向かい合い、諭すようにゆっくりと話した。

「最初からそんな暗いこと考えてどうするんだよ？ それにヤツハは、シリウがすぐ死ぬような、そんな弱い奴だと思ってんのか？」

ヤツハは小さく首を横に振った。 カイルはヤツハの両肩を強くつかんだ。

「シリウが死ぬわけない！ 必ず帰つてくる！ 信じて、俺たちはココで強くなるんだ、もつと！ シリウが帰つてきたとき、自信持つて一緒にガラオルを倒しに行けるようにな！」

ヤツハはカイルを見た。 意外なほどじっかりした瞳に、ヤツハの心が和らんだ。 カイルを安心させようと来たつもりが、逆にカイルに励まされてしまった。 しかし

「でも……」

カイルの眉が歪み、唇が震えて、思わず噛み締めた。 静かにひとつ息を吸うと、震える声で言った。

「今は、泣いてもいいよね？」

カイルはヤツハに抱きついた。 やはり気持ちは押さえきれなかった。 満点の星空に見守られながら、二人は抱き合つて泣いた。

わよなは言わない……卒業

ソラール兵士養成学校卒業希望生たちは、最後の試験に挑む。これに合格しなければ、卒業を認められないのだ。今回の卒業希望者は、シリウを含めて五人居た。次々に名前を呼ばれ、試験に臨んだ。普段の実技試験よりも難しい卒業試験に苦戦しつつも、どうにか卒業の道を手にした。闘技場の中は興奮の熱気で溢っていた。

残すはシリウ一人となつた。

「シリウ・ソム・イクシード。これより卒業試験を行う！ 闘技場中央へ！」

試験官のアナウンスに従い、シリウは闘技場の中央まで歩み行くと、ゆっくりと周りを見渡した。

闘技場を取り囲む傍観席には、卒業試験を見守る生徒たちで埋まっている。勿論その中にはサクたち仲間もいる。

三人共に余裕の表情で座っていた。皆、シリウの勝利を信じているのだ。

シリウは仲間達に見守られている安心感、そして、最後の闘技場を名残惜しむかのようにゆっくりと仰いだ後、指先でそっと眼鏡を上げた。

「対戦相手、前へ！」

審判員が言うと、闘技場の正面にある大きな鉄格子が重い音を立てて上がり始めた。シリウの前に、シャルサム教官によつて召喚された幻獣が姿を現した。

全身を厚い殻に包まれ、節足動物のような形をした巨体から突き出る一本の触覚のような先には、小さな球体が揺れている。四本の長く頑丈そうな足が、地面を突き刺すように立つていて。

「あなたが最後の相手ですか」

シリウの頭の中で数々の情報が動きだす。

「ガラナサの類でしょうか。属性、無し。弱点、特に無し。対応するすべは、速さ。さすがに卒業試験ともあれば、少々厄介ですね……」

シリウはあまり面倒でもなさそうに表情を変えぬまま、身構えた。コラコラと動いていた幻獣の球体が、シリウを捉えたかのように止まつた。シリウの三倍はあるうかという巨体から、堅い甲羅に包まれた太い足が振り下ろされた。

「速い！」

生徒の誰かが叫んだ。

卒業試験に出現する幻獣は、普段の試験よりも数倍強く、クセの強い幻獣が召喚される。卒業希望者の心を試すことと同時に、外の世界へ出ることへの背中を押すためだ。普段の実技試験に出でる幻獣と似た姿をしていても、その実力は予想外ことが多い。幻獣が振り下ろす足が土煙を巻き上げる中、シリウは涼しい顔で軽々とその攻撃を避け続けている。

「すごい……でも逃げ回ってるだけじゃ……」

生徒たちは息を飲んでシリウを見守っていた。

堅い甲羅には剣も通じない。切っ先を手入れしている剣だとて、小さく火花が散る程度で傷ひとつ付けられない。

全身をドス黒い鎧で覆われた幻獣は、今日の卒業試験対戦相手の中では屈指の強敵のようだった。シャルサム教官も、学校一優秀な生徒が卒業とあつて、力も入っているのだろう。

シリウは攻撃を避けながら、冷静に様子を見ていた。

「どうやら、関節の辺りはガードが弱そうですね……」

シリウは堅い甲羅を繋ぐ関節に狙いを定め、足の付け根を目がけて懷に忍ばせておいたナイフを投げた。風を切り裂いて放たれたナイフは、苦い音と共に関節を貫通した。同時に、今までせわしなく動いていた足の動きが止まつた。

「当たり、でしたね！」

シリウは動きの止まつた一瞬を逃さず、幻獣の体を駆け上がると、小さな頭の首根っこに剣を突き立てた。

「いきます！ 針劍華！」
シンケンカ

シリウの気合と共に剣を通じて念が送り込まれ、その身体は内部から膨らみ始め、幻獣はまるで風船のように破裂した。

「わあああああっ！」

粉々に砕け散った殻の鎧と体液が降り注ぐ中、歎声と悲鳴が鬪技場を包んだ。

いつもと変わらぬ表情で、けれども少し満足げな柔らかい目で見上げるシリウの視線の先に、笑顔で喜ぶサク、ヤツハ、そしてカイルの姿があった。

「ゆつくりしていけばいいのに……」

カイルは開け放たれた部屋の扉に寄りかかって、身仕度をしているシリウの後ろ姿を見ながら撫然として言った。だが、長く居ればその時間だけ別れが辛くなる。それは二人とも同じ気持ちだった。だから、カイルの言葉もただの口上文句でしかなかつた。

シリウは無言で少しだきめの斜め掛けカバンに少しの着替えと貴重品、書物などを丁寧に詰めていた。

その時、廊下の方が賑やかになつた。

「？」

カイルが振り向くと、何人かの女子生徒が周りを気にしながら廊下を歩いてきていた。本当は、異性の寮に入るのは固く禁じられている。内緒で忍び込んだのだろう。カイルの姿を見ると気まずい表情で立ち止まり、仲間同士で顔を見合わせた。状況を察知したカイルは微笑み、優しく声を掛けた。

「シリウなら、中にはいるよ

小さく部屋の中を指差すカイルに、彼女たちは恐る恐る

「あの、このことは誰にも……」

と懇願するので、カイルは笑顔で頷いた。

「分かってる。 誰にも言わないよ」

彼女たちはホッとした顔で、そつと中を覗いた。

「シリウさん……」

振り向くシリウに、彼女たちはそれぞれに餞別の品を手渡した。

「どうかお元気で……」

「ありがとう。 あなたたちも、お元気で

「私たちも、頑張ります！」

「はい。 無事に卒業出来る様に祈っています」

各自に声を掛けられ、その一人一人に礼を言つシリウ。 彼女たちは名残惜しむようにゆっくりと後退りしながら扉の所まで行くと、小さくお辞儀をして部屋を出ていった。 カイルは足早に帰つていくその後ろ姿を見送りながら、笑つた。

「シリウ、あんな可愛い子たちに見送られて、泣くんじゃないよ？」
すると、シリウは驚いたような顔を上げた。

「泣くわけないじゃないですか！」

珍しく不機嫌そうに言つて、貰つた品々を一旦テーブルに置くと、カイルに近づいた。

「僕が泣く時は、カイルから幸せが失われた時です。 僕はこれら、あなたの幸せを取り戻しに行きます。だから今は少しだけ、我慢してくださいね」

シリウはカイルが寄りかかる扉の柱に手を置いた。

「シリウ……」

見上げるカイルに、シリウはそつと唇を落とした。

「僕を信じてください。 どうか、悲しまないで。 僕にはそれが、

一番の心残りなんです」

「信じてる。 僕は、シリウにたくさん助けられた。 今度は俺が助けられるように強くなるから。 シリウの方こそ、俺を信じて

「信じてる。 僕は、シリウにたくさん助けられた。 今度は俺が助けられるように強くなるから。 シリウの方こそ、俺を信じて

カイルは安心させるように微笑んで見せた。

数分後、人の気配が無くなつて静まり返つたシリウの部屋を、カイルは一人で眺めていた。シンプルな部屋の一角にあるばかでかい本棚には、たくさんの本が立て掛けられている。シリウが残していったものだ。必要最低限の物だけを持って、シリウは出いでつた。

「手紙、書きます」

と、わずかな希望だけ残して……。

学校の門の辺りでは、人だかりが出来ていた。皆、シリウを見送るために集まつたのだ。

「大げさですねえ……」

門に近づきながら、シリウは苦笑いをした。その人だかりに入ると

「元氣でな！」

「あまり無理するんじゃないぞ！」

と教官たちがシリウの肩を叩いて激励する。

「お前が居なくなつたら、この学校のレベルも一気に下がるよ！」

「シリウ先輩！ どうかお元氣で！」

生徒たちもそれに言葉を掛ける。中には、悲しさからか寂しさからか、涙を浮かべる女子生徒たちもいる。

ファンネル校長がシリウを見上げ、誇らしげに微笑んだ。

「シリウ、君は学校の誇りじゃ！ 数々の試練をよくぞ耐えぬき、乗り越えたな！ その経験を活かして、立派に生きていくことを願つてあるぞ」

シリウは勿体ない、と謙遜し

「僕は、この学校で学ぶことが出来たことを感謝しています。お世話になりました」と微笑んだ。

「いいのかい?」

と言つたのはミランだつた。眼鏡の奥で、瞳が心配そうに揺れている。たくさんの思いがこもつたその言葉に、シリウはコクリと頷いた。

「人にはそれぞれに、思うところがあるのです。それは、ミラン先生も同じでしょ?」

それはカイルのことなのか、シリウには話していないはずの自身の息子のことなのか、シリウの表情からは読み取れなかつたが、ミランはシリウの決意だけは感じ取れた。

「分かつた。体には気を付けな!」

口調は変わらなかつたが、いつもと違つていたのは、くわえ煙草が無かつたことと、まるで子供を送り出すような優しく和やかな笑顔だつた。

「シリウ!」

ヤツハが駆け寄つた。その目にすでに、涙が溢れそつになつてゐる。

「カイルが見つからないの……学校中探したけど、ビニに居ないのよ! シリウを見送るつていう大事な時なのに!」

切羽詰り焦つた様子で言うヤツハに、シリウは微笑んだ。

「カイルには、今さつき挨拶をしてきました」

ヤツハは少し驚いた顔をしたが、すぐに安心したように息をついて微笑んだ。

「そうだつたの……良かつた!」

「シリウ!」

サクが近づいてきてシリウの前まで来ると、ゆっくりと拳を差し出した。シリウは微笑みながら自身の拳を握り、サクのソレにコツンと当てた。

『頼んだぜ！』

『はい』

田で会話をするように笑顔を交わし、シリウは学校の門を一步だけ出た。そしてゆっくりと振り向き

「皆さん、お元気で！」

と高く手を挙げると、踵を返した。

誰もシリウの行き先を聞かない。

それは、この学校の昔からの風習だ。

もう会えないかもしないし、もし次に会ったときは、相対する存在になっている……そんなことも、ざらにあるからだ。自分の力を過信して、世間に飲まれ死んだ生徒たちも少なくはない。見送る人々の瞳には、卒業し自分の願う道を生きることができるこという憧れと、荒波に向かう背中を誇りに思う輝きが宿っていた。

再会。シリウとラトキンの今

シリウからの手紙は、一ヶ月後に届いた。

そこには、自分はいたつて元気だということ、順調に自分が思う情報を集めているということ。そして、サクやヤツハ、カイルがしつかりと訓練しているかどうかを心配しながら簡潔に締められていた。

寄り添うようにシリウからの手紙を読んだ三人は、安心した笑顔を浮かべた。

「シリウも頑張ってんだ。オレらも遊んじゃいられねえよな！」

嬉しそうに言うサクに、ヤツハとカイルは顔を見合させて笑った。

「サクつたら、昨日だつてナトウと喧嘩してたくせに！」

そう言いながら、ヤツハは絆創膏の貼られている鼻先を指先で弾いた。

「な、なに言つてんだよ！ あれも立派な訓練だよ！」

慌ててふんつとそっぽを向いて拗ねるサクに、カイルは明るい声を上げて笑った。

カイルはこここのところよく笑う。

学校の中では相変わらずクールでいて、そんな笑顔を見せるのはサクやヤツハの前だけの事だったが、そんな笑顔を見ながら、サクやヤツハも内心ホッとしていた。

シリウが学校を出てからしばらくの間はカイルもさすがに落ち込んだ様子でいたし、気遣う一人の語り掛けにも空笑顔を見せていたが、やがて日が経つにつれてその表情にも明るさが戻ってきたのだ。

三人は何かにつけて一緒に行動し、次の年のグループ試験にも余裕でクリアした。もはや彼らに適うグループは、学校の中には他には居なかった。実力、精神共に、確実に成長していたのだ。

やがて三人は、力ナン山で偶然見つけた小さな湖の湖畔でくつろ

ぐようになつた。木々に囲まれた湖は学校からも見えにくく、隠れるようにのんびりとした静かな時間を楽しめた。

そんなある日だつた。

いつものように湖の畔でそれぞれに時間を潰していた三人は同時に、背後に気配を感じた。

「誰だつ！」

サクが飛びよつて立ち上がって身構えた。ヤツハとカイルも緊張し、身構えた。

ガサガサと近くの木の枝が揺れ、三人の前に静かに何者がが降り立つた。同時に、三人は驚いて目を見開き、サクがその人物の名を呼んだ。

「ラディン！」

彼はゆつくり立ち上ると、笑顔を見せた。

「よつ！ 元気そだな！」

ピッと片手を挙げてにんまりするその顔は、何も変わつていなかつた。

変わつた所と言えば、黒いチリチリの髪の毛が肩下辺りまで伸びたことくらいか。くつきりとした二重の黒い瞳も、明るく元気な力を放つてゐる。衣服から覗くがつしりした筋肉質な手足も、相変わらず陽に焼けたように健康的だ。

「ラディン！ お前、今までどこで何やつてたんだよ？」

サクが嬉しそうに飛び付き、肘鉄を食らわせた。

「ぐあつ！ なにすんだ、このやろつ！」

ラディンとサクは湖畔を転げまわつて、会えなかつた時間を感じさせない様子でふざけあつた。それを見て、ヤツハとカイルは笑つた。

「ホントに久しづりだな！ いきなり会いに来るなんてズルイぜ！ 来るなら来るつて連絡くらいしろよな！」

後ろからラディンの首に腕を巻き付けて締め上げながら、サクが言つた。すると、大げさに苦しがつていたラディンの様子が少し変わつた。

「どうした？」

氣付いたカイルが尋ねると、ラディンはサクの腕をそつと緩めて振り返り、三人を眺めた。

「実は、シリウのことで来たんだ」

その一言で、三人に緊張が走つた。

「シリウのこと、知つてゐるのか？」

サクが驚いて声を上げた。カイルとヤツハも、じつとラディンを見つめている。ラディンは頷いて、落ち着かせるように少し微笑んだ。

「とにかく話す。聞いてくれ」

三人は湖畔に腰を下ろして、ラディンの話を聞いた。

「半月くらい前の話だ……」

ラディンは遠く思い出すよつて話し始めた。

ラディンはサツフル村でサクたちと別れた後、行く当ても無く山を越えていた。そして偶然たどり着いたゴロナゴという山あの町で、探偵事務所で働きながら武道場で剣術を習つ毎日を過ごしていた。

ある日ラディンは、請け負つた仕事【密偵】を失敗して追われることになつた。状況は多勢に無勢で、ついにラディンは路地裏に追い込まれ、追つて來た屈強な男たちに囲まれた。あわや命はこれで終わりかという時、ラディンは目の前に光を見た。

青い炎の向こうには、細身で長身の男が立つてゐた。

「な、なんだこの青い光はっ？」

「熱い！なんかヤバイな！逃げるぞ！」

あつとこう間に散つていいく男たちを余裕の表情で見送ると、男はゆっくりとラティンに近づきながら

「大丈夫ですか？」

と手を差し伸べた。そしてラティンの顔を見た途端、男は驚いた顔をした。

「あ、あなたは！」

「あんたは！シリウ？」

お互いがその姿を見て驚いていた。ラティンはシリウに手を引かれて立ち上がりながら「なんでこんな所に？」と目を丸くした。

「ま、偶然ここに来たというところです」

微笑むシリウに、ラティンは苦笑した。

あの時……

ラティンは何も言わずに姿を消した。カイルにだけ、別れの言葉を伝えた。そして、あらうことか口づけをした。

その事を、田の前に居るシリウは知っているのだろうか？

自分の事をどう思つているのだろうか？

ラティンの心を読むように、シリウは優しく微笑んだ。

「会えて良かつた。突然何も言わずに居なくなつてしまつたから、ずっと心配していたんですよ」

『どうやらカイルとのことは深くは知らないみたいだ……』

ラティンは心の底でホッと一息をつくと

「こんな所で立ち話もなんだし、俺の部屋に来ないか？ 旅をしてきたのなら、疲れてるだろ？ 少し休んでいけよ。話も聞きたいし。な？」

と自分の部屋に招いた。そして久しぶりの再会の喜びを分かち合い、お互いの話を始めた。

「俺はあれからじばらく山や森の中で修行していたけど、一人じゃ限界があるってことに気付いて、どこか修行が出来る場所を探して彷徨つて、偶然この町に着いたんだ。ゴロナゴは静かな所だし、武術も盛んだってことを聞いて、ここで働きながら武術を学ぶことにしたんだ」

ラディンは久しぶりの友人に、とても嬉しそうに話した。シリウは出されたお茶を飲みながら興味深く聞き入っていた。何も告げずに姿を消したことにも、何も言及しなかった。

「それで、あんたはなんでこんな所に？ ヴィルスの兵士養成学校に行つてたんじゃないのか？」

一通り話した後でラディンが不思議そうに尋ねると、シリウは微笑んだ。

「卒業しました。それで自由の身になつたので、ガラオルの情報を収集しながら旅をしているんです」

手荷物は肩に掛けた大きめの鞄のみ。腰には短剣を装備しているくらいで、軽装だ。変わった所といえば、少し髪の毛が長くなつた位で、眼鏡をかけた知的で纖細そうな雰囲気は変わらずだった。『ガラオル』の言葉に、ラディンの心に熱がこもつた。

因縁深き相手。昔は手下として働いていたが、今は敵対する感情しかない。その上、ラディンが守りたい相手カイルの仇でもあるのだ。

「ガラオル……」

ラディンが強い瞳で咳くと、シリウは固い表情で頷いた。

「サクもヤツハもカイルもまだソラール兵士養成学校に残つて、自分を高める訓練をしています」

「そつか……俺も頑張んなきやな！ でもここでは、ガラオルの噂は全然聞かねえ。俺が世話になつてゐる探偵事務所も、しけた依頼ばかり受けるだけだし。だけど、その気になつたら何か情報が見つかるかもな。この町は商業の町としても有名らしいから、流通がさかんみたいだし、何らかの情報は流れてきてるかもしねえ」

そこまで話したラディンはふと自分の拳を握り、見つめた。

「……てことはあんた、カイルを置いてきたってことか？」

ふと投げ掛けた質問にシリウはフツと俯いたが、すぐに顔を上げた。

「カイルは大丈夫ですよ。 サクもヤツハも傍にいますし。 慣れた場所ですから、寂しくは無いはずです」

そういうシリウの顔は、やはりどこか心に引っ掛かるものがあったのだろう、小さな影を背負っているようだった。 だがラディンは、不謹慎にも心の中でガツツポーズをとっていた。

『じゃあ、もしかしたら俺にもチャンスあるかも知れねえ!』

「どうしました?」

首をひねるシリウに、ラディンは愛想笑いでごまかした。

「い、いや、なんでもねえ! それより、これからどうするんだ? しばらくここに居るのか? それともまた旅を続けるのか?」

シリウは頷いた。

「確かにこの近くにハアヤという小さな村があるはずなんですが、そこに行こうと思っています」

「そこに、ガラオルの情報があるのか?」

シリウはそれには答えず、手にしていたお茶を飲み干した。

「はあ。 美味しかったです。 ご馳走様でした。 ではこれで「おもむろに立ち上がり荷物を手に取るシリウに、ラディンは慌てて立ち上がった。

「お、俺も何か手伝おうか? この町にも少しは慣れてきた。 それに今は探偵事務所で働いてるから、裏の情報も手に入れられるかもしれないぜ!」

だがシリウは軽く手を挙げた。

「いえ。 ラディンは自分を高めるために訓練を続けてください。 もしかしたら、いざれは力を貸して頂くかもしれません。 では、突然会つたばかりにお邪魔してすみませんでした。 お仕事頑張ってくださいね」

微笑みながら優しく断つて部屋を出でこいつとするシリウス、ラ

ディンは何も出来なかつた。ただ一言

「無理すんなよ！」

と去つていく背中に投げることしか……。

ラティンの本郷の名前

「シリウは、そのまま出て行っちゃった」
ラティンは話終えると、ひとつ息を吐いた。

「ハアヤという村に何があるのかしら？」

ヤツハの呟きに、ラティンはそこなんだ、と指を立てた。

「ハアヤ村には黒い噂があつて、なんでも、魔女が住んでいるとか

……

「魔女？」

カイルが繰り返したので、ラティンは頷いた。

「確かにすぐ近くにある村なんだが、何か面白いものがあるわけでもないから観光に訪れる人もいないし、いつも霧だか雲だかに包まれてるっていうんで、『ロナゴ町も気持ち悪がつて閑』したがらないんだ。だから、噂のまま放つてあるってわけだ」

「……」

カイルの胸に、一抹の不安がよぎった。ヤツハがそれに気付き、カイルの肩を叩いた。

「きっと大丈夫よ」

「そうさ！ シリウを信じて今まで来たんだ！ ちゃんと手紙も送つてくれてるし、心配ないって！ な！」

氣遣うサクの笑顔に、カイルの表情が和んだ。深く信頼しあう姿を見て、ラティンは安心したように息をついた。

「あんたら、前よりずつといい顔してるよ！」

ラティンは立ち上がるど、湖畔に立つて水面を見つめた。

「シリウの事でナーバスになつてんじゃないかつて、正直心配してたんだ。おせつかいだったみたいだな

「まあな！」

「うわあっ！」

サクがいきなりその背中を蹴った拍子に、ラティンの体はバラン

スを崩して湖に落ちた。 拍子に、水しぶきが高々と上がった。

「「ラディン！」」

驚くヤツハとカイルの前で、サクもまた服のまま湖に飛び込み、腰までの深さの中でも慌てるラディンの腕を掴むと力任せに引き揚げた。

「いきなり何すんだよ！」

全身ずぶ濡れのラディンは、サクに向かって飛び付いた。二人は再び湖に沈み、ずぶ濡れで体を起こすと、同じタイミングで笑い始めた。

「オレたちはたくさん経験を乗り越えてきた。今あるのは、お互いに支え合つた結果なんだ。その辯は、ちょっとやそっとじゃ切れねえんだよ！」

サクは、たくましさを備えた笑顔で言い、ラディンに拳を差し出した。

「？」

きょとんとしているラディンにサクが
「なんだよ、お前もオレたちの仲間だろ！だからシリウのことを教えに来てくれたんだろう？」

と言うと、ラディンは照れたように鼻を擦り、自分の拳をサクのそれに突き当たた。一人が笑いあう様子を見ながら、ヤツハとカイルは顔を見合わせ、呆れたように肩をすくめると笑った。四人の笑い声が湖畔に揺れた。

「つたく……それにしても、いきなり突き飛ばすなんてひでえことするよな…」

やがて湖から上がったラディンは、おもむろに服を脱ぎ始めた。
「なつ！ 何してんのよ…」

頬を赤くして慌てて踵を返すヤツハに、ラディンは怪訝な顔で
「服を乾かさなきゃ、帰れねえだろうが！ 風邪ひいてもいいって

のか？」

と、少し震えながら脱いだ服を木の枝に引っ掛けた。湖畔では、カイルが薪を集めて淡々と火を起こし始めている。

「カイルは平気なのつ？」

と慌てた口調で言うヤツハに、カイルは「もう慣れた」と笑った。

「何言つてんだよ？ カイルも男だろ？」

とサクもそそくさと服を脱ぎながら言つた。いつも性格を表すかのように立つてゐる短い黒髪が、べたりと寝て零を垂らしている。

「あ、そつか！」

ヤツハの慌てた言葉に、ラディンが「カイルも脱げば？」

と笑つた。

「なんで俺が脱ぐんだよ！」

「ついでついで！」

「俺は濡れてないだろつ！」

「男同士なんだから、いいじゃん！」

サクも面白がつてカイルの腕を取ると、ラディンが嬉しそうにその裾を掴んだ。

「お前ら～～！」

カイルの声は怒りに奮え

「もう一回、頭冷やしてこいつ！」

と言つ怒号と共に、二人の体はまとめて湖へと叩き落とされた。大きな水しぶきが上がる前で、カイルは大きくため息をつき、その後ろではヤツハが大笑いしながら拍手を贈つていた。

「つたく……ひでえ」とするよな！」

再び岸に上がつた一人は、並んで火の前にしゃがみこむと大きな

くしゃみを連発した。

「自業自得だろ！」

と言いながら、不機嫌そうに薪をくべるカイル。 その様子を面白おかしそうに笑い続けるヤツハ。

「あなたたち、まるで兄弟みたいね！」

ヤツハの言葉に、サクとラディンは顔を見合せた。 そしてお互いに指を指すと

「「なんでこいつどつ！」」

と声をハモらせた。

「そういう所が、よー！」

笑うヤツハに、燐然としていたカイルもつられて笑っていた。

「つたく！ 勝手に言つてろ！」

ラディンは肩下まである縮れた髪の毛をひとつに束ねると、絞るように水を落とした。 水を大量に含んでいた髪の毛から雫が滴り落ちて、褐色の背中を滑り落ちる。 適度についた筋肉の盛り上がりは、今まで独自に訓練を続けてきた証なのだろう。 無駄の無い体を見事に作り上げている。

カイルはほんやりとその後ろ姿を眺めながら、突如ハッとした顔をした。

「ソルティヤ……」

その唇からこぼれ落ちた言葉に、ラディンはビクリと肩を震わせた。 そしてゆっくりカイルに振り向くと

「な、なんでその名前を……？」

と声を震わせた。 カイルは思わず洩れた言葉に驚きながらも、確信したように改めてラディンを見つめた。

「！ やつぱり……」

「何の話？」

ヤツハが興味深そうに寄り添つた。 サクも何事かときよとんとしている。 無言でカイルに食い入るように見つめられたラディンは、観念したように言った。

「ソルティヤ……俺の本当の名前だ」「なんだって？」

サクが飛び上がって驚いた。

「何で二つも名前があるんだよ？ 普通一つだろ？」

「納得出来ない顔で尋ねるサクに、ラティンは
「いや、【ラティン】っていうのは、俺が勝手に付けた名前なんだ」と苦笑いして頭をかきむしった。水しづきが周りに飛んだ。
「でも何で、そんな名前をカイルが知ってるわけ……？ カイルつて一体どんな情報網を持つてるのよ？」

ヤツハの問いに、カイルはラティンを見ながら呟くように言った。

「首の後ろに、カモメのような形のアザがある……」
その言葉に、ラティンは慌てて自分のうなじを押さえた。
「だ、だから何あんたが知ってるんだよ？ 誰も知らねえハズだぜ？」

驚きの眼差しで見るラティンの手をサクが取つて首の後ろを見ると、そこにはカモメのような形をしたアザがくつきりと浮かんでいた。

「本当だ！ カモメのアザがある！」

「カイル、なんで？」

驚きながら言うヤツハに、カイルはラティンに言った。
「俺は、お前の母親を知ってる」

「えっ？」

ラティンは目を見開いてカイルを見た。

「俺の……母親……？」

それつきり言葉を無くすラティンの前で、カイルはおもむろに立ち上がった。

「会いに行こう！」

そう言うカイルを見上げ、動けないでいるラティンの肩を優しく抱いたヤツハがカイルに尋ねた。

「えっ？ ラティンの母親は近くに居るっていうの？ すぐに会え

るの？」

サクもカイルを見つめて答えを求めた。カイルは微笑みながら頷いた。

「ああ。すぐに会える。行こう、ソルティヤ！」

その名前に、ラディンの肩が再び震えた。それに気付いたヤツハが見ると、ラディンは固い顔をしていた。

「ラディン……？」

「……ない……」

小さな声で何かを呟くラディンに、サクが言った。

「どうしたんだよ？ お前、自分の母ちゃんに会えるんだぜ？ 良かつたじゃねーか！」

サクも、母親に会うということはラディンにとっては幸せなことなのだと感じ、その背中を押した。

「俺は会いたくなえ！」

ラディンはサクとヤツハの手を振り払って、後退りした。

「？ なんでだよ？」

「お母さんに会えるのよ？ ずっと会えなかつたんでしょう？」
訳が分からず困惑するサクとヤツハ。カイルもまた、ラディンの意外な反応に戸惑っていた。ラディンは不機嫌さを体いっぱいに表して、叫ぶように言った。

「母親だと？ 俺はそいつに捨てられたんだぜ！ そんな奴に会いたいわけねえだろうが！ それに、その母親って奴は、俺に会ったがつててるのかよ？」

「いや、それは……」

カイルは言葉に詰まった。行方知れずの息子の話をしているミランの顔は、カイルには半ばあきらめているように見えた。カイルには、自信を持つてラディンの背中を押すことが出来なかつた。

その時

「自分の子供に会いたくない親が居るわけないじゃない！」
ヤツハが言った。

「どんな理由があつたのか分からぬけど、さつとラティンだつて会いたかつたはずよ！　ずっと一人で生きてきたんだもの。　ずっと寂しかつたはず！」

「くつ！」

ラティンは木の枝から生乾きの服を無造作に掴み取ると「あんたらに、一体俺の何が分かるつてんだよ！　放つておいてくれ！」

と言い捨て、走り去ってしまった。

「ラティンっ！」

三人はラティンの姿をあっけにとられて見送った。　我に返つた

カイルが

「ラティン待つて！」

と走りだした。

「カイルっ！」

ヤツハが引き止めると、カイルは悲痛な顔で振り返つた。

「ラティンのお母さんって……？」

「ミラン先生だよ。……俺、あいつのこと何も考えてなかつた……」

「謝らなきや！」

カイルはそう言つて踵を返すと、ラティンの母親の正体を知つて再び驚いている一人を残して、ラティンを追つた。

ラティンは、湖の反対側にある山肌には不釣り合いなほど大きな岩にもたれてうずくまっていた。心の中が複雑に入り交じり、息も荒く、しばらく落ち着けないままでいた。

そんなラティンの脳裏には、幼い頃の思い出が蘇つていた。

小さな山の麓にあるサウロパという村に、一人の元気な少年がいた。

両親は優しく、決して裕福ではなかつたが、毎日を心の豊かさで埋め尽くしてくれていたので、それほど不便さを感じることもなく過ごしていた。

少年は、黒髪に黒い瞳の両親とはまったく違つた、金のサラサラした髪の毛に茶色い瞳をし、肌は透き通るように色白だった。

その少年は「ソルティヤ」と呼ばれていた。

物心付いた頃から、ソルティヤは村の子供たちに苛められていた。両親とは髪の色も瞳の色も全く違う子供など居るハズがないと罵られ、「拾われ子」と笑つた。

だがソルティヤは自分を真っ直ぐに見つめ愛してくれる両親が大好きだし、愛していた。だから誰に何と言われようと、両親を疑うことはなかつた。

そんなある日、外で一人遊んでいたソルティヤが家に入ろうとすると、中から両親が話す声が聞こえてきた。それは小さな声だったが、何故だか胸騒ぎと共に気になつたソルティヤは、そつと扉に耳を付けた。

「あの子も十歳にならうとしている……そろそろ本当の事を話すべ

きかもしれないな……」

重苦しく低い声に、高く柔らかな声が答えた。

「そんな……ソルティヤは誰が何と言おうと私たちの子供です！あの日村はずれで泣くソルティヤに出会ったとき、子供が出来ない私たちに神様が与えてくれたのだと、あなたも喜んだじゃありませんか？」

「それはそうだが……」このまま本当の事を隠し通せると思つか？

実際あの子は、両親との成りが違うというだけで、心ない言葉を掛けられている。このままでは、ソルティヤが可哀想だと思わないか？

「でもあなた……」

二つの声は、それきり押し黙ってしまった。ソルティヤはどうしたらいいのか分からなくなり、激しい動悸と共に扉を離れた。

近所をあてもなく歩いていると、村一番のガキ大将ナルクと出くわした。

ソルティヤはナルクが苦手だった。

いつも一人以上の子分を従えて肩で風を切るよう歩く姿は、子供ながらに人を圧倒する気迫がこもっていた。子供たちは誰も逆らはないので、ナルクはすっかり王様気分だった。そんなナルクにとつてソルティヤは、格好の苛め相手だったのだ。顔を見るたびに蔑んだ目で見下し罵声を浴びせるナルクが、ソルティヤにはとても苦手な相手だった。

珍しく今日のナルクは一人だった。

夕刻近いので、家に帰る途中だったのだろう。だが子分がいてもいなくても、ナルクは変わらなかつた。

「おう、ソルティヤじゃねえか？こんな所で何やつてんだ？ やつぱり『うちの子じゃない』って追い出されたか？」

人目もばからず大笑いするナルクに、ソルティヤはいつも以上に胸が騒めぐのを感じた。さつき聞いてしまった両親の会話によ

つて、ソルティヤは何を信じていいのか分からなくなっていた。

ソルティヤの睨むような目に気分を害したナルクは、眉をしかめた。

「なんだ？ 何か不満でもあるのか？」

そう言いながら、握りこぶしを見せた。 太く褐色の腕は、数々の喧嘩を乗り越えてきた傷が幾つも刻み込まれている。 大抵の子供たちは、それを見せられると尻込みして何も言えなくなる。 ソルティヤも例外ではなかつた……

だが、今日のソルティヤは違つていた。 少し俯いて自身の両拳を握ると、ぎゅっと目を瞑つてナルクへと殴りかかつていつたのだ。

「うわああああっ！」

「なっ？」

突然ソルティヤが飛びかかつてきただので、面食らつたナルクは思わず尻餅を付いてしまつた。

「うわあああっ！」

ソルティヤはナルクに馬乗りになると、言葉にならない声を出しながらナルクの頬に拳を叩きつけていつた。

「つにするんだ、てめえ！」

ナルクもやられてばかりではなかつた。 一人は土煙をあげながら転げまわり、殴りあつた。

やがて日が暮れ、足を引きずりながら家の扉を開けたソルティヤを迎えたのは、いつもと変わらない両親の笑顔だつた。 それはすぐ、驚きの顔になつた。

ソルティヤの傷だらけの顔や体、ボロボロになつた衣服。 母親はソルティヤに駆け寄り膝まづくと

「一体これは……また苛められたのね？」

と涙目で言いながら、ソルティヤの腫れた頬を包んだ。 その手は、細く暖かかった。

「母さん……」

ソルティヤは、笑顔を作つて見せた。

「俺は、母さんの子供なんだよね？」

母親は目を見開いた。 次にソルティヤは奥に座る父親の顔を見た。

「父さんの子供なんだよね？」

ソルティヤを見つめる父親の顔が少し固くなつた。

三人は初めて作り物の笑顔を交わした。

その夜、ソルティヤは家を出た。

ほんの少しの着替えと食糧だけを小さな鞄に詰め込み、覚えたばかりの字を並べて書いた置き手紙を、そつと台所のテーブルの上に残し、静かに家の扉を開けた。

遠い思い出だつた。

もう思い出すことはないと思つていた。 育ててくれた恩は忘れることがない。 だが、嘘をつき続けられるのは、耐えられなかつた。

一人でも生きていける。

そう思つた。

今まで『独り』だつたのだから。

いつの間にか、うずくまるラティンの傍にカイルが立つていた。

三人の決意！

「行こう！」

そう言つサクに手を捕まれ、引つ張られるようにヤツハが訪れたのは、ソラール兵士養成学校の医務室だつた。机に向かつて何か書いていたミランは、勢い良く扉を開けたサクを見たが、特に驚いた様子もなくペンを止めて、またか、という顔をした。

「サク……今度はどこを怪我したんだい？」

くわえ煙草で、半ば呆れた声を出して背もたれに身をゆだねるミランに、サクは詰め寄るように近寄つた。

「会つてやれよ！」

「んっ？」

意味が分からず困惑した顔のミランに、サクの後ろからヤツハが補足した。

「ミラン先生の息子さんが、見つかったのよ…」

「！」

ミランは背もたれから体を離し背筋を伸ばして、ヤツハを見、サクを見て目を丸くした。

「一体何を…」

「首の後ろにカモメのアザがある！ ソルティヤって名前のラティンが、先生の息子なんだろ？」

「サク、言つてることが滅茶苦茶！」

ヤツハが慌てて制止し、ミランに説明をした。

旅先で出会つた友人ラティンについてさつき再会し、ひょんなことから首にあるカモメのアザを見つけたこと。ソルティヤと言つ名前にひどく反応したこと。 その話をカイルから聞いたといつこと

一通り話を聞きおわったミランは、すっかり短くなつたタバコをもみ消した。そして長いため息を吐いたあと、後れ毛を耳にかけた。

サクとヤツハは並んでベッドに座り、ミランの様子を見つめ、答えを待っていた。

「分かった」

そう返事をしたミランに、サクは嬉々として立ち上がり、言った。
「あいつならまだ湖に居るはずだ！　まだ間に合ひぜ！」「ヤツハも立ち上がって湖に向かう気持ちを整えた。だがミランは椅子から腰を上げる様子も無く

「待て。誰が会つと言つた？」

と冷たく言つた。サクとヤツハは驚いてミランを見つめた。

「あんたたちの話は分かつたと言つただけ。会つとは言つていない

い

そう言つとそっぽを向き、また書き物を始めた。

「な、なんでだよ？　自分の子供だぜ？　なんで会つてやんないんだよ？」

サクが納得行かない顔でミランに言つた。掴み掛かりそうな勢いのサクの腕に、ヤツハは必死でしがみついた。だがそのヤツハにも、ミランの気持ちが分からぬいでいた。

「先生、どうして……？」

ミランは手元に視線を落としたまま面倒臭そうに言つた。

「用はそれだけかい？　あたしは忙しいんだ。用が無いなら出でいきなさい！」

「先生！」

サクが叫ぶように突っ掛かると、突然ミランが立ち上がつた。

そしてずかずかと二人に近づくと、視線を合わせないように背中を

押して部屋から追いでいく。

「ちょ、ちょっと先生っ？」

一人があたふたしていると、ミランは

「あたしは忙しいって言つてるだろ？ 仕事の邪魔だ！ 出てい
きな！」

と言い捨て、ぴしゃりと扉を閉じてしまった。

「ミラン先生っ！ なんでなんだよ？ 自分の息子だろ？ ラティ
ンに会つてやれよ！」

サクは扉を叩きながら言つたが、その扉が開く気配はなかつた。
向こう側では、扉にもたれて額に手を当てて俯くミランがいた。

「何で……今更……」

「お節介なんだよ……」

ラティンは後ろに立つカイルの気配を感じながら、両膝に顔を埋
めたまま言つた。

「自分を捨てた奴なんかに、会えるわけないだろ？ が……」

カイルは何も言えないでいた。 親に会いたいと思うのは、当然
だと思っていたからだ。 ヤツハもサクも、自分の親を大切に思つ
ている。 カイルは戦争孤児だったので、両親の顔すら知らない。
育ててくれたマチのことは、勿論本当の母のように慕つていたが、
やはりふとした時に実の親を想う時があった。 だから誰でも、親
に会いたいと思う心に違ひはないと信じていたのだ。

だが、ラティンは違つていた。

少し手を伸ばせば届く親に、会いたくないという。 ラティンは
母を『自分を捨てた奴』と罵倒した。

言葉を失つてしまつたカイルの前に、ラティンは立ち上がつた。
まだ上半身裸で、手には生乾きの服を握つてゐる。 立ち去ろう
とするラティンを引き止めたくて言葉を探していると、ラティンは

すれ違ひざまに

「あんただけは、分かつてくれると思つてた……」

と呟いた。

「つ！」

振り向くと、すでにその姿は消えていた。

「ラディン！」

その気配はもう無く、カイルは何も出来ずに立ち尽くしたまま、湖からの風に吹かれていた。

「カイルっ！」

ヤツハがカイルの姿を見つけて駆け寄ってきた。 サクも一緒だ。

「ラディンは？」

サクの問い掛けに、岩にもたれてうなだれていたカイルはゆっくりと顔を上げた。

「もう居ない……」

消え入りそうなほど小さな声で言つカイルに、ヤツハが心配して近づいた。

「何があつたの？ ラディンに何か言われたの？」

カイルは俯いてため息をついた。

「嫌われた……」

「えつ！」

ヤツハが聞き返すと、カイルは頭をかきむしつた。

「誰だつて、親には会いたいと思うだろ？ 僕だつてそうだ……。

自分の親を、自分を捨てた奴だと言つあいつに、かけてやる言葉がまるで見つからなかつた……」

「カイル……」

ヤツハがカイルの震える肩を抱いて、寄り添つた。 その時サクが呟いた。

「シリウなら……こんな時、どう言いつかな……？」

その言葉に、二人は顔を上げた。

「ほり、あいつ、色々と器用だからさ、こんな時どうこうのかなあって、さ。きっとこんな時だって、簡単に解決しちまうんじゃねーかな？」

サクは苦笑いして頭をかきながら言った。

「シリウに会いたい……」

カイルが呟いた。ヤツハは小さく震えるカイルの身体を優しく抱き締めた。ヤツハにも、どう言葉を掛けていいのか分からぬのだ。ただ抱きしめてやることしか、自分の気持ちを伝えられなかつた。その様子を見て、サクが意外に明るい口調で言った。

「よし！ 会いに行くか？」

「えっ？」

ヤツハはサクを見た。

「会いに行くって……もしかして、ラティンが教えてくれた村まで行くってこと？」

「ああ！」

サクは強く頷いた。

「いい機会じやねえか。ラティンとも仲直りしてえしさ、こんな所でくすぶつてるのも飽きてきたし、シリウにばっかりいい格好されるのも癪だし！」

サクはニット笑った。

「サク、それって……」

ヤツハが言い掛けると、サクは拳を握り上げた。

「卒業するんだ！」

「！」

カイルもその思いがけない案に、急に心の扉が開いたような気がした。

「そうだな……」

そう呟いて微笑むと、頷いて言った。

「待ってるだけじゃ、つまらないしな！」

少し明るくなつたカイルに、ヤツハは呆れた顔をして言った。

「本当にあんたたちは……ま、カイルはシリウに会いたくて仕方ないから分かるけど！」

そして笑顔になると

「分かつた！ こうなつたら、あたしも付き合つわ！ 三人で卒業しましよう！」

と、勢いよくカイルの肩を叩いた。

卒業試験1

すぐに三人は、学校に卒業希望届けを提出した。

「本気か？」

三人を前に、ファンネル所長は驚いた顔をした。いつも細く、開いているのかどうかも分からぬほど切り傷のような目がいっぱいに広がり、白髪は、その髪までもが逆立つようだつた。

「カイルとヤツハはいいとして……」

流し見るファンネル所長の視線が、サクで止まつた。

「何か不満でもあんのかよ？」

「こら、サク！」

いつでも誰にでも前衛姿勢を崩さないサクを、ヤツハが一喝した。ファンネル所長はサクを見つめながら髪をさすつた。そしてしばらく何か考える仕草をして

「まあのう。この学校は、生徒の希望した時が卒業する時じや。その先のことは、何も関与しない。今まで守られていた生活も、何の保障も無くなる。一人で生きていかなくてはならん。そのことは分かつてあるだろうな？」

と三人に向かつて確かめた。

「はい、分かつています！」

カイルは強く頷き、ヤツハとサクも同様に頷いた。ファンネル

所長は

「分かつた。では卒業試験の準備をしよう」と頷いた。

翌日、卒業試験の日取りと卒業希望者の名前が講堂に貼り出されると、ソラール兵士養成学校の中では、様々な賑わいが生まれた。

サクに向かつて、驚き動搖するナトウが殴りかかって行つた。

それに対してもサクはいつものように応戦して、二人が場所を変えるたびに学校のあちこちで喧騒が生まれた。生徒たちは、これが最後なのだと感傷に浸りながら、あれだけ迷惑だつたサクとナトウの喧嘩を温かく見守つていた。それは教官たちも同じで、散々手を焼かせたサクが居なくなると思うと、今の二人を容易に引き離す事は出来なかつた。

ヤツハは、友人や後輩との別れを惜しんでいた。

今までずっと一緒に高めあつた友人や可愛い後輩と別れるのは胸が痛い。だが、いつかはそんな日が来るのだ。お互に励ましの言葉を交わした。

カイルは医務室を訪れていた。

育ての親マチの妹だという理由で頼つたミランには、入学してからずっと世話になつた。性を偽り、自分を高めたい一心でいたカイルにとっては、ミランの存在は唯一の心の拠り所であり、もう一人の母のようだつた。

改めて礼をいわなければ、と、重い心のカイルが医務室に入ると、ミランはいつものようにくわえタバコで机に向かつて仕事をしていた。

ミランは視線を手元に落としたまま、カイルに言つた。

「余計な事をしてくれたねえ……」

「えつ……？」

たじろいだカイルに、ミランはいつもと同じ口調で続けた。

「あたしの息子は死んだと思つたのに……今更、見つかったんだなんて……」

「でも先生！ ラティンは……いや、ソルティヤは先生の息子です！ 彼はずっと一人で生きてきた！ 誰も信じられなくて、でも、やつと仲間を見つけられた……俺も同じだつたから、彼の気持ちが

分かつてたはずだった……けど……」

カイルは唇を噛んだ。

「何故、会おうとしないんですか？ 何故？ 親子なのに……血の繋がった家族なのに……！」

「言いたいことはそれだけかい？」

ミランは、椅子に座つたままカイルを見つめていた。 カイルはかぶりを振つた。

「先生！ 僕は卒業します。 自由の身になつて、世界を見たい。 僕はまだ、人間として何か足りないんだと思います。だから僕は、ラティンの気持ちも、ミラン先生の気持ちも理解出来なかつた。 もうひとつ階段を上るために、ここを出なくちゃならないと思うんです！」

ミランは、力説するカイルをじつと見つめていた。 そしてゆつくりと立ち上がると、カイルに近づいた。

「カイル……」

ミランはカイルを抱き締めた。

「先生……？」

薬品の匂いが鼻をくすぐつた。 ミランは、カイルの耳元で囁いた。

「ありがとう……」

「？」

その意味が分からず考えあぐねていると、体を離したミランはカイルの肩を抱いて見つめた。

「あたしの方が、あんたたちよりもずっと、子供なのかもしけないね……」

そう言いながら微笑む顔には、切なさがにじみ出でていた。

「息子に会つたら、伝えてくれないか？ 幸せにしてやれなくて、すまなかつた」と

「先生……」

その表情と言葉で、カイルには伝わつた。 ミランはラティンに

会いたいのだと。どんなに拒絶していても、やはり母は子に会いたいのだ。カイルは何も言わなかつたが、ミランの気持ちを知つた事で心が軽くなつたのを感じ、微笑んで頷いた。

それから、ミランはカイルをもう一度抱き締め

「元気でやるんだよ」

と囁いた。その少し涙交じりの震えた声は、カイルの心中に深く染み込んだ。

「先生、ありがとうございました……本当に……あなたと出会えて良かつた！」

カイルはあふれる涙を拭いもせず、ミランの首に自分の腕を絡ませた。どこかで母のような温もりを感じていた。最初で最後の抱擁だった。

数日後。

闘技場には、たくさんの生徒達が卒業試験を見ようと集まつっていた。

「サク・パクオラ！ 前へ！」

サクの卒業試験が始まった。

鉄格子の向こうから現れた対戦相手はガーゴル系の幻獣。サクの背丈二倍ほどの大きさをした、鷲のような幻獣だ。空こそ飛べないが、跳躍力が高い。太い足の先に光る爪は、甘く見ると痛い目にあうだろう。過去に同じような姿の幻獣と一度戦つたことのあるサクは、鼻をすすつて笑つた。

「楽勝だろ！」

構えるサクの後ろから

「死ぬんじゃねーぞ！」

と声が飛んだ。振り向くと、ナトウが壙を乗り越えそつなほどに前のめりになつていた。

「テメエのその軽い頭で、勝つてみろ!」

「なんだとコラ! やんのかつ?」

サクは一瞬で沸点に達したように、ナトウに向かつて腕を回した。

「あいつに勝つたら、今度は俺が相手してやるよ!」

にたり顔で言ひナトウに指を指して

「待つてろよ! 一瞬で片を付けてやる!」

と強く宣言した。

「行け!」

シャルサム教官が冷たく指示すると、ガーゴルは咆哮を上げてサクに襲い掛かった。足を踏みだすたびに、爪で地面がえぐり取られる。土煙を上げながら近づいてくるガーゴルに、サクもまた飛び掛かつて行つた。

「うらああつ!」

胸の辺りの羽を掴み、器用にガーゴルの背中に乗つた。

「ひやつぼう!」

「あいつ、楽しんでないか?」

ナトウの呆れた咳きも届かず、サクは暴れるガーゴルの背中でバランスを取つた。そして気合をこめると

「ふんっ!」

サクの拳が、いとも簡単にガーゴルの延髄にヒットした。

「キュエエエッ!」

悲鳴のような鳴き声のあと、ガーゴルは前のめりに倒れこんだ。

そして、そのまま動かなくなつたのだ。

「えつ?」

生徒たちはあつけない幕切れに声を失つた。卒業試験にしては、あまりに味気ない。華もない。もつとも、試験に華など必要な

いのだが。

サクは身軽にガーゴルの背中から飛び降りると、余裕の表情で笑つた。

「なんだよ。 つまんねえの！ 最後くらい、もう少し強いやつとやりたかったな！」

まだ物足りない表情で、サクは倒れているガーゴルに背中を向けた。 その時

「がつ！」

サクの体がいきなり吹き飛ばされた。 塙に叩きつけられた衝撃に咳き込むと、赤い飛沫がその口から吹き出た。

「サクつ！」

塙の上から、ナトウが覗き込んでいる。

「何やつてんだ、てめえは！ バカ野郎つ！」

サクはその声にキツと顔を上げた。

「油断しただけだ！ お前は黙つて見とけ！」

唇の端から伝い落ちる赤い筋を腕で無造作に拭き取り、立ち上がると、ガーゴルを睨んだ。

「倒れたんじやねえのかよ？ 試験は終わりだろ？」

「通常の試験用ならな」

シャルサム教官が言つた。

「このガーゴルは、卒業試験用の特別製だ。 さつきは不意の衝撃にしばらく意識が飛んだようだが、次は多少の攻撃では倒れんぞ！」

シャルサム教官は、余裕の表情で笑つた。

「このままでは卒業は無しになるぞ」

彼もサクの横暴な性格には頭を痛めていた。 最後こそはその礼をするつもりで、今までよりも難解な幻獣を召喚したのだろう。シャルサム教官の言葉に、サクは激しく反応した。 目が輝き、搖れた。

「そろはいかねえ！ 僕にはやらなきやならねえことがあるんだ！」

こんな奴に、足止め食らつての場合じゃねえんだよ！

サクは拳に気を溜めた。

「俺はここを出なくちゃならねえ！ ヤツハの為に！ カイルの為に！ シリウの為に！ そして、俺自身の為にだ！」

ガーゴルが首を振り乱して暴れだした。 サクを踏みつけようと襲ってきた足を避け、ガーゴルの後方に回つた。 そこでサクは、地面に向かつて拳を突き立てた。

「爆拳弾！」
〔パッケンダン〕

サクの拳から気が放たれ、土埃が辺りを包んだ。

「あいつ……何やつてんだ？」

視界が閉ざされ、目を凝らす生徒たち。 ガーゴルは振り返り、サクが居るであろう方角へと駆け出した。 と、突然その体が重い音と共に沈み、咆哮が闘技場に響いた。

「なんだ！ 何があつたんだ？」

やつと土煙が落ち着きはじめると、見守る生徒たちにもよつやく状況が見えはじめた。

「落し穴か！」

ナトウが叫んだ。 ガーゴルの太い足が、サクが掘った穴にはまつて身動きが取れなくなつていた。 その鼻面に、サクが拳を突き付けた。

「これで、終わりだあつ！ 食らえ！ 爆拳剛馬！」
〔パッケンゴウマ〕

サクの叫びと共にまばゆい光が放射され、ガーゴルの頭を包んだ。それは大きな馬のいななきと共に空に駆け上がつた。

その光が消えた後には、息を荒げて立つサクと、無残にも頭を吹き飛ばされたガーゴルの体があつた。

「勝負あり！」

審判の声が闘技場に響き、歓声が沸き起つた。 ナトウは思わず息を呑んだ。

「あいつ、あんな力を持つてたのか……」

それは卒業試験を見守っていたサラライナ教官も同じ気持ちだった。

「いつの間にあんな実力が……？」

確かに、サクたちはアルコドへの旅から帰ってきてから、随分実力は上がっていた。ナトウとの喧嘩は相変わらず絶えなかつたが、それ以上に訓練にも余念はなかつた。だがこれほどまでとは、ずっとサクを見守ってきたサラライナ教官も知らないことだつた。

生徒たちの歓声の中、サクはナトウの下に近づくと胸を張り、自慢げに鼻をすすつた。

「どうだ！」

ナトウは意外にも柔らかい笑みを見せた。

「なかなかやるじゃねえか！」

「へへっ！」

二人は笑いあつた。

「サク、終わったみたいだな」

控え室で精神統一をしていたカイルがそつと目を開けて呟いた。
少し離れた所で、ヤツハも心を落ち着かせていた。

「次はあたしね！」

ヤツハは緊張を振り切ろうと、飛び跳ねるように勢い良く立ち上がり、カイルに微笑んだ。

「じゃ、行ってくるわね！」

軽く手を上げ、ヤツハは闘技場へと向かつた。

「頑張れよ。君なら大丈夫だろうけど」

呟いたカイルは、再び目を閉じて瞑想を始めた。

「ヤツハ・キナソン！ 前へ！」

ヤツハはスタスターと闘技場に歩み出た。

その時

「せんぱーーい！」

一際甲高い声が、ヤツハの耳に届いた。その方を見ると、大きく手を振っている後輩サリナの姿が見えた。ヤツハは答えるようにこりと笑つて小さく手を振ると、少し緊張した面持ちで対戦相手を待つた。

「対戦相手、前へ！」

審判員の声で鉄格子が上がり、暗がりから一つの影がゆっくりと現れた。やがて明るみに出ると、全貌が明らかになった。

「やだ、気持ち悪いっ！」

対戦相手を見た途端、ヤツハの全身に鳥肌が立つた。目の前に現われたのは、プラナアル系の幻獣だった。

名前こそ可愛いが、その体はヌメって黒光り、骨無しで手足もない容姿。前方と思われる先端の両側についている黒い目が、ギロ

リとヤツハを確認した。足跡の様にキラキラとしたヌメリを残しながらゆっくりと迫るプラナアルに、ヤツハは思わずたじろいだ。

「な、なんで、よりによつてこんな奴なのよ？」

出来るなら華やかに片を付けて終わらせたかつたと、若干の悲しみを感じながら、ヤツハは仕方なく身構えた。プラナアルはヤツハの体の半分くらいの大きさで、あまり動きも早くなさそうだった。

「始めつ！」

審判員の声と同時に、ヤツハは闘技場の端にある武器棚へと走り、出来るだけ距離を保てるように長い細剣を手にした。

「さあ、いくわよ！」

ヤツハは剣を構えて向かつていった。すれ違いざまに剣をプラナルに突き立てる、一瞬刃を包み込むよつな柔らかい感触の後、その細長い体は一刀両断された。

「やつた？」

ヤツハは振り向いて、プラナアルの様子を見た。
一つに分断されたプラナアルは又める体を動かしてしばらくもがいていたが、やがて動かなくなつた。

「やつたあ！」

サリナの甲高い歓喜の声が響いた。周りの生徒たちはあっけない終わり方に騒ついていた。

だがヤツハは固い表情で再び剣を構えた。

「まだよ……」

プラナアルの気配が消えていないことに気が付いていた。

「ヤツハ先輩？」

サリナは、いまだに身構えて動かないヤツハにただならない気配を感じた。すると、あろうことかプラナアルは再び動き始めた。動くどころか、プラナアルは二つの体になつて再生したのだ。

「なんてことよ……」

ヤツハを、一体のプラナアルが襲い掛かる。

「いやあっ！」

体が小さくなつたことで、プラナアルの動きは若干早さが増して
いた。

「気持ち悪いっつ！」

ヤツハはほほ泣き顔でプラナアルを切つていつたが、切られるた
びにその体は倍になつて増えていく。 気が付くと、ヤツハは數十
体の小型プラナアルに囲まれていた。

「マジでヤバいよね、これ……」

冷や汗がヤツハの頬を伝つた。

「これしかないかな……」

ヤツハは両腕を交差させた。

「眠つてもらいましょう！ 百花眠々（ヒヤツカミンミン）！」

氣をため込んだ腕が広げられると、紫色の花びらと共に風が生ま
れ、プラナアルたちを包み込んだ。 その途端に、せわしなく動いて
いたプラナアルの動きが止まつた。 眠つてしまつたのだ。

同時に、観戦していた生徒の何人かも眠つてしまつた。 まだ実
力がついていない生徒にも効いてしまつたようだ。

「剣が利かなきや、邪魔だわ！」

ヤツハは剣を投げ捨てる、腕を上げて半月を描いた。

「これで終わり！ 貧血になるからあまりやりたくないけど、最後
だから特別ね！ いくわよ！ 月下降馬ゲッカカイバ！」

ヤツハの体から蒼い氣が放たれ、それは波となつてプラナアルたちを押し流した。 気の波に飲まれ、翻弄される体は次第に小さくなり、やがて溶けるように消えてしまつた。 波が消えると、闘技場にはヤツハ一人が残つていた。

「勝負あり！」

審判員が腕を上げた。 その途端、闘技場を囲む生徒たちの歓声
が響き渡つた。 その声でやつと目を覚ました生徒たちもいた。
予想通りに貧血でふらつくヤツハが精一杯の笑顔でサリナを見上げ
ると、涙を溜めた彼女は大手を振つて喜んでいた。

カイルはゆっくり目を開けた。遠く歓声が聞こえる。ヤツハの勝利を感じ取ると、小さく微笑んでゆっくり立ち上がり、静かな控え室を後にして闘技場へと向かつた。

「カイル・マチ。前へ！」

カイルはゆっくりと闘技場に進み出た。生徒たちは、シリウに次いで優秀な成績を保ち続いているカイルの雄姿を見届けようと、歓声と共に見守っている。カイルはそれを気にすることなく立ち、対戦相手が出てくる檻の鉄格子を静かに見つめていた。

「対戦相手、前へ！」

カイルと生徒たちは、重く響きながら上がる鉄格子の向こう側に目を凝らした。だが……

「なんだ？ 出でこねえじゃねえか！」

「シャルサム教官も、三体連続で幻獣をだすのはやっぱ、大変なんだよ」

「そうだよな、幻獣を創り出すこと自体、高等技術だもんな！ 一
体だけでもすげーよ」

生徒たちの騒つきのなか、カイルの目の前には上がり切った鉄格子とその向こう側の暗闇しかなかつた。

「対戦相手は、カイルに怖気づいたんだ！」

誰かが叫んだその時

「始め！」

と審判員が号令を出した。

「何でだ？ 何も居ないじやないか！」

生徒が叫ぶように言つた一瞬後、カイルは目の前に剣を構えて力をこめていた。踏張る足元は、次第に後ろに押し戻されている。

「シャルサムも、いやらしいのを出してきたねえ……」

観覧席の後ろの方で、腕を組んだミランが椅子に座り足を組んだ

まま呴いた。

「擬態か……」

カイルは唇を噛むと、剣を持つ手に力をこめた。

「はあっ……」

振り切ると剣にかかる重さは消え、相手は離れたようだった。
「周りに合わせて自分の色を替え、まるで透明に見せる。動きに
合わせて、その色も微妙に素早く変える……」

分析しながら呴くカイルに

「なるほど、さすがに順応が早いな。 その通りだ。 ポイズ。
擬態幻獣だ」

とシャルサム教官が感心したように手を細めた。

「なんだ？ 全然見えないぞ！」

生徒たちの大半は、ポイズの姿を捕らえられずに手を泳がせてい
る。 まるでカイル一人だけで演武をしているかのように見えるの
だ。

「特別難しい相手を当てるとは……シャルサムもカイルを高く評価
している証拠だ」

ミランは静かに呴きながら、煙草に火を点けた。

「ここは禁煙じやよ」

声と共に、隣から小さな缶皿が差し出された。 驚いて顔を向け
ると、ファンネル所長が微笑みながら立っていた。

「あ……すみません！」

慌てて缶皿を受け取り、火が点いたばかりの煙草を揉み消した。

「心配じやううが、あの子は大丈夫じやよ」

ファンネル所長は、ミランの隣に座った。

「これまで本当によく耐えてきた。 あの子が一番入学してから変
わった所は、自分を解放することが出来るようになった所じやな」

「所長……？」

ファンネル所長は、目を細めて髪をさすった。

「先に卒業したシリウも、サクもヤツハも、本当によく成長してく

れた。あの子たちは、ソラールの誇りじや

「ええ。そうですね」

ミランは微笑みながら、目の前で戦っているカイルを見つめた。

「いつかは皆、旅立つていく……」

「ミラン、あなたも、カイルをよく守ってきたのう」

「えつ？」

「わしは、いつバレるかとワクワクしておつたのに」

楽しそうに笑うファンネル所長に、ミランは目を丸くしていた。
「知つて……いらしたんですか？」

ファンネル所長は、目を細めた。

「それくらい分かるわい。ここに入りたがる子たちは皆、心に何かしらを背負つてある。責任であつたり、遺恨であつたり、絆であつたり……それぞれ違う思いのもとに、集まつて来ておる。そういうして、自分を押さえきれなくて自滅していく生徒も、何人も見てきておる。隠し事もあつて当然じゃ」

ミランはカイルを見つめた。

「あの子は過去をずっと一人で抱え、一人で解決しようとしていました……私は、それを見守る事しか出来なかつた」

「立派に成長したものだ」

ファンネル所長は、嬉しそうにカイルを見つめた。

当のカイル本人はそんな会話を知るはずもなく、剣を構えて防戦の一方だった。

「姿は見えても、こう速くては受けるのが精一杯だ……！」
わずかな色の変化を捉え、迫る手だから足だから避けたり受ける事に集中していたが、さすがに体が悲鳴を上げはじめていた。一瞬遅れてしまつ攻撃は、ポイズに当たる気配も無い。

「くつ！」

体を回転させて距離を取り、一呼吸置いたカイルは、体に受ける傷が打撃によるものだと気付いた。

「そりゃ……」

カイルはにやりと笑うと、おもむろに手にしていた剣を自分に向かた。

「なっ！ 何を？」

ミランが乗り出す先には、自ら手足を傷つけ始めるカイルの姿があつた。

「何をやつてんだ？」

「氣でも狂つたのか？」

生徒たちが口々に騒めきだす中、遂に剣を地面に投げ捨てたカイルの手足からは、赤い零が伝い落ちていた。 激痛に耐えながらも、カイルは少し口角を上げていた。

「これでいい……はあっ！」

氣合を入れて、ポイズに向かつて走りだした。 そして、攻撃は肉弾戦となつた。 攻撃をするたびに、カイルの体から赤い飛沫が舞う。

「カイル！」

ミランが立ち上がりそうになるのを、ファンネル所長が制した。

「まあ、待ちなさい」

「でもあのままでは……！」

心配気なミランとは対照的にファンネル所長は落ち着いた様子で、目を細めたまま微笑んでいた。 カイルの手足から飛び散った赤い飛沫は地面にも点々と落ちていたが、やがてカイルの前には赤い固まりが姿を現していた。 カイルはその赤い塊と戦つていた。

「だいぶ姿がはつきりしてきたな！」

ミランが思わず叫んだ。

「なんてことを！ 自分の血液で、相手の姿を浮かび上がらせるなんて！」

ポイズは驚いたように後退りして、自分の体を見回した。 ポイ

ズは、カイルと変わりない姿をしていた。

「手間をかけさせやがって……これで終わりだ！」

カイルは拾い上げた剣を上段に構えた。

「はあっ！剣舞四奏！」

カイルが振り下ろした剣から気が放出し、ポイズ目がけて襲い掛かった。それは逃げる暇さえ与えず、ポイズを飲み込み、切り刻んだ。

「勝負あり！」

審判員の腕が上がった。

沸き上がる歓声の中、地面に剣を突き刺してもたれるように立つカイルの瞳には、それでも満足気な熱い輝きが宿っていた。

さよなら……ソラール兵士養成学校！

「全く！ あんたは最後まで心配させるんだから……」
巻き終わった包帯を強めに留めて軽く叩いたミランに、カイルは
「いてて……」
と呻いた。

「あたしもホントにびっくりしたんだから……カイルつたら、全身
血まみれで医務室に入つてくるんだもん！」
ヤツハがあきれたようにため息をついた。 ヤツハは、サクの様

子を見るために一先ず医務室にいたのだ。 幸い背中を強く打ち付けただけだったので、少し安静にしただけで完全復活していた。
カイルは苦笑した。

「布なんかがあれば闘牛士みたいに被せられたんだけど、あいにく
周りには何もなくて……」

「だからって、出血多量で死なれても困るんだよ！」

ミランは不機嫌口調で言った。 いつものように煙草をふかしながら、道具を片付けていた。 だがどこかその白い煙は踊るように揺れていた。 無傷だったヤツハも呆れた顔で、ミランの手伝いをしている。

その時

「布が欲しかつたんなら、そこにあるじやん！」

ベッドにあぐらをかけて軽い口調でいうサクに、皆もよとんとしている

「それ、その服さ。 僕なら脱いで被せるけどなっ」

と、自分の襟をつまんで笑った。 すると、ヤツハとミランは顔を見合わせて吹き出し、カイルは複雑な顔でサクに笑った。

「なんだよ！ オレ、変なこと言つたかよ？」

少し不機嫌になりながら言つサクに、三人は笑いが止まらなかつた。

その後、医務室にファンネル校長も現れた。

少し緊張した空気の漂つた医務室の中で、激励の言葉をかけ
「多少無茶な戦いもあつたが……皆よくやつた。卒業試験は合格
じゃ。卒業を認める！」

とファンネル校長は笑った。

これでサク、ヤツハ、カイルの三人は試験に合格し、晴れて卒業
することになった。

旅立ちの朝。

快晴の空の下、サク、ヤツハ、カイルは、並んでソラール兵士養成学校を仰ぎ見た。

「長かつたようで、短かつたな！」

サクは五年、ヤツハは四年、カイルは実に七年の年月を過ごした。
それぞれが想い出を思い返しながら、青い空に映える建屋を見上げていた。住み込みで毎日を厳しい訓練に費やし、数々の試験を乗り越えてきた。たくさんの想い出が詰まっていた。

「さあ、行こうか！」

サクがヤツハとカイルに笑いかけ、一人は頷いた。三人が振り返った先には、見送りにと校門に集まっている生徒たちや教官たちがいた。

「頑張れよ！」

「元氣でね！」

それぞれに送る言葉を交換しながら、握手や抱擁を交わした。

「死ぬんじやねーぞ！」

ナトウがにかつと笑つてサクを見下ろした。

「死ぬわけねーだろ！ お前こそ、すぐにくたばるんじやねーぞ！」

笑い返したサクに、ナトウは自分の拳を差出した。サクは一瞬

戸惑つたが、すぐに微笑んで自分の拳をナトウの拳に当てた。

「世話んなつたな！」

サクが言つと、ナトウは感極まつたよつて、目に涙をためた。

「早く行けよ！」

サクは、顔を背けて言つナトウに笑つて頷いた。

ヤツハには、サリナが抱きついた。すでに涙を溢れさせしゃくりあげながら、サリナはヤツハの首にストールを巻いた。

「つこれ……？」

「あたしが家を出るときに持つてきたストール。小さい頃から、ずっと一緒だつたの。これがあたし大ど思つて、頑張つてください！」

ヤツハは驚いてサリナの顔を見た。

「いいの？ 大切な品なんでしょう？」

サリナは赤い目で頷いた。

「先輩は、あたしにとつて何にも替えられない。だからこれは、先輩に持つていて欲しいんです！ 今まであたしなんかに優しくしてくださつて、本当に感謝します！」

「サリナ……」

ヤツハはサリナの気持ちを受け入れた。

「ありがとう。 大切にする！」

ヤツハが微笑んで言つと、サリナも微笑み返した。

そんな様子を見ながら通り過ぎるカイルの前に、ミランが待つていた。いつものように白衣を着て、一つにまとめた背中までの金髪は、陽の光を受けて輝いている。

「ミラン先生、お世話になりました！」

カイルは微笑んで、包帯だらけの手を差し出した。ミランは戸惑つた顔を見せたが、ゆっくりと自分の手をカイルに重ね、優しく握つた。

「本当に強く、大きくなつたね。マチ姉さんもきっと、喜んでるよ」

ミランは涙の滲んだ瞳を隠すように眼鏡を上げた。カイルは小さく頷いて

「マチさんのお墓参り、してあげてくださいね。マチさんもきっと、ミラン先生のことを持つてると思つから」と笑つた。

ミランはその笑顔にふと不安に襲われ、気持ちが暗雲に陰りそうになつたが、それもカイルの運命なのだからと、心に留めた。

ここを旅立つていく者は皆、危険に身を晒しながら生きていく者がほとんどだ。生きるも死ぬも本人の運命。ただ、死に行く者を見送るのだと思うことだけは考えないようにしてきた。ミランを見つめるカイルの顔は、何の曇りもなく透明な笑顔をしていた。後から続くサクヤヤツハも同じだった。

「皆……元氣で」

ミランは最後の愛情をこめて、三人を抱き締めた。

第一章・はじまり……「ゴロナ」町へ

ソラール兵士養成学校を出た数時間後には、三人は汽車に乗つていた。

目指すは「ゴロナ」町。 ラディンが住む町だ。

そしてそこから、シリウがいるであろうハアヤ村へと向かつ。 窓の外を流れる景色を眺めながら窓際に肘を突くカイルの頬が、知らず知らずのうちに緩んでいた。

「カイル嬉しそう」

ヤツハがカイルに囁くと、カイルは慌ててそっぽを向いた。 ヤツハは小さく笑つた。

「そういう素直な気持ちを大事にしなきや」

ヤツハはカイルの肩を軽く叩いた。

「何を話してんだ？」

サクが頬をパンパンに膨らませて言つた。 その膝には、さつき駅で買つたばかりの弁当が乗つてゐる。 ヤツハはそれを見るなり眉をしかめた。

「サク、それもう一つ用じやない！」

サクの足元には、綺麗に空っぽになつた弁当箱が転がつてゐる。「これ、貰いぜ！ 焼肉弁当！」 ヤツハもカイルも食べてみるつて！」

満面の笑顔で言つサクに、ヤツハが言い返した。

「後で食べるわよ！ まだ「ゴロナ」町までは時間が掛かるのよ！ 後でお腹すいたつて言つても知らないからね！」

するとサクは動じない顔で、傍らに置いてある袋を持つて見せた。「大丈夫さあ！ まだこんなにあるんだぜ！」

袋の中には、まだ五つほどの弁当が積んである。

「そういうこと言つてるんじゃないの？！ もう、あんたは…」「頭を抱えて呆れるヤツハと、目の前にある弁当を美味しそうに頬

張るサクを見ながら、カイルはクスリと笑つてまた窓の外を眺めた。

汽車はスイスイと山を越え、谷を越えて、軽快に走っていく。

一年前、サク、ヤツハ、カイル、そしてシリウは共に旅をした。サクとヤツハはまだしも、それぞれがバラバラに集まり、何の共通点もなかつた四人が揃つたのは奇跡でもあり、運命だったのだろう。

「不思議だな」

窓の縁に肘を乗せて二人を見つめるカイルに、サクとヤツハは不思議そうな顔をした。

「何が不思議なんだよ？ 時々変なこと言つよな、カイルってさ」
サクが口をモグモグさせて聞くと、カイルは笑つた。

「皆と居ると、安心するよ」

ヤツハは微笑みながらカイルの横に座り直した。

「あたしも。 皆と居ると安心するし、楽しい。 何より、寂しくないもの」

カイルはヤツハに頷いた。

「前は、そんなの要らないと思ってたけどな」

「人は、一人じゃ生きていけねえんだぞ！」

言いながらサクは、空になつた弁当箱を惜しげもなく足元に落とした。

「少なくともオレは、一人じゃ生きて行けねえ！だから助けてもらうんだ！」

自信満々に笑うサクに、カイルは笑いながら足元の「ゴミ」を拾つてサクの膝に乗せた。

「そうだな。 ジャ、他の人に迷惑にならないようこ、これも片付けて！」

「ええっ！」

サクは顔を強張らせてそれらを見、渋々片付けている様子を見ながら、カイルとヤツハは肩を寄せて仲良く笑つた。

「『ロナ』『ロナ』

冷たく機械的なアナウンスと共に、汽車は『ロナ』駅のホームに滑り込んだ。

「サクつ！ 降りるわよっ！」

ヤツハがよだれを垂らして爆睡しているサクを叩き起こし、カイルはサクの荷物も担いで、揃って汽車を降りた。

「おおおーーー！ ここが『ロナ』かあーー！」

大きく両腕を伸ばして大あくびをしながら、サクは初めて訪れた町に感動していた。

『ロナ』町は、コンクリートで作られた建物が所狭しと立ち並んでいる近未来の町だ。商業が盛んで、かつちりとしたリクルートスーツを着こなす人々が堅い顔で通り過ぎていく。冷たい印象の町だった。

「さて、これからどうしようか……？」

カイルは周りを見渡した。

「とりあえず、泊まる所を探しましょっ！ 動くのはそれからでも遅くはないわ。やることはたくさんあるもんね！」

ヤツハが駅を出たところに町の地図を見つけた。駅周辺の地図には、たくさんのかわいい四角が並べられていた。

「これ、なんだ？」

サクがその四角の一つを指差すと、カイルが

「建物の印だろ？ 道の両脇は、店や会社の建物で埋め尽くされている。かなり進んだ町みたいだな」

その中から『ホテル』と書かれた建物を見つけると、三人はまずそこへ向かった。

駅から程近い場所にそのホテルはあった。実際にこじんまりとし

た、【ゴロナゴ・ホテル】という小さな看板を見落とせば、あつさりと通り過ぎてしまうような場所にそのホテルはあった。

「いらっしゃいませ」

黒いスーツを着た従業員が頭を下げた。きつちりとした訓練の賜物か、三人は滞りなく受付を済ませて荷物を一旦部屋に置くと、再び外に出た。

「ここは、観光にくるような所じゃないみたいね」

ヤツハが呟いた通り、何の遊びもないシンプルな内装に、静かなロビー。淡々とした語り口調の従業員。カイルは苦笑した。

「色んな町があるからな……」

「空も小さいし、息が詰まりそうだぜ！ さつさとラディンを探しだそうぜ！」

サクはすでにつまらなさそうに言いながら、頭の後ろに手を組んだ。

ヤツハも苦笑して

「そうね、贅沢は言つてられないわ。早くラディンを探しましょう！」

「でもどうやって……？」

カイルは途方に暮れていた。右も左も分からぬ町で一人の人間を探すのは、容易なことではない。同感のヤツハがため息をつこうとしたとき、サクが

「んなの、呼びながら走り回ればいいんだよ！」

と飛び出そうとした。

「ちょっと待ちなさいよ！ ここは学校じゃないんだからね！ 迷子になつたら……」

ヤツハの声はサクには届かなかつた。

「待ちなさいってば、サクっ！」

叫ぶヤツハの肩を押されて、カイルは言つた。

「ま、大丈夫だよ……ホテルの場所さえ分かつていれば、腹が減つたら帰つてくるさ！」

カイルに振り返つたヤツハは、肩をすくめてため息をついた。

「それもそうね」

どこかへと暴走してしまったサクは放つておいて、カイルとヤツハは一人でラディンを探すこととした。しかしラディンがどこにいるのかなんて、検討もつかない。一人はとりあえず、町の中を歩いてみることにした。

「静かな町ね……」

夕刻間近のゴロナゴ町は、人の往来もまばらで實に冷たい空気が漂っている。

「本当にこの町に、ラディンがいるのかしら……？」

街灯も少ない町中をあちこち見ながら歩くヤツハは、不安げに言った。不安に思うのは、カイルも同じだった。

「だけど、ラディンはこの町で修業してるって言つていたし……！」

その途端、二人は顔を見合せた。

「道場！」

「そうか、道場を探せばいいんだ！」

「手がかり、掴めそうね！」

安心したのもつかの間、二人はその道場の名前すら知らないことに気付いた。

「片つ端から探すしかないか……」

カイルは肩をすくめた。

二人は町の中心部を目指した。役所のような所があれば、この町の道場の場所くらい分かるだろう。

もうすぐ暗くなる。一人の足は、次第に早足になっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4816v/>

ヴァンドル・バード

2012年1月5日21時58分発行